

昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 IX

浪岡町教育委員会

昭和60年度淡路城跡発掘調査報告書(IX) 訂正表

P15の10行	東西軸4間、南北軸4間	⇒	東西軸3間、南北軸3間
P33の22行	東西190cm、本	⇒	東西190cm、
P53の19行	R41区検出。	⇒	R42区検出。

お詫び

昭和58年度発掘調査報告書までの史跡指定地面積と公有地面積の数値が誤っていましたので、下記の通り変更してください。お詫び申し上げます。



史跡指定地面積 138,000㎡

公有地面積 114,800㎡

1. 新	跡	15,480㎡	5. 内	跡	7,890㎡
2. 山	跡	5,400㎡	6. 西	跡	13,830㎡
3. 堀	跡	3,750㎡	7. 旗	跡	8,550㎡
4. 北	跡	15,450㎡	8. 無	名の	跡22,250㎡

発刊にあたって

史跡浪岡城跡は、南朝の雄奥州鎮守府将軍北畠顯家の末孫が拠った中世城館として、津軽地域の中では特異な光彩をはなっております。

このたび、昭和60年度の発掘調査報告書を発刊するにあたって、浪岡城が浪岡町民の精神的柱であると同じように津軽中世史を解明するための貴重な資料として県内外の研究者に発表できますことは、浪岡町の文化財保護行政を推進する上で、誠に意義深いことと考えております。

今後、浪岡城跡は「史跡公園」として順次環境整備し、町民および全国の方々に公開して歴史学習の場となる予定です。さらに近接した場所に浪岡城跡出土品を中心とした歴史資料館を建設する計画が進み「歴史のまち浪岡」を標榜できることもそれほど遠いことではないと思われまふ。関係各位にあつては、旧に倍しての御指導・御助言をお願い申し上げます。

昭和63年1月31日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名俊吉

例 言

1. 本書は昭和60年度に調査した、浪岡城跡内館に関する発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国（50%）・県（8%）の補助を受け、浪岡町（町長・工藤善弘）と浪岡町教育委員会（教育長・蝦名俊吉）が総額1,200万円で行った。
3. 発掘調査は、昭和60年5月27日から同年11月22日までが野外調査、昭和60年11月25日から昭和62年3月10日までが屋内整理作業として実施した。
4. 本書の編集は、工藤清泰がおこない、執筆は以下の通りである。
 - I 調査に至る経緯……………工藤清泰
 - II 調査経過……………木村浩一
 - III 検出遺構と主な出土遺物……………工藤清泰・木村浩一
 - IV 出土遺物……………工藤清泰
 - V まとめ……………工藤清泰
5. 本書は、本文5項目、写真図版（PL.）33枚、挿図（Fig.）62枚、表（Ch.）109枚で構成した。
6. 遺構の略称は以下の通りである。

S B 礎石・掘立柱建物跡 S T 竪穴建物跡 S E 井戸跡
S D 溝跡 S F 焼土遺構 S X 性格不明遺構
7. 遺物の略称は以下の通りである。

P 陶磁器・土器類 F 鉄・銅製品 C 銭貨
S 石製品 B 骨類 M 木製品・漆器被膜等
NR 自然遺物類
8. 遺構の土層注記にあたっては「新版標準土色帖」小山正忠・竹原秀雄編著（1976.9）を参考にした。
9. 本書を作製するにあたり、注記・錆取り・実測・浄書等の整理作業は下記の方々の手に寄るところが大きかった。記して感謝申し上げます。

武田嘉彦、長谷川亘、斎藤とも子、佐々木里見、常田紀子、成田和佳子、上藤馨、石岡佳子

10. 本書の刊行にあたり、下記の機関・各位の御指導・御助言を得た。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
- 文化庁記念物課、県教育庁文化課、県埋蔵文化財調査センター、
八戸市立博物館、秋田裕毅

本文目次

発刊にあたって

例言

I 調査に至る経緯	1
II 調査経過	5
III 検出遺構と主な出土遺物	9
IV 出土遺物	74
V まとめ	152
写真図版 (PL.)	159

I 調査に至る経緯

史跡浪岡城跡は、陸奥国鎮守府將軍北畠顯家の末裔が拠った城館として、津輕中世史の中で特筆すべき意味を有している。15世紀前半まで津輕北半を勢力範囲としていた安藤氏と親戚関係にあった北畠氏は南北朝の動乱後、北奥の地まで落ちのびることになるが、安藤氏と南部氏の抗争によって安藤氏が駆逐された後は、旧安藤領を南部氏から委任統治する形で、浪岡の地に拠を構えたものと思われる。

浪岡城北畠氏に関する研究は、明治以降戦前まで地元の前田喜一郎、小友叔雄等を中心におこなわれ、南朝事蹟の城館として昭和15年2月10日に国の史跡指定を受けることとなった。史跡指定は当時の戦時下における思想背景があったとしても、その事によって城館の改変に歯止めがかかり、現在に至ると平場・堀跡ともに平城形態の中では盛時の遺構を良好に残存している中世城館の一つであると言える。

浪岡町では、明治百周年の記念事業として史跡地内の公有化事業を昭和44年から着手している。当時、内館を除く平場は林檎園・畑地、堀跡は帯代として住民に使用されていたが、北館・猿楽館・東館・西館・検校館およびその間の堀跡は、ほぼ全面が昭和49年までに買収済となった。史跡指定地、136,000㎡のうち84%に及ぶ114,800㎡が公有化することとなった。

その後町当局は、史跡公園として史跡の活用を図るべく文化庁との協議にあたったが、基礎資料の不足によって明確な環境整備計画を策定するまでには至らなかった。そのため、昭和52年度から、環境整備の基礎資料を得るため発掘調査事業に着手した。昭和52年度には、町単独事業（総額300万円）として弘前大学教育学部歴史研究室に委託して調査を実施し、北館と東館の堀跡をトレンチ方式にて発掘した。翌昭和53年度からは補助事業として進展し、文化庁・県文化課・町教育委員会が一体となって東館・北館・内館の各平場および堀跡の調査を実施してきた所である。

これまでに検出された遺構・遺物は多種多様に亘り、既刊報告書「浪岡城跡Ⅰ～Ⅳ」^(注3)に詳しいので参照願いたい。

昭和60年度の調査は、前年度から開始した内館平場の2年次にあたり、礎石建物跡などが検出し浪岡城主館としての性格を濃くしている内館の平場を、以下の調査要項に従って実施した。

昭和60年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

1. 調査の目的

浪岡城跡は、北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。発掘調査は、将来「史跡公園」として環境整備する上での基礎資料を得るためにおこなうものである。

Fig. 1 城跡跡全体図



- | | | | |
|--------|-----------------------|---------|-----------------------|
| 1. 新館 | 15,480 m ² | 5. 内館 | 7,890 m ² |
| 2. 東館 | 5,400 m ² | 6. 西館 | 13,830 m ² |
| 3. 猿楽館 | 3,750 m ² | 7. 校館 | 8,550 m ² |
| 4. 北館 | 15,450 m ² | 8. 無名の館 | 22,250 m ² |

—— 史跡指定地 136,000 m²

2. 調査期間

事前作業 昭和60年4月1日～5月25日

発掘作業 昭和60年5月27日～11月2日（実際は11月22日まで）

整理作業 昭和60年11月5日～昭和61年3月29日（実際は昭和60年11月24日から昭和62年3月27日まで）

3. 調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内

浪岡城跡内館 約3,000㎡（実際の調査面積は約2,400㎡）

4. 調査員等

調査顧問 村越 潔 弘前大学教育学部教授

” 佐々木達夫 金沢大学文学部助教授

” 高島 成信 八戸工業大学助教授

調査員 宇野 栄二 浪岡町文化財審議委員長

” 葛西 善一 浪岡町文化財審議委員

” 佐藤 仁 弘前高等学校教諭

” 三浦貞栄治 浪岡高等学校教諭

” 奈良岡洋一 藤崎園芸高等学校実習教諭

5. 調査協力員等

調査協力員 辻住伸、須藤光治、羽柴直人、蜂須賀里佳（以上弘前大学）、
木村日登美（東北女子大学）

調査補助員 常田紀了、対馬桂子、佐々木忠義、工藤馨、斎藤とも子、成田和佳子、
武田嘉彦、坂本甲見、伊藤圭子

調査作業員 大坂弘子、鎌田ふみ、奈良岡昭江、林ソミ、太田容子、杉山徹、
常田節子、出町とみゑ、有馬節子、津川ふさ、境はる子、藤田幸子、
山田とも子、村岡せい子、太田ミツ、奈良岡英子、有馬恵子、工藤久子
小笠原トシエ、山内美世

6. 調査主体者

浪岡町 町長 工藤 善弘（昭和62年1月18日から阿部暢彦）

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101の1

7. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会社会教育課 Tel 0172-62-3001

教 育 長 蝦名 俊吉

社会教育課長	鎌田 静治（昭和62年4月1日から上岐圭一）
社会教育係長	木村 鐵雄（昭和61年4月1日から石村正司）
社会教育係主査	佐藤 司
社会教育係主事	工藤 清泰（調査担当）
“ ”	成田 和了
“ ”	櫛引 巖芳
“ ”	木村 浩一（調査担当）

8. 調査方法

平場はグリッド方式により遺構・遺物の検出に努める。

9. 報告書の刊行

浪岡町教育委員会が作製・刊行する。

（注1）前田喜一郎 「浪岡御所と其城跡」他多数の著述がある。

（注2）小友叔雄は「津軽封内城跡考」「北畠本永録日記を読む」等の多数の著述がある。

（注3）①昭和52年度浪岡城跡発掘調査報告書（1978年3月）

- | | | | |
|---|--------|-----|----------------|
| ② | “ 53 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅱ（1980年3月） |
| ③ | “ 54 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅲ（1981年3月） |
| ④ | “ 55 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅳ（1982年3月） |
| ⑤ | “ 56 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅴ（1983年3月） |
| ⑥ | “ 57 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅵ（1984年3月） |
| ⑦ | “ 58 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅶ（1985年3月） |
| ⑧ | “ 59 “ | “ “ | 浪岡城跡Ⅷ（1986年3月） |

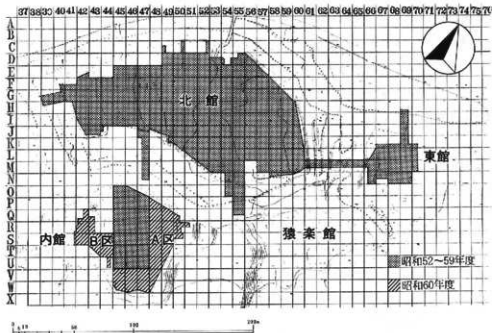
II 調査経過

昭和60年

- 4月22日 事前調査開始。
- 5月15日 今年度調査区のグリッド設定並びに仮杭打ち作業開始。
- 5月23日 仮杭の設定（雑草の刈り取り及び樹木の間を抜けて設定するため、時間を要する）、器材点検、ベルトコンベアー、テントの設営。
- 5月27日 作業員を加え発掘調査作業開始。表土剥ぎ、草刈り作業。
- 5月30日 表土除去作業。作業区が昨年度調査区を挟んで二箇所になるため、内館東側（P～W-48～50区）及び南端（V・W-45～47区）をA区、内館中央部南側（O～U-43・44区）をB区と仮称する。（以下A区・B区として用いる。）
- 6月3日 A区、B区調査区平板測量、B・M. 設定、表土除去作業。浪岡高校2年生150名見学。
- 6月6日 W-45・46区、昨年度トレンチ掘り箇所の検出作業。B区の一部で黒色土の遺構確認面が検出されたが、運動場として利用していた時のトラック部分であり、攪乱土が入り込んでいるため遺構確認面を広げてゆく段階で注意が必要となる。気温32℃、著く砂ぼこりの一日。
- 6月8日 V-45・46区遺構確認面まで掘り下げる。V-45区で昨年度検出の建物跡に連なると思われる柱穴を確認。V-46区には、灰が覆土中に混入する小竪穴遺構がみられる。
- 6月10日 V・W-46区に礎石列が4間検出される。（S B 60）
- 6月12日 V・W-45.46区、遺構確認面まで掘り下げ。S E 111・112の井戸跡を検出。
- 6月14日 S E 111・112、S X 270・271・272掘り下げ開始。礎石建物跡（S B 60）の柱穴は掘り方断面図作成のため半葺。S B 61は'84検出のものに引き続き柱穴列と思われる。
- 6月17日 泉道青森—浪岡線拡幅に伴う緊急調査が青森県の委託で始まる（昭和61年1月20日整理作業終了）。
- 6月19日 S E 111・112・113・114・115、S X 271・273、S D 82の掘り下げ。
- 6月20日 S E 110掘り下げ。S E 111灰層確認状態写真撮影。S E 112プラン平面実測完了。S E 113・114・115掘り下げとセクション図作成。S X 270掘り上がり写真撮影。S E と思われるものの中で直径が3 m未満のものは、半葺し1 mまで掘り下げ、セクション図を作成、プラン確認で終了することにした。

- 6月21日 SE111掘り下げ。SD82はSE111の南と北で確認状態が異なるため、SD92に変更する。SX271セクション図作成。SE114プラン確認。SD90掘り下げ。W-46・47区境にSE116設定。午後5時になっても気温が30℃、暑い一日。
- 6月25日 SE110・111掘り下げ、SX273・SD90掘り下げ。乾燥状態が続き、遺構確認・発掘作業に支障をきたしたため、下の水路から揚水し散布するが効果少。

Fig. 2 昭和60年度発掘調査区とグリッド配置図



- 7月1日 雨のため室内作業。発掘調査担当の一人、木村が8月10日まで奈良文化財研究所にて研修を受ける。
- 7月2日 SE111の北西部で隅柱検出
- 7月3日 R・S・T-48区第1層素掘り。
- 7日5日 PQ-48区、P-49区素掘り。調査員の佐藤仁先生指導にみえる。
- 7月10日 Q-48区、遺構確認面まで掘り下げ。Q-48区については、削平されており遺構確認面=地山と考えた方がよさそうである。
- 7月16日 R-49～51区を遺構確認面まで掘り下げ。QR-48区から粘土貼遺構を検出(SX275)。SE111-240cmまで掘り下げる。四方の隅柱検出(1辺67～68cmの方形枠)

- 7月24日 SE111木枠内覆土除去作業終了、床面直上から椀と茶臼が出土。SE111は、横棧を2段（納と切れ込み）で造作している。SX287から鉈刀、SX288から赤絵、芋引金出土。
- 8月7日 SE121の覆土中から「かまど」状の焼土遺構が検出、実測・写真撮影を行う。
- 8月13日～15日 盆のため全員休み。
- 8月21日 乾燥が激しいため遺構の掘り下げを中断し、S・T-38・39区の第Ⅱ層を掘り下げる。
- 8月30日 調査区内の石等が踏み荒らされていた。乾燥時のこともあり復元は不可能。
- 9月9日 SE118は染付が多く出土しているが、壁面崩落の危険性もあり、セクションも前日の雨で崩れるなど作業に危険性がでてきたため掘り下げを一時中止する。調査員の宇野栄二先生が指導に見える。明の届高校生65名見学。
- 9月13日 遺構掘り下げ、セクション図作成作業を進める。U～W-48区の遺構確認作業。中里町高齢者学級150名見学。
- 9月18日 Pit・遺構掘り下げ作業。Q・R-49区の遺構平面実測作業始める。
- 9月26日 A区北東部遺構平面実測終了。A区は掘り下げ作業が終了し、実測並びに精査作業が残る。以後はB区が作業の中心となる。
- 9月28日 SE118掘り下げ終了（完掘）。B区は、竪穴建物跡・竪穴遺構がA区よりも多く検出されているが、ほとんどが重複している。
- 10月7日 ST277・280、SE137、SX318・319・320掘り下げ。
- 10月11日 SE138掘り下げ、-180cm付近から木枠検出（隅柱・横棧の一部）。セクションは井戸枠に沿った形できれいに残っている。
- 10月17日 SE138木枠検出、1辺100cmの隅柱横棧形の井戸枠である。ST246・247・280 SX321・329の調査。SX321からは遺物が多量に出土しており、廃棄場所と考えられる。
- 10月23日 ST277精査、SE138木枠側面実測、SB71範囲確認作業、SX321・330掘り下げ。十和田湖町文化財審議委員会来訪。
- 11月2日・3日 中世考古学シンポジウム開催、県内外から研究者、一般の人々を含め100名以上の参加者があった。
- 11月7日 掘り下げ作業終了。A区南端とB区的全景写真撮影。深く掘り下げたSE111・128を危険防止のため-200cmまで埋め戻す。SB38・60の礎石建物跡柱穴の埋め戻し。
- 11月21日 A区遺構平面実測終了。B区遺構平面実測開始。今年度の調査区面積は約2400

m。

11月25日～昭和61年3月27日 室内にて整理作業。

※出土遺物と実測図面等は浪岡町教育委員会で保管している。

Ⅲ 検出遺構と主な出土遺物

1. 礎石建物跡

礎石建物跡は昭和59年度調査区において1棟検出しただけであるが、そのS B38から30m南側で東西に一列だけ掘り方内に礎石を置いた遺構が発見された。S B38もそうであったが、掘り方内に礎石を置き柱を建てた時に礎石が土に覆われて外見上は掘立柱状を呈する建物を、礎石建物と扱えるのか疑問を提示する識者もいた。しかし、設岡城に一般的な掘立柱建物の柱穴内に根石を入れることさえ稀である事実からすれば、柱の心身が礎石と考えた石の上で間尺を調節している事実から、あえて礎石建物跡と使用することを御寛容いただきたい。

S B60 (P.L. 3-上、Fig. 5-b、Ch. 1) —— U・V45区検出。規模は対応する梁間

方向が発見できず0間、桁行が6間でその方向はN-76°-Eであるが、この東西軸はS B38の東西軸とまったく同じのものであり、本遺構がS B38と関連のあることをうかがわせる。礎石の据え方はa 1、a 2がS T275と重複したため掘り方線を描き明瞭に検出できなかったが、a 3～a 7は径80cm強、深さは遺構確認面から50cm前後の所に礎石を据えている。礎石上端の比高は最大27cmである。礎石の表面観察によると、表面が火を受けたと思われる痕跡があり、柱痕の部分は丸く石質表面が剥離するような状態となっていた。(Fig. 5-bにおけるスクリーントーンの白めき部分) によって、これらの柱痕から柱心身を計測すると以下ようになる。

a 1	～	a 2	=	200cm (6.60尺)	
a 2	～	a 3	=	215cm (7.09尺)	
a 3	～	a 4	=	206cm (6.79尺)	
a 4	～	a 5	=	211cm (6.96尺)	
a 5	～	a 6	=	217cm (7.16尺)	
a 6	～	a 7	=	192cm (6.33尺)	
平均値				=	206.8cm (6.82尺)

Ch. 1 (a) S B60覆土層序注記表 (Fig. 5-b)

Pit No.	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	埋土層(m)	備考
a 1	—	—	—	36.62	ST 275重複
a 2	—	—	—	35.70	ST 275重複
a-3	円	83 × 80	(80)	35.55	
a-4	円	88 × 80	(88)	35.54	
a 5	円	88 × 78	50	35.63	
a-6	円	90 × 82	48	35.58	
a-7	円	78 × 77	26	35.82	

Ch. 1 (b) S B60柱穴計測表 (Fig. 5-b)

層序No.	検出物
1	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に小粒の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6) を3割と極小塊の炭化物を1割含む。
2	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小塊の炭化物を若干含む。
3	黒色土 (10 Y R 2/1) に小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と極小塊の炭化物を若干含む。
4	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を15割と極小塊の炭化物を2割含む。
5	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に黒色灰 (10 Y R 1/7/1) を絶分約に3割と小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を2割とにぶい炭褐色粘土 (10 Y R 7/3) を若干と極小塊の炭化物を1割含む。
6	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に明褐色砂質土 (10 Y R 6/6) を2割と黒色灰 (N 2/0) と極小塊の炭化物を1割含む。
7	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に極小粒の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6) を2割と極小塊の炭化物を1割含む。
8	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に極小から中粒の黄褐色砂質土 (2.5 Y R 4/4) を2割と小塊の炭化物を1割含む。
9	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に極小から小粒の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6) と小から中粒の炭化物を1割含む。
10	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に極小塊の炭化物を若干含む。
11	黒色土 (10 Y R 2/2) に極小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を1割未満と褐色灰 (10 Y R 4/1) と極小塊の炭化物を1割含む。
12	黒褐色土 (10 Y R 2/3) に極小から中粒の炭化物を1割含む。
13	地山、明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6)。

Fig. 3 内館礎石・獨立柱建物跡配置図

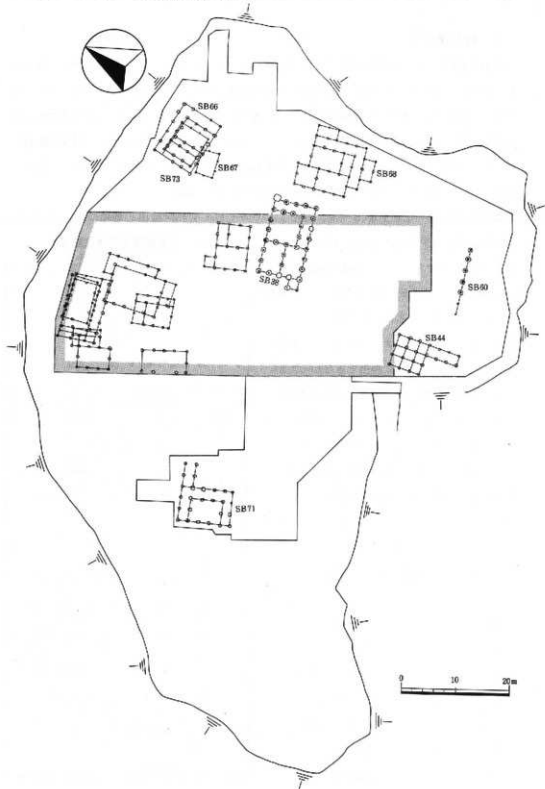


Fig. 4 S B44实例图

Ch. 2 S B44柱穴测量表

穴号	形状	直径×短径cm	深cm	备 考
a-1	方	50 × 48	65	
a-4	円	38 × 38	44	
b-3	方	48 × 46	48	
b-4	—	—	—	
c-3	方	52 × 46	52	
c-4	方	43 × 39	48	
d-1	—	—	—	
d-2	方	51 × 45	36	
d-3	方	46 × 52	33	
d-4	木	52 × 48	62	
e-1	木	48 × 48	26	
e-2	方	55 × 46	20	
e-3	方	54 × 52	(33)	
e-4	木	47 × (49)	33	
f-1	木	39 × 34	33	
f-2	円	45 × 40	41	
f-3	方	59 × 54	43	
f-4	木	43 × 49	35	
g-1	木	60 × 48	68	
g-2	方	52 × 41	54	
g-3	木	—	—	
g-4	木	55 × 33	59	

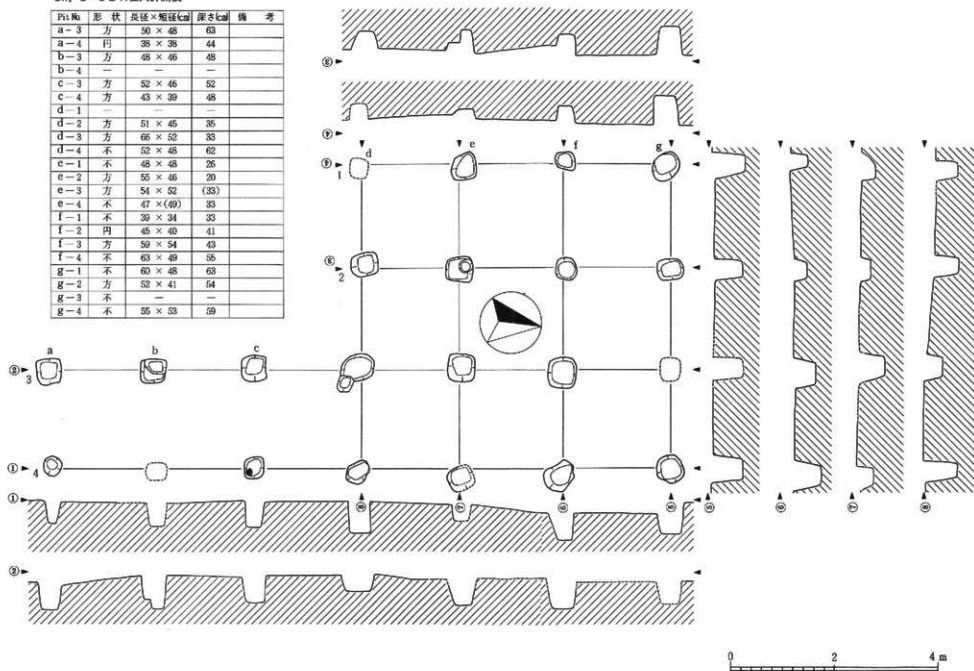
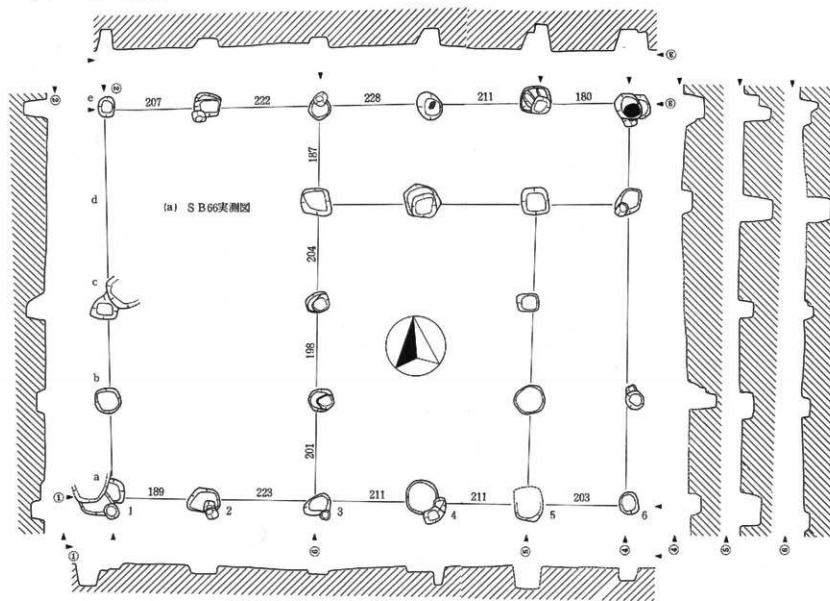
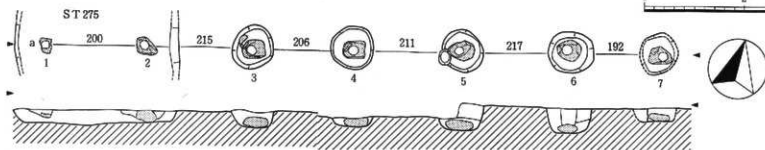


Fig. 5 S B60・66実測図



(b) S B60実測図



Ch. 3 S B66柱穴計測表

PI No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
a-1	不	46 × 37	10	
a-2	不	53 × 43	16	
a-3	不	57 × 35	11	
a-4	円	67 × 64	16	
a-5	不	53 × 68	(43)	
a-6	方	44 × 38	(11)	
b-1	円	52 × 51	16	
b-3	円	50 × 46	16	
b-5	円	60 × 55	22	
b-6	円	38 × 38	(16)	
c-1	不	54 × 50	17	
c-3	方	47 × 38	19	
c-5	方	44 × 36	30	
d-3	方	59 × 57	(16)	
d-4	方	50 × 47	41	
d-5	方	55 × 55	60	
d-6	不	54 × 45	20	
e-1	方	36 × 32	46	
e-2	方	53 × 36	16	
e-3	不	48 × 43	21	
e-4	不	53 × 50	(33)	
e-5	方	62 × 54	50	
e-6	不	54 × 46	43	

0 2 4 m

計測値の単位はcm

S B 38の場合、1間の平均値が196.96cm（6尺5寸）であったのと比較すると本遺構は間尺が長くなっている。重複する遺構にはS T 275（旧）があり、a 6の部分にだけ層序断面に柱痕らしい形跡が発見されているが出土遺物に丸釘があったため新規の攪乱とも推定される。他の掘り方覆土からの出土遺物としては、a 2から不明鉄製品、a 3から不明鉄製品と角釘、a 5から美濃灰軸皿、角釘、○宋通○、a 7から美濃灰軸皿、角釘が出土しており、16世紀代の廃絶と推定される。

2. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡と認定したものは12棟であり、その内6棟は昭和59年度調査区と連続するものである。以下、その規模・間尺・重複関係・出土遺物等について報告する。

S B 44（Fig. 4、Ch. 2）—— U・V 45区検出。東西軸4間、南北軸4間の主屋に、1間×3間の張り出し部が両側へ伸びる。この張り出し部は、破線で示した通り1間×2間の別棟である可能性もあるが接距離が200cmで本建物跡の間尺に近いことから一応張り出しとして考えた。南北軸の方向はN-7.5°-Wである。柱穴の掘り方は方形プランが多く、一辺50cm前後となり深さは外側が40cm以上、内側が30cm前後と比較的浅く、現状では4×4間の総柱建物跡になると考えられる。間尺の基本は200cm（6.6尺）を使用しており、一間あたりの長短はあるもののほぼ6.6尺の範囲で柱穴が並んでいる。重複する遺構としては、S T 258（旧）、S F 64（新）があり、柱穴から出土している美濃灰軸皿、青磁皿、無文銭から16世紀代の廃絶と推定される。

S B 63 —— Q・R-48・49・50区検出。4間×7間の規模を有すると考えられるが現在検討中のため次年度に報告予定。

S B 64 —— Q・R・S-47・48区検出。5間×3間以上の規模を有すると考えられるが現在検討中のため次年度に報告予定。

S B 65 —— Q・R-47・48区検出。7間×3間の規模を有すると考えられるが現在検討中のため次年度報告予定。

S B 66（P L. 2-上、Fig. 5、Ch. 3）—— Q・R-49・50区検出。長軸（東西）5間、短軸（南北）4間の規模を有する。ただし、張り出しとみられる部分が南辺東側に1×2間である可能性もあり今後再検討する予定である。東西列でみると、a列とd列の柱穴が一辺50cm以上の比較的大きい掘り方を呈するのに対して他は、径40cm前後の円形あるいは不整形の掘り方を呈している。短軸方向はN-4°-Eである。重複する遺構としては、S D 95（旧）、S D 94（新旧不明）、S B 63（新旧不明）、S B 73（新旧不明）、S B 67（新旧不明）等がある。間尺は、最小180cm（6.0尺）から最大228cm（7.5尺）まであり、a列、e列、3列の平均値は

205.3cm (6.77尺) であり、6.6尺より若干幅広の間尺となっている。柱穴からの出土遺物には a 4 から紹聖元宝、e 2 から瓦質土器他が出土しており、廃絶時期は15～16世紀と考えられる。

SB67 (P.L. 2, Fig. 6, Ch. 4) — Q・R48・49区検出。長軸(東西)3間、短軸(南北)2間の規模を有し、短軸方向はN-8°-Wである。本竪立柱建物跡の柱穴は方形基調の掘り方を呈し、一辺30cm弱と小形のプランに対して深さは50～80cmと非常に深い掘り方である。重複する遺構としては、S×275(新)、SE127(新旧不明)があり、廃絶年代を推定できる遺物は出土していないが、b 3の部分にあたる柱穴(今回は掘立柱の柱穴と考えなかった)からは磁石が出土しており注目できる。柱間をみると、最小値が140cm (a 1～a 2、b 4～c 4)、最大値が200cm (a 4～b 4) であり、160cm～150cmの使用度が高い。この間尺は6.6尺を基準とした場合の $\frac{1}{4}$ の数値に近く、一般的には主屋以外の縁というような部分で使用する事が多い。(S B02参照)しかしながら、本柱穴の形状・深さ・不規則性はそのまま壁面が削平された竪建物跡ともいっており注意を要する点である。

Ch. 4 S B67柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径cm	深さcm	備考
a-1	円	28×27	(57)	
a-2	方	25×20	57	
a-3	方	29×27	68	
a-4	方	27×26	59	
b-1	方	25×23	(25)	
b-4	不	26×-	54	
c-1	不	28×24	58	
c-2	方	24×23	65	
c-3	円	29×29	81	
c-4	方	22×22	(56)	

Fig. 6 S B67実測図

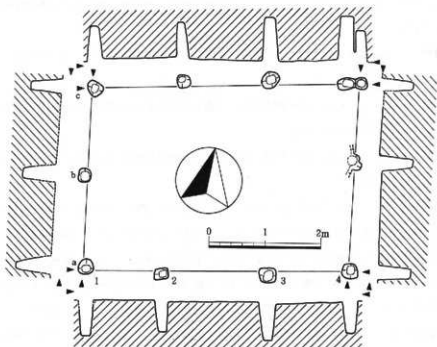


Fig. 7 SB68実測図

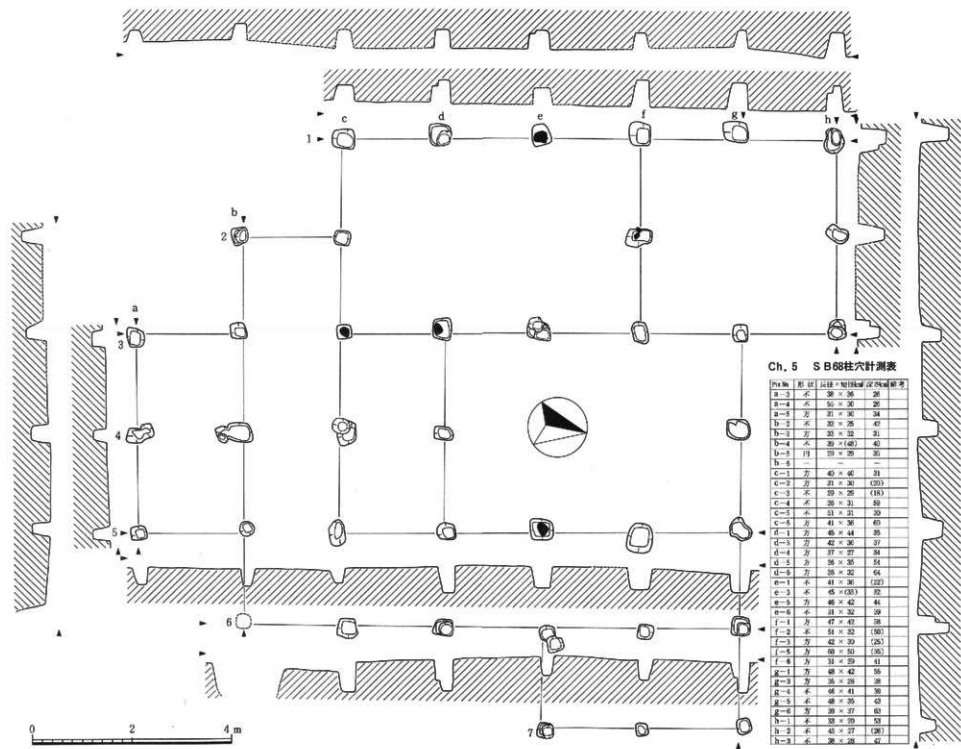
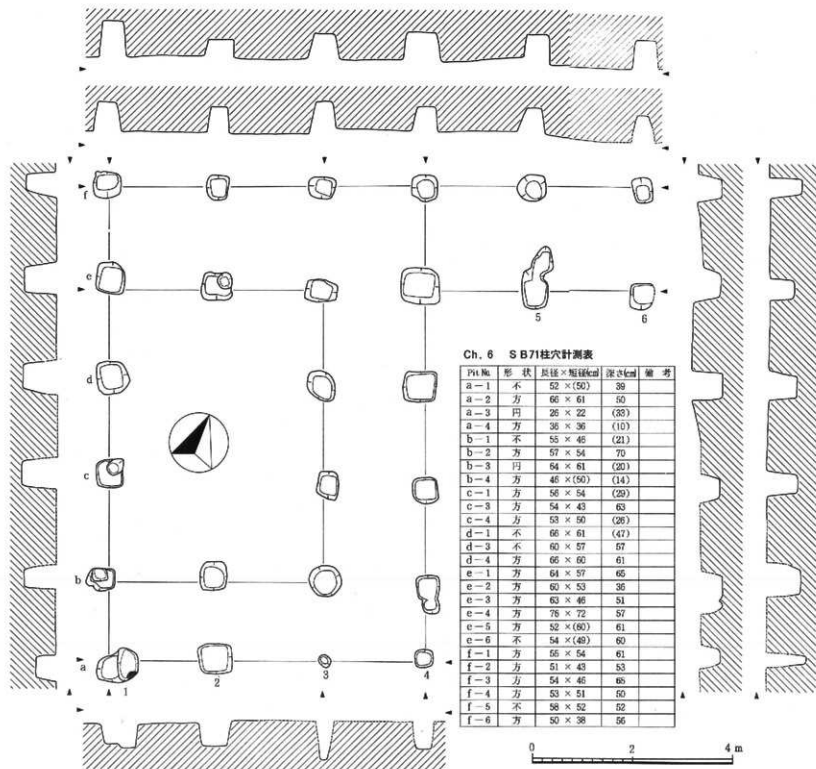


Fig. 8 SB71实测图



SB68 (P.L. 2, Fig. 7, Ch. 5) —— S・T・U48・49区検出。長軸(南北)7間、短軸6間の規模を有し、長軸方向はN-11.5°-Wである。柱穴の間尺は6.6尺(約200cm)を基準としており、最大220cmから最小で185cmの計測値は2間ないし3間の測点によっては6.6尺の範囲に入ってくる傾向がある。柱穴の掘り方は方形基調であり、一辺30cm前後、40cm前後、50cm前後の各種が存在し、深さも30~60cm前後と統一的ではない。しかし、その配置をみると、南側に2間×1間の張り出し(おそらく出入口部分と考えられる)部を有し、b6の柱穴が存在したとすれば南側と東側に1間幅の縁を回していたような柱穴配置である。さらに3の列を境に東側に六間と四間、西側に六間と二間を配置しているのは二列平面の系譜に連なるものと考えられる。特に注目されるのは、柱穴の上部に川原石を据え付けて、修理ないしは柱据え付けの補強をおこなっている点である。e1、c3、d3、e5がそれぞれであり、礎石構成の建物跡であったSB38が本遺構の西側にほぼ軸を同じくして存在することは、礎石建物跡の発生と系譜を考える上で示唆に富む所である。柱穴内からの主な出土遺物としては、b4から染付皿、e1から美濃天目碗、f2から染付皿と角釘、f5から美濃灰釉皿、g4から染付皿と無文銭があった。よって本遺構の廃絶時期は16世紀代と考えられる。

SB69 —— S・T43・44区検出。東西5間、南北4間ほどの規模を有すると推定されたが、柱穴の配置が不明確なため、現在検討中の掘立柱建物跡である。

SB70 —— S42・43区検出。東西2列に6間の並びは確認したものの竪穴建物跡との重複が激しいため北側での柱穴配置を確認することができず、現在検討中である。

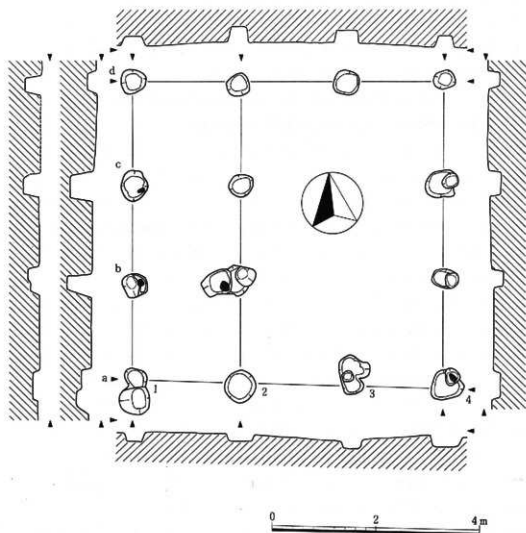
SB71 (P.L.3-1, Fig. 8, Ch. 6) —— Q・R42・43区検出。長軸(南北)5間、短軸(東西)3間の主屋に2×1間の張り出しが東側北端に付属する規模である。張り出し部は拡張する可能性もある。柱穴の掘り方は、方形基調で一辺60cm以上のものから30cm前後のものまで各種存在し、深さは50~60cmぐらいのものが多い。ただし、a3については明確に本遺構のものとは断定できない。柱穴配置をみると3間×2間の主屋部分の南・東・北側に縁を回す形態と考えられ、東側北端から東に向って2間×1間の張り出しが出入口等の施設になる可能性が高い。しかしながら柱穴の間尺についてみると、a列からb列へが160cm(5.3尺)を使用している以外、200cm(6.6尺)を基準としていることから南側の縁と、東・北側の縁では機能上の違いがあるのかもしれない。重複する遺構としては、S・T277、S・T280、S・T282、S・T283等の竪穴遺構およびSB70があり、新旧関係については不明である。主な柱穴からの出土遺物としては、c3から小札、d3から鉄滓と皇宋通宝、e1から白磁皿2点、e2から白磁皿、f1から青磁碗片4点、f2から青磁碗、f4から青磁鉢、a2から慶元通宝と型宋元宝があった。出土遺物からは16世紀前半以前の廃絶と考えられるが明確でない。

SB72 —— S42区検出。2×2間までは確認しているものの南側が未調査のため後日報告す

Fig. 9 S B73実測図

Ch. 7 S B73柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径cm	深さcm	備考
a-1	不	45 × 35	19	
a-2	円	61 × 59	13	
a-3	不	39 × 35	16	
a-4	不	56 × 56	21	
b-1	方	31 × 44	46	
b-2	不	58 × (50)	22	
b-4	方	50 × 37	28	
c-1	不	70 × 50	24	
c-2	円	45 × 43	45	
c-4	不	54 × 52	29	
d-1	不	49 × 46	17	
d-2	不	44 × 41	35	
d-3	方	48 × 48	26	
d-4	方	41 × 35	21	



る予定である。

SB73 (PL.2-上、Fig.9、Ch.7) —— Q・R48・49区検出。3間×3間のほぼ正方形プランを呈する規模で、間尺はすべて6.6尺(約200cm)を基準としている。南北軸はN-7°-Eの方向であり重複するSB66に近似している。柱穴の掘り方は不整形が多く径60~40cmぐらいで深さは浅い(本地域は地山面の削平がみられる場所にあたることも一因である)。柱穴配置は、東に2×3間の空間と西側に1×3間の空間を有し、部屋割りとも考えられる。主な出土遺物としては、a4から判読不明銭、b1から不明銅製品、b2から青磁皿、c1から永楽通宝・徳元〇と硯、c4から不明鉄製品と青磁綾花皿、d2から青磁碗が出土しており16世紀前半以前の廃絶と考えられる。

(工藤清泰)

3. 竪穴建物跡

「竪穴建物跡」で扱うものは、竪穴形態を持つ遺構の中で、柱穴配置により上部構造が推定できる遺構である。竪穴形態を持つが、上部構造が不明な遺構については性格不明「竪穴遺構」として後述している。

ST246 (Fig.11-①、Ch.8-①(a)(b)) —— RS42区検出。東西440cm、南北380cm、深さ40cmの長方形プランを有する。棟通りに2本の柱穴がみられる。出土遺物は、青磁碗、染付皿、白磁皿、越前甕などの他に鉄釘、打根、銭貨、漆器等が出土している。SB70(旧)、ST279(旧)、と重複しており、出土遺物からは16世紀以後の廃絶と考えられる。なお、セクション図で2個の柱穴が遺構に伴っているが、これらについては、竪穴建物跡の柱穴の可能性はあるものの、確認はできない。また、セクション中の第1層が削られている部分は南北及び東西の断面のセクションをとった時のトレンチ跡であり、遺構とは関係しない。

ST247 (Fig.11-②、Ch.9-①(a)(b)) —— RS43区検出。東西490cm、南北500cm、深さ80cmの規模を有する。柱穴は、棟通りに4個存在するが、壁に沿う柱穴はみられない。西壁、南壁の一部で壁溝と思われるものがみられている。出土遺物は青磁碗・皿・盤、染付皿、白磁皿、珠洲播鉢、釘、鉄鉢、小札などがある。SB70(旧)、SX324(新旧不明)と重複しており、出土遺物と考え合わせると16世紀以後の廃絶と考えられる。

Fig. 10 内館整穴建物跡配置図

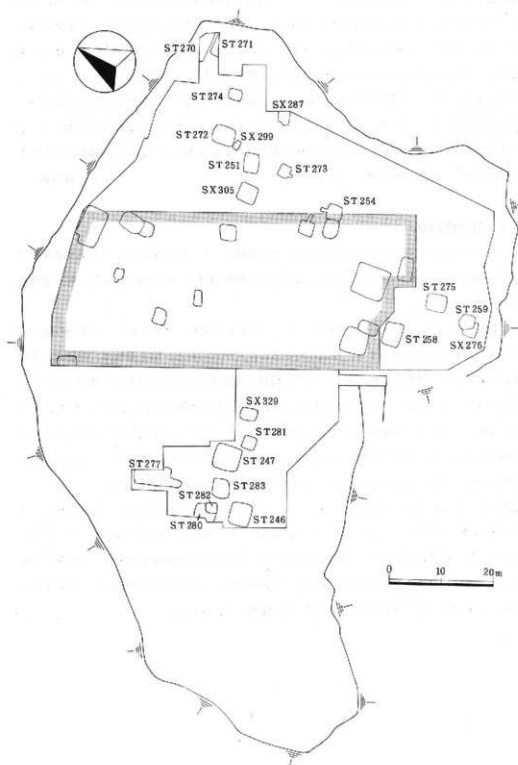
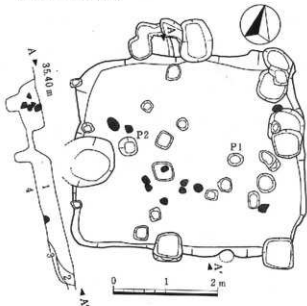
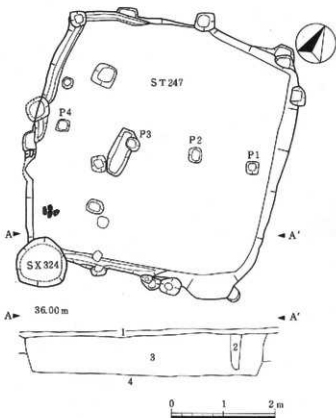


Fig. 11 竪穴建物跡 I

(1) ST 246 実測図



(2) ST 247・SX 324 実測図



Ch. 8

(a) ST 246 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	30 × 24	51	
2	方	36 × 36	64	

(b) ST 246 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (00YR 2/1) に極小から大塊状の褐色砂質土 (10YR 4/6) を3割と、小塊状の炭化物を1割とに多い黄褐色粘土 (00YR 5/3) を部分的に1割含む。
2	黒色土 (10YR L7/1) の単層。
3	黒色土 (10YR 2/1) に小塊状の褐色砂質土 (00YR 4/6) を1割含む。
4	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Ch. 9

(a) ST 247 柱穴計測表

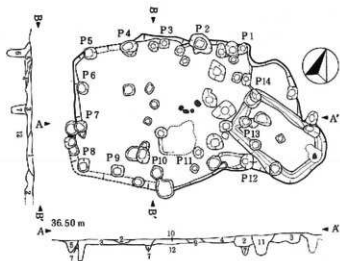
Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	25 × 24	50	
2	方	30 × 26	66	
3	円	28 × 26	57	
4	不	24 × 24	50	

(b) ST 247 覆土層序注記表

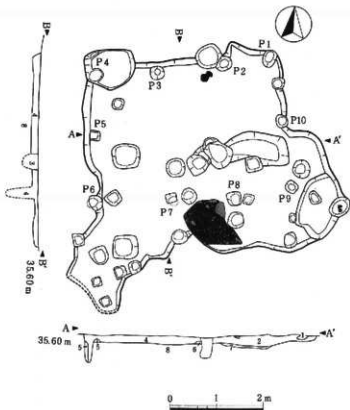
層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5YR 2/2)。しまりあり。
2	黒褐色土 (10YR 2/2)。しまりなし。
3	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に中ブロック状の明褐色砂質土 (10YR 6/8) が30%含まれる。
4	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Fig. 12 竪穴建物Ⅱ

(1) ST 251 実測図



(2) ST 258・SF 69 実測図



Ch. 10

(a) ST 251 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備	考
1	方	21 × 21	33		
2	方	26 × 26	15		
3	方	21 × 20	15		
4	方	27 × 24	25		
5	方	28 × 26	25		
6	方	26 × 25	26		
7	方	29 × 25	25		
8	方	29 × 25	25		
9	方	28 × 24	27		
10	方	26 × 26	23		
11	方	26 × 26	26		
12	方	20 × 28	26		
13	方	27 × 23	25		柱より西
14	方	26 × 19	26		

(b) ST 251 覆土層序注記表

層序No	特徴	備
1	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層の粘土 (5 YR 5/5) を2層、炭化物を3層含む。	
2	黒色土 (10 YR 2/1) Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層の黒褐色土 (7.5 YR 3/2) と褐色粘土 (7.5 YR 6/6) を1層ずつ、明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) の砂層を含む。	
3	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層の粘土 (7.5 YR 5/5) を1層と明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) をブロック状に3層含む。	
4	Ⅲ、Ⅳ層の粘土 (7.5 YR 5/5) Ⅱ層の黒褐色土 (7.5 YR 3/2) の砂層と明褐色粘土 (5 YR 5/5) の砂層、明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) を2層と明褐色粘土 (7.5 YR 5/6) を1層含む。しまりあり。	
5	黒褐色土 (10 YR 2/2) Ⅱ、Ⅲ層の明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) の砂層とⅢ層の黄褐色土 (5 Y 6/2) を3層含む。	
6	黒褐色土 (10 YR 2/1) Ⅱ層の明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) の砂層、明褐色土 (5 YR 6/2) と炭化物を1層ずつ含む。	
7	明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) Ⅱ層の黒褐色土 (10 YR 2/2) を7層含む。	
8	黒褐色土 (10 YR 2/1) Ⅱ、Ⅲ層の黄褐色粘土を10層と明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) を7層と炭化物を5層含む。	
9	黒褐色土 (10 YR 2/2) Ⅱ層の明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) を7層と炭化物を2層含む。	
10	黒褐色土 (10 YR 2/2) Ⅱ層の明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6) を2層と炭化物を2層含む。	
11	埋土、明褐色砂質土 (7.5 YR 5/6)。	

Ch. 11

(a) ST 258 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備	考
1	方	28 × 30	28		
2	方	25 × 26	24		
3	方	25 × 26	24		
4	方	25 × 30	26		
5	方	27 × 22	39		
6	方	24 × 25	33		
7	方	21 × 29	49		
8	方	31 × 39	49		
9	方	26 × 25	49		
10	方	26 × 25	28		

(b) ST 258 覆土層序注記表

層序No	特徴	備
1	黒色土 (10 YR 2/1) とⅢ、Ⅳ層の黄褐色砂質土 (7.5 Y 6/2) の砂層。	
2	黒褐色土 (10 YR 2/1) Ⅱ層の黒褐色土 (10 YR 1.7/1) を3層と小塊の炭化物を1層含む。	
3	黒色土 (10 YR 1.7/1) Ⅱ層の黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を1層含む。	
4	黒色土 (10 YR 2/1) Ⅱ層の小から中塊状の黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を5層と黒色の砂 (10 YR 1.7/1) を2層と小塊の炭化物を1層含む。	
5	黒色土 (10 YR 2/1) と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) の砂層。	
6	暗褐色土 (10 YR 3/3)。	
7	小から中塊状の黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) Ⅱ層の黒褐色土 (10 YR 2/1) を5層含む。	
8	埋土、黄褐色砂質土 (7.5 YR 5/6)。	

ST251 (Fig.12-①, Ch.10-(a)(b))——S48・49区検出。東西380cm、南北300cm、深さ23cmの規模を有する。柱穴配置は東西4間、南北3間で東側に張り出しを持つ可能性があるが竪穴遺構(新旧不明)と重複しており確認できない。出土遺物は、床面から鉄滓が1点みられる。その他、ST251の遺物と思われるものに、染付碗がある。全体に遺物が少なく、時期は不明である。また、柱穴配置からは、遺構東半部で別の建物が構築されていた可能性も考えられる。

ST258 (Fig.12-②, Ch.11-(a)(b))——UV45区検出。東西440cm、南北320cm、深さ20cmの規模を有する。柱穴配置は東西3間、南北2間である。南壁西端に南西方向に張り出しを有する。南東部で竪穴遺構(新)と重複している。SF69の焼土遺構はその竪穴遺構と重複するものであり、ST258よりも新しいと思われる。出土遺物は床面直上から釘と大宋元宝がみられ、覆土中からは、青磁碗、美濃灰軸皿、産地不明播鉢、用途不明銅製品、紹聖元宝、治平通宝がみられた。なお、遺構確認作業時に出土した青磁碗、産地不明陶器碗、産地不明播鉢も遺構に伴う可能性がある。遺物からは15世紀の廃絶の可能性もある。重複する遺構としては、SB44(新)、SF69(新)がある。

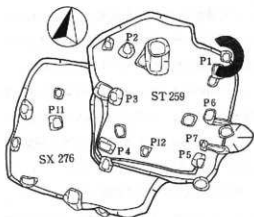
ST259 (Fig.13-①, Ch.12, P.L.4-(b))——W45区検出。東西260(320)cm、南北260cm、深さ28cmの規模を有する。柱穴配置は東西1間、南北2間であるが、東西の間尺は約180cm、南北の間尺は約100cmで、平面形はほぼ正方形になる。東壁南側に張り出しを有し、出入り口施設用に柱を1本増し、壁溝を作っている。ST259の柱穴はPit1からPit7までである。南壁に沿って壁溝がみられる。南西部でSX276と重複するが新旧関係は不明である。また西半ではもう一つ別の遺構と重複していると思われるが、これも新旧関係は不明である。北東コーナーでSF71(新)と重複している。出土遺物は、青磁碗、瀬戸灰軸瓶子、産地不明陶器、釘、無文銭がみられる。遺物からは、15世紀代に廃絶した遺構の可能性もある。

ST270 (Fig.13-②, Ch.13-(a)(b))——R51区検出。調査トレンチに南壁のみが検出されたため、正確な規模は不明である(東西600cm以上、南北240cm以上、深さ20cm以上)。柱穴配置は、南壁に沿い3間が確認されているが、さらに西へもう1間延びる可能性がある。セクションにかかっている2個の柱穴は、竪穴建物跡に関係する可能性があるが、壁に沿った柱列との規則性がみられない。全体の柱穴配置が不明である現時点では竪穴建物跡の柱穴としては扱わない。出土遺物は、瀬戸灰軸浅鉢のほか、産地不明播鉢が数個みられる。遺構の覆土と思われる層序(セクション面)から出土した弁(Fig.55-267, P.L.11-(b))もST270のものであろう。時期については不明である。

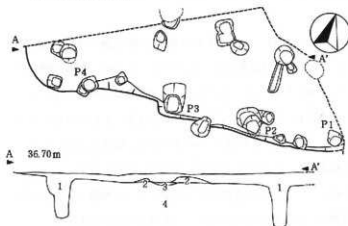
ST271 (Fig.13-③, Ch.14-(a)(b))——R51区検出。ST270と同様、トレンチにより北壁が検出されたもので正確な規模はつかめないが、東西310(420以上)cm、南北170cm以上、深さ60cm程度であろう。柱穴は北壁で東西方向2間、南北方向は東・西壁とも1間が確

Fig. 13 竪穴建物跡Ⅲ

(1) ST 259・SX 276 実測図



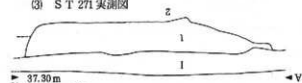
(2) ST 270 実測図



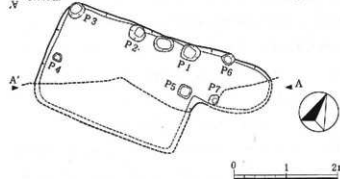
A 36.70m



(3) ST 271 実測図



V 37.30m



Ch. 12
ST 259・SX 276 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	29 × 24	62	
2	不	30 × 27	52	
3	方	33 × 27	64	
4	方	34 × 23	42	
5	方	27 × 22	66	
6	不	28 × 21	53	
7	不	21 × 15	17	
11	方	27 × 25	56	ST 276
12	方	20 × 17	21	"

Ch. 13
(a) ST 270 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	27 × 25	75	
2	不	34 × 31	104	
3	方	35 × 35	89	管状
4	方	30 × 28	65	

Ch. 13
(b) ST 270 覆土層序

層序 No	特 徴
1	暗褐色土 (7.5 YR 3/3) に大～小ブロックの黄褐色砂質土 (10 YR 8/8) を15%と小塊の炭化物を2%含む。
2	黄褐色砂質土 (10 YR 8/8) に礫を15%含む。しまりなし。
3	暗褐色土 (7.5 YR 3/3) に黄褐色砂質土 (10 YR 8/8) を小粒状に20%含む。
4	堆山。黄褐色砂質土 (10 YR 8/8)。

Ch. 14
(a) ST 271 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	37 × 31	55	
2	円	34 × 33	36	
3	円	33 × 28	53	
4	不	16 × 15	24	
5	方	25 × 25	22	
6	不	23 × 23	21	
7	不	20 × 19	29	

Ch. 14
(b) ST 271 覆土層序注記表

層序 No	特 徴
1	暗褐色土 (10 YR 3/3) に小～大ブロック状の明黄褐色砂質土 (10 YR 6/8) を15%と灰白色パミス (7.5 YR 8/1) と礫が3%ずつ、炭化物が1%含まれる。
2	堆山。明黄褐色砂質土 (10 YR 6/8)。

認められ、東壁北端に張り出し及び張り出しに伴う柱穴が2本検出されている。出土遺物は染付皿一点のみである。16世紀に入ってから廃絶した可能性が高いと思われる。ST270とは軸方向を同じくするが、両建物の間隔が狭いため同時期には存在しなかったと思われる。新旧関係は不明である。

ST272 (Fig.14-①), Ch.15-a(b) —— R49区検出。東西360(520)cm、南北440cm、深さ24cmの規模を有する。柱穴配置は、東西1間、南北3間であるが、東西の1間は間尺が広く、南北の間尺の1間半から2間分ある。また、南北3間のうち、南端の1間は間尺が半間分しかなく、この建物跡は規模的には2間×2間半となっている。西壁北端には張り出しがあり、張り出しに伴う柱穴が、半間+1間検出された。出土遺物は、青磁碗、産地不明播鉢、釘、用途不明鉄製品、皇宋通宝、治平通宝、無文銭などがみられる。SE130(新)と重複しているが、時期は不明である。

ST273 (Fig.14-②), Ch.16-a(b) —— S48区検出。東西250cm、南北230cm、深さ30cmの規模を有する。柱穴配置は南北方向に2間、東西方向は1間であるが、南壁で等間隔に2個の柱穴が入り北壁でも対応する柱穴が認められることから、3間になる可能性も高い。柱穴の深さは約40cmであるが、南側のPit4、Pit5の間の2本は深さが約25cmであり、補助的な柱とも考えられる。出土遺物は、覆土内から産地不明播鉢、釘があるが、遺構確認の段階で出土した白磁皿、染付皿、中国褐釉壺、瀬戸大皿などもST273に関する遺物と考えられる。北部でSE135(新)と重複し、西・北側に風倒木状の擾乱があるため、正確なプラン・規模が不明である。また、南壁には、壁溝と思われるものがみられる。16世紀以後の廃絶と思われる。

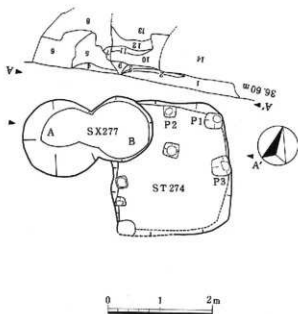
ST274 (Fig.15-①), Ch.17-a(b) —— R50区検出。東西220cm、南北260cm、深さ24cmの規模を有する。柱穴配置は、東西2間、南北2間と推定されるが、確認されている柱穴は3個である。出土遺物は床面近くから青磁碗があり、覆土からは青磁皿、白磁皿、瀬戸鉄軸碗、羽口、洪武通宝、無文銭が出土した。このうち青磁皿と瀬戸鉄軸碗は二次焼成を受けている。遺物からは15世紀後半の可能性が考えられる。SX277B(旧)と重複しているが、SX277Aとの新旧関係は不明である。

ST275 (Fig.15-②), Ch.18-a(b) —— V46区検出。東西330cm、南北400cm、深さ30cmの規模を有する。柱穴配置は、東西2間、南北2間で、中央にも柱穴がある総柱形態をとっていると思われる。出土遺物は青磁碗、青白磁陶枕?、瓦質手焙り、越前蓆、産地不明播鉢、かわらけ、釘、鉄鏝、用途不明鉄製品がみられる。遺構南部にSB60(新)が重複しており、礎石(根石)が残っている。また、北側ではSX273と重複しているが、新旧関係は不明である。

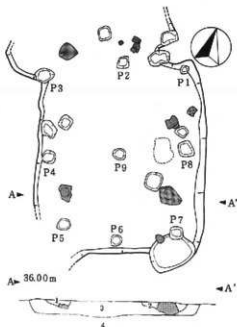
ST277 (Fig.16, Ch.19-a(b)) —— Q42区検出。東西370cm、南北710(906)cm、深さ36cmの規模を有する。柱穴配置は東西2間、南北3間と推定される。南壁西端に張り出し及

Fig. 15 竪穴建物跡V

(1) ST 274・SX 277 実測図



(2) ST 275 実測図



Ch. 17

(a) ST 274 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×短径 [cm]	深さ [cm]	備考
1	方	34 × 30	58	
2	方	25 × 23	44	
3	不	39 × 36	56	

(b) ST 274・SX 227 A・B 覆土層序注記表

層序地	特徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/3) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から極大粒状に3密と炭化物が1密と灰白色灰 (7.5 Y 8/1) が薄い板状に散在している。
2	灰黄褐色土 (10Y R 4/2) に炭化物を若干含む。しまりなし。
3	黒褐色土 (10Y R 2/3) と灰黄褐色土 (10Y R 4/2) との混層に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が小から大粒状に1密と炭化物を若干含む。
4	褐色砂質土 (10Y R 4/4) と黒褐色土 (10Y R 3/2) との7対3の混層。しまりややなし。
5	暗赤褐色土 (5Y R 2/3) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) を中から大塊状に2密と炭化物を若干含む。
6	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) を中から大塊状に2密と炭化物を若干含む。
7	暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) との5対5の混層。しまりなし。
8	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) が極大塊状に30密含まれる。
9	暗赤褐色土 (5Y R 3/2) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) が中粒状に1密含まれる。
10	黒褐色土 (10Y R 3/1) に明褐色砂質土 (10Y R 6/6) が大塊状に1密と炭化物が若干含まれる。
11	黄褐色砂質土 (2.5 Y 6/3) の単層。しまりなし。
12	黒色灰 (10Y R 1.7/1) に灰白色灰 (7.5 Y 8/1) が極厚い板状に10密と明赤褐色土 (2.5 Y 8/8) が極大粒状に1密含み、黒色灰の層中に炭化物が小量含まれる。
13	にがい黄褐色砂質土 (10Y R 7/4) に黒色土 (10Y R 2/1) を薄い板状に1密含まれる。
14	堆山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Ch. 18 (a) ST 275 柱穴計測表

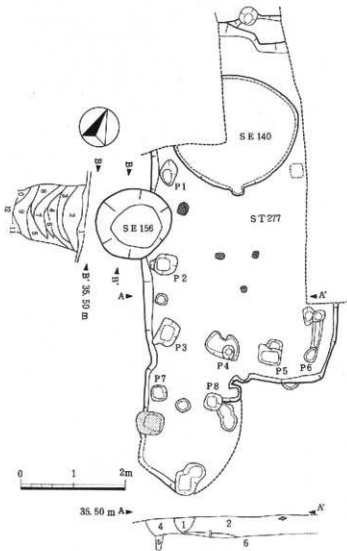
Pit No	形状	長さ×短径 [cm]	深さ [cm]	備考
1	不	17 × 17	7	
2	方	24 × 22	27	
3	不	37 × 28	26	
4	方	26 × 26	19	
5	不	25 × 23	27	
6	方	22 × 22	37	
7	方	26 × 26	17	
8	方	31 × 28	14	
9	方	24 × 22	18	

(b) ST 275 覆土層序注記表

層序地	特徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に極小塊の炭化物を若干含む。
2	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) と極小塊の炭化物を若干含む。
3	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を15密と小塊の炭化物を2密含む。
4	堆山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Fig. 16 竪穴建物跡Ⅵ

(1) S T 277・S E 156 実測図



Ch. 19 (a) S T 277 柱穴計測表

Pit No	形状	長さ×幅(cm)	深さ(cm)	備考
1	不	34 × 24	—	—
2	方	28 × 25	57	—
3	方	40 × 33	77	—
4	方	45 × 41	61	—
5	不	50 × 38	67	—
6	方	33 × 31	56	—
7	方	35 × 33	45	—
8	不	43 × 34	58	—

(b) S T 277 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒色土 (10 Y R 2/1) に黒褐色灰 (10 Y R 3/1) を3%と極小塊の炭化物を1%含む。	
2	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小粒から大粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を2%と極小塊の炭化物を1%含む。	
3	黒色土 (10 Y R 2/1) と黒褐色灰 (10 Y R 3/1) と赤褐色土 (10 Y R 6/2) との混層に極小塊の炭化物を1%含む。	
4	黒色土 (10 Y R 2/1) に小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を5%と極小塊の炭化物を1%含む。	
5	黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と黒色土 (10 Y R 2/1) との混層。	
6	堆山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

S E 156 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に灰黄褐色灰 (10 Y R 4/2) を大から極大粒に2%と赤褐色粘土 (10 Y R 5/4) を中粒状に2%と炭化物を極小塊に2%含む。しまりややあり。	
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を極小から大粒状に5%と炭化物を極小塊に1%含む。	
3	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) との6対4の混層。	
4	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を大粒状に1%と赤褐色粘土 (5 Y R 4/6) を大粒状に1%含む。	
5	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を中から極大粒状に7%含む。	
6	黒褐色土 (10 Y R 2/2) と暗褐色砂質土 (10 Y R 3/3) の5対5の混層。	
7	黒色土 (10 Y R 2/1) の混層。	
8	赤褐色土 (10 Y R 5/4) の混層。	
9	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に、赤褐色粘土 (10 Y R 5/4) を大から極大粒状に2%と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を小から極大粒状に5%含む。	
10	暗褐色砂質土 (10 Y R 3/3) に黒褐色土 (10 Y R 3/1) を厚い板状に2%含む。	
11	黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。しまりなし。	
12	堆山。黄褐色砂質土 (2.5 Y 5/3)。	

び張り出しに伴う柱穴が確認される。南側の柱穴配置は、張り出しの影響で3間となっているが、柱穴の深さがPit 4では若干たらず、補助的な要素が強い。出土遺物は、青磁鉢・碗・皿、白磁皿、美濃灰釉皿・鉄軸碗、瀬戸瓶子、珠洲甕・播鉢、越前壺、産地不明壺・播鉢、瓦質香炉、小札、鉄鍬、釘、鉄鏝、用途不明鉄製品、銅製高台、銅淨、政和通宝、威平通宝、祥符元宝、元豊通宝、嘉祐通宝、大型元宝、漆器などがみられる。重複関係はSE140(旧)がみられるが、SE156との新旧関係は不明である。15世紀後半廃絶の可能性が考えられる。

ST280 (Fig.17-①)、Ch.20-①(b)、P.L.5-①(a) —— R42区検出。東西340cm、南北430cm、深さ42cmの規模を有する。南北の棟通りに2個の柱穴が配置される。2個ともSB71の柱穴と重複しているが新旧関係は不明である。またST282(旧)とSX327(旧)と重複している。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、染付皿、美濃鉄軸壺、瀬戸灰釉瓶子、越前甕、瓦質碗 (Fig.49-169、P.L.23-169)、産地不明壺・播鉢・無釉陶器、釘、用途不明鉄製品、銅製装飾具、銅淨、元祐通宝、皇宋通宝、祥符元宝、景祐〇〇、無文銭などが見られる。出土遺物からは16世紀に入ってからの廃絶と考えられる。

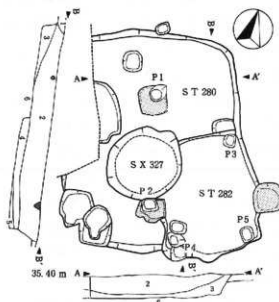
ST281 (Fig.17-②)、Ch.21-①(b)、P.L.5-①(b) —— S43区検出。東西244cm、南北252cm、深さ78cmの規模を有するほぼ正方形の遺構である。柱穴は四隅に配置されている。遺構中にみられる柱穴は、他の柱穴が深さ30cm以上あるのに対し、10cm程度の深さしかなく、また、位置も中心からずれているためST281に関する柱穴には入れなかったが、あるいは補助柱痕なのかもしれない。出土遺物には、青磁碗・盤、白磁皿、染付碗・皿、瀬戸卸皿、越前播鉢、珠洲系播鉢、産地不明播鉢、小刀、小札、三ツ目札、鉄鍬、釘、火箸、鏝、用途不明鉄製品、砥石、無文銭などがみられる。小型の竪穴建物跡であるが比較的深く、倉庫的な機能が考えられる。16世紀に入ってからの廃絶と思われ、一時期に埋め戻された可能性が高い。

ST282 (Fig.17-③)、Ch.20-①(b)、P.L.5-①(a) —— R42区検出。東西190cm、本南北230cm、深さ60cmの規模を有する。柱穴は四隅に配置されるが、北西端の1個はSX327と重複しているため(新旧関係不明)検出されていない。出土遺物には、白磁皿と釘がある。時期については不明である。形態・柱穴配置等ST281との共通点が多く、ST282についても倉庫的な機能が考えられる。

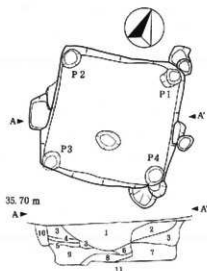
ST283 (Fig.Ch.22-①(b)) —— R42区検出。東西380cm、南北350(420)cm、深さ46cmの規模を有する不整形を呈している。柱穴は南北方向棟通りに3本配置されており、北壁中央部に張り出しと思われる部分があるが柱穴に接しており、張り出し・出入口施設とは一概に断言できない。出土遺物には青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿・水滴?、美濃灰釉皿、瓦質手埴り、産地不明鉢・播鉢、三ツ目札、火箸、釘、元豊通宝、無文銭、砥石などがみられる。新旧関係は、SB71(旧)、SE141(旧)であるが、SX330との新旧関係は不明である。

Fig. 17 整穴建物跡Ⅶ

(1) S T 280・282、S X 327実測図



(2) S T 281実測図



Ch. 20 (a) S T 280・282 柱穴計測表

Flt No	形状	長径×短径cm	深さcm	備考
1	不	36 × 28	61	S T 280
2	方	29 × 26	41	〃
3	方	26 × 24	51	S T 282
4	不	35 × 28	48	〃
5	方	29 × 25	51	〃

(b) S T 280・282 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と小塊状の炭化物をそれぞれ1発ずつ含む。
2	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を5発とに多い黄褐色粘土 (10 Y R 5/4) を全体的に3発と小塊状の炭化物を1発含む。
3	黒色土 (10 Y R 1.7/1) に中塊状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) と極小塊状の炭化物をそれぞれ1発ずつ含む。
4	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) を2発とに多い黄褐色粘土 (10 Y R 7/8) と小塊状の炭化物をそれぞれ1発ずつ含む。S T 282の覆土。
5	黒色土 (10 Y R 2/1) と黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) との混層。S T 282。
6	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。

Ch. 21 (a) S T 281 柱穴計測表

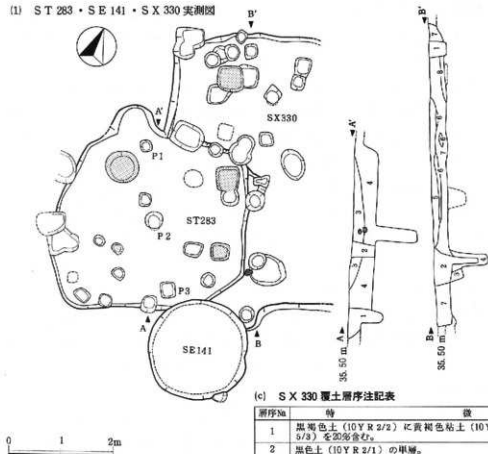
Flt No	形状	長径×短径cm	深さcm	備考
1	不	31 × 28	38	抜き取版
2	円	35 × 33	31	
3	円	37 × 35	37	
4	円	37 × 37	43	

(b) S T 281 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10 Y R 2/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から中粒状に2発含まれる。
2	黒色土 (10 Y R 2/1) において黄褐色粘土 (2.5 Y 6/4) が中から大塊状に7発含まれる。
3	褐色土 (7.5 Y R 6/4) と黒色土 (10 Y R 2/1) との8対2の混層に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から大塊状に5発含まれる。
4	黒色土 (10 Y R 2/1) の単層。しまりあり。
5	黒色土 (10 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が中から大塊状に15発含まれる。
6	黒色土 (10 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が極小粒状に1発含まれる。
7	黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) の単層。しまりなし。
8	褐色土 (7.5 Y R 6/4) と黒色土 (10 Y R 2/1) との6対4の混層に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から大塊状に5発含まれる。
9	黒色土 (10 Y R 2/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小から大塊状に5発含まれる。
10	黒色土 (7.5 Y R 1.7/1) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) が小塊状に3発含まれる。
11	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8)。

Fig. 18 竪穴建物跡遺

(1) ST 283・SE 141・SX 330 実測図



(c) SX 330 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に黄褐色粘土 (10Y R 5/3) を2層含む。	
2	黒色土 (10Y R 2/1) の単層。	
3	黒色土 (10Y R 2/1) とに黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) との層層。	
4	に黄褐色砂質土 (10Y R 5/4) の単層。	
5	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を2層と極小塊の炭化物を1層含む。	
6	黒色土 (10Y R 2/1) に極灰色灰 (10Y R 6/1) を3層と小塊状の炭化物を1層含む。	
7	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) と小塊状の炭化物をそれぞれ1層ずつ含む。	
8	黒色土 (10Y R 2/1) に極小塊の炭化物を若干含む。	
9	堆土。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。	

Ch. 22

(a) ST 283 柱穴測定表

Pit No	形状	長径×短径cm	深さcm	備	考
1	方	23 × 22	29		
2	円	34 × 34	88		
3	方	32 × 29	17		

(b) ST 283 覆土層序注記表

層序No	特	徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に小粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を2層とに黄褐色粘土 (10Y R 4/3) と極小塊の炭化物をそれぞれ1層含む。	
2	黒色土 (10Y R 2/1) に極小から中粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) とに黄褐色粘土 (10Y R 4/3) と極小塊の炭化物をそれぞれ1層含む。	
3	黒色土 (10Y R 2/1) に中から大粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を1層と小塊状の炭化物を1層と下層部に褐色土 (7.5 Y R 6/6) を5層含む。	
4	黒色土 (10Y R 2/1) に小から大粒状の黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) を5層と小塊状の炭化物を2層含む。	
5	堆土。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。	

出土遺物からは16世紀の廃絶と考えられる。

S X 287 (Fig.19-①, Ch.23) —— S 49区検出。東西240cm以上、南北260cm、深さ35cmの規模が確認されているが、東壁はまだ検出されていない。当初は竪穴遺構として扱ったが、方形のプランと柱穴がみられたため竪穴建物跡の項で報告する。柱穴は西壁の北端及び南端に配置されており、東壁でも同様な配置が考えられる。出土遺物には、白磁八角碗・皿、産地不明擂鉢、土師質把手、鉄滓、元壺通宝、治平元宝、炭化米などがみられる。15世紀後半の廃絶の可能性ある。遺構内には、焼土が110cm×50cm程度の範囲でみられる。焼土の近辺で炭及び炭化米の集中している箇所がみられている。形態的にはS T 281、282のような小規模な竪穴建物跡であり、倉庫的用途が考えられるため、焼土家屋である可能性が高い。

S X 299 (Fig.19-②, Ch.24-a)(b) —— R S 49区検出。東西190cm、南北100cm、深さ65cmの規模を有する小型の建物跡である。柱穴は東西2間、南北1間が配置され、柱穴中央には柱痕が残っている。遺物は釘が2点出土したのみで、遺構存続時期は明確にしがたい。南側でS X 210(新)と重複している。

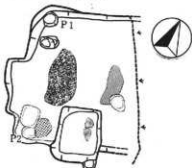
S X 276 (Fig.13-①, Ch.12, Pl. 4-b) —— W 45区検出。東西300cm、南北270cm、深さ45cmの規模を有する。柱穴は、東西の棟通りに2本配置される。出土遺物には、鉄滓、無文銭、漆器などがみられる。北東コーナーでS T 259と重複するが、新旧関係は不明である。遺構存続時期についても明確にならない。

S X 305 (Fig.19-③, Ch.25) —— S 48区検出。東西360cm、南北360cm、深さ(確認できず)の規模を有する。遺構の壁は検出できず、壁溝痕により規模を把握した。柱穴は四隅に配置され、壁溝と思われる施設は二重又は一重ではほぼ正方形を形作っている。覆土も明確ではないため、出土遺物中でS X 305に存するものも判断しかねるが、染付小壺、鉄鐵、釘、聖宋元宝、宣○通宝など遺構確認作業時に出土した遺物が考えられる。時期の推定は困難である。

S X 329 (Fig.19-④, Ch.26) —— S 44区検出。東西240cm以上、南北320cm、深さ20cmの規模を有する。S F 75(焼土遺構・新)が遺構東側に重複しているため、東壁は確認していない。平面形は方形であるが、柱穴配置は不明である。竪穴建物跡の可能性が高いものとして、ここで報告しておく。出土遺物には、青磁盤、染付皿、越前甕、産地不明擂鉢、小札がある。16世紀の廃絶の可能性ある。

Fig.19 竪穴建物跡Ⅹ

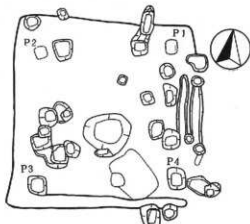
(1) SX 287 実測図



Ch. 23 SX 287 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	29 × 27	30	
2	不	36 × 22	50	

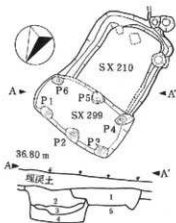
(3) SX 305 実測図



Ch. 25 SX 305 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	(方)	(26) × (23)	—	
2	(不)	(23) × (23)	16	
3	不	27 × 30	34	
4	方	41 × 35	14	

(2) SX 210・299 実測図



Ch. 24

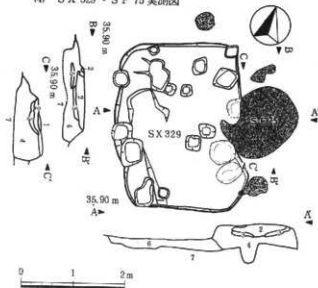
(a) SX 299 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	不	26 × 21	16	
2	不	26 × 24	20	
3	不	29 × 20	22	
4	不	31 × 30	10	
5	不	22 × 20	10	
6	不	25 × 17	—	

(b) SX 299・210 土層序記表

層序	特徴
1	黒色土 (0Y R 2/1) に細小から中粒の暗黒褐色砂質土 (0Y R 6/6) を10%と白色ペリスを3%と中粒の砂化物を2%含む。しまりあり。
2	黒色土 (0Y R 2/1) と大粒の暗黒褐色砂質土 (0Y R 6/6) の層間に細小から中粒の砂化物と白色ペリスを1%ずつ含む。灰白・黄褐色砂質土 (0Y R 5/2) を3%含む。
3	黒色土 (0Y R 2/1) と黒褐色土 (0Y R 5/3) と灰白色砂 (0Y R 7/1) の混層。
4	黒色砂質土 (0Y R 4/4) と黒色土 (0Y R 1.7/1) との混層に大粒の灰白・黄褐色砂質土 (0Y R 6/4) を10%含む。
5	埋土。黄褐色砂質土 (0Y R 6/6)。

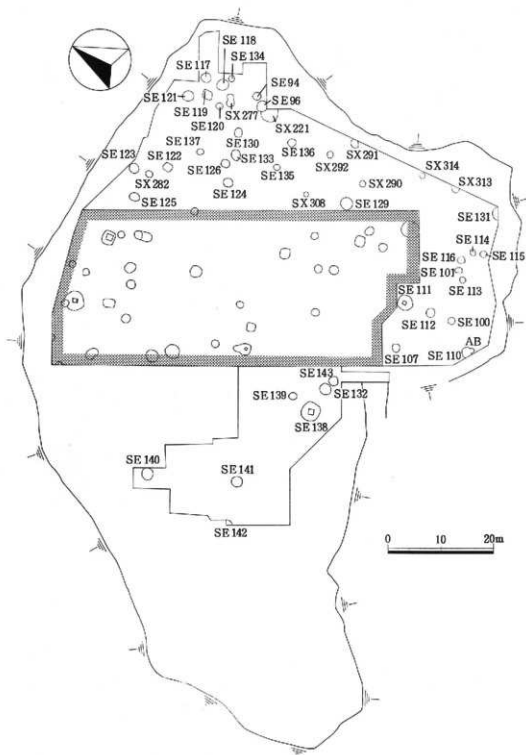
(4) SX 329・SF 75 実測図



Ch. 26 SF 75・SX 329 土層序記表

層序	特徴
1	黒褐色土 (0Y R 2/2) と灰白・黄褐色土 (5Y 6/3) との混層。
2	褐色土 (5Y R 6/8) と灰白・黄褐色土 (5Y 6/3) と灰白・黄褐色土 (7.5 Y R 5/4) と黒褐色土 (0Y R 5/1) との混層。しまりあり。
3	黒褐色土 (0Y R 1.7/1) と灰白・黄褐色土 (7.5 Y R 5/4) を1%含む。
4	黒色土 (0Y R 2/1) に細小から中粒の暗黒褐色砂質土 (0Y R 6/6) を2%と粗粒色土 (0Y R 6/1) と極小粒の灰化物を1%含む。
5	灰白・黄褐色砂質土 (0Y R 5/4) と黒色土 (0Y R 2/1) との混層。
6	黒色土 (0Y R 2/1) に細小から中粒の暗黒褐色砂質土 (0Y R 5/4) を2%と中粒の砂化物と粗粒色土 (5Y R 6/6) を1%含む。
7	灰白・黄褐色砂質土 (0Y R 5/4)。

Fig. 20 内館井戸跡配置図



4. 井戸跡

本年度報告の井戸跡では、隅柱横棧型の井戸木枠を有する井戸が2基（SE111・138）検出された。その他、特徴あるものには井戸内にカマド状の焼土を有するもの（SE121）などがある。検出された井戸跡の平面規模は、長径92cm短径88cmから長径375cm短径355cmまでと、個体により差がみられる。直径の小さなものについては、調査時に作業が困難で危険度も増すため、確認面から100cmまでの掘り下げで終了している。以下、各井戸跡の概要を記してゆく。なお、遺構規模のうち深さの（ ）内は、掘り下げを中止した時点での深さを示している。

SE96（Fig.21-①）—— S50区検出。長径225cm、短径200cm、深さ（47）cm。SX221と重複するが、新旧関係は不明。出土遺物なし。時期不明。

SE100（Fig.21-②）—— W45区検出。長径143cm、短径130cm、深さ（20）cm。遺構のプランを確認した程度である。時期不明、出土遺物なし。重複遺構なし。

SE101（Fig.21-③）、Ch.28）—— W46区検出。長径145cm、短径95cm、深さ（100）cm。楕円形のプランを有する。前年度に遺構を確認し、埋め戻してあったものを掘り下げた。粘土の薄い広がりが第2層の焼土上面にみられた。出土遺物には、白磁皿（口禿）、珠洲系稲鉢、釘、棒状鉄製品がある。15世紀後半廃絶の可能性がある。

SE102（Fig.21-④）、Ch.29）—— R47・48区検出。長径145cm、短径130cm、深さ（115）cm。出土遺物に美濃灰軸皿、瀬戸灰軸皿、唐津皿があることから、城館末期（16世紀末）の廃絶と考えられる。

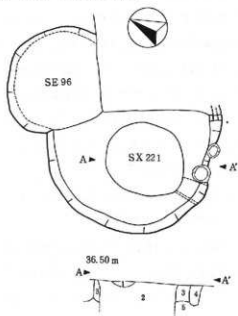
SE107（Fig.21-⑤）—— UV45区検出。長径148cm、短径138cm、深さ（37）cmの規模を有する。遺構側溝で柱穴と重複しているが、新旧関係不明。覆土中から染付碗が1点出土している。

SE110A・B（Fig.23-①）、Ch.31）—— W45区検出。2基の井戸跡が重複しているため、北側の大きな方をA、南側の小規模なものをBとして報告する。なお、新旧関係はA（旧）B（新）となっている。Aは長径（216）cm、短径180cm、深さ（88）cmで、南西側の壁は確認していない。また、南東部もBに切られているため壁は調査した段階では検出されなかった。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、刀子、釘、用途不明鉄製品、漆器、はたて貝、不明骨などがある。Bは長径（96）cm、短径88cm、深さ（88）cmであるが、北西部の1/4がAと重複しており、明確な壁を確認することができなかった。出土遺物には、青磁碗、瀬戸灰軸壺、無文銭がみられる。Bの覆土上面より暗緑色一部白濁する軸のかかった碗が出土している。比較的新しい製品であるとすれば、Bは城館期より新しいのかもしれない。時期については、A・Bともに不明である。

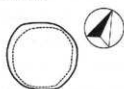
SE111（Fig.22-①②）、Ch.30、P.L.6-①a）—— V46区検出。長径290cm、短径270cm、深さ370cmの規模を有する。井戸内に床から165cm程度まで隅柱横棧型の木枠を有してい

Fig. 21 井戸跡 I

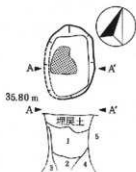
(1) SE 96・SX 221 実測図



(2) SE 100 実測図



(3) SE 101 実測図



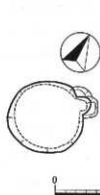
Ch. 27 SX 221 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	におい黄褐色粘土 (10Y R 4/3) と黒褐色土 (10Y R 3/2) とが8対2の混層。
2	黒褐色土 (10Y R 3/2) と灰黄褐色灰 (10Y R 4/2) とが6対4の混層ににおい黄褐色粘土 (10Y R 4/3) が中から大粒状に1割と炭化物を若干含む。
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に明黄褐色砂質土 (10Y R 7/6) が大から極大粒状に1割含む。
4	黒褐色土 (10Y R 2/3) に明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6) が中から大粒状に1割とにおい黄褐色粘土 (10Y R 5/3) が大塊状に1割と炭化物を若干含む。
5	堆山。黄褐色砂質土。

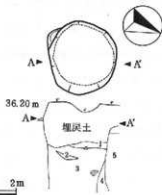
Ch. 28 SE 101 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に黒色灰 (N 2/0) を粒状に15割と小粒のにおい黄褐色灰 (10Y R 1/2) を2割と極小から小塊の炭化物を2割極小粒の黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を1割含む。湿性あり。
2	褐色腐土 (10Y R 4/6) と明黄褐色腐土 (10Y R 6/6) の混層に炭化物1割含む。
3	黒色土 (7.5 Y R 2/1) に小粒のにおい黄褐色灰 (10Y R 7/2) を1割含む。しまりなし。
4	黒色土 (7.5 Y R 2/1) と淡黄色砂質土 (2.5 Y 7/4) と黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) の混層に炭化物1割含む。
5	堆山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

(5) SE 107 実測図



(4) SE 102 実測図

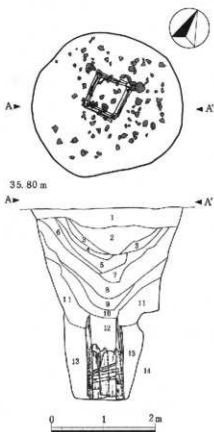


Ch. 29 SE 102 覆土層序注記表

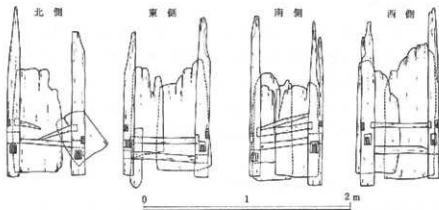
層序No	特 徴
1	におい黄褐色粘土 (10Y R 4/3)。
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) と暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) の混層に大塊状の炭化物を1割含む。
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) に暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) が3割と暗灰色灰 (10Y R 5/1) を5割と中から大塊状の炭化物を2割含む。下部部にいきしだい湿性有り。
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) と暗褐色土 (10Y R 3/3) との混層湿性有り。
5	堆山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6)。

Fig.22 井戸跡Ⅱ

(1) SE 111 実測図



(2) SE 111 井戸実測図



Ch. 30 SE 111 覆土層序注記表

層序No.	特 徴	備 考
1	黒褐色土 (10Y R 2/3) に灰色灰 (5 Y 4/1) を3%と明黄褐色土 (10Y R 6/8) を極小粒状に2%と灰白色ペシス (7.5 Y R 8/1) を極小粒状に1%と炭化物を2%含む。小石1%を含む。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/3) に褐色灰 (10Y R 4/0) を15%と明黄褐色砂質土極小粒状に1%と小石を1%含む。しまりなし。	
3	灰色灰 (5 Y R 4/1) と黒褐色土 (10Y R 2/3) とにおい黄褐色灰 (10Y R 7/2) との7対2対1の混層。	
4	黒褐色土 (10Y R 2/3) に灰色灰 (5 Y R 4/1) を3%と炭化物を2%含む。	
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) に灰白色ペシス (7.5 Y R 8/1) を中から大粒状に2%と炭化物を大塊状に1%含む。しまりなし。	
6	黒褐色土 (10Y R 2/3) に黒褐色灰 (2.5 Y 3/1) を2%と褐色粘土 (10Y R 4/4) を極小粒状に2%と炭化物を1%含む。	
7	黒褐色土 (10Y R 2/3) に褐色粘土 (10Y R 4/4) と灰色灰 (10Y 5/1) をそれぞれ10%ずつと褐灰色灰 (5 Y R 4/1) を7%含む。しまりなし。	
8	褐灰色灰 (5 Y R 4/1) に灰黄色灰 (2.5 Y 7/2) が極厚い板状に30%含む。	
9	黒褐色土 (10Y R 2/3) に褐灰色灰 (5 Y R 4/1) が10%とにおい黄褐色灰 (10Y R 5/3) を大塊状に1%含む。	
10	黒褐色土 (10Y R 2/2) に明褐色砂質土 (10Y R 6/8) を20%と褐灰色灰 (5 Y R 4/1) を10%含む。	
11	黒褐色土 (10Y R 2/2) に小から中粒状の明褐色砂質土 (10Y R 6/8) を2%含む。	
12	明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) に黒褐色土 (10Y R 2/2) を20%含む。	
13	黒褐色土 (10Y R 2/2) ににおい褐色砂質土 (10Y R 7/3) を小から中粒状に2%含む。	
14	堆山。黄褐色砂質土 (10Y R 6/8)。	

る。横棧が枠の下端から60cmほどの間に3段組まれている。掘り方は、急角度のV字形で壁の崩壊はあまりみられない。覆土層序観察からは、第13層で枠を固定し、11層で木枠の裏ごめを行う構築課程、井戸廃棄後の埋め戻し（2層から10層）、地形を行った1層、と各工程がある程度推定できる。遺物出土状況は、床面近くから茶臼が2点、同じく木枠内から染付皿、瓦質手焙り、産地不明播鉢がみられる。11及び13層からの遺物の出土はない。埋め戻し・地形の層からは、青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿（茶筒底皿を含む）、美濃灰釉皿・壺、瀬戸鉄釉皿・壺、瀬戸灰釉壺、越前壺、産地不明播鉢、瓦質手焙り、小刀、鉄鐵、鉄鍋、釘、多孔鉄製品、棒状鉄製品、鞆、銅針、溶解物、羽口、臼、硯、漆器などや、直径1.8cm程の五門玉状の用途不明土製品、熙寧元宝、元祐通宝、無文銭、不明骨などが出土している。出土遺物からは16世紀後半の埋め戻しと考えられる。重複関係ではS D92（旧）がある。

SE 112（Fig.23-②、Ch.32）—— V 45・46区検出。長径190cm、短径157cm、深さ（150）cmの規模を有する。東側の壁が若干崩れた感がある。出土遺物には、染付皿、美濃灰釉皿、瓦質手焙り、珠洲系壺、土師器羽釜、小札、釘、聖宋元宝などがある。16世紀に入ってからの廃絶と考えられる。

SE 113（Fig.23-③、Ch.33）—— W46区検出。長径125cm、短径105cm、深さ（83）cmの規模を有する。遺物は東半部より主に出土した。青磁碗、白磁皿、染付碗、美濃灰釉大皿・折縁皿、産地不明皿、釘、元豊通宝、洪武通宝、無文銭などが出土しており、16世紀後半に廃絶された遺構と考えられる。

SE 114（Fig.23-④、Ch.34）—— W47区検出。長径142cm、短径118cm、深さ（100）cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗、溶解物、刀子、鉄滓がある。時期不明。

SE 115（Fig.24-①、Ch.35）—— W47区検出。長径130cm、短径130cm、深さ（110）cmの規模を有する。ほぼ円形のプランと推定される。明確に覆土中から出土した遺物はないが、遺構確認作業の際出土している青白磁陶枕？、美濃灰釉皿、産地不明播鉢、釘がSE 115に依る可能性がある。時期不明。

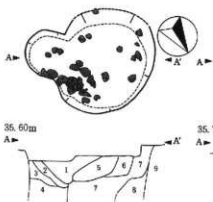
SE 116（Fig.24-②、Ch.36）—— W46・47区検出。長径153cm、短径135cm、深さ（110）cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、瀬戸灰釉瓶子、産地不明播鉢、増嶋、溶解物、釘、永楽通宝、硯、茶臼がある。15世紀後半に廃絶した可能性がある。

SE 117（Fig.24-③、Ch.37）—— R 50区検出。長径197cm、短径175cm、深さ（100）cmの規模を有する。出土遺物には、白磁小杯、鉢、刀子がある。時期不明。

SE 118（Fig.25、Ch.40、P.L.6-(b)）—— R 50区検出。長径235cm、短径215cm、深さ440cmの規模を有する。本年度、底面まで掘り下げた井戸跡は3基ある。この井戸跡は直径も比較的大きく、出土遺物が多量であったため掘り下げた。井戸枠は検出されないいわゆる

Fig. 23 井戸跡Ⅲ

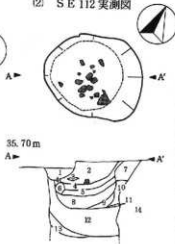
(1) SE 110 実測図



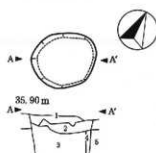
Ch. 31
SE 110 A・B 覆土層序注記表

層序No.	地層	特徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/1) 硬質褐色土 (7.5 Y R 5/2) の中間層に厚い、酸化物質を多量に含有する。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に1層と酸化物質を多量含有。	
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に2層と酸化物質を多量含有。	
4	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に3層と酸化物質を多量含有。	
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に4層と酸化物質を多量含有。	
6	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に5層と酸化物質を多量含有。	
7	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に6層と酸化物質を多量含有。	
8	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に7層と酸化物質を多量含有。	
9	粘土、黄褐色砂土 (7.5 Y R 7/8)。	

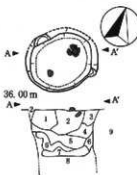
(2) SE 112 実測図



(3) SE 113 実測図



(4) SE 114 実測図



Ch. 34
SE 114 覆土層序注記表

層序No.	地層	特徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に1層と酸化物質を多量含有。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に2層と酸化物質を多量含有。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に3層と酸化物質を多量含有。	
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に4層と酸化物質を多量含有。	
5	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に5層と酸化物質を多量含有。	
6	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に6層と酸化物質を多量含有。	
7	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に7層と酸化物質を多量含有。	
8	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に8層と酸化物質を多量含有。	
9	粘土、黄褐色砂土 (10Y R 5/6)。	

Ch. 32
SE 112 覆土層序注記表

層序No.	地層	特徴
1	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に1層と酸化物質を多量含有。	
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に2層と酸化物質を多量含有。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に3層と酸化物質を多量含有。	
4	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に4層と酸化物質を多量含有。	
5	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に5層と酸化物質を多量含有。	
6	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に6層と酸化物質を多量含有。	
7	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に7層と酸化物質を多量含有。	
8	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に8層と酸化物質を多量含有。	
9	粘土、黄褐色砂土 (10Y R 4/4)。	
10	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に10層と酸化物質を多量含有。	
11	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に11層と酸化物質を多量含有。	
12	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に12層と酸化物質を多量含有。	
13	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) 比褐色土 (10Y R 4/2) の中間層に13層と酸化物質を多量含有。	
14	粘土、黄褐色砂土 (10Y R 5/6)。	

Ch. 33
SE 113 覆土層序注記表

層序No.	地層	特徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に1層と酸化物質を多量含有。	
2	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に2層と酸化物質を多量含有。	
3	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に3層と酸化物質を多量含有。	
4	黒褐色土 (10Y R 2/2) 比褐色土 (7.5 Y R 4/2) の中間層に4層と酸化物質を多量含有。	
5	粘土、黄褐色砂土 (10Y R 4/6)。	

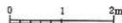
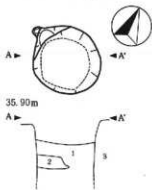


Fig. 24 井戸跡Ⅳ

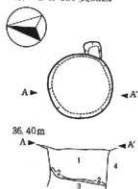
(1) SE 115 実測図



Ch. 35
SE 115 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒褐色土 (5 Y R 3/1) に長筒状砂質土 (10 Y R 6/8) が穴から隙状に約 5 割と埋められ土 (7.5 Y R 5/8) が隙状に約 1 割と埋められる。
2	明褐色土 (5 Y R 8/2) に明褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が隙状に含有され赤褐色土 (5 Y R 4/6) が隙状に 1 割と埋められる。
3	粘土、黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8)。

(5) SE 120 実測図

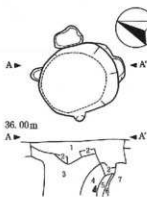


Ch. 39
SE 120 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒褐色土 (5 Y R 3/2) に褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が隙から隙状に約 5 割と埋められ赤褐色土 (5 Y R 5/8) が隙状に約 1 割と埋められ (10 Y R 7/3) を 1 割と下層に砂質土が埋められ土 (10 Y R 7/3) が隙状に 1 割と埋められる。
2	褐色砂質土 (10 Y R 4/6) の初期。
3	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が隙から隙状に 1 割と埋められ土 (5.5 Y 7/3) が隙状に 1 割と埋められる。
4	粘土、褐色砂質土 (10 Y R 4/6)。



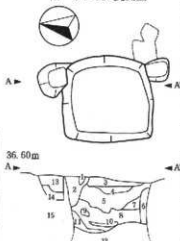
(2) SE 116 実測図



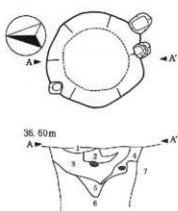
Ch. 36
SE 116 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒色土 (10 Y R 3/1) に細小から小粒状の緑褐色土 (10 Y R 6/3) を 5 割と細小から小粒の炭化物を 2 割と小粒の黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を 1 割含む。しきりあり。
2	黒色土 (10 Y R 3/1) と小粒から半粒の明褐色砂質土 (10 Y R 6/8) の混物。
3	黒色土 (7.5 Y R 3/1) に細小粒状の明褐色砂質土 (10 Y R 6/8) と細小粒状の黄褐色土 (10 Y R 6/8) と細小粒の炭化物をそれぞれ 1 割と 1 割と炭化物を 1 割含む。
4	黒色土 (7.5 Y R 3/1) に細小から小粒状の明褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を 5 割と黄褐色土 (10 Y R 6/3) を 5 割と炭化物 (10 Y R 6/2) を 5 割と炭化物を 1 割含む。
5	黒色土 (7.5 Y R 3/1) に赤褐色砂質土 (10 Y R 7/3) を 30 割含む。
6	黒色土 (7.5 Y R 3/1) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) との混物。
7	粘土、明褐色砂質土 (10 Y R 6/8)。

(4) SE 119 実測図



(3) SE 117 実測図



Ch. 37
SE 117 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	暗褐色土 (10 Y R 3/2) に小から中アブツシ土 (暗褐色土) (10 Y R 6/3) が 5 割と赤褐色土 (5 Y R 5/8) (10 Y R 6/3) が 1 割と埋められる。しきりあり。
2	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に暗褐色土 (暗褐色土) (10 Y R 6/3) が 5 割と埋められる。
3	黒褐色土 (5 Y R 3/2) に暗褐色土 (暗褐色土) (10 Y R 6/3) が 5 割と赤褐色土 (5 Y R 5/8) が 1 割と埋められる。
4	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に赤褐色土 (赤褐色土) (10 Y R 6/3) が 5 割と埋められる。
5	黒褐色土 (5 Y R 3/2) に赤褐色土 (赤褐色土) (10 Y R 6/3) が 5 割と埋められる。
6	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に赤褐色土 (赤褐色土) (10 Y R 6/3) が 5 割と埋められる。
7	粘土、黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8)。

Ch. 38
SE 119 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒褐色土 (10 Y R 3/2) の初期。しきりなし。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) と黒褐色土 (10 Y R 3/2) を 90 割と炭化物 (10 Y R 6/2) を 10 割と埋められしきりなし。
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) が 5 割と大粒状に約 1 割と炭化物 (7.5 Y R 6/2) が 5 割と埋められしきりなし。
4	黒褐色土 (10 Y R 3/2) と黒褐色土 (10 Y R 3/2) と大粒状の炭化物 (炭化物) (10 Y R 6/2) の混物。
5	黒褐色土 (10 Y R 3/2) と黒褐色土 (10 Y R 3/2) の 5 割と大粒状の炭化物 (炭化物) (10 Y R 6/2) の 5 割と埋められしきりなし。
6	黒褐色土 (10 Y R 3/2) と炭化物 (炭化物) (10 Y R 6/2) の 5 割と埋められしきりなし。
7	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色土 (10 Y R 3/1) が 1 割と埋められしきりなし。
8	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黒褐色土 (10 Y R 3/2) を 10 割と埋められしきりなし。
9	褐色土 (10 Y R 4/2) の初期。
10	褐色土 (7.5 Y R 4/2) と明褐色土 (5 Y R 6/6) の 5 割と埋められしきりなし。
11	明褐色土 (10 Y R 3/2) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) が 4 割と埋められしきりなし。
12	黒褐色土 (10 Y R 3/2) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) が 4 割と埋められしきりなし。
13	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に黄褐色土 (10 Y R 6/8) が 5 割と埋められしきりなし。
14	赤褐色土 (10 Y R 3/1) を 10 割と埋められしきりなし。
15	粘土、黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8)。

素掘りの井戸跡である。遺物は主に第1層から第8層に集中しているが、第24層の上層でも集中している部分が見られた。第24層の遺物は、ほとんどが染付皿 (Fig. 25・71・76・79・82・84・85・86) である。また、遺物の出土状態からは、第24層上が壁面の崩落土であり、使用不能になった井戸跡を一時期に埋め戻したものと考えられる。前出以外の出土遺物としては、青磁碗・皿 (陵花皿含む)、白磁皿 (内柄、端反り含む)、染付碗・皿・小型の菊皿 (Fig. 25-83)、珠洲系插鉢、産地不明襦鉢、瓦質手焙り、小札、鉄線、鉢、芋引金、鉄鍋、火箸、かすがい、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、小柄の柄、目貫金具、用途不明銅製品、開元通宝、聖宋元宝、元豊通宝、永樂通宝、熙寧〇〇、無文銭、漆器、磁石、石臼、茶臼、硯などがみられる。16世紀の廃絶と思われる。陶磁器類は襦鉢・瓦質手焙りを除いてすべて中国製のみであり、美濃・瀬戸等の製品が伴出してない。当遺構における瓦質手焙りの出土遺物中に占める率は他遺構と比較して高いようである。他遺構との重複なし。

SE 119 (Fig. 24-④, Ch. 38) —— R50区検出。長径175cm、短径168cm、深さ(115)cmの規模を有する。隅丸方形のプランを有する井戸跡である。出土遺物には、羽口、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、炭化米がある。時期を決定できるような遺物が出土していないため使用年代は不明である。

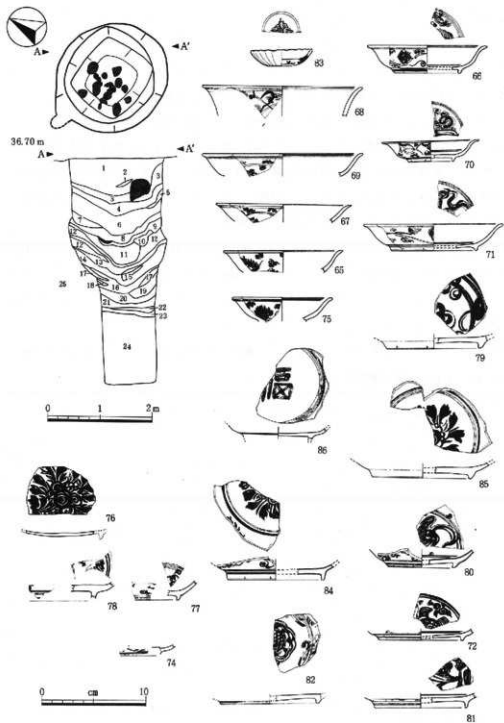
SE 120 (Fig. 24-⑤, Ch. 39) —— R50区検出。長径125cm、短径123cm、深さ(80)

Ch. 40 SE 118 覆土層序注記表

層序	地	説
1	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を中粒状に1割と細粒状 (10 YR 4/1) を中粒状に1割と炭化物を大から細大粒状に3割含む。	
2	灰黄色土 (10 YR 6/2) と黄褐色土 (5 YR 6/6) と炭化物の存在。	
3	黄褐色土 (7.5 YR 2/3) には細かい黄褐色砂質土 (10 YR 6/3) を小から細大粒状に3割と炭化物を中粒状に1割含む、しまり中あり。	
4	黄褐色土 (10 YR 3/1) には細かい黄褐色砂質土 (10 YR 6/3) を中粒状に1割と明褐色土 (7.5 YR 7/1) をうすい粒状に1割と炭化物 (10 YR 2/1) をうすい粒状に1割と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を小粒状に1割と炭化物を中から大粒状に1割含む。	
5	褐色砂質土 (10 YR 4/6) と黒褐色土 (10 YR 3/2) が4割の混層。	
6	黄褐色土 (10 YR 2/2) と黄褐色砂質土 (10 YR 3/3) を細かい板状に3割と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) が中粒状に1割と黄色土 (10 YR 1/1) が中粒状に2割と炭化物を大から細大粒状に5割含む。	
7	黄褐色土 (10 YR 4/6) と黄褐色土 (10 YR 3/2) が8割の混層。	
8	黄褐色土 (10 YR 2/3) には黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) を5割と炭化物を大粒状に3割含む。	
9	黄色土 (10 YR 2/1) と炭化物の混層に黄褐色土 (10 YR 5/3) が細かい板状に10%混入している。	
10	黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) の単層。	
11	黄褐色土 (10 YR 2/2) には細かい黄褐色砂質土 (10 YR 5/3) が小から中粒状に1割と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) が大粒状に1割と炭化物を大粒状に1割含む。	
12	明褐色砂質土 (10 YR 6/8) と黄褐色土 (10 YR 2/2) の9割の混層。しまりなし。	
13	黄色土 (7.5 YR 2/1) と黄褐色土 (10 YR 5/6) が1割と黄褐色砂質土 (10 YR 3/3) が左側の塊から極厚い板状に伴入する状況混入している。しまりなし。	
14	細かい黄褐色砂質土 (10 YR 6/3) の単層。しまりなし。	
15	黄色土 (10 YR 2/1)。	
16	黄褐色土 (7.5 YR 2/1) と黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) が大粒状に1割と黄褐色砂質土 (10 YR 3/3) を入層状に1割含まれ下層に細かい黄褐色土 (10 YR 5/3) が細かい板状に10%含まれる。	
17	黄褐色砂質土 (10 YR 5/6)。しまりなし。	
18	黄褐色砂質土 (2.5 Y 7/3)。しまりなし。	
19	細かい黄褐色土 (10 YR 6/3)。しまりなし。	
20	明褐色砂質土 (10 YR 7/6)。しまりなし。	
21	黄色土 (10 YR 1/1) の中央部に黄褐色土 (10 YR 4/1) がごく細かい板状に30%含まれる。	
22	細かい黄褐色土 (2.5 Y 6/3)。しまりなし。	
23	灰黄色砂質土 (2.5 Y 7/2) と黄色土 (2.5 Y 2/1) が7割5厘の混層。しまりなし。	
24	灰黄色砂質土 (2.5 Y 7/2)。しまりなし。	
25	地山。黄褐色砂質土 (10 YR 5/6)。	

Fig. 25 井戸跡 V

SE 118 実測図及び出土染付実測図



cmの規模を有する。平面形はほぼ円形を呈している。出土遺物には覆土から用途不明銅製品、永楽通宝、〇〇元宝がみられる。また、覆土上面ではあるが、白磁皿、染付碗、釘、洪武通宝などもS E 120に伴う可能性がある。16世紀の廃絶の可能性はある。

S E 121 (Fig.26-①), Ch.41, P L. 7--(a)——Q R 50区検出。長径210cm、短径195cm、深さ(120)cm。確認面から20cm程下がった覆土中に、焼土遺構(S F 73(新)、後述)が重複して作られている。出土遺物には、青磁碗・皿、瀬戸灰釉瓶子、珠洲系播鉢、釘、用途不明鉄棒、鉄滓、溶解物、漆器、皇宋通宝などがある。なお、遺構覆土層序中第7層以下がS E 121の覆土と思われる。

S E 122 (Fig.26-②), Ch.42)——Q 48区検出。長径165cm、短径157cm、深さ(93)cmの規模を有する。平面形は方形に近く、内部に集石がみられた。出土遺物には、珠洲系播鉢、鉄滓、土師器把手などがある。時期不明。

S E 123 (Fig.26-③), Ch.43)——P Q 48区検出。長径200cm、短径185cm、深さ(138)cmの規模を有する。出土遺物は、青磁碗・盤、染付皿、座地不明播鉢、釘、鉄滓、用途不明鉄製品、洪武通宝、元豊通宝、無文銭、炭化米などである。16世紀の廃絶と考えられる。

S E 124 (Fig.26-④), Ch.44)——R 48区検出。長径185cm、短径170cm、深さ(130)cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗・皿(陵花皿を含む)、白磁皿、染付碗・皿、美濃灰釉皿、瀬戸灰釉細皿・鉄軸蓋、越前製・播鉢、珠洲系壺、瓦質手埴り、増埴、かわらけ、小札、釘、用途不明鉄製品、銅滓、無文銭などがある。東西にある柱穴(旧)は掘立柱建物跡になる可能性がある。

S E 125 (Fig.27-①), Ch.45)——P Q 48区検出。長径190cm、短径177cm、深さ(116)cmの規模を有する。出土遺物には、土師器(把手付)、用途不明銅製品があるが、覆土上より出土している鉄鍋、用途不明鉄棒もS E 125の遺物と考えられる。S X 296(新)と西側で重複している。時期不明。

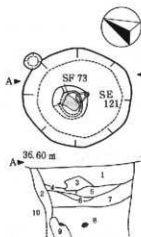
S E 126 (Fig.27-②), Ch.46-(a)——R 48・49区検出。長径162cm、短径160cm、深さ(118)cmの規模を有する。確認面から110cm程度掘り下げた段階で壁がほぼ水平に崩落している。出土遺物には、青磁碗・皿・瓶子耳?、白磁皿、染付碗・皿、美濃灰釉皿・褐釉碗、増埴、瓦質手埴り、鉄鉢、釘、用途不明鉄角棒、銅鋸、洪武通宝、無文銭、用途不明銅製品、不明骨などがある。16世紀の廃絶と考えられる。遺構東側でS X 284(旧)と重複している。

S E 127 (Fig.27-③), Ch.47)——R 49区検出。長径137cm、短径120cm、深さ(40)cmの規模を有する。出土遺物は第1層からのみで、染付皿、火打金、毛抜がある。遺構南側でS X 286(旧)と重複している。16世紀の廃絶の可能性はある。

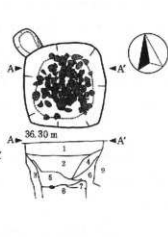
S E 128 (Fig.28-①), Ch.48)——U 48区検出。長径245cm、短径225cm、深さ(200)cm

Fig. 26 井戸跡Ⅵ

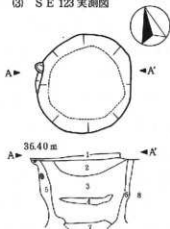
(1) SE 121・SF73実測図



(2) SE 122実測図



(3) SE 123実測図



Ch. 41 SE 121 覆土層序注記表

層序No	層	説
1	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
2	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に赤褐色砂質土 (7.5 Y R 5/2) が中規模に付着している。下部に土が埋まっている。	
3	明褐色土 (20Y R 7/6) の面層。 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
4	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
5	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
6	灰褐色土 (20Y R 7/1) の面層。	
7	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
8	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
9	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
10	暗土。黄褐色砂質土 (20Y R 5/8)。	

Ch. 42 SE 122 覆土層序注記表

層序No	層	説
1	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
2	黒褐色土 (7.5 Y R 1/7) に赤褐色砂質土 (7.5 Y R 1/7) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 5/5) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/1) が厚く付着した層。	
3	黒褐色土 (7.5 Y R 1/7) と赤褐色砂質土 (2.5 Y R 2/1) が厚く付着した層。	
4	黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。	
5	黒褐色土 (7.5 Y R 1/1) に赤褐色土 (7.5 Y R 1/1) と赤褐色砂質土 (7.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。	
6	黒褐色土 (20Y R 2/1) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (20Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (20Y R 2/2) が厚く付着した層。	
7	黒褐色土 (7.5 Y R 1/1) に赤褐色砂質土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。	
8	黒褐色土 (7.5 Y R 1/1) に赤褐色砂質土 (20Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 2/2) が厚く付着した層。	
9	暗土。明褐色砂質土 (2.5 Y R 5/6)。	

Ch. 43 SE 123 覆土層序注記表

層序No	層	説
1	赤褐色土 (20Y R 4/3) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
2	赤褐色土 (20Y R 4/3) と黒褐色土 (20Y R 2/2) の面層。黒褐色土 (20Y R 4/3) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 4/3) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 4/3) が大規模に分布している。	
3	黒褐色土 (7.5 Y R 7/1) と黒褐色土 (20Y R 7/1) の面層。黒褐色土 (20Y R 7/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 7/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 7/1) が大規模に分布している。	
4	黒褐色土 (7.5 Y R 7/1) と黒褐色土 (20Y R 7/1) の面層。黒褐色土 (20Y R 7/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 7/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 7/1) が大規模に分布している。	
5	黒褐色土 (20Y R 4/1) と黒褐色土 (20Y R 4/1) の面層。黒褐色土 (20Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 4/1) が大規模に分布している。	
6	黒褐色土 (20Y R 4/1) と黒褐色土 (20Y R 4/1) の面層。黒褐色土 (20Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 4/1) が大規模に分布している。	
7	赤褐色砂質土 (20Y R 4/2) の面層。	
8	暗土。黒褐色砂質土 (20Y R 5/8)。	

Ch. 44 SE 124 覆土層序注記表

層序No	層	説
1	黒褐色土 (20Y R 3/2) に赤褐色土 (20Y R 4/4) と黒褐色土 (20Y R 3/3) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 3/6) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 3/6) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 3/6) が大規模に分布している。	
2	黒褐色土 (20Y R 3/2) と黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) の面層。黒褐色土 (20Y R 3/2) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 3/2) が大規模に分布している。黒褐色土 (20Y R 3/2) が大規模に分布している。	
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
4	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
5	黒褐色土 (20Y R 2/2) に赤褐色砂質土 (20Y R 5/8) が厚く付着した層。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。黒褐色土 (2.5 Y R 4/1) が大規模に分布している。	
6	暗土。黄褐色砂質土 (20Y R 5/8)。	

0 1 2 m

(4) SE 124実測図

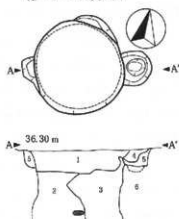
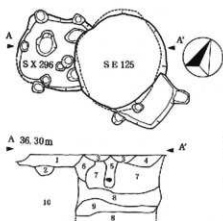


Fig. 27 井戸跡Ⅶ



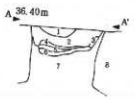
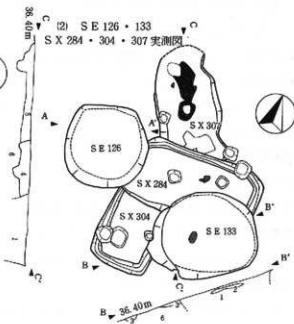
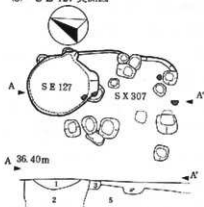
(1) SE 125・SX 296 実測図

Ch. 45

SE 125・SX 296 覆土層序注記表

層序番号	地層	備
1	黒褐色土 (10Y R 5/3) 片黒褐色土 (10Y R 5/2) と埋め込み物を含む。10Y R 6/8 が極小から小粒状に1層と黒褐色土 (5Y R 6/8) が極小粒状に1層と炭化物を含む。しりりあり。	
2	暗褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 5/1) が5層と炭化物を1層含む。しりりあり。	
3	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 6/2) が中から大粒状に1層と炭化物を含む。しりりあり。	
4	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 6/8) が極小から小粒状に1層と黒褐色土 (10Y R 6/7) を1層と炭化物を含む。しりりあり。	
5	黒褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 4/6) が極小から小粒状に1層と炭化物を1層含む。	
6	黄褐色土 (10Y R 5/2) と黒褐色土 (10Y R 5/1) との混成。	
7	黄褐色砂状土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 5/1) が中から大粒状に1層と黒褐色土 (10Y R 6/8) が中から大粒状に1層と片黒褐色土 (7.5 Y 5/2) が中粒状に3層を含む。しりり中々あり。	
8	黄褐色砂状土 (10Y R 4/2) と黒褐色土 (10Y R 5/1) との混成に炭化物を含む。 (10Y R 6/8) が大粒状に1層と片黒褐色土 (10Y R 6/7) が中から大粒状に1層と片黒褐色土 (7.5 Y 5/2) が中粒状に1層を含む。しりり中々あり。	
9	黒褐色土 (10Y R 5/1) が中から大粒状に1層と黒褐色土 (10Y R 6/7) が中から大粒状に1層と片黒褐色土 (7.5 Y 5/2) が中粒状に1層を含む。しりり中々あり。	
10	地土、黄褐色砂状土 (10Y R 6/8)。	

(3) SE 127 実測図



(b) SE 133・SX 284・304 覆土層序注記表

層序番号	地層	備
1	黒褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 4/6) を2層と極小粒状の炭化物を1層含む。	
2	黄褐色砂状土 (10Y R 6/8)。	
3	黒色土 (10Y R 1.7/1)。	
4	黒色土 (10Y R 2/1) が小粒状の褐色砂状土 (10Y R 4/8) と黒褐色土 (10Y R 5/1) と黒褐色土の炭化物をそれぞれ1層ずつ含む。しりりあり。	
5	黒褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (7.5 Y R 4/6) を2層と小粒状の炭化物を1層含む。しりりあり。	
6	地土、褐色土 (10Y R 4/6)。	

Ch. 46

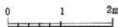
(a) SE 126 覆土層序注記表

層序番号	地層	備
1	灰古褐色土 (10Y R 4/2) と黒褐色土 (10Y R 5/2) との混成に炭化物を含む。中から大粒状に2層と黒褐色土 (2.5 Y 6/2) が極小粒状に1層と黒褐色土 (2.5 Y 6/1) が極小から小粒状に1層と炭化物を1層含む。しりりあり。	
2	黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) と黒褐色土 (10Y R 4/6) の混成に炭化物を含む。中から大粒状に1層と黒褐色土 (10Y R 6/8) が中粒状に1層と黒褐色土 (2.5 Y 6/1) が極小から小粒状に1層と炭化物を1層含む。しりりあり。	
3	灰古褐色土 (10Y R 4/2) 混成。しりりあり。	
4	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 3/1) が中から大粒状に2層と黒褐色土 (2.5 Y 6/2) を小粒状に3層含む。しりりあり。	
5	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (7.5 Y R 2/2) 10%の混成に炭化物を含む。	
6	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (7.5 Y R 4/6) が中から大粒状に1層と黒褐色土 (2.5 Y 6/1) が極小から小粒状に1層と炭化物を1層含む。しりりあり。	
7	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) を2層と炭化物を1層含む。	
8	地土、黄褐色砂状土 (10Y R 5/6)。	

Ch. 47

SE 127・SX 307 覆土層序注記表

層序番号	地層	備
1	黄褐色土 (10Y R 5/2) と黒褐色土 (10Y R 5/2) を2層と片黒褐色土 (10Y R 5/2) が極小から小粒状に1層と炭化物を1層含む。しりりあり。	
2	黄褐色土 (10Y R 5/2) 片黒褐色土 (10Y R 6/8) が極小から小粒状に1層と黒褐色土 (10Y R 7/2) を2層含む。	
3	黄褐色土 (10Y R 5/1)。	
4	黒色土 (10Y R 5/1) が小粒状の褐色砂状土 (10Y R 4/8) と極小粒の炭化物をそれぞれ1層含む。しりり中々あり。	
5	地土、褐色土 (10Y R 4/6)。	



の規模を有する。遺物は上層からのみ出土している（主に第3層付近）。染付皿、かわらけ、羽口、縄文時代の石櫛が出土しており、その内、かわらけは、8点（他遺物はすべて破片1点のみ）の出土があり、注目される。遺構南側でS X 289（旧）と重複している。16世紀代の廃絶か。

SE 130（Fig.14-1）、Ch.15-b）—— R 48区検出。長径170cm、短径108cm、深さ（110）cmの規模を有する。隅丸方形に近い平面形を有しており、出土遺物には、白磁碗、用途不明鉄製品がある。時期不明。

SE 131（Fig.28-2）、Ch.49）—— W 47・48区検出。長径230cm、短径不明、深さ（110）cmの規模を確認する。未調査部分にかかっているため、プラン、規模とも不明である。出土遺物には、青磁皿、美濃灰釉皿、鏝状用途不明鉄製品がある。時期不明。

SE 132（Fig.28-4）—— T 44区検出。長径228cm、短径215cm、深さ（10）cmの規模を有する。プランを確認したのみである。出土遺物には白磁皿（端反皿）、釘がある。時期不明。

SE 133（Fig.27-2）、Ch.46-b）—— R 49区検出。長径200cm、短径163cm、深さ（15）cmの規模を有する。出土遺物には、瀬戸灰釉卸皿、漆器、不明骨がある。遺構北側と西側でそれぞれS X 284（旧）、S X 304（旧）と重複する。瀬戸灰釉卸皿については確認面からの出土であり、SE 133に付随しない可能性もある。時期不明。

SE 134（Fig.28-3）、Ch.50）—— R 50区検出。長径124cm、短径120cm、深さ（85）cmの規模を有する。平面形はほぼ円形で小型の井戸跡。出土遺物には、確認面から半月形用途不明鉄製品がある。時期不明。

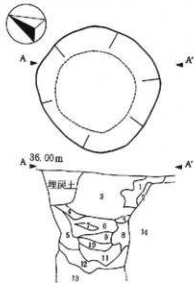
SE 135（Fig.14-2）、Ch.16-b）—— S 48区検出。長径135cm、短径118cm、深さ（10）cmの規模を有する。S T 273（旧）の北壁で重複している。覆土からは用途不明鉄製品、鉄滓が出土している。また、遺構確認作業の際に出土した遺物で、SE 135に伴う可能性のあるものとして、釘、毛抜鉄がある。時期は、重複関係から16世紀の廃絶と思われる。

SE 136（Fig.28-5）、Ch.51）—— S T 49区検出。長径153cm、短径145cm、深さ（100）cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗、白磁皿、染付碗、瀬戸灰釉壺、釘、洪武通宝、開元通宝、永楽通宝、元豊通宝、無文銭が出土している。16世紀の廃絶と思われる。

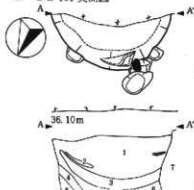
SE 138（Fig.29-1②）、Ch.52、P L. 8・11（c～g））—— T 43・44区検出。長径375cm、短径355cm、深さ310cmの規模を有する。隅柱横棧型の木枠を有する。木枠は130～140cm残存している。隅柱は床面に密着していない。横棧は三段までみられる。セクション図では、木枠内の土と構築時の裏込め土が表層付近まで明確に分かれている。木枠上部が腐朽してから埋め戻す井戸跡が多い中で、SE 138は木枠が残っている時点で埋め戻しを行っている可能性が高い。出土遺物は、木枠の裏込め部分から、青磁碗・大皿・皿、瀬戸鉄釉碗、瀬戸灰釉皿、越前甕、瓦葺手埴り、珠洲系播鉢、釘、鉄鍋、銅皿？、砥石などがあり、木枠内からは青磁碗・皿、

Fig. 28 井戸跡遺

(1) SE 128 実測図



(2) SE 131 実測図



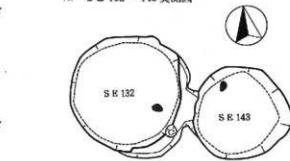
Ch. 49
SE 131 覆土層序注記表

層序別	物	備
1	灰吹土 (10Y R 3/7) と黒色土 (10Y R 2/8) の混雑した塊から大粒の破砕物を含む砂状土 (1.5 Y R 7/6) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
2	灰吹土 (10Y R 7/1)。	
3	灰吹土 (10Y R 4/3)。	
4	灰吹土 (10Y R 3/4) と小礫の灰吹土 (1.5 Y R 6/7) を主とする砂。	
5	灰吹土 (10Y R 3/6) と小礫の灰吹土 (1.5 Y R 6/7) を主とする砂。	
6	灰吹土 (10Y R 4/3) と黒色土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする砂。	
7	黄土。明黄色砂状土 (10Y R 6/8)。	

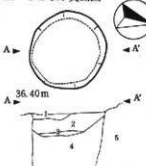
Ch. 48
SE 128 覆土層序注記表

層序別	物	備
1	黒色土 (10Y R 6/2) と灰吹土 (10Y R 4/3) と赤土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
2	灰吹土 (10Y R 3/1) と黒色土 (10Y R 3/1) を主とする砂。	
3	灰吹土 (10Y R 2/2) と黒色土 (10Y R 4/3) と赤土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
4	黒色土 (10Y R 4/3) と黒色土 (10Y R 6/1) と黒色土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
5	黒色土 (10Y R 3/2) と黒色土 (10Y R 4/3) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
6	黒色土 (10Y R 4/1) と黒色土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
7	黄土。明黄色砂状土 (10Y R 6/8) と赤土 (10Y R 6/8) と赤土 (10Y R 6/8) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
8	黒色土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 3/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
9	黒色土 (10Y R 2/2) と黒色土 (10Y R 3/2) と赤土 (10Y R 3/2) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
10	黒色土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
11	黒色土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
12	黒色土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 3/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
13	黄土。明黄色砂状土 (10Y R 6/8) と赤土 (10Y R 6/8) と赤土 (10Y R 6/8) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	

(4) SE 132・143 実測図



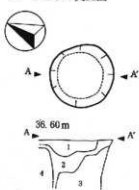
(5) SE 136 実測図



Ch. 51
SE 136 覆土層序注記表

層序別	物	備
1	灰吹土 (1.5 Y R 3/5) と黒色土 (10Y R 2/8) と赤土 (10Y R 4/1) と赤土 (10Y R 4/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
2	黒色土 (10Y R 3/2) と赤土 (10Y R 4/3) と赤土 (10Y R 4/3) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
3	灰吹土 (10Y R 3/2) と赤土 (10Y R 3/2) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
4	黒色土 (10Y R 2/2) と赤土 (10Y R 3/2) と赤土 (10Y R 3/2) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
5	黄土。明黄色砂状土 (10Y R 6/8)。	

(3) SE 134 実測図



Ch. 50
SE 134 覆土層序注記表

層序別	物	備
1	灰吹土 (10Y R 3/2) と赤土 (10Y R 3/2) と赤土 (10Y R 3/2) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
2	黒色土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 3/1) と赤土 (10Y R 3/1) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
3	灰吹土 (10Y R 2/2) と赤土 (10Y R 2/2) と赤土 (10Y R 2/2) の混雑した塊状土 (10Y R 6/2) を主とする中から破砕物混入の砂 (1.5 Y R 6/5) を含む砂。	
4	黄土。明黄色砂状土 (10Y R 6/8)。	

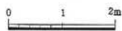
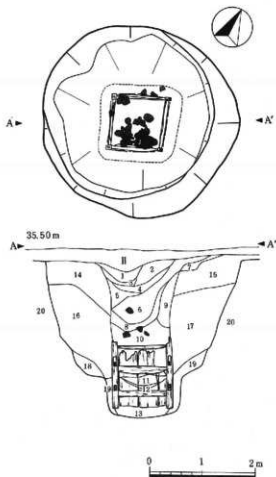
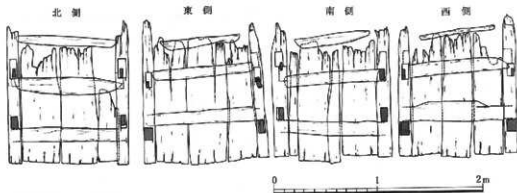


Fig. 29 井戸跡Ⅹ

(1) SE 138 実測図



(2) SE 138 井戸種実測図



Ch. 52 SE 138 覆土層序注記表

層位	層名	説明
II	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 3/2) が中粒状に1層と炭化物を若干含む。	
1	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色土 (0Y R 1/7/1) と黒褐色土 (0Y R 5/1) が5等ずつと炭化物を若干含む。	
2	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 4/4) を薄く粒状に3等と炭化物を若干含む。しまりや中粒あり。	
3	黒褐色土 (0Y R 1/7/1) と黒褐色土 (0Y R 5/1) と黒褐色土 (0Y R 2/2) との6対3対2の混層。	
4	黒褐色土 (0Y R 2/2) に灰黄褐色粘土 (0Y R 4/2) を中から大粒状に7等と炭化物を若干含む。土壌が酸化し赤褐色 (5Y R 4/6) を経ている。	
5	黒褐色粘土 (0Y R 2/2) と灰黄褐色粘土 (0Y R 4/2) と黒褐色土 (0Y R 2/2) との6対2対2の混層に炭化物を若干含む。しまりあり。	
6	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 3/3) が中から大粒状に5等と灰白色ペリス (7.5 Y R 8/1) が中粒状に3等と炭化物を若干含む。しまりあり。	
7	黒褐色土 (0Y R 2/2) に、こげい黄褐色粘土 (0Y R 4/2) が中から大粒状に5等と黒褐色土 (0Y R 1/7/1) と炭化物を少量含む。	
8	黒褐色粘土 (0Y R 3/2) と灰黄褐色粘土 (0Y R 4/2) との6対1黄褐色土 (2.5 Y 6/3) との6対3対1の混層。しまりあり。土壌が若干酸化し褐色 (7.5 Y R 4/5) を経ている。	
9	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 1/7/1) を中から大粒状に1等と灰黄褐色粘土 (0Y R 5/6) を3等と炭化物を若干含む。	
10	灰黄褐色粘土 (0Y R 4/2) に黒褐色粘土 (0Y R 3/1) が中から大粒状に3等と炭化物を若干含む。しまりあり。	
11	黒褐色粘土 (0Y R 2/2) にオリーブ色粘土 (5Y 6/5) とこげい黄褐色粘土 (0Y R 4/3) が大粒状に5等と黒褐色土 (0Y R 1/7/1) が3等とラを若干含む。しまりあり。	
12	オリーブ色粘土 (5Y 6/6) に黒褐色粘土 (0Y R 2/2) を大粒状に20等含む。	
13	黒褐色土 (0Y R 1/7/1) に黒褐色土 (0Y R 1/7/1) が10等と中から中粒状に混入している。	
14	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 4/6) と黄褐色粘土 (0Y R 5/6) が中から大粒状に7等と灰白色ペリス (7.5 Y R 8/1) と炭褐色土 (2.5 Y 6/3) が中から中粒状に3等と炭化物を若干含む。	
15	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 5/6) と灰白色ペリス (0Y R 2/2) を大から大粒状に1等と炭褐色土 (0Y R 1/7/1) を中粒状に1等と炭化物を若干含む。	
16	黒褐色土 (0Y R 2/2) に黒褐色粘土 (0Y R 3/3) と灰褐色粘土 (0Y R 3/3) の混層が中から大粒状に10等と灰褐色粘土 (0Y R 4/4) が大粒状に3等と灰白色ペリス (7.5 Y R 8/1) を中粒状に1等と炭化物を若干含む。しまりや中粒あり。	
17	黒褐色土 (0Y R 2/2) と黒褐色粘土 (0Y R 3/4) との5対5の混層に黒褐色粘土 (0Y R 5/6) を大粒状に3等と炭化物を若干含む。	
18	黒褐色粘土 (7.5 Y R 3/2) に黒褐色土 (0Y R 2/2) が中粒状に3等と白色ペリス (7.5 Y R 8/1) を中粒状に7等含む。	
19	黒褐色土 (7.5 Y R 2/1) に黒褐色粘土 (0Y R 3/4) が中から大粒状に1等と炭化物を若干含む。	
20	黒土。黄褐色粘土 (0Y R 5/6)。	

白磁皿、染付碗・皿、越前甕、珠洲系鐮鉢、埴塙、小札、鍍の緑金具、小柄、釘、銭貨、漆器、木槌、折敷、箸、桃の種、縄文時代の石斧がある。この遺物出土状態をみると、井戸構築時の木枠裏込めに染付が一点も含まれず、廃棄時の埋め戻し土には含まれていることが注目され、また裏込め部で出土している瀬戸灰釉皿は、口縁部にのみ施釉されているものであることなどから、井戸構築は15世紀後半であり、廃絶期は16世紀に入ってから可能性が高いものと思われる。また、井戸木枠内は一時期の埋め戻しである。これは、枠内出土の青磁碗（Fig.40-7、P.L.13-7）が第5層から第13層までの出土破片を接合したものであることから証明される。

SE139（Fig.30-①、Ch.53）—— S T 44区検出。長径165cm、短径145cm、深さ（120）cmの規模を有する。出土遺物は、青磁碗、美濃灰釉鉢、越前甕、鉄鍍、鏝状用途不明鉄製品、釘、鉄滓、漆器がある。セクションでは深さ120cmまで単層であり、一時埋め戻しをした可能性が高い。時期不明。

SE140（Fig.16）—— Q 42区検出。長径245cm、短径220cm、深さ（5）cmの規模を有する。S T 277（新）と重複している。プランを確認したのみでほとんど掘り下げていない。出土遺物は青磁碗1点のみ。時期不明。

SE141（Fig.18）—— R S 42区検出。長径195cm、短径190cm、深さ（35）cmの規模を有する。遺構北側にS T 283（新）と重複している。出土遺物には、染付碗（口縁鉄釉）、白磁皿、無釉陶器甕、鉄鍍、三ツ目札、小札、鍍の脚板、釘、判読不能銭貨がある。16世紀の廃絶と思われる。

SE142（Fig.30-②）—— R 41区検出。樹木保護のため調査できず規模不明。白磁皿、釘の出土があるが時期不明。重複関係なし。

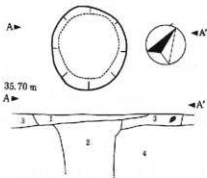
SE143（Fig.28-④）—— T 44区検出。長径186cm、短径180cm、深さ（41）cmの規模を有する。出土遺物には青磁碗、白磁皿、溶解物、釘がある。時期不明。SE132との新旧関係も不明である。

SX221（Fig.21（1）、Ch.27）—— S 49・50区検出。長径162cm、短径143cm、深さ（42）cmの規模を有している。外縁にさらに直径320cm程度の堅穴遺構がある。井戸跡は堅穴遺構の覆土から掘り込んで構築されている。この堅穴遺構と井戸跡の関係は不明。染付皿、珠洲系鐮鉢が出土しており、16世紀前半に廃絶された可能性が考えられる。

SX277（Fig.15-①、Ch.17-b）—— R 50区検出。S X 277は東西2つの遺構が重複しているため、西側をA（新）、東側をB（旧）と仮称して報告する。Aは長径155cm、短径150cm、深さ（105）cmの規模のほぼ円形を呈する遺構である。出土遺物には瀬戸灰釉大皿がある。また、Bは長径130cm、短径120cm、深さ（100）cmの規模でAと同様、ほぼ円形を呈している。出土遺物には溶解物、釘などがある。いずれも時期不明。

Fig.30 井戸跡 X

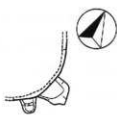
(1) SE 139 実測図



SE 139 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒色土 (00Y R 2/1) に灰黄褐色土 (00Y R 6/2) を含んだ C 5 層を含む。
2	黒褐色土 (00Y R 2/1) に灰黄褐色土 (00Y R 6/2) を含んだ C 10 層と小塊状の炭化物を 1 層と極小の明黄褐色砂質土 (00Y R 6/5) を 1 層を含む。
3	黒色土 (00Y R 2/1) に C 64・黄褐色土 (00Y R 6/4) を 3 層と極小の炭化物を 2 層を含む。
4	堆土。黄褐色砂質土 (00Y R 5/6)。

(2) SE 142 実測図



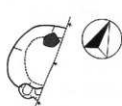
(4) S X 291 実測図



(3) S X 282 実測図



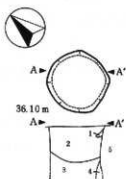
(5) S X 313 実測図



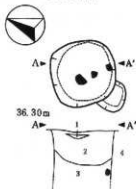
(6) S X 314 実測図



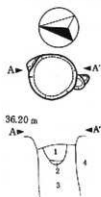
(7) S X 290 実測図



(8) S X 292 実測図



(9) S X 308 実測図



SX 290 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	灰褐色砂質土 (00Y R 5/6) の凝層
2	黒褐色土 (00Y R 2/3) に極小塊状の炭化物を 1 層 (00Y R 6/2) を、3 層と極小塊の炭化物を含む。下層層上面に、中塊状に C 10 層と極小の炭化物を 1 層と極小の明黄褐色土 (00Y R 6/5) を 3 層含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (00Y R 2/1) に C 64・黄褐色土 (00Y R 7/2) を 3 層と極小塊の炭化物を 1 層を含む。しまりなし。
4	灰黄褐色砂質土 (00Y R 4/2) の凝層。
5	堆土。黄褐色砂質土 (00Y R 5/6)。

SX 292 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒色土 (00Y R 2/1) と極灰色土 (00Y R 4/1) との凝層。
2	黒褐色土 (00Y R 2/2) に中塊状の炭化物砂質土 (00Y R 5/5) を 1 層と極灰色土を全体の C 2 層と極小から中塊状の炭化物を 2 層含む。極灰色土 (00Y R 5/2) を 2 層含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (00Y R 2/2) に中から大塊状の灰白色砂質土 (2.5 Y 7/1) を 3 層と中塊状の灰黄褐色砂質土 (00Y R 6/2) を 2 層と極小から中塊状の炭化物を 3 層含む。しまりあり。
4	堆土。黄褐色砂質土 (00Y R 5/6)。

SX 308 覆土層序注記表

層序	特 徴
1	黒褐色土 (00Y R 2/2) に極小塊の炭化物を 1 層含む。しまりあり。
2	黒褐色土 (00Y R 2/2) と極灰色土 (00Y R 4/1) との凝層 (00Y R 6/2) の凝層。
3	黒褐色土 (00Y R 2/2) に極小塊の炭化物を 1 層と極小の C 64・黄褐色砂質土 (00Y R 7/2) を 3 層含む。
4	堆土。黄褐色砂質土 (00Y R 5/6)。



SX282 (Fig.30-③)——Q48区検出。長径130cm、短径120cm、深さ(110)cmの規模を有する。出土遺物には、白磁八角碗、青磁碗、瀬戸灰軸瓶子、火箸、釘、用途不明鉄製品がある。陶磁器の3片はいずれも二次焼成を受けている。15世紀後半の廃絶の可能性がある。

SX290 (Fig.30-⑦)、Ch.54)——U48区検出。長径120cm、短径115cm、深さ(90)cmの規模を有する。出土遺物には、青磁皿、白磁皿、染付碗・皿、釘などが出土している。16世紀の廃絶の可能性がある。

SX291 (Fig.30-④)——U49区検出。長径190cm、短径150cm、深さ(45)cmの規模を有する。不整形の平面を呈する遺構である。出土遺物には、青磁碗、小札、鉄鍔、釘、溶解物、判読不能銭貨がある。SB68の柱穴と重複していると思われるが、新旧関係等不明である。時期不明。

SX292 (Fig.30-⑧)、Ch.55)——T49区検出。長径140cm、短径125cm、深さ(95)cmの規模を有する。出土遺物には、青磁碗、越前系摺鉢、かすがい、釘、鉄鍋、鉄砲の玉、砥石がある。100cm程掘り下げた段階では壁がしっかりしていた。16世紀の廃絶の可能性が高い。

SX308 (Fig.30-⑨)、Ch.56)——T48区検出。長径92cm、短径88cm、深さ(100)cmの小規模なほぼ円形の遺構。出土遺物には青磁碗、染付皿、漆器(PL.33—330)、釘などがある。青磁碗、漆器の一部に火を受けた痕跡が残っている。16世紀の廃絶の可能性がある。

SX313 (Fig.30-⑤)——W48区検出。長径(140)cm、短径不明、深さ(67)cmの規模を確認した。東側が未調査部にかかったため正確な規模・プランを確認していない。出土遺物には染付碗が1点ある。16世紀の廃絶の可能性がある。

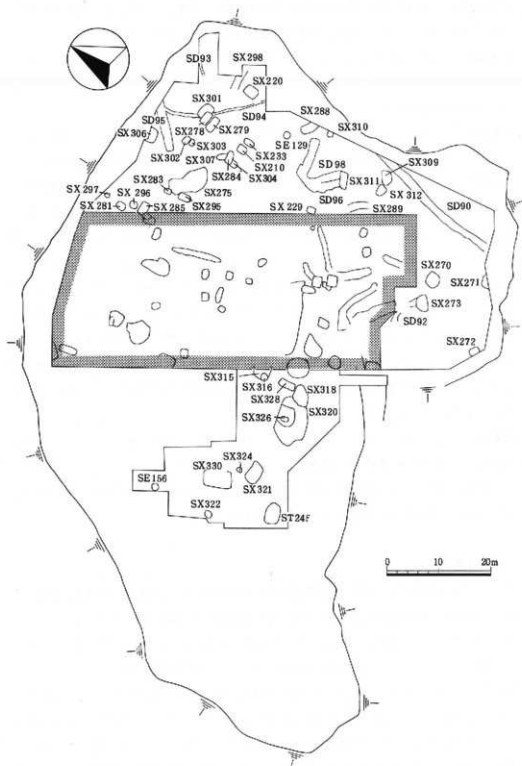
SX314 (Fig.30-⑥)——V48区検出。長径108cm、短径不明、深さ(68)cmの規模を確認した。SX313同様東側が未調査部にかかっているため、規模・プラン共に不明である。出土遺物には釘が1点あるが、確認面から出土している折縁口縁の美濃灰軸皿も遺構に伴う可能性がある。(16世紀後半に廃絶された可能性がある。)

5. 溝跡

溝跡には、城館期に伴う溝跡と城館期以前のものとはみられる。城館期の溝跡は、概ね幅が狭く、直線的に延びる傾向がある。これに対して城館期以前の溝跡は幅が広く、L字やU字に曲折することもある。また、延びる方向についても、城館期のものは館の形状、建物跡の軸方向に関係しているのに対し、城館期以前のは延びる方向が無作為である。

SD90 (Fig.32、Ch.57)——UV48区、W47区検出。幅140cm、深さ60cmで、北東から南西へ約27mの規模を確認した。遺物は南端部を中心に出土している。青磁碗、白磁碗・皿・八角碗、美濃灰軸皿、産地不明摺鉢・皿、瓦葺手盛り、伊万里皿、須恵器甕書壺、釘、銅滓、鉄滓が出土しているが、すべてがSD90に伴うとは考えられない。南端で掘立柱建物跡等と重

Fig. 31 内館壁穴遺構・溝跡配置図



とから、出土遺物がS D95に伴わない可能性もある。時期不明。

SD96——T48・49区検出。幅154cm、深さ14cmの規模を有する。東から西へ延び、ほぼ直角に曲折して南へ延びる溝跡で約16mを確認した。S D98（新）と曲折部で交差し、南端でS X311（新旧関係不明）と重複する。また、S B68（新？）の柱穴数個と重複している。出土遺物は、土師器環、釘、自然石（めのう）がある。時期は不明であるが、城館期以前の溝跡の可能性が高い。

SD98——T48区検出。幅160cm、深さ12cmの規模を有する。S D96と並行して東側を南北に延びるが、北端部は東へゆるく曲がりS D96と交差して北へ延び立ち上がる。S D96（旧）、S X311（新旧関係不明）、S B68（新？）と重複する。出土遺物なし。時期不明だが、城館期以前の溝跡の可能性が高い。

6. 焼土遺構

焼土の広がり、範囲を焼土遺構としてとらえ、報告する。浪岡城跡検出の焼土遺構は概ね焼土の広がりのみで、カマド等の形態をとらないものが大多数である。しかし、今年度検出のS F73は小型ながら中空で焚口、煙道状の部分もみられる特異なものである。また、このS F73が廃棄された井戸の中、検出面から70cm程度下がった部分に構築されていたことも注目される。しかし、貧弱であり、実用に供したとは思えず、カマド以外の用途も考慮する必要があるであろう。

SF70——W45区検出。長径94cm、短径70cm、厚さ約20cmの規模を有する。南側に粘土の広がり東北200cm、南北150cmの規模で検出されている。粘土の広がり焼土遺構との関係は不明である。規模を確認したのみで未調査。出土遺物、遺構の重複関係ともになし。時期不明。

SF71（Fig.13-11）——W46区検出。長径80cm、短径55cm、厚さ24cmの規模を有する。S T259（旧）の北東コーナーで重複している。中心部分に柱穴（新）が掘られている。柱穴による欠損部を考慮すると半円状になると思われる。規模確認のみ、未調査。出土遺物なし。時期不明。

SF72——P48区検出。長径142cm、短径98cmの規模を確認した。南西部で柱穴（新）と重複している。規模を確認したのみであり未調査。出土遺物なし。時期不明。

SF73（Fig.26-11）——QR50区検出。長径68cm、短径38cm、高さ25cmの規模を有する。S E121内の深さ70cm程度に設置されている。中空で、北側の大きめの穴、南東側に小さな穴がみられる。それぞれ焚口、煙道に見立てると、小カマド状を呈する遺構である。前述のとおり、カマドとするには貧弱であるため、他の用途を考える必要があるであろう。覆土中からは溶解物が1点出土している。時期は、S E121が15世紀の可能性を有するため、S F73は

それ以後の廃絶となる。

S F 74——S 44区検出。長径78cm、短径46cmのもの、長径35cm、短径28cmのもの、長径41cm、短径13cmの3つの焼土遺構からなっている。近接して、南西側にS F 75、その南側にS F 76、77と配置されている。これら4者の関係も考慮する必要があると思われる。規模を確認したのみである。出土遺物なし。重複関係なし。時期不明。

S F 75 (Fig. 19 (4))——S 44区検出。長径142cm、短径118cmの規模を有する。隅丸方形状を呈するが、西端で柱穴(新)と重複しており形が崩れている。S X 329 (旧)の東壁で重複している。出土遺物には元符通宝、土師器坏がある。重複関係から16世紀の廃絶と考えられる。

S F 76 (Fig. 19 (4))——S 44区検出。長径68cm、短径38cmの規模を有する。S F 75同様に、S X 329 (旧)の南東壁で重複している。出土遺物なし。重複関係から16世紀の廃絶と考えられる。

S F 77——S 44区検出。長径66cm、短径24cmの規模を有する。東西に延びるひょうたん形を呈している。規模を確認したのみであり未調査。出土遺物、重複関係なし。時期不明。

S F 64 (Fig. 12 (2))——V 45区検出。長径138cm、短径100cmの規模を有する。S T 258の南側に位置する。S T 258と重複する竪穴遺構(旧)と重複しているが、S T 258との新旧関係は不明である。また、南東部でS B 44(新)と重複している。規模を確認したのみである。出土遺物なし。時期不明。

7. 竪穴遺構

ここでは、遺構の平面形が不定形である、上部構造が推定できない、などの遺構や土坑状の遺構など、使用目的や構築形態の不明な性格不明遺構を一括してとり上げてゆく。

SX210 (Fig.19-(2), Ch.24-(b))——R S-49区検出。東西151cm、南北(160)cm、深さ20cmの規模を有する。北部でSX299(旧)と重複しているが遺構確認作業時に遺構範囲が確認できなかったため、正確な規模は不明である。南・東・西の各壁には壁溝と思われる溝が巡っている。出土遺物には、染付皿、皇宋通宝、用途不明鉄製品がある。16世紀の廃絶の可能性がある。

SX270 (Fig.33-(1), Ch.58)——V46区検出。東西290cm、南北270cm、深さ36cmの規模を有する。浅い播鉢状に、中央が若干深くなっている。出土遺物には、覆土中より青磁碗、白磁碗・皿、かわらけ、釘があるが、覆土上の、確認時に出土している青磁碗・陸花皿、産地不明播鉢、釘、日貫金具、政和通宝、嘉泰元宝、銅洋もSX270に伴う遺物である可能性が高い。時期不明。

SX271 (Fig.33-(2), Ch.59)——W46区検出。東西(240)cm、南北(110)cm、深さ70cmの規模を確認した。出土遺物には、青磁碗・大皿、白磁皿、珠洲系播鉢、釘などがある。南側が未調査であり、正確な規模は不明。15世紀後半に廃絶された可能性もある。

SX272 (Fig.33-(3), Ch.60)——W45区検出。規模不明、柱穴の重複している場所である可能性がある。出土遺物なし。時期不明。

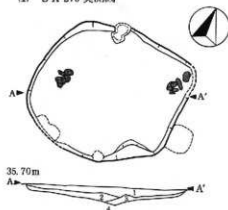
SX273 (Fig.34-(1), Ch.61)——V46区検出。東西310cm、南北不明、深さ30cmの規模を確認した。南側でS T275、北側でS D92と重複しているため規模・形態ともに不明。出土遺物には、白磁皿、瓦質手焙りがある。時期不明であるが、遺構中(セクションベルト中)の石がS B60に伴う礎石とすると、S B60よりも古い可能性がある。前出S T275・S D92との新旧関係不明。

SX275 (Fig.35, Ch.66-(a))——Q R48区検出。東西470cm、南北730cm、深さ50cmの規模を有する。二つの不定形土坑が繋がった様な形の遺構である。1層としてほぼ全面に粘土を張った層がみられた。遺物の出土数・種類が多量だったため特に慎重に調査を進めたが、床面から昭和25年銘の10円玉が出土したため、現代の擾乱と結論した。なお、出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿・小杯、瀬戸灰釉皿・鉄釉碗、美濃灰釉皿・鉄釉皿、志野皿、越前甕、瓦質手焙り、産地不明播鉢、埴埴、産地不明無釉陶器、土師器壺、新磁器碗、ガラス、おはじき、鉄鐵、鎌、鉄鍋、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、キセル、用途不明銅製品、溶解物、開元通宝、嘉祐通宝、元祐通宝、無文銭、一銭、10円、火打石等がある。SX283(旧)と重複している。

SX278 (Fig.34-(3), Ch.62)——R49区検出。東西268cm、南北130cm、深さ25cmの規模を有する。長方形の平面を呈する、土坑状の浅い遺構である。SX278覆土中からは、小

Fig.33 墓穴遺構 I

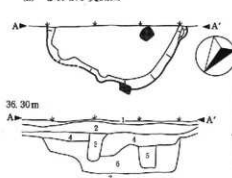
(1) S X 270 実測図



Ch. 58 S X 270 覆土層序注記表

層序No	特	微
1	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に灰白色 (10 Y R 8/1) の灰を50% 強小塊から小塊の炭化物を2%と褐色土 (10 Y R 4/6) を1%含む。	
2	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に極小粒から中粒の褐色土 (10 Y R 4/6) を30%と炭化物を若干含む。	
3	黒色土 (10 Y R 2/1) に極小粒から小粒の褐色土 (10 Y R 4/6) を15%含む。	
4	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

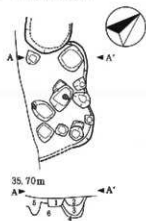
(2) S X 271 実測図



Ch. 59 S X 271 覆土層序注記表

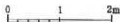
層序No	特	微
1	54年度調査埋土。	
2	褐色土 (7.5 Y R 4/3) に明赤褐色泥土 (5 Y R 3/8) が中粒状に1%と灰白色パミス (10 Y R 8/1) と炭化物が中粒状に2%含まれる。しまりあり。	
3	褐色粘土 (7.5 Y R 4/4) と黒褐色土 (7.5 Y R 3/2) の混層で下層にいく程しまりが強く炭化物が中から極大粒状に3%含まれる。	
4	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が2%と淡黄色パミス (2.5 Y 8/3) が極小から極大粒状に1%と炭化物が極小から大粒状に3%と黄灰色灰 (2.5 Y 5/1) が含まれる。	
5	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に炭化物が極小から大粒状に5%含まれる。	
6	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6) が大から極大粒状に15%と黄灰色灰 (2.5 Y 5/1) が1%と淡黄色パミス (2.5 Y 6/1) が小から大粒状に1%と炭化物が極小から極大粒状に3%含まれる。	
7	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	

(3) S X 272 実測図



Ch. 60 S X 272 覆土層序注記表

層序No	特	微
1	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に灰色灰 (10 Y 6/1) が30%と褐色砂質土 (7.5 Y R 6/8) を中粒状に1%含む。	
2	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に褐色砂質土 (7.5 Y R 6/8) を小粒状に20%と炭化物を1%含む。	
3	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に灰色灰 (10 Y 5/1) を20%含む褐色砂質土 (7.5 Y R 6/8) を小粒状に1%と炭化物を1%含む。	
4	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に褐色砂質土 (7.5 Y R 6/8) の50%の混層。	
5	暗褐色土 (7.5 Y R 3/3) に褐色砂質土 (7.5 Y R 6/8) が極小粒状に2%含まれる。	
6	地山。黄褐色砂質土 (10 Y R 5/6)。	



札1点が出土している。S B66(新?)の柱穴が遺構中に見られており、また北側でS X301(旧)と重複している。時期不明。

S X279 (Fig.34-②, Ch.63) —— R49区検出。東西315cm、南北150cm、深さ22cmの規模を有する。西壁南側がふくらんだ状態の長方形を呈している。東壁については明確な壁が検出できずに、なだらかに立ち上っている。遺構内にS B66の柱穴があるが新旧関係は不明である。明確に覆土中より出土した遺物はないが、遺構確認作業中出土した染付皿、白磁皿などは遺構に伴う可能性がある。時期不明。

S X281 (Fig.34-④, Ch.64) —— P48区検出。東西180cm、南北200cm、深さ25cmの規模を有する。出土遺物には用途不明鉄製品が1点みられるのみであり、時期等については不明である。なお、遺構南北軸上に2個の柱穴が検出されており、何らかの上部構造が存在した可能性も考えられるものである。

S X283 (Fig.35, Ch.66-①b) —— Q48区検出。東西95cm、南北140cm、深さ35cmの規模を有する。長方形の掘り込みである。出土遺物は覆土中より青磁皿が1片ある。S X283南東コーナーでS X275(新)と重複している。時期は不明である。

S X284 (Fig.27 ②, Ch.46-①c) —— R48・49区検出。東西(237)cm、南北105cm、深さ20cmの規模を有する。出土遺物は釘1点のみである。この箇所はS X284を中心に、北側でS X307(旧)、南側でS E133(新)及びS X304、西側でS E126と重複しているが、遺構間の総合的な新旧関係は不明である。北壁・東壁に壁溝状の溝が見られる。時期不明。

S X285 (Fig.34-⑤, Ch.65) —— Q48区検出。東西(178)cm、南北168cm、深さ12cmの規模を確認した。西壁は昭和59年度調査のS X216・217等と重複しており(新旧関係不明)規模・形態は明確ではない。出土遺物は、覆土中から新磁器碗が1片検出されており、時期的には新しい遺構である可能性もある。

S X288 (Fig.36-①) —— T49区検出。長軸不明、短軸170cm、深さ8cmの規模を確認した。東側が未調査区であるため、遺構の形態・規模は把握できない。北西から南東に向かって、スロープ状に下がる形をとるため、西壁は落差を検出できず、東壁付近での深さを記載している。遺構内にS B68の柱穴が存在するが新旧関係は不明である。出土遺物には、赤絵皿、珠洲系漆鉢、芋引釜、釘、至大通宝、判読不明銭、加工石、炭化米などがみられる。16世紀の廃絶の可能性もある。

S X295 (Fig.35-①, Ch.66-①a) —— Q R48区検出。東西142cm、南北210cm、深さ15cmの規模を有する。東壁に柱穴によるものと思われる形態の変化がみられるが、ほぼ方形の遺構と思われる。東側にS X275(新)があり、その第1層の粘土層がS X295にもかかっている。出土遺物は覆土から用途不明鉄製品が1点出土しているのみである。遺構上面から新磁

Ch. 66 (a) SX 275・295覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	にぶい黄褐色粘土 (10YR 5/4) と暗褐色粘土 (10YR 3/3) の混層に小粒の礫と小塊の炭化物が2割ずつ含まれる。
2	にぶい赤褐色土 (5YR 4/4)。
3	黄褐色粘土 (10YR 5/6)。
4	黒褐色土 (10YR 2/2) に中〜小粒の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) が25%含まれる。
5	黄灰色灰 (2.5 Y 6/1)。
6	にぶい黄褐色粘土 (10YR 5/4) と黒褐色土 (10YR 2/3) の混層に炭化物を1%含む。しまりあり。
7	明黄褐色粘土 (10YR 6/6) と褐色粘土 (10YR 4/4) の混層に炭化物を1%含む。
8	褐色土 (10YR 4/4) に部分的ににぶい赤褐色土 (5YR 4/4) と黒褐色土 (10YR 2/3) が3割ずつ入り込んでいる。
9	黒褐色土 (10YR 3/2) に極小から中塊状のにぶい黄褐色粘土 (10YR 5/4) が30%含まれる。
10	黒褐色土 (10YR 2/3) に小〜中ブロック状の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) が25%と礫が2%含まれる。
11	暗褐色土 (10YR 3/3) ににぶい黄褐色ベテス (10YR 7/2) が極小粒で3%と大ブロック状の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) が1%含まれる。
12	褐色土 (10YR 4/4)。しまりあり。(SX 295覆土)
13	にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) に炭粒子の褐灰色ベテス (7.5 YR 8/1) を3%含む。しまりあり。(SX 295覆土)
14	褐色土 (10YR 4/4) に暗黄灰色灰 (2.5 Y 5/2) を3%含む。しまりあり。(SX 295覆土)
15	暗黄灰色灰 (2.5 Y 5/2) に小塊の炭化物を1%含む。(SX 295覆土)
16	暗褐色土 (10YR 3/4) に小粒の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) と礫と小塊の炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。(SX 295覆土)
17	暗褐色土 (10YR 3/4) に中ブロック状の明黄褐色砂質土 (10YR 6/8) を5%と炭化物を1%含む。しまりあり。(SX 295覆土)。
①	褐灰色灰 (10YR 4/1)。
②	黄褐色粘土 (10YR 5/6) とにぶい赤褐色土 (5YR 4/4) と黒褐色土 (10YR 2/3) の混層。
③	黒褐色土 (10YR 2/3)。
18	地山。明黄褐色砂質土 (10YR 6/8)。

(b) SX 283覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒褐色土 (10YR 2/2) と黒褐色土 (10YR 3/2) の混層に明褐灰色灰 (5YR 7/1) を10%と黄褐色砂質土 (10YR 5/6) を大塊状に1%と炭化物を若干含む。
2	明褐灰色灰 (5YR 7/1) と褐灰色灰 (5YR 4/1) の混層に黄褐色砂質土 (10YR 5/6) を極大粒状に1%含む。しまりなし。
3	褐灰色灰 (5YR 4/1) に明褐灰色灰 (5YR 7/1) が10%と黄褐色砂質土 (10YR 5/6) が大から極大粒状に1%含む。
4	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Ch. 73 (a) SX 320、SE 139

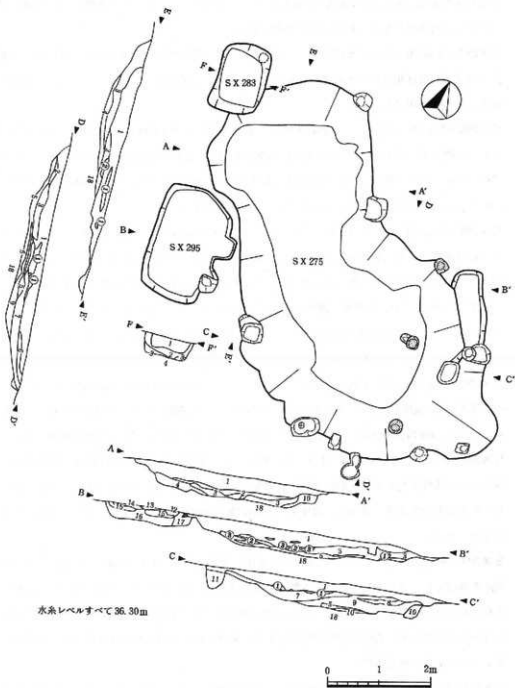
層序No.	特 徴
1	黒色土 (10YR 2/1) ににぶい黄褐色粘土 (10YR 6/4) を1%含む。
2	黒色土 (10YR 2/1) に灰黄褐色灰 (10YR 6/2) を全体的に5%含む。
3	黒色土 (10YR 2/1) に灰黄褐色灰 (10YR 6/2) を全体的に10%と小塊状の炭化物を1%と極小粒の明黄褐色砂質土 (10YR 6/6) を1%含む。
4	黒褐色土 (10YR 2/2) に黒褐色粘土 (10YR 3/2) を中塊状に1%と炭化物を1%含む。
5	黒色土 (10YR 2/1) ににぶい黄褐色粘土 (10YR 6/4) を3%と褐灰色灰 (10YR 6/1) を5%と極小から小塊状の炭化物を2%含む。
6	黒色土 (10YR 2/1) に極小粒状の黄褐色砂質土 (10YR 5/6) を3%と極小塊の炭化物を1%含む。
7	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

(b) SX 328 覆土層序注記表

層序No.	特 徴
1	黒色土 (10YR 1.7/1) に小粒状の黄褐色砂質土 (10YR 5/6) と小塊の炭化物をそれぞれ1%とにぶい黄褐色粘土 (10YR 7/3) と明赤褐色土 (5YR 5/8) をそれぞれ若干含む。
2	地山。黄褐色砂質土 (10YR 5/6)。

Fig. 35 竪穴遺構Ⅲ

(1) S X 275・283・295 実測図



器の皿が出土しているが、前述のように、現代の攪乱であるS X 275の粘土層の中に含まれていた可能性が高いため、伴出遺物とは認めない。時期不明である。

S X 296 (Fig. 27-①, Ch. 45) — P Q 48区検出。東西135cm、南北136cm、深さ15cmの規模を有する。S X 296の東側でS E 125(旧)と重複している。出土遺物には、鉄鐵、漆の被膜(又は漆紙)がみられる。時期不明である。

S X 297 (Fig. 36-②, Ch. 67) — P 48区検出。東西86cm、南北102cm、深さ29cmの規模を有する。ほぼ楕円形の土坑状を呈する遺構である。遺物は出土していない。柱穴との新旧関係、時期は不明である。

S X 298 (Fig. 36-④) — R 50区検出。東西不明、南北140cm、深さ23cmの規模を確認した。西側でS T 274と重複している(新旧関係不明)。東側は未調査区のため、東西方向の規模は不明である。確認した形態からは、溝跡となる可能性が大きい。出土遺物には、用途不明鉄製品、鉄滓が床面直上からみられる。時期は不明である。

S X 301 (Fig. 34-②, P L. 10-①) — R 49・50区検出。東西(310)cm、南北210cmの範囲を確認した。深さ不明。内館は、公園・運動場として利用されてきたため、平場の整地が行なわれ、削平・盛土部分がある所のみみられる。このため、S X 301では確認状態ですら覆土が削りとられ、壁溝状に溝が巡っているのみであった。南西コーナーでS X 278(旧)と、北西コーナーでS D 94と重複している(S D 94との新旧関係は不明)。表土除去作業時から遺物の出土はなく、時期は推定できない。

S X 302 (Fig. 36-③, Ch. 68, P L. 10-a) — Q R 49区検出。東西157cm、南北107cm、深さ22cmの規模を有する。長方形に近い土坑状を呈する遺構である。南壁西端で柱穴と重複しているが、新旧関係は不明。遺物は釘が1点出土したのみであり、遺構の時期は不明である。

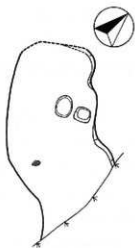
S X 303 (Fig. 36-③, Ch. 68, P L. 10-a) — R 49区検出。東西122cm、南北86cm、深さ21cmの規模を有する。方形の土坑状遺構を呈し、北側に隣接するS X 302を一回り小さくした形態のものである。遺物は、遺構床面から産地不明播鉢が1片出土している。遺構の時期は不明である。

S X 304 (Fig. 27-②) — R 48・49区検出。東西122cm、南北(140)cm、深さ不明の範囲を確認した。S X 301同様に、壁溝状の溝が残存するのみである。S E 133・S X 284とそれぞれ東壁・北壁部で重複しているが、新旧関係は不明である。出土遺物中明確にS X 304に伴うものはないが、遺構確認作業時に出土した染付小碗・瓦質手焙り遺物は遺構に伴う可能性が残るものである。時期不明。

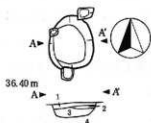
S X 306 (Fig. 36-⑤) — Q 49区検出。東西280cm、南北不明、深さ不明の範囲を確認した。S X 301同様壁溝状の溝が東側・西側に南北方向に延びているものである。北側は未調

Fig.36 竪穴遺構Ⅳ

(1) SX 288 実測図



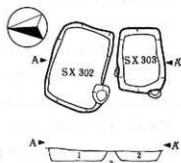
(2) SX 297 実測図



Ch.67 SX 297 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	暗褐色土 (10Y R 3/4) に極小塊の炭化物を若干含む。
2	暗褐色土 (10Y R 3/4) に小から中塊の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を30%含む。
3	黒褐色土 (10Y R 3/2)。
4	地山、黄褐色砂質土 (10Y R 5/8)。

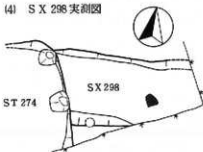
(3) SX 302・303 実測図



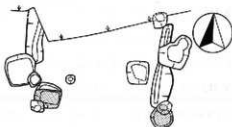
Ch.68 SX 302・303 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒色土 (10Y R 2/1) に極小塊から中塊状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を15%含む。
2	黒色土 (10Y R 1.7/1) に極小塊から中塊状の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) を7%含む。
3	地山、黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

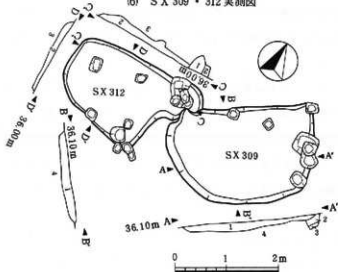
(4) SX 296 実測図



(5) SX 306 実測図



(6) SX 309・312 実測図



Ch.69

(a) SX 309 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) において黄褐色土 (10Y R 4/3) を小から大塊状に1等と小から中塊状の炭化物を少量含む。
2	黒褐色土 (7.5Y R 2/2) と褐色土 (7.5Y R 4/4) と2列8の混層。しまりやなし。
3	黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) の単層。
4	地山、明黄褐色砂質土 (10Y R 6/6)。

(b) SX 312 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5Y R 2/2) と暗褐色砂質土 (10Y R 3/3) との5列5の混層に明黄褐色砂質土 (10Y R 7/6) を極大塊状に1等と暗褐色土 (10Y R 3/4) を大塊状に3%含む。
2	黒色土 (10Y R 2/1) に暗褐色土 (10Y R 5/1) を5%含む、黄褐色砂質土 (10Y R 5/6) を極小から極大塊状に1%と明黄褐色土 (10Y R 5/8) を極大塊状に若干と炭化物を若干含む。
3	地山、黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

査である。南側では溝が検出されなかったため形態・規模は不明であるが、その位置・軸方向からすると、S B66に付随する施設の可能性もある。明確に遺構に伴う遺物はないが、遺構確認作業時に染付皿が出土している。時期不明。重複している柱穴との新旧関係不明。

S X 307 (Fig.27-②, Ch.46-(c)) —— R 49区検出。東西120cm、南北(194)cm、深さ20cmの規模を有する。遺構覆土に、粘土・焼土が混入しており、粘土張り状の様相を呈している。遺構南側でS X 284(新)と重複している。出土遺物には、用途不明鉄製品、用途不明銅製品、硯などがみられる。時期不明。

S X 309 (Fig.36-⑥, Ch.69-(a)) —— U 48区検出。長径290cm、短径190cm、深さ18cmの規模を有する。北東から南西に延びる半月状のプランで、北西辺がほぼ直線になる。出土遺物は、覆土中から釘、茶臼があるが、確認面で出土した白磁皿も遺構に伴う可能性がある。遺構北半に東北に3個比較的小さな柱穴が並ぶが、これは、西側のS X 312方向へと延び、櫓状になるものと思われる。新旧関係は北半の柱穴(旧)、S X 312とは新旧不明。時期は不明である。

S X 310 (Fig.37(1)) —— T 49区検出。東西不明、南北116cm、深さ39cmの規模を確認した。東側が未調査のため、形態・規模は不明であるが、検出した部分はほぼ方形になる。覆土中より青磁皿、小丸が出土している。南辺で重複している柱穴との重複関係不明。時期不明。

S X 311 (Fig.37-②, Ch.70) —— T U 48区検出。東西320cm、南北140cm、深さ10cmの規模を有する。S D96・98の2本の溝が延長してきた南端に位置する。S D96・98及び遺構南端で重複するS B68の柱穴との新旧関係は不明である。覆土中より砥石が1片出土している。時期不明。

S X 312 (Fig.36-⑥, Ch.69-(b)) —— U 48区検出。東西202(270)cm、南北168cm、深さ10cmの規模を有する。東南に延びる不整形のプランを有する。東壁は南北に直線に延び、東壁北端が張り出し状に東側へ膨らむ。S X 309と東端が接するが、新旧関係は不明である。遺構北部に東側のS X 309方向に約90cm間隔で柱穴が並び、南部では西側から50~70cm間隔で櫓状に柱穴が配されている。これらとS X 312の新旧関係は不明である。出土遺物は擦文土器、自然石がみられる。時期不明。

S X 315 (Fig.37-③, Ch.71) —— S 44区検出。東西不明、南北(310)cm、深さ23cmの規模を確認した。東半部は昭和59年度の調査区内にかかっているが、明確な遺構は検出されていない。床面が西側から東側へと緩やかなスロープを呈して昇っているため、東壁を確認できなかったものと思われる。覆土中より雁又鐵、漆器被膜が出土している。また、遺構確認作業時に検出した白磁皿、瀬戸灰釉鉢、釘も遺構に伴う可能性がある。S X 316(旧)と南西端で重複している。時期不明。

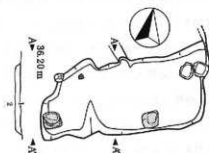
S X 316 (Fig.37-③) —— S 44区検出。長径140cm、短径130cm、深さ(55)cmの規模を有し、ほぼ円形を呈する。-55cmまでしか掘り下げていないが、さらに深くなる可能性があり、

Fig.37 整穴遺構V

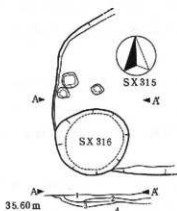
(1) SX 310 実測図



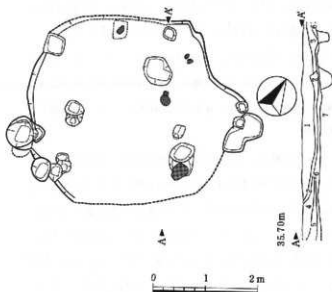
(2) SX 311 実測図



(3) SX 315・316 実測図



(4) SX 317 実測図



Ch. 70 SX311 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 2/2) に褐色砂質土を中から大塊状と小から粒状に 5%と、にがい赤褐色土 (5Y R 5/4) を小から粒状に 2%と粗灰 (10Y R 4/1) (10Y R 6/1) と炭化物を若干含む。
2	地山。黄褐色砂質土 (10Y R 5/6)。

Ch.71 SX315 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (10Y R 3/1) が55%と白色灰 (N 8/0) が20%と炭化物が小粒状に20%と明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が小粒状に 5%混入している。
2	白色灰 (N8/0) が帯状に走り部分的に炭化物と黒褐色土 (10Y R 3/1) が混入している。
3	黒褐色土 (10Y R 3/1) に15%の明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8) が小粒状に混入している。
4	地山。明黄褐色砂質土 (10Y R 6/8)。

Ch.72 SX317 覆土層序注記表

層序No	特 徴
1	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に明黄褐色パミス (10Y R 7/6) を1%と灰白色灰 (10Y R 2/2) を5%と炭化物を1%含む。
2	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) と灰白色灰 (10Y R 2/2) との50%の混層に炭化物を3%含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (7.5 Y R 3/1) に灰白色灰 (10Y R 2/2) を30%と明黄褐色砂質土 (7.5 Y R 5/8) を7%と炭化物を5%含む。
4	灰黄褐色粘土に明黄褐色粘土 (10Y R 6/6) を5%と炭化物を1%含む。しまりあり。
5	黒褐色土 (10Y R 3/1) と灰白色灰 (7.5 Y R 6/1) が20%と灰黄褐色粘土 (10Y R 4/2) が20%の混層に炭化物を1%含む。しまりあり。
6	黒褐色灰 (10Y R 3/1)。
7	地山。明黄褐色砂質土 (7.5 Y R 5/8)。

井戸等の機能も考えられる。また、S X315（新）の南西端、床面の最も低くなる部分に構築されていることから、S X315と同時期に水溜り的な機能を有したとも考えられよう。出土遺物には、白磁皿、釘がみられる。時期不明。

S X317 (Fig.37-④)、Ch.72)——T44区検出。東西350(430)cm、南北不明、深さ(40)cmの規模を確認した。遺構東半分が前年度の調査で検出されている。前年度の調査では南側の竪穴遺構と同一視していたためS T255としていたが、本年度の調査により2つの竪穴遺構の重複であることが判明した(S X317(新))。覆土中より、青磁碗、染付皿、越前甕、瓦質手埴り、釘、硯が出土している。出土遺物からは16世紀の廃絶と思われる。

S X318 (Fig.38)——T44区検出。東西(458)cm、南北(290)cm、深さ10cmの規模を確認した。平面形は不整形である。遺構北端でS E139(旧)、西南端でS E138(新)と重複している。出土遺物は、覆土から青磁碗・鉢、珠洲系壺、越前甕、釘、鉄鍬、泉通宝、漆器がみられる。15世紀の廃絶の可能性がある。

S X320 (Fig.38、Ch.73)——S T43・44区検出。東西不明、南北不明、深さのみ35cmを計った。北壁の一部が確認されたが、西・南・東壁は不明である。S E138(新)、S E139(旧?)、S X326(新?)と重複している。覆土から青磁碗、白磁皿、瀬戸鉄軸甕、越前甕、釘、鉄鍬が出土している。15世紀の廃絶の可能性がある。

S X321 (Fig.39-①)、Ch.74)——S42・43区検出。東西(400)cm、南北266cm、深さ58cmの規模を有する。遺構西端で井戸状の竪穴遺構(旧)と、南半部でS F78(新)と重複している。遺物は主に東半分から出土している。特に出土密度が高いのは南東部の壁ぎわである。出土遺物は、青磁碗・皿・盤、白磁皿、染付皿、褐釉壺、瓦質手埴り、珠洲系壺、無釉陶器、産地不明掘鉢、刀子、穿引金、釘、用途不明鉄製品、鉄滓、太刀の足金具、大観通宝、熙寧元宝、皇〇〇宝が覆土からみられる。床面直上からの遺物出土はない。16世紀の廃絶と思われる。

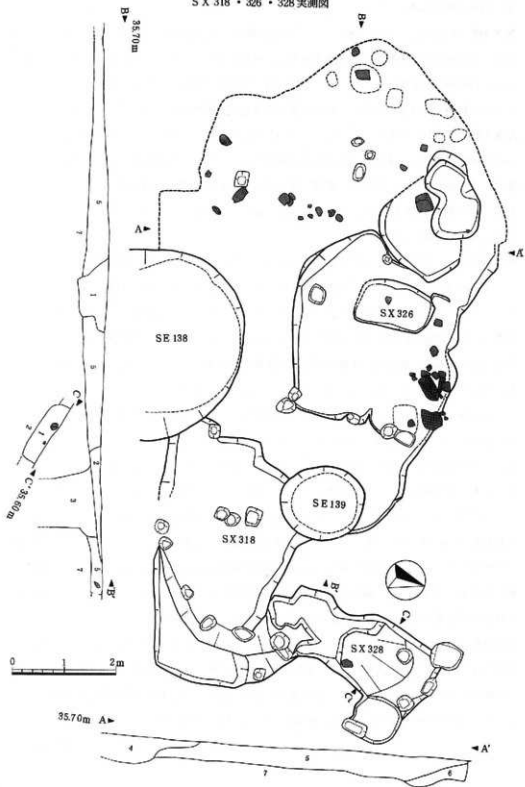
S X324 (Fig.11-②)——S43区検出。長径100cm、短径94cm、深さ(30)cmの円形を呈する遺構である。さらに深くなり、井戸跡状になるが、遺構が小さく危険も伴うため作業を中止した。出土遺物には、白磁皿、鍍鉢、溶解物がある。S T247の南西コーナーで重複しているが、新旧関係は不明である。時期不明。

S X326 (Fig.38、Ch.73-a)——S44区検出。東西92cm、南北148cm、深さ10cmの規模を有する。遺構覆土層序断面図からは、確認面で東西144cm、深さ59cmの規模が考えられる。しかし、グリッド杭が遺構南西コーナーに設定されていたため、十分な表土除去、確認ができなかった。出土遺物はない。S X320(旧)と重複しているため、16世紀の廃絶の可能性もある。

S X327 (Fig.17-①)——R42区検出。長径150cm、短径136cm、深さ(37)cmの規模を有する円形の遺構である。深さは、さらに60cm以上あり、井戸跡等の可能性も考えられる。

Fig. 38 竪穴遺構VI

S X 318 • 326 • 328 実測図



S T 280、S T 282と重複する（両者ともに新か？）。出土遺物には、白磁皿、釘が各2点ある。時期不明である。

S X 328 (Fig.38, Ch.73-(b))——S 44区検出。東西132cm、南北378cm、深さ35cmの規模と考えられる。不整形で、北半部分が南へ傾斜しており、スロープを形づくる。出土遺物には、青磁碗、白磁皿・八角碗、かわらけ、釘、用途不明鉄製品がある。南端でS X 318と接するが、新旧関係は不明である。15世紀後半の廃絶の可能性が考えられる。

S X 330 (Fig.18, Ch.22-(c))——R 42区検出。東西(320)cm、南北540cm、深さ32cmの規模を確認した。東壁の立ち上がりは検出されていない。出土遺物には、青磁碗・皿、白磁皿、美濃褐釉碗、釘、鉄銅片、鉄滓、漆器がある。西壁南部でS T 283、S E 141と重複するが、新旧関係は不明である。また、S B 70(新)、S B 71(旧)の柱穴とも重複している。15世紀後半の廃絶の可能性がある。

S T 245 (Fig.39-(2), Ch.75, PL.10-(c))——S 41・42区検出。東西420cm、南北282cm、深さ64cmの規模を有する。不整形の遺構である。南西部で別の竪穴遺構、電柱(新)と重複している。出土遺物が多種、多量であった。床面直上からは、青磁碗、美濃瀬戸灰釉皿、越前甕、産地不明甕・播鉢、釘が出土している。覆土からは、青磁碗、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、瀬戸灰釉壺、越前甕、産地不明播鉢・鉄釉壺、埴埴、小札、針、釘、用途不明鉄棒、銅紙、断読不能銭貨、無文銭、硯が出土している。また、前年度に若干掘り下げたが、その際には、青磁碗・皿、白磁皿、染付碗・皿、青白磁陶枕?、美濃灰釉皿、瀬戸灰釉壺、越前甕・播鉢、埴埴、小札、釘、鉄銭、元祐通宝、開元通宝、紹聖元宝等が出土していた。出土遺物からは、16世紀の廃絶の可能性が高いと思われる。なお、東壁はさらに拡張する可能性もあるため、トレンチで東壁確認を行ったが明確にならず、スロープ状に地山が立ち上ってゆく状態がみられたのみであった。そのため、トレンチ分は遺構規模・出土遺物ともに遺構には含めていない。

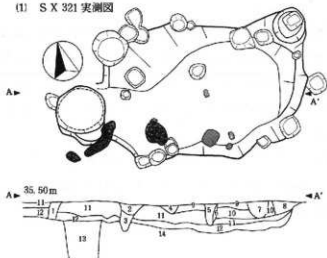
S E 129 (Fig.39-(3), Ch.76)——S T 49区検出。東西140cm、南北134cm、深さ80cmの規模を有する。平面形は若干角がつく感じの円形を呈する。出土遺物は、覆土から青磁碗、瀬戸鉄釉碗、瓦質手焙り、溶解物、釘、銅製小皿がある。また確認面から出土している瓦質手焙り、鉄滓も遺構に伴う可能性がある。重複関係なし。時期不明。

S E 156 (Fig.16, Ch.19-(b))——Q 42区検出。長径148cm、短径136cm、深さ132cmの規模を有する。井戸跡と思われたが、底面が早い段階で検出されたため、S E 129とともに竪穴遺構の項で記載することにした。覆土第2層から、かわらけ、用途不明鉄製品が出土している。S T 277と重複しているが、新旧関係は不明である。時期不明。

(木村浩一)

Fig. 39 整穴遺構Ⅶ

(1) S X 321 実測図

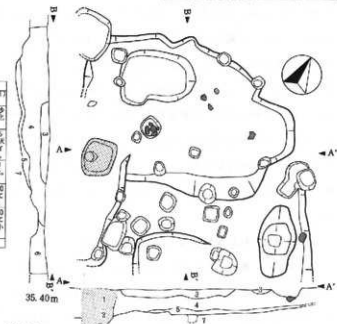
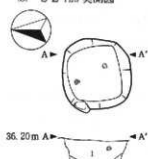


(2) S T 245 実測図

Ch. 75
S T 245 覆土層序注記表

層序	特徴	備考
1	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に灰白色 (10 Y R 2/1) を1層含む。	
2	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に小粒状の黒褐色砂質土 (10 Y R 7/6) を2層と層小塊状の灰化物を1層含む。	
3	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に灰褐色砂質土 (2.5 Y 7/2) を中粒状で2層とに灰褐色土 (10 Y R 2/4) を層状に1層を1層含む。 (10 Y R 2/1) を7層と灰化物を小粒状に1層含む。	
4	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に灰白色 (10 Y R 2/1) を全体的に2層と灰化物を小粒状に1層含む。しりりあり。	
5	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) を小から中ロット状に2層とに灰褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を1層含む。	
6	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色砂質土 (10 Y R 7/8) を小から中ロット状に2層とに灰褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を1層と層小塊状の灰化物を1層含む。	
7	層山。黄褐色砂質土 (10 Y R 7/6)。	

(3) S E 129 実測図



Ch. 76
S E 129 覆土層序注記表

層序	特徴	備考
1	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に灰白色 (10 Y R 7/1) を全体的に1層と層小から大塊状の灰化物を3層と小粒～大粒状の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を2層を含む。しりりあり。	
2	黒褐色土 (10 Y R 3/2) と黒褐色土 (10 Y R 4/1) との境界に小から中粒状の灰化物を1層含む。	
3	黒褐色土 (10 Y R 3/2) と褐色砂質土 (10 Y R 4/4) との境界に小から中粒状の灰化物を1層含む。	
4	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小粒状の明黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8) を2層と層小塊の灰化物を1層含む。	
5	黄褐色砂質土 (10 Y R 6/8)。	
6	層山。黄褐色砂質土。	

Ch. 74
S X 321 覆土層序注記表

層序	特徴	備考
1	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小粒状の褐色砂質土 (10 Y R 4/6) と層小塊の灰化物を1層含む。	
2	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小粒状の褐色砂質土 (10 Y R 4/6) を1層と層小塊状の灰化物 (10 Y R 6/4) を2層と層小塊の灰化物を1層含む。	
3	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小から中粒状の褐色砂質土 (10 Y R 4/6) を3層含む。	
4	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小から大粒状の褐色砂質土 (10 Y R 4/6) を3層含む。	
5	黒褐色土 (10 Y R 3/1) にに灰褐色砂質土 (10 Y R 2/1) を3層と層小塊状の灰化物 (10 Y R 6/6) と小塊状の灰化物を1層ずつ含む。	
6	黒褐色土 (10 Y R 3/1)。	
7	黒褐色土 (10 Y R 3/1) にに灰褐色砂質土 (10 Y R 2/3) を1層と小塊状の灰化物を1層含む。	
8	黒褐色土 (10 Y R 3/1) にに灰褐色砂質土 (10 Y R 5/2) を2層と小塊状の灰化物を1層含む。	
9	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小粒状の褐色砂質土 (10 Y R 4/6) を2層含む。	
10	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に黄褐色土 (10 Y R 3/1) を2層と小塊状の灰化物を1層含む。	
11	黒褐色土 (10 Y R 3/2) に黄褐色土 (10 Y R 3/1) を7層とに灰褐色砂質土 (10 Y R 7/2) を5層と黒褐色土 (10 Y R 1/7) を2層と小塊状の灰化物と小粒状の黄褐色砂質土 (10 Y R 6/6) をそれぞれ1層含む。	
12	黒褐色土 (10 Y R 2/3) とに灰褐色砂質土 (10 Y R 7/2) と黒褐色土 (10 Y R 3/1) との境界に小塊状の灰化物を1層含む。	
13	黒褐色土 (10 Y R 3/1) に小から中粒状の褐色砂質土 (10 Y R 4/6) を3層含む。	
14	層山。褐色砂質土 (10 Y R 4/6)。	



IV 出土遺物

本年度の出土遺物数は、陶磁器類（土器も含む）約2,700点、鉄・銅製品約1,200点、銭貨約300点、石製品104点、木製品（漆器被膜も含む）71点、骨類17点、自然遺存体30点、皮革製品1点であった。発掘箇所が内館の辺縁部であったことと考慮すると、昭和59年度調査区の出土点数よりは減少しており、全体形を知り得る遺物も少ないため、一部の遺物については昭和59年度出土品も参考資料として掲載している。

遺物の出土状態については、Ⅲ章にて述べている箇所もあり、本章では遺構等にとらわれず出土遺物の全容が理解できるような記載を心がける。なお、主要な報告資料は、城館期のものとし、城館期以前および城館期以後のものについては、そのつど注意書きをする。

1. 陶磁器類

陶磁器類は、大別すると交易等による搬入品と地元産に二分できる。しかし、浪岡城跡から出土するものについてみると、地元産と推定されるものは少量の土師質土器だけと考えられ、他のものはすべて搬入品とみなすのが妥当であろう。さらに、中国産品や国産品を問わず、浪岡周辺の窯場で生産されたものが皆無とすれば、日本海交易による搬入品ということになり、出土陶磁器のほとんどを舶載陶磁器（船に積載して運んだ陶磁器）として包括できると考えられる。以上の観点から、陶磁器類を分類する時、主要生産地による分類が現在の段階では基本的方向性を見だし得るが、中国産等の場合筆者に生産地同定を成し得る力量はなく、従来使用していた名称別分類をおこなうことを御了承いただきたい。また日本産等についても、産地不詳の類が多いことから、その焼成・成形・器形等による製品別分類をおこなうことも了解いただきたい。

A. 搬入された陶磁器類で中国産等のもの

A-1 青磁（P.L.13・14、Fig.40・41、Ch.77）

青磁はすべて中国産と考えられるもので、碗360点、皿130点、盤14点、鉢類16点、香炉3点、他2点、計525点の破片が出土している。以下、器形別に記載する。

A-1-a 碗

青磁碗の主体を占めるのは胴部外面に線描蓮弁文を有する類と口縁が端反りする無文の類である。昭和59年まで調査した北館よりは内館の方が無文碗の出土比率が高い傾向を示す。

- I類 胴部外面にやや荒めの線描蓮弁文を有するもの。（1）口縁破片1点の出土だけで、推定径15cm、暗い黄緑色の釉調を呈し胎土は緻密な灰色である。胴部下半はややふくらみを有して高台に至ると思われる。

Ⅱ類 口縁が直行して立ち上がり口縁部外面に雷文帯を巡らすもの。二片の出土があった。

Ⅱ a 類 雷文帯を鑿工等によって簡略に描き込み、同様の工具で内面に劃花文を描く。
施軸は肉厚で気泡が多く淡い青緑色を呈す。(3)

Ⅱ b 類 雷文帯をスタンプ状工具で押し、黄緑色の軸調を呈するもの。(2)

Ⅲ類 内外面ともに一条の劃線等を除けば無文とみなし得るもの。

Ⅲ a 類 口縁が直行して立ち上がるもの。胴体数としてみた場合では10点前後の出土数し
がなく、いずれも気泡の多い施軸がなされ、暗緑色・青緑色・灰緑色等の軸調が
みられる。(4)は、推定口径18.2cm、高さ8.9cmを計り底を除いて高台まで深
みのある青緑色軸が施される。また、内面口縁下3cm前後の部分から見込にかけ
て無数の擦痕が横位にみられ、本器物内で柔の調合や繊維質のものを搦るとい
う行為がなされたと考えられる。

Ⅲ b 類 口縁が外反か端反りして立ち上がるもの。30個体以上の出土があり、推定口径16
～18cmぐらいのものが多く。焼成状態や軸調も多様で、褐色を呈する酸化青磁か
ら暗緑色・黄緑色・青緑色・白濁気味の青灰色等の軸調が認められる。(5)は
推定口径16.4cmを計り、胴部外面中央にクロク整形痕が残って、細かい黒粒の混
入する灰色素地に青灰色の軸が施されたものである。

Ⅳ類 胴部外面に蓮弁文を簡略化した細蓮弁文(剣先状蓮弁文・山形蓮弁文)を施すもの。

Ⅳ a 類 蓮弁の表現が鑿状工具による片刃彫りであり、明確な稜(鋸)を有せず谷の部分
だけが明確なもの。良好な口縁部がないため弁先の状況は明らかでなく、おそら
く剣先に近いものと考えられる。2片の出土があり暗緑色・青灰色の軸調を呈す。

Ⅳ b 類 蓮弁の表現が線刻に近いもので、弁先が無作為な山形や弧状を呈し縦位の線刻も
弁先の山や谷から無作為に施されている。20個体前後の出土があり、軸調は暗緑
色・黄緑色・青灰色・青緑色等があり、内面見込上端に劃線文を施す例もみられ
る。推定口径は14cm前後のもの、(7)のように11.4cmを計る小型のものに大
別でき、見込にスタンプ文のみられる(6)もある。(7)は疊付および高台内
まで施軸しているが、(6)は疊付から底まで荒いケズリ痕が認められ、施軸は
されていない。

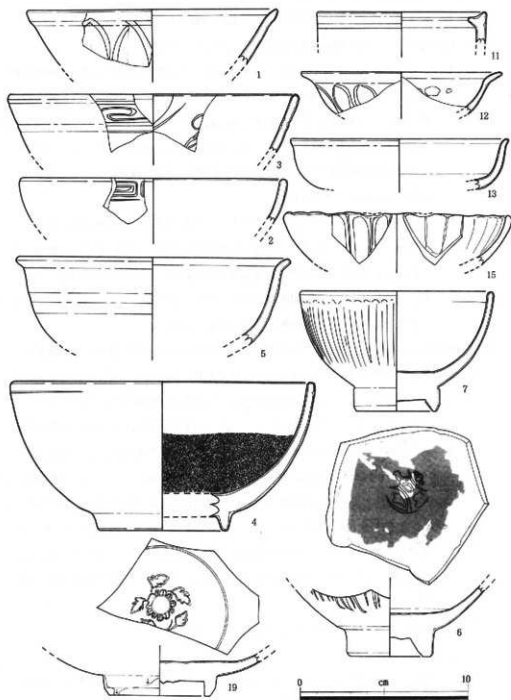
Ⅳ a 類・Ⅳ b 類ともに口縁は直行した立ち上がりを呈する。

A-1-b Ⅲ

青磁皿は、口縁が外反・端反りするものと、稜花形を呈するもの、および菊皿状のものに大
別できるが、半数以上は稜花形のものである。

Ⅰ類 口縁が外反し、胴部外面に片刃彫りによる不整形の蓮弁が描かれるもの。(12)一点

Fig.40 青磁实测图



の出土であり、推定口径12.0cmを計る。軸調は淡い青灰色を呈し部分的に軸がかからず素地の見えている箇所もあり、灰白色の良質な胎土である。

Ⅱ類 口縁が端反りし、胴部内外面ともに無文であるもの。なお底部が明確でないため見込等の文様については記述できない。推定口径13~16cmぐらいのものまであり5個体前後の出土があった。軸調は青灰色・青緑色・暗灰緑色等があり、胎土は灰色のものが多い。(13)は、推定口径13cm、青灰色の気泡の多い軸調を呈する例である。

Ⅲ類 口縁が稜花状を呈し、高台立ち上がり上端腰部で一度屈折し、口縁部へ向って緩く外反するもの。個体数として20個体前後の出土があった。

Ⅲ a 類 内面・見込ともに無文であり、見込の中央部および高台裏・畳付の素地に施釉されず素地が露胎しているもの。(14)は推定口径13cm、器高3cmを計り、青灰色の薄い軸調に、一部酸化状態で褐色を早する灰色の胎土である。

Ⅲ b 類 内面口縁部に2~3条の波状櫛目文が施されているもの。軸調には暗青緑色・青灰色・灰緑色等がみられる。高台部は明確でない。

Ⅲ c 類 内面口縁部に2~3条の波状櫛目文とその下胴部内面に刺花文を施すもの。1例出土し、酸化青磁特有の褐色胎土に黄緑色軸が認められる。

Ⅳ類 口縁から胴部にかけて菊花状のえぐりがきれいにみられるもの。(15)は推定口径13cmを計り、透明感のある白緑色の軸調に緻密な灰白色の胎土が認められる。

Ⅴ類 口縁形態は不明で、高台部のみもの。見込に印花文を有し、施釉が畳付までで高台裏が露胎している例(16)。見込中央に軸のふき取り等による露胎部分があり、施釉は畳付と高台裏の一部に及んでいる例(20)があり、本例に類似の皿が2点存在する。

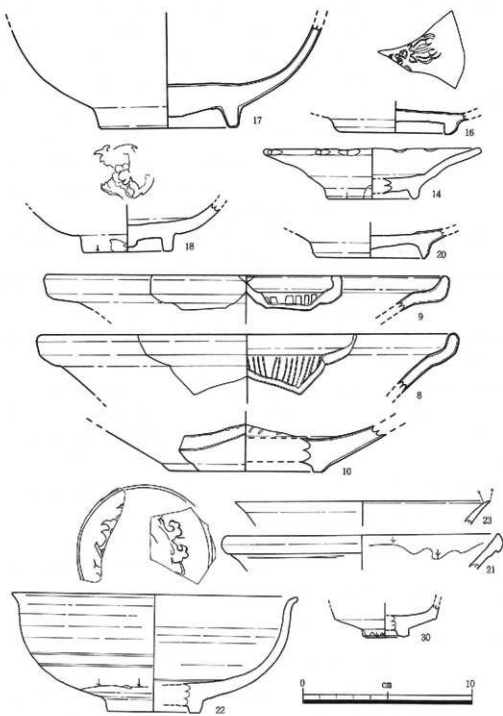
A-1-C 盤

青磁盤としたものは、推定口径20cm以上で器高が6cm前後のものをあて、大皿と称することも可能である。個体数では4~5個体が出土している。

Ⅰ類 口縁が折れた状態で立ち上がり、胴部内面に花卉状のえぐりが簡略化したヒダを縦位に施すもの。(9)は推定口径24.2cmを計り、透明度の高い青緑色の軸調に緻密な灰色の胎土がみられる。他に、暗青緑色の軸調で部分的に酸化状態の素地が認められるものも存在する。

Ⅱ類 口縁形態はⅠ類と同じであるが、胴部内面のヒダが線状に簡略化されたもの。(8)と(10)は同一個体と思われ、推定口径25.2cm、器高6.5cm前後、底径9.0cmを計る。濁りのある黄緑色の軸調で、胎土は緻密な灰色を呈するが部分的に酸化褐色を呈する所もみられる。施釉は畳付の一部を除いて全面施釉のようであるが、Ⅰ類の中には、底が露胎するものも存在する。

Fig.41 青磁・白磁実測図



A-1-d 鉢

青磁鉢は、底径が皿のように大きく安定し、胴部の立ち上がりから推定して皿ほどには器高が低くならないと思われるものを一括したため、碗形あるいは皿形となるものもあるかもしれない。口縁形態が不明であるため、高台部の特徴から分類する。

I類 高台裏が釉のふきとりのためか蛇の目状を呈し、他は畳付部からすべて施釉されるもの。(17)は深みのある暗青緑色の釉調で、最も緻密な青灰色の胎土を有している。接合した部分を見ると、貫入の度合に相違がみられ、破壊の状況や土中での状況によって貫入が違ってくるのであろうか。見込に割線ないしはスタンプの痕跡はあるが明確に図示することはできなかった。底径8cmを計る。

II類 高台畳付から裏にかけて素地が露胎し、高台立ち上がり部に釉の流れが認められ、見込に印花文が施されるもの。(18)は緑灰色の釉調に黒色および灰色の胎土、(19)は淡い青緑色の釉調に荒い灰色の胎土を有し、底中央にケズリ残痕がトチン状に認められる。

A-1-e 香炉

青磁香炉は3片の出土であり、口縁形態のわかるものは2片である。

I類 口縁部外面に一条の割線が巡り、内面に突起状の線が一条巡るため蓋等を考慮した成形になっているもの。(11)は暗緑青色の釉調で、胎土は緻密な灰色、推定口径10cmを計る。

II類 口縁が単に円筒状の縁のようにストレートな立ち上りを呈するもの。釉調は青緑色胎土は灰白色を呈する。口縁部内面に釉溜りが認められる。

以上の他に、蓋の底と思われる破片も出土しているが、小片のため割愛する。

Ch. 77 青磁観察表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土	遺構名	器位	器形	釉	胎土	文様	特徴	備考
13-1	40-1	P1763	Q42		II	碗	暗青緑色	灰色	縁通介文		
13-4	40-4	P2021	T48	SX308	フタ上		青緑色	灰白色		内部に擦痕が多い	接合)
"	"	P2176	R43	ST367	"	"	"	"		"	"
13-8	41-8	P2658	Q47	SX211	"	盤	鮮黄色	灰色-褐色	内面に細い筋有り		1964年度出土
13-9	41-9	P2219	R42	ST260	"	"	青緑色	灰色			
13-2	40-2	P2164	S42		II	下	黄緑色	白色	外面出文		
13-3	40-3	P1917	S44		"	"	青緑色	白灰色	外面書文、内面 刺花文		
13-11	40-11	P128	S40		I	香炉	暗緑青色	灰色			
13-10	41-10	P2318	T44	SE138	フタ土盛		黄緑褐色	"			接合)
"	"	P2319	"	"	"	"	"	"			"
13-5	40-5	P1493	T38		II	碗	青灰色	"		口縁内反	

P1. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	軸	胎	土	文	様	特	備	考
13-5	40-6	P 143	S42	ST245	フク土	碗	青緑色	灰	色	蓮弁文、印花文				
13-7	40-7	P 2320	T44	SE136			青	灰	色	模写蓮弁文			接着	
		P 2376			セクション内フク土									
		P 2425												
		P 2433			枠内粘土層									
		P 2458			枠内フク土									
		P 2476			セクション内フク土									
		P 2477			フク土									
		P 2478												
		P 2487			枠内フク土									
		P 2488												
		P 2494												
		P 2505												
		P 2506												
14-12	40-12	P 2236	R42	ST280	フク土	皿		灰	白	色	外面蓮弁文	「縁外灰	接着	
		P 2590		ST283										
14-13	40-13	P 2416	S42	pit内										
14-17	41-17	P 1804	Q42		II	鉢	青	緑	色	青	灰	色	胎部釉を拭きとっている	接着
		P 1805			II									
14-18	41-18	P 2507	R42	ST280	pit内フク土		緑	灰	色	灰	色			
14-14	41-14	P 964	W47		II	子	青	灰	色	灰色、赤褐色			見込み一部腐蝕	
14-15	40-15	P 721			II	菊皿	白	緑	色	灰	白	色		
14-16	41-16	P 2106	R32	ST246	セクション内フク土	皿	淡	青	緑	色	灰	白	色	見込み印花文
14-19	40-19	P 817	W47		II	鉢	青	緑	色	灰	白	色	見込み内縁、花スタンプ	
14-20	41-20	P 1750	P42		II	皿	青	灰	色	白	色		見込みの釉を拭きとっている	

A-2 白磁 (P.L.15・16, Fig.41・42, Ch.78)

白磁はすべて中国産と考えられるもので、器形別にみると皿371点、碗24点、小坏他11点の破片数が出土している。製作年代からすると、13~14世紀の一群と15~16世紀の一群に分類が可能であり、城館期の製品は後者、前者は伝世品的性格を有していると考えている。

A-2-a 碗

白磁碗は、個体数とみた場合10点以内の出土であり、そのほとんどは13~14世紀のものである。つまり、城館期に白磁碗はほとんど搬入・使用されていないことになる。

I類 口縁が玉縁を呈し腰部の張りがなく直線的立ち上がりをするもの。(21)は推定口径17cmを計る大ぶりの碗で、灰白色の釉が所々に釉溜りに施され、灰白色の硬質感あふれる胎土が認められる。13~14世紀。1個体出土。

II類 口縁が外反した立ち上りを示し、腰部が張りを有して高台にいたるもの。

Ⅱ a 類 推定口径18cmを計り、暗灰色の軸調に堅緻な灰色の胎土を有し、胴部外面がくすんだ状態を呈するもの(24)。没岡城跡Ⅷ P 92・Fig.42—183に掲載した白磁碗と同形のものと同定される。

Ⅱ b 類 碗と言うよりは鉢と言えるかもしれないが、口縁は持手に成形されて外反し、内外面ともにロクロ整形痕が明瞭に残っている。(22・25・26)は同一個体と推定され、透明度の高い灰白色の軸調を早し堅緻な灰色の胎土を有している。外面の施軸は腰部下端で止まり、高台部は素地を露呈している。見込には一条の劃線を回した中に印花文が施されており、推定口径17cm、器高7cmを計るものである。本類はいずれも13~14世紀の製品である。

Ⅲ類 口縁の素地が露胎するいわゆる口壳のものである。(23)は小片であるため碗かあるいは皿と考えられ、口縁は外反しながら尖った状態になっている。やや青味のある灰色の軸に白色に近い堅緻な胎土がみられる。推定口径15cmを計る。13~14世紀。

A-2-b Ⅲ

白磁皿は大別すると口縁が内湾気味に立ち上がるものと口縁端反りのものがある。北館の調査においては後者が数量的に多かったが、内館においては前者の出土率が高くなる傾向を有する。今後、詳細に分析をする機会を得たいと思っている。

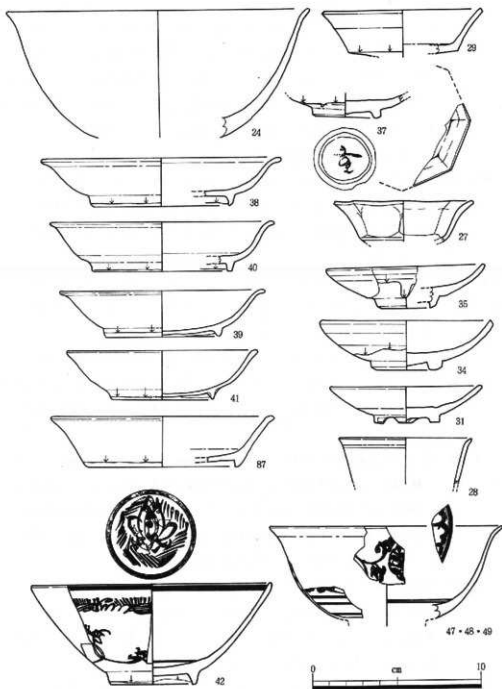
I 類 口縁が内湾気味に立ち上がるもの。本類は、素地が焼き上りによって硬質と軟質の二種(磁器質と陶器質)に分類できるけれども、単純に焼成温度の差による出来不出来の印象があるため、今回は細分していない。底部片から推定するに20個体前後の出土がある。

I a 類 高台の作りが四弧状に快りを入れたもの。施軸にあたっては器面全体にかかるもの(31・32)と高台部上端で止まり高台部が露胎するものがみられる。見込部分には四箇所の重ね焼き痕が認められる。(31)は口径9.4cm、器高2.5cmを計り、光沢のある灰白色の軸調に堅緻な灰白色の胎土が認められる。(32)は推定口径9.5cmを計り、外面に茶色のくすんだ部分がみられる。

I b 類 高台の作りが丸形に削られたままのもの。本類には全面施軸はみられず、高台上端から口縁下端で施軸が止まり高台が露胎しているものだけである(33~37)。軸調は白色から白濁色まで個体によって特徴がある。(37)の底には早書痕が認められ、漢字状の文字と考えられるが判読できない。

Ⅱ類 硬質持手に成形され、口縁が端反りするもの。皿付の部分だけ施軸がなされず、他は全面施軸である。底部片および口縁部片から推定するに20個体前後の出土がある。推定口径は11~15cmのものが多く、器高は3cm前後である。

Fig. 42 白磁・染付実測図



Ⅱ a 類 高台の立ち上がりあと腰部が張り出して口縁にいたり端反りするもの。(38)は推定口径14.8cm、白色の軸調に白色の胎土を有する。(39)は推定口径12.4cm白色の胎土で、不透明な灰白色の軸調を呈する。(40)は推定口径13.4cm、骨付に砂の付着がみられ、軸のくぼみ等が所々に認められる。(41)は光沢のある白色の軸調で精選された白色の胎土を有している。

Ⅱ b 類 高台の立ち上がりから腰部の張り出しをもたないで外反したまま口縁に至るもの。(87)はS F 118出土のもので、推定口径13cm、白色の軸調・胎土である。

Ⅲ類 口縁から胴部にかけて花卉状のへこみを有する、いわゆる菊皿と言われるもの。細片が多く判然としなが、2～3個体の出土がある。

A-2-C 小坏

白磁小坏には、前述ⅢのⅠ類とⅡ類に比定できる二種類に大別できるが、個体数としてみれば5個体以内の出土である。

Ⅰ類 高台から腰部にかけてほぼフラットな成形をした後、腰部で大きく屈折して外反しながら口縁に至るもの。施軸は外面腰部屈折部で止まり、高台部は露胎すると考えられる。

Ⅰ a 類 いわゆる八角坏と言われる胴部を八角に面取りしたもの。(27)は、堅緻な白色の胎土にやや青味のある白色軸を施し、推定口径8.5cmを計る。

Ⅰ b 類 胴部に面取りがなされず丸形を呈するもの。(29)は軟質な乳白色の胎土に緑がかった白色透明軸を施しており、推定口径10cmを計り、屈折部から高台部にかけて素地が露胎したままクロ整形の痕跡が顕著に認められる。(30)は小鉢としたが坏に近いものと思われ、施軸が高台立ち上がり部分まで施されているものである。高台の成形は、ⅢⅠ類と同じである。

Ⅱ類 硬質薄手に成形され、胴部がほぼ直線の立ち上りを呈した後口縁が端反りするもの。(28)は推定口径8.0cmを計り、白色の胎土に白色の透明軸が施されている。

以上の他、小壺、陶枕等ではないかと推測される破片も存在するが、明確に中国産のものと鑑定を受けていないため、報告は将来に譲ることとする。

Ch. 78 白磁観察表

P.L. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	透視名	器 位	版形	軸 調	胎 土	文 様	特 徴	備 考
15-21	41-21	P 887	V 46	SX 270	セクションワフナシ	碗	灰 白 色	灰 白 色		玉縁	後野(1984年度)出土
"	"	J 1428	"	"	"	"	"	"	"	"	"
15-27	42-27	P 2296	T 41	SX 318	フクナ	小鉢	白 色	白 色			
15-28	42-28	P 86	S 41			Ⅰ 小鉢	"	"		口縁やや外反	
15-32	"	P 504	T 44			" 皿	"	"		口縁内縁、引り寄せ	
15-33	"	P 554	S 46			"	"	乳 白 色		外面に軸止り有	1984年度出土
15-22	41-22	P 2533	R 42	SB 71	ソク土	碗	灰 白 色	灰 白 色			
15-23	41-23	P 733	W 45			Ⅱ 果網	"	白 色		口縁外反、口洗	
15-24	42-24	P 1045	P 48			Ⅰ 碗	暗 灰 色	灰 色			
15-29	42-29	P 1037	"			" 小鉢	白 色	乳 白 色			後野

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	文様	特記	備考
15-29	42-29	P2092	S49	SX287	フク土	小鉢	白 色	乳白 色		様書
15-30	41-30	P1098	R48	SX275	灰 面	小鉢	白 色	白 色		
15-34	42-34	P1891	T43		Ⅱ	皿	白 濁 色	乳白 色		
15-35	42-35	P1446	W46	SE113	フク土	〃	白 色	〃	口縁内湾	
15-35	—	P1799	Q42		Ⅱ	碗	灰 色	灰 色	口縁、花文様	外壁脚部下から露出
15-36	—	P212	R30		I	〃	白 濁 色	乳黄 色		1984年度出土
15-31	42-31	P1445	R50	SE118	フク土	皿	灰白 色	灰白 色	口縁内湾、引り糸白	見込みに重畳模
15-36	—	P2530	R42	ST283	床面直上	〃	乳白 色	乳白 色		様書
—	—	P2542	〃	フク土	〃	〃	〃	〃	口縁内湾	〃
15-37	42-37	P2045	T49	SE136	〃	〃	白 色	〃	底部に繋ぎ	
16-38	42-38	P745	W47		Ⅱ	〃	〃	白 色		
16-39	42-39	P749	〃	〃	〃	〃	〃	〃		
16-40	42-40	P1974	S42		〃	〃	〃	〃		
16-41	42-41	P2171	S43	ST288	フク土	〃	〃	〃		様書
—	—	P2196	〃	Ⅱ	下	〃	〃	〃		〃
18-87	42-87	P2609	R50	SE118	フク土	〃	〃	〃		見込みに重畳模 様書

A-3 染付 (P.L.16・17・18, Fig.42・43・44, Ch.79)

染付は、中国産と日本産のものがあり、後者には17世紀以降の近世・近代・現代の製作品も含まれている。今回は、中国産のものに限って報告し、日本産については、浪岡城の存続年代との関わりから後日改めて報告する。

中国産染付は、皿390点、碗87点、水注等5点の計482点の破片数が出土している。

A 3-a 碗

染付の碗は、その高台部成形からレンツー碗とマントーシン碗およびその中間形の三種に分類可能であるが、口縁部片および底部片の観察からはレンツー碗が多く、出土個体数は15個体前後である。

I類 口縁から高台部にかけて丸味のある緩い内湾形の立ち上がりを見せ、見込部分が丸味を有した断面形を有するもの。(42)は、外面口縁部にくずれた波濤文帯、胴部にアラベスク状の連続文、見込に蓮花状文を一条の圏線内に描いている。施軸は、所々に露胎する凹があり、畳付には施されていない。推定口径14.2cm、器高6cmを計る。

(43)は外面胴部と見込に牡丹文を描くもので(42)同様に施軸の凹がみられ畳付は露胎するが褐色を呈する。連丁碗の類。

II類 口縁部はないが、底部片が1点あり、高台裏が丸味を有して見込方向に盛り上がるもの。底に「長(命富貴)」銘を有し、見込に蓮池人物文らしい文様がある。椀頭心碗の類。

III類 口縁が端反りし、見込面がフラットな状態であるI類とII類の中間形のもの。(47・48・49)は同一個体と考えられ、口縁に暗褐色の口紅(鉄軸?)が回り、胴部内面は無文胴部外面は呉須が所々で黒錆化した牡丹唐草文、見込に花卉状の文様が見られるものである。他に口縁部片には四方禪状の文様を施した例も存在する。

A-3-b 皿

染付皿は、口縁形態・底部形態・文様等によって5分類に大別できる。特にS E 118出土の一括資料はまったく接合関係が認められないことから、破壊された後の一括産棄資料として重要であり、一括して写真図版(PL.18)で掲示した。推定口径は最小で6cm前後の小皿から、10~14cm前後の中皿、20cm以上の大皿まで存在するが中皿としたものが大部分である。

I類 口縁が端反りし、高台を有する皿。口縁・底部片から30個体以上の出土がある。

I a類 胴部外面に牡丹唐草文を行し、見込に玉取獅子文(53・66・69・71・72など)や十字文(56)、輪花文(55)、花卉文(84)を有するもの。

I b類 胴部外面は無文であるが見込に花卉文(85)、雲巻状文(79・82)、「福」の字が描かれているもの(86)。

I c類 胴部外面に渦巻状文を有し、胴部内面および見込にアラベスク風の文様を施しているもの。

II類 高台立ち上がりから一気に口縁まで外反気味の立ち上がりを早するもの。胴部内外面は無文で見込に雲巻状の文様がみられる(54)。1個体出土。

III類 口縁は内湾気味に立ち上がり、底が唇筒底を呈するもの。10個体前後の出土がある。

III a類 胴部外面が無文で、見込にだけ吉祥文(57)や陰花文を描くもの。

III b類 胴部外面に光芒文や列点文を施し、見込に花文(58)や文字文等を描くもの。

III c類 口径6.0cm、器高1.6cmの小皿(83)で、口縁は輪花状に波をうち、胴部外面には花卉を意図したと思われる副縁が無作為に引かれ、見込には十字花文が描かれ、さらに見込立ち上がりには幅2mm前後の軸の掻き取り痕が残っている。外面施釉は底部立ち上がりで止まり底にかけて露胎している。断面には漆の接合痕が残っている。

III類の施釉はいずれも底部立ち上がりで止まり、底にかけては露胎している。

IV類 口縁が内湾気味に立ち上がり、高台を有するもの。前述I~III類の呉須の発色よりは彩かやや深味のある濃紺色を呈する。10個体前後の出土がある。

IV a類 内外面ともに團線のみ施され、底に「器」銘のあるもの(62)。なお、本類に含まれると思われるが、胴部外面に波状の陰刻を施した口縁部片(61)もある。

IV b類 外面無文、見込に蚊籠文等が施され、底に「圖」銘を有するもの(63)。

IV c類 小片のため詳細はわからないが、胴部内外面および見込に、四方禪文、花卉文、牡丹唐草文、寿字文等を施すと思われるもの。

V類 上記以外のもの。3個体前後の出土。

V a類 口縁が外反し、口縁内面に四方禪文、胴部外面に唐草草花文を描く、推定口径20cmを計る大皿(59・60)。非常に薄手の成形がなされている。

V b類 口縁が斜行して立ち上がり、高台部の成形は荒く削り出しただけで、内外面とも

に回線だけが施されている。焼成が甘いためか陶質の胎土であり、施軸も高台上端で止まり壹付から底は露胎している(64)。類似した胎土・成形で口縁が外反する破片が一点存在する。

A-3-C 水注?

Fig.44-44に示したものはP.L.16-44・45・46の破片(同一個体と思われる)を推定復原したもので、耳の部分およびその取り付け部から水注等の機能を有する壺形の破片と思われる。呉須は濃紺色の発色を早するが二次加熱のためか軸上に細かい凹凸が認められる。文様も詳細は不明であるが浪岡城跡遺P.95、Fig.43-194で示した壺形の器形より若干大振りになると思われる。

Ch.79 染付観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	施軸	胎土	文様	特徴	備考
16-42	42-42	P.146	S.42	ST265	フク土	壺	青白色	白灰色	アラスカ系青、 見込み回線、 唐草文			接替 1964年度 出土
"	"	P.2409	"	"	"	"	"	"	"	"	"	"
16-43	43-16	P.815	W.46		II	"	"	白	回線、荷花、唐 草文			
16-44	44-44	P.2513	R.42	pit内	フク土	取手	"	"	"	"		
16-45	44-45	P.1968	S.42		II	水注	"	"	草花文			1964年度出土
16-46	44-46	P.1252	S.48		埋土	"	"	"	回線、菊花文	耳の付着痕、 2次焼成		
16-47	42-47	P.2441	S.43	SX321	フク土	壺	白	青	回線	口縁裝飾		同一個体
16-48	42-48	P.613	R.44		I	"	青	白	"	"		"
16-49	42-49	P.514	P.44		"	"	"	"	回線、唐草、花文			"
17-53	43-53	P.2434	S.43	SX321	フク土	壺	"	"	回線、玉取獅子 文			
17-57	44-57	P.1152	R.49		IV	"	"	"	回線	番物底		
17-59	-	P.2594	R.42	ST288	フク土	壺	淡青白色	乳白色	四方唐文			同一個体
17-60	-	P.2588	"	"	"	セクション 内フク土	"	"	"	"		"
17-63	44-63	P.2026	S.42		II	壺	青白色	白	回線、唐草文、 [福]			接替 1964年度 出土
"	"	P.2545	"	ST245	フク土	"	"	"	"	"		"
"	"	P.2126	"	"	"	"	"	"	"	"		"
17-54	44-54	P.1221	T.49		IV	上	青白灰色	"	回線、花文			
17-58	44-58	P.2724	Q.48		埋上	"	白濁色	乳黄色	回線、花文	番物底		
17-61	44-61	P.938	V.45	SE.111	フク上灰層	"	透	明	白	色	回線、外面に暗 文	
17-55	43-55	P.1220	T.49		IV	上	青	白	色	"	回線、唐草、花文	
17-56	43-56	P.53	R.41		I	"	"	"	回線、見込み十 字花文			
17-62	44-62	P.2020	T.49	pit内	フク土	"	青灰色	灰	色			

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	周位	器形	釉	胎	土	文	様	特	備	考
17-64	43-64	P 604	W47	星	II	皿	青白褐色	赤褐色	同線					
18-65	25-65	P 1449	R50	SE 118	フタ土		青白色	白色	同線、牡丹草文			口縁やや外反		
18-66	25-66	P 1962	"	"	"	"	"	"	同線、土取獅子文、牡丹草文			口縁外反		
18-67	25-67	P 1907	"	"	"	"	"	"	同線、牡丹草文			"		
18-68	25-68	P 1309	"	"	"	"	"	"	同線、草花文					
18-69	25-69	P 2610	"	"	"	"	"	"	同線、唐草文					
18-70	25-70	P 1538	"	"	"	"	"	"	同線、見込み十字花文、外周草花文			口縁外反		
18-71	25-71	P 1969	"	"	"	"	"	"	同線、牡丹草文、土取獅子文、主取獅子文			取柄軸を部試きとてある	注意	
"	"	P 1960	"	"	"	"	"	"	"			"		
18-72	25-72	P 1963	"	"	"	"	"	"	同線、土取獅子文					
18-73	"	P 1934	"	"	"	"	"	"	同線、唐草文、花文			口縁外反		
18-74	25-74	P 1675	"	"	"	"	"	"	同線					
18-75	25-75	P 1424	"	"	"	"	"	"	同線、牡丹草文					
18-76	43-76	P 1929	"	"	"	"	"	"	花卉文					注意
"	"	P 2065	T 46	SX 306	"	"	"	"	"					"
18-77	25-77	P 1450	R50	SE 118	"	"	"	"	同線、草花文					
18-78	25-78	P 1377	"	"	"	"	"	"	同線					
18-79	43-79	P 2611	"	"	"	"	"	"	同線、唐草、見込み花文			2次焼成		
18-80	25-80	P 1933	"	"	"	"	"	"	同線、土取獅子文、唐草、花文					
18-81	25-81	P 1964	"	"	"	"	"	"	同線、花葉文					
18-82	43-82	P 1930	"	"	"	"	"	"	同線、花葉文、唐草、花文					
18-83	43-83	P 1378	"	"	"	小皿	"	"	外周同線、見込み十字花文			見込みの一角部削り	注意	
18-84	43-84	P 1931	"	"	"	皿	"	"	同線、花卉文、唐草文					
18-85	43-85	P 1932	"	"	"	"	"	"	同線、花卉文			2次焼成		
18-86	43-86	P 1961	"	"	"	"	"	"	同線、見込み十字花文					

A-4 赤絵 (P.L.16, Fig.44, Ch.80)

赤絵は2片の出土があり碗と皿がある。中国産。

A-4-a 碗 (P.L.16-51)

Fig.44-51は推定口径12.8cmの碗形の口縁部片である口縁は外反して立ち上がり、内外面とも2条の圈線下に草花様の文様が施されているが、緑色・赤色顔料は脱色してくすみ色あせた状態になっている。

A-4-b 皿

Fig.44-52は推定底径10.4cmを計るやや大振りの皿高台片である。胎土や成形は、白磁皿Ⅱ類としたものに近似し、高台立ち上がり外面には花状の文様が赤褐色に近い赤色顔料と光沢のある点状の緑色顔料で描かれており、見込にも同様の顔料で花卉状の部分がみられる。

Ch.80 赤絵観察表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	調胎土	文様	特徴	備考
16-51	44-51	P2040	T49	pit内	フク	上 碗	灰	色 白	灰 色 陶線		
16-52	44-52	P1219	*	S×288	*	皿	*	灰 白 色	陶線、花文		

A-5 色絵染付 (P.L.16, Fig.44, Ch.81)

染付として呉須文様を施した上に赤色・緑色顔料で再度文様を描いているものである。Fig.44-50は推定口径14.7cmの皿口縁部片であり、外面に呉須で圈線と唐草状の文様を施した上に雑な筆使いで赤色の圈線2条と草花状の文様が描かれ、内面には濃紺の圈線下に赤色の圈線および草花文さらに列点状の緑色顔料が置かれているものである。中国産であり、一片の出土。

Ch.81 色絵染付観察表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	調胎土	文様	特徴	備考
16-50	44-50	P 263	R43		I	皿	灰 白 色	白 色	青花の上に紅で唐草		

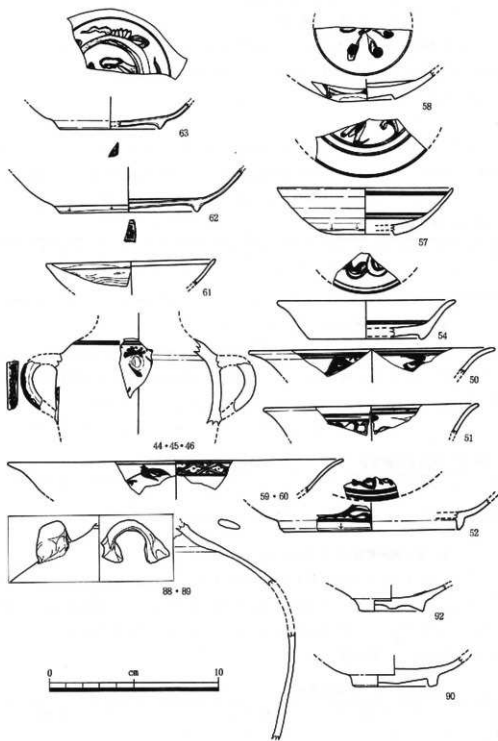
A-6 褐釉陶器 (P.L.19, Fig.44, Ch.82)

12片の出土があり、すべて同一個体のもと思われる。耳が肩部と思われる所に横役に貼り付けられ、表面には斑状になった黄褐色の釉が施された壺である。内面は黄灰色を呈し、胎土は部分的に白粒砂を含んだ明灰色であり、器厚がすべて4mm前後と薄手に製作されているのが大きな特徴である。(88・89)

Ch.82 中国褐釉 (呂宋) 壺観察表

Pl. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	調胎土	文様	特徴	備考
19-88	41-88	P1782	Q42		II	壺	褐色、赤色	灰 色		耳付き	
19-89	41-89	P2297	T44	S×318	フク土	*	*	*			

Fig.44 染付・赤絵・色絵染付・中国襦袖・朝鮮寒測図



A-7 朝鮮 (P.L.19, Fig.44, Ch.83)

朝鮮製の陶器は2片あり、碗と皿の器形がある。

A-7-a 碗

(91)は碗の胴部片で、丸味を有した湾曲で立ち上がり、光沢のある透明釉が施され胎土、器面ともに白粒砂・黒粒砂が全体に混入し、やや緑がかった灰色の色調を呈している。

A-7-b 皿

(92)は皿底部片で、畳付の一部に施釉が及ばない以外は全面施釉である。高台部の成形は削り出しによる工具の痕跡が明瞭で、整形はおこなわれない。胎土は白粒砂を含む堅緻な灰色を呈し、釉は光沢のある灰釉的な灰緑色の釉調を示す。見込と高台部に砂日積みの痕跡が認められる。

Ch.83 朝鮮観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺跡名	層位	器形	釉	調	胎土	文	様	特	徴	備	考
19-91	—	P.1720	R41			Ⅱ 碗	灰	青	薄	灰	色				
19-92	44-92	P.1060	Q48			I 皿	灰	緑	色	灰	色				

A-8 その他 (P.L.19, Fig.44, Ch.84)

おそらく中用産のものと推定されるが、焼成・成形・施釉が雑然としており明確に分類できかねるもの。(90)は皿底部片であり、乳黄灰色の胎土に、畳付上端まで流れのある青白濁色の釉が施されたものである。高台の成形は工具の削り痕が明瞭で、再調整はなされない。特に文様等が認められないことから、青磁の粗雑品とも思われるが判然としない。

Ch.84 不明陶器観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺跡名	層位	器形	釉	調	胎土	文	様	特	徴	備	考
19-90	44-90	P.986	W46	ST250	ツケ上	皿	乳	青	白	濁	色	乳	黄	色	

B. 搬入された陶磁器で日本産のもの

B-1 瀬戸・美濃 (P.L.19・20・21・22, Fig.45・46・47, Ch.84・85)

瀬戸・美濃窯で生産されたものとしてはその施釉から、灰釉・鉄釉・長石釉・黄瀬戸釉の4種に大別できる。また、器種によっては胎土や施釉方法にも相違が認められることから、なるべく細分してそれぞれの個体数を顕現できるように努める。なお、瀬戸・美濃という言葉の使用については、瀬戸窯と美濃窯の区別が現段階では筆者にできかねることからの暫定的用語であると理解いただきたい。

B-1-1 瀬戸・美濃灰釉

瀬戸・美濃灰釉の製品としては、瓶子・壺・鉢・卸皿・皿・水滴・香炉・碗等の器種があり、それぞれの破片出土数は瓶子16点、壺13点、鉢9点、卸皿6点、皿182点、水滴3点、香炉2点、碗1点、他10点である。

B-1-1-a 瓶子

瓶子はすべて胴部の小片であるため全体形を推定できる資料はない。(93)は精選された灰色の胎土で器体外面に劃花文を描き、光沢のある淡い灰緑釉が施されている。内面には輪積みか巻き上げと思われる痕跡と横位の指ナデ痕が残っている。(94)は締め腰型瓶子の底に近い部分と推定され、内外面に輪積み痕が残り外面の施釉は部分的に茶色を呈する黄緑色で、内面には横位の指ナデ痕も残っている。胎土は良質な灰色を呈する。(97)は、外面に三筋を有する破片で外面の釉はほとんどが禿げ落ちて、灰色の胎土を露呈している。瓶子の個体数は4点前後と思われる。

B-1-1-b 壺

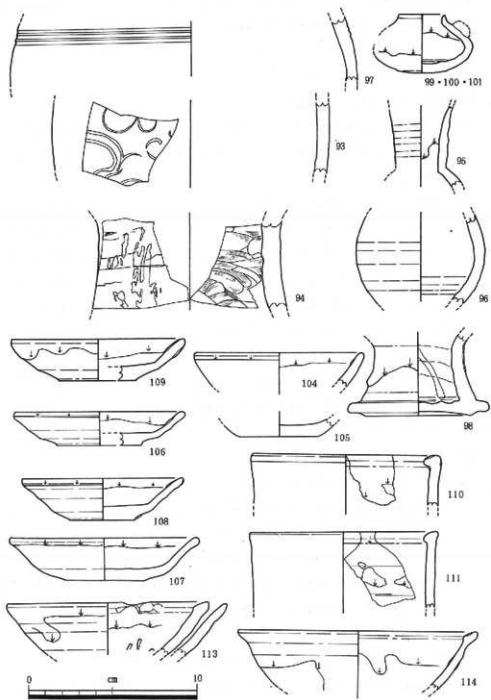
壺としたものの中には水注や花瓶等があるかもしれないが、いずれも全体形を推定するまでには至らぬため破片の特徴を記述する。(95)は頸部片であり口縁に向かって緩く外反し下方には球形に近い胴部を有する花瓶と推定される。外面にはロクロによる引き上げ痕が残り二次加熱のためガラス質の黄緑釉がくすんだ灰緑色を呈する部分もある。内面は頸部取り付け部の上端で施釉が切れ釉溜りも認められる。また、頸部から胴部にいたる部分には工具によるロクロ痕がある。(96)は花瓶の胴部片と思われるもので、外面にはロクロ成形痕と黒味のある黄緑色釉が施され、内面にはロクロ指ナデ痕が認められる。(98)は底径8.4cmを計る花瓶状の底部片であり、回転糸切による切り離し痕と外側に強く凸帯した底辺線部がある。ガラス質の黄緑釉が肉厚に底部立ち上がり部分まで垂れ下がり、内面底にも釉の落ち込みが認められる。以上の壺の胎土は、白色に近いものから灰色・黄白色と部分的に違う箇所も存在する。また、これらの他に、薄手に成形され内面に工具によるV字状のロクロ回転痕が存在するもの、内面に明瞭なロクロ指ナデ痕を有するもの等が存在する。

B-1-1-c 鉢

鉢の中には推定口径25cm以上の盤あるいは深皿とでも言えるタイプと、推定口径20cm以下の小形のものがあり、いずれにも卸目を有するいわゆる卸皿と言われるものを内包しているため、今回は卸目の付けられていない類を一括した。(鉢という分類は本来適当ではないのかもしれないが、細片が多く全体形を知り得ないため御寛容願いたい。)

I類 口径25cm以上で口縁内面に突拵を有するもの。(200)は浪岡城跡Ⅲ P97 Fig.44-217で示したものと同一であるが、本年度底に脚の付くことが確認されたので再度掲載したものである。口径35cm、底径16cm、高さは脚を除いて9.0cmを計り、外面の口

Fig.45 瀬戸・美濃灰軸実測図



クロ痕はかなり密に引かれている。(115)は推定口径30.8cm、(116)は推定口径25.4cmを計るもので、どちらも灰白色の胎土に黄緑色の釉が施された口縁部片である。

- Ⅱ類 口径20cm以下で口縁やや外側に関いた折線状を呈するもの。(114)は推定口径14.2cmを計り、口縁下2cm前後まで内外面に黄緑色釉を施軸し部分的に垂れ下った所や釉溜りのみられる部分もある。

B-1-i-d 卸皿

卸皿は鉢と同様の分類が妥当である。

- I類 口径25cm以上と推定されるもの。(117)は内面胴部の限定された箇所格子状の卸目を有すると考えられる破片で、縦位の卸目を深くV字状に入れた後、浅めに横位の卸目を入れている。

- Ⅱ類 口径20cm以下の口縁内面に突帯を有するもの。(113)は片口の部分であり、内外面に電ね焼きの痕跡と思われる付着物が認められる。ガラス質の緑色釉が口縁付近にだけ施され、以下は露胎し内面に卸目を確認できる。外面にクロ成形痕が存在する。(118)はゆがみのある器形で、推定口径15cm、器高3.4cmを計る。施軸は、口縁下2cm前後の所まで黄緑色釉が施され、内面は黄灰色外面は灰色の素地が露胎している。底は回転糸切痕が雑然と認められ再調整はしていない。

B-1-i-e 皿

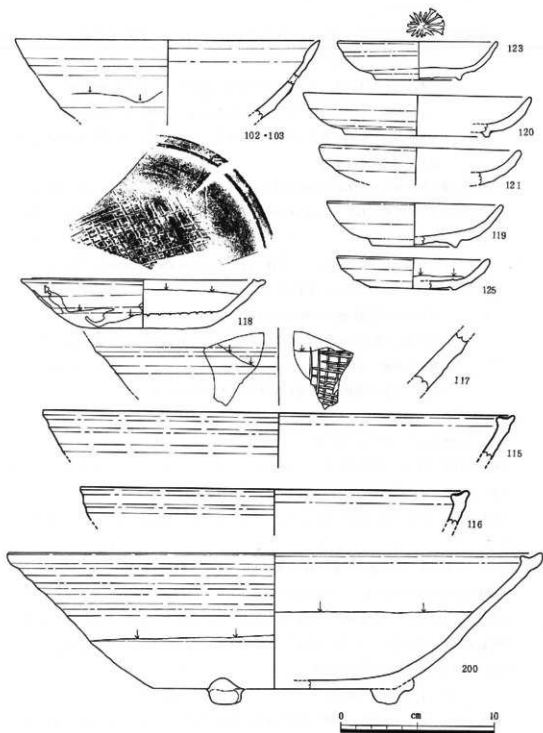
皿の中には高台を有せず糸切による切り離しだけの類と高台を有する類に2大別でき、施軸や口縁形から細分できる。一般に前者を密窯期、後者を大窯期に比定して時間的差異があるとみられている。

- I類 底が糸切による切り離しを呈するもの。

- I a類 口縁がやや外反ぎみの立ち上がりをして、口縁の部分だけに施軸されるいわゆる縁軸皿の類。(106)は口径10.2cm、高さ2.0cm、底径5.0cmを計り、内面が煤けた状態になっている。(107)は口径11.4cm、高さ2.5cm、底径4.7cmを計り、二次加熱のためか釉が剥落して凹凸状を呈する。(108)は口径9.6cm、高さ2.5cm、底径3.8cmを計り、底部立ち上がりにトチン状の重ね焼き痕が残る。(109)は口径10.4cm、高さ2.5cm、底径4.6cmを計り、内外面の軸下端が釉溜り状を呈する。

- I b類 口縁がやや内湾気味の立ち上がりを呈し、外面は口縁だけの施軸であるが内面は口縁の部分が肉厚にその下から見込全般に薄く斑状の施軸がみられるもの。(104・105)は同一個体と思われ、推定口径10.2cm、胎土はI a類より軟質な乳黄色を呈している。

Fig. 46 瀬戸・美濃灰軸実測図



Ⅱ類 削り出し等によって高台部を形成するもの。

Ⅱ a 類 口縁が雄反りするもの。本年度は出土例が少なくおかつ細片であるため図示できなかった。

Ⅱ b 類 口縁がやや内湾しながら直行して立ち上がるもの。(119)は口径11.6cm、高さ2.8cmを計り、乳灰色の胎土に黄緑灰色釉が全面に施され、底に輪ドチ痕が認められる。(120・121)は、黄灰色を呈する軸調の中に緑色の釉の流れが存在する。(123)は、見込に菊の印花文を有する例。(125)は、内面立ち上がり部分から見込にかけて釉をふき取って露胎しており、外面高台部上端に輪ドチ痕が認められるものである。

なお、Ⅱ a 類・Ⅱ b 類ともに可能性のある底部片に、見込中央からズレた部分に菊状の印花文が認められる例(122)と花卉状の印花文が認められる底径4.5cmの小皿片(124)がある。

Ⅱ c 類 口縁が折縁を呈するもの。(126)は推定口径10.5cmで胴部内面に約3cmほどの間隔をあけて3ないし4本のヒダを縦位にソグ入れている。(127)は、推定口径11.0cmで胴部内面に間隔なく縦位のヒダをソグ入れている。(128)は、ゆみのある器形で口径12cmを計り、見込に軸ハギ、底に輪ドチの痕跡が残っている。軸調は黄瀬戸手に近いものである。本類の高台成形にあたっては外面立ち上がりを削った後の調整がなく鋭角な段状を呈するものが多い。

B-1-1-f 香炉

香炉は、すべて筒形のもので口縁部片だけ出土している。(110・112)は同一個体と考えられ推定口径12.4cm、口縁部を内側に突き出した形状を呈し、ガラス質の緑色釉が施されているが二次加熱による釉の凹凸が各所に認められる。口縁部外面に一条の劃線が回っている。(111)は推定口径11.2cm、口縁内側に突き出しを有し、内面に緑色釉の振りかかりが認められる。

B-1-1-g 水滴(90・100・101)

水滴は1個体の出土である。推定口径2.8cm、推定器高3.5cm、推定胴部張り出し6.0cmを計り、つまみと注口部は欠落している。底は承切り底であり、施釉は内面が口縁から胴部まで外面が胴張り出し部までなされ、他はすべて露胎している。軸調は、鉄分が混在したように黒褐色の列点がみられる灰緑色を呈する。

B-1-1-h 碗

碗も1個体の出土である。(102・103)は同一個体と推定され、その復元図がFig.46-102である。推定口径20cm前後で、口縁は内面がふくらみを有しながら直行して立ち上がる。

胴部は緩く内湾するようであり、外面は胴部途中で施軸が切れる。縮胎している部分の調整はヘラ等によってなされており、軸調も淡い黄緑色を呈して一味違った特徴を有する。一般に平碗と言われる。

Ch. 84 瀬戸・美濃灰胎観察表

PL. No	Fkg. No	遺物No	出土区	遺構名	群	位	器形	軸	調	胎	土	文	採	特	備	考
19-93	45-93	P 2289	T 44	SX 320		フク土	瓶子	灰、緑色	灰	色	彫花文					
19-96	45-96	P 189	T 39			I	壺	黄緑色								
19-94	45-94	P 1634	T 44			II	瓶子	淡黄緑色、赤色						輪襷み痕		
19-97	45-97	P 2183	R 42	ST 278		フク土	土	淡黄緑色						内面彫色		
19-95	45-95	P 968	W 46	SR 116			壺	淡緑灰色						内面に輪止り		
19-98	45-98	P 819	Q 42			II	壺	黄緑色	乳黄色					糸切り底、輪止り		
19-99	45-99	P 2177	R 43	ST 247		床面	甌	黄緑色、赤褐色	灰	色						P 2566と同一群
19-100	45-100	P 3085	O 45	SX 203		pit内	フク土	緑黄色								1984年度出土
19-101	45-101	P 2566	R 42	SX 330		マサシロ内	フク土	黄緑色、褐色								P 2177と同一群
20-102	46-102	P 2292	T 44	SX 318		フク土	甌	淡黄緑色	乳灰色							
20-104	45-104	P 2112	S 42	ST 245			甌		乳黄色					外山開閉無軸		
20-106	45-106	P 2556	O 45	SX 203			壺	緑黄色	灰白色					口縁上部のみ施軸		
20-107	45-107	P 791	Q 47			II	壺	黄緑灰色						口縁上部のみ施軸		採遺、1984年度出土
		P 3905	P, Q 47	SX 203		フク土	壺	黄緑褐色						口縁糸切り底		
20-108	45-108	P 3135	Q 46	SX 225			壺							糸切り底		
20-109	45-109	P 817	Q 47			II	壺	暗緑色	灰白色					口縁上部のみ施軸		
20-103	45-103	P 2251	T 44	SX 318		フク土	甌	淡黄緑色	灰白色							
20-106	45-106	P 158	S 42	ST 245			甌		乳白色					口縁糸切り底		
20-110	45-110	P 1841	S 43			I	香印	緑黄色	灰白色	新緑				2次焼成		1984年度出土
20-111	45-111	P 18	R 42			I	壺	淡黄緑色	灰白色							
20-113	45-113	P 1328	R 48	SR 124		フク土	加蓋	黄緑色								
20-114	45-114	P 1776	Q 42			II	洗鉢									
20-118	46-118	P 1131	R 49			II	下	細組								見込みまで施軸
20-112		P 2123	S 42	ST 247		フク土	香印	淡黄緑色								見込みまで施軸
20-115	46-115	P 1383	R 51	ST 270			洗鉢									2次焼成
20-116	46-116	P 1061	Q 49			I	壺	黄緑色								
20-117	46-117	P 1438	R 48	SE 102		フク土	細組									
20-200	46-200	P 455	R 45			II	洗鉢									採遺、1984年度出土
		P 474	S 43			I	壺									
		P 480					壺									
		P 1375		SP 53		フク土	壺									
		P 1135	R 48			I	壺									
		P 2371	S 44	SX 315		フク土	壺									
21-119	46-119	P 1986	R 43			I	甌	黄緑灰色	乳灰色							輪下子痕
21-123	46-123	P 145	S 42	ST 246		フク土	壺		灰白色							輪下子痕、2次焼成
		P 154					壺									見込みまで施軸
21-126	47-126	P 1690	Q 41			II	ヒタ蓋	黄緑色								折縁
21-127	47-127	P 142	S 39			I	壺									
21-120	46-120	P 1475B	T 39			II	甌	乳白色、黄緑色	乳黄色							1輪内湾
21-121	46-121	P 1475C					壺									
21-122	47-122	P 1425	R 48	SE 102		フク土	壺	黄緑色	乳灰色							見込みに印花文
21-124	47-124	P 2734	Q 48			壺	土		乳白色							見込みに印花文
21-125	46-125	P 861	V 46	SE 111		フク土	壺		乳灰色							見込み無軸
21-128	47-128	P 1563	S 39			II	壺	黄白褐色	乳白色							採遺
		P 1564					壺									輪下子痕有

B-1-1-ii 瀬戸・美濃鉄釉 (PL.22, Fig.47, Ch.85)

瀬戸・美濃鉄釉の製品としては、碗58点、皿7点、壺13点、香炉等2点の破片数が出土している。

B-1-1-ii-a 碗

碗はすべて天日茶碗と通称される類である。口縁形態等から二類に大別できる。

I類 口縁がくびれを有した立ち上がりを呈するもの。

I a類 胴部下半の露胎部が鉄サビ状の付着のため、赤褐色の色調を呈するもの。(135)

は、推定口径12.0cm、暗黒褐色の斑状の施釉がみられる。(136)は、推定口径10.8cm、黒褐色と赤褐色の釉が所々みられる。

I b類 胴部下半の露胎部が素地をそのまま露呈するもの。(137)は、推定口径11.4cm

内外面ともロクロ痕が明瞭であり、釉調は胎釉に近い黒褐色を呈する。(138)

と(139)はI a類かI b類のどちらに包括されるかわからないが、(138)は黄色の強い黒褐色、(139)は光沢のある漆黒色を呈する口縁部片である。

II類 口縁がくびれを有せずやや内湾して直線的な立ち上がりを呈するもの。(134)は、推定口径12.0cm、漆黒色の釉調で二次加熱のためか内外面の一部に釉の剥離がみとめられ、凸凹状を呈している。

B-1-1-ii-b 皿

皿はいずれも細片で図示していないが、口縁がやや外反気味に立ち上がるものと、直線的な立ち上がりを呈するものがあり、碗よりは茶褐色に近い釉調を呈するものが多い。個体数では3個体以内の出土である。

B-1-1-ii-c 壺

壺は、胴部片と底部片のみが細片で出土しており、漆黒色・胎釉に近い黒褐色・黒色と褐色の斑状を呈する釉調がある。(141)は推定底径9.0cmを計る糸切底の底部片であり、外面に黒褐色釉、内面に緑色がかかった列点状の釉が認められ、ロクロの挽き上げ痕が明瞭である。個体数は6個体前後と思われる。

B-1-1-ii-d 香炉

香炉は、1点だけの出土である。(140)は、口径5cmの小振りの筒形香炉と思われる、口縁が内側に丸味を有して折り返されている。胎土は堅緻な灰色、胎釉ぎみの黒色釉が外面にみられ、内面は口縁下2.5cm前後まで黒色と褐色の斑らの釉が施されている。口唇はかなり擦りへった状態に見える。

Ch. 85 瀬戸・美濃鉄胎観察表

PL No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	文様	特	備	考
22-134	47-134	P2026	T46	pH内	Ⅱ	フク土 天目碗	黄鉄胎	灰色			2次焼成
22-137	47-137	P1559	S30		Ⅱ		褐色	*			
22-140	47-140	P1208	T49		I	香伊 天目碗	黄褐色	*			口縁内側に玉縁
22-139	47-139	P2025	S49	SE129		フク土 天目碗	*	*			
22-141	147-141	P2545	T44	SX320		マクシオン内 フク土	黄緑色 褐色	淡灰色			
22-135	147-135	P1326	R48	SE126		フク土 天目碗	褐色	乳赤褐色			接合
*		P1294	*	*	*	*	*	*			*
22-136	47-136	P1570	T39		Ⅱ	*	黒褐色	灰色			
22-138	47-138	P1031	T48		I	*	黄褐色	乳白色			

B-1-ii 瀬戸・美濃志野(長石)胎 (P.L.21, Fig.47, Ch.86)

瀬戸・美濃志野胎のものは細片が多く、22片の出土をみたが底部・口縁部片の観察からは7個体前後の出土数と思われる。器種はすべて皿である。

I類 口縁が端反りし、全面に長石胎を施すもの。(129)は、推定口径13cm、器高2.4cm、高台径8.0cmを計り、白色の胎土に灰白色の軸を施し、底には輪ドチ痕、破損面は漆による接合痕が認められる。

II類 口縁が内湾ぎみに立ち上がり、全面に長石胎を施すもの。細片が多く図示できず。

III類 口縁部や底部がないため器形の形態はわからないが、長石胎下に筆による鉄絵が施されるもの。(130)は細片であるが、内面に灰色をする文様が描かれている。

Ch. 86 志野観察表

PL No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層位	器形	胎土	文様	特	備	考
21-129	47-129	P1474	T39		Ⅱ	皿	白褐色	乳白色			口縁内反、刀子痕等 破で磨損してある
21-130	-	P 24	Q42		I	*	白褐色	灰色	内面に鉄絵		

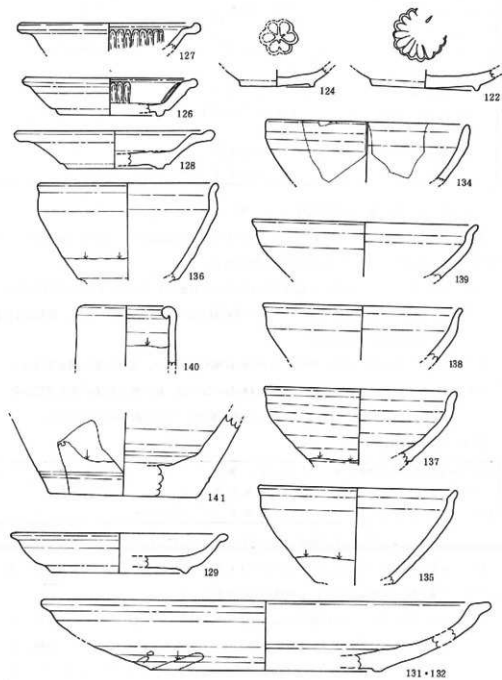
B-1-iii 瀬戸・美濃黄瀬戸胎 (P.L.21, Fig.47, Ch.87)

瀬戸・美濃黄瀬戸胎のものは5点の破片が出土しているけれども、後述する黄瀬戸様の破片以外は、大皿(盤)と推定される同一個体のものである。

I類 大皿(盤)の破片で、口縁は外反した立ち上がりを呈し(131)、高台は内側だけに削り込みを入れ胴部への立ち上がりには削りを施さず畳付から斜行して口縁に至る(132)ものである。胎土は乳白色、光沢をおさえた黄白色軸が全面に施され、外面胴部下半には軸のふきとり痕がみられ褐色を呈する胎土が露出している。口径は27~28cm前後と考えられる。

II類 大皿(盤)の破片と考えられ、胎土はI類と同じ、軸調がやや光沢を有する黄緑色と

Fig. 47 美濃・瀬戸灰釉・鉄釉実測図



白濁した部分のみられ、外面は胴部途中で軸が止まり内面は同位置で弧を描くようにへら状の工具で軸をふきとっている(133)。黄瀬戸に近い製品と考えられるが、釉調・施釉方法に疑問が残るためあえて黄瀬戸様のものでしておく。

Ch. 87 黄瀬戸手観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺構名	層	位	器形	釉	調	胎	土	文	検	特	製	備	考
21-131, 47-131		P1618	T44			II	大皿	乳黄色	乳黄色					口縁外灰			
21-132 47-132		F 39	Q42			*	*	黄白濁色	乳白色								
21-133		F1476	T39			*	*	*	乳黄色								接ぎ
		F1500	S30			*	*	*	*								*

B-2 唐津 (P.L. 22, Fig. 48, Ch. 88)

唐津窯で生産されたものは、58点の破片が出し皿2点以外はすべて皿である。施釉や口縁形態によって細分できる。

B-2-a 碗

碗は2片の出上だけであり、図示できたのは(151)だけである。(151)は底径5cmで高台の高さ1cmを計り、内面および高台外面まで若干濁りのある黄灰色釉を施し、畳付と高台内面は露胎している。高台内はケズリ痕が残っている。

B-2-b 皿

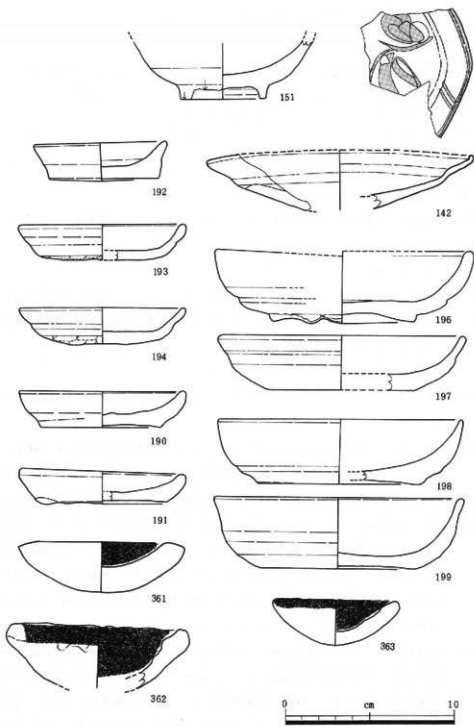
皿は高台の内側を荒く削っただけで無調整のものがほとんどで、口縁形態や釉調にバラエティーがある。

I類 口縁が指のつまみ出しによって波状を呈するもの。(143)は1単位の幅が狭く、口縁が黄褐色、内外面ともにそれ以下が青灰色を呈する白濁釉が施されている。(147)はつまみの1単位幅が広く光沢のある緑灰色の釉が施されている。

II類 口唇に鉄釉の口紅を施すもの。(142)は胴部上半で段状に折れて立ち上がり口縁を内側につまみ出して器体が四角に変形している。胎土は赤褐色を呈し、内面には鉄絵具による草花文を描いた上に灰色釉を施し、外面は胴部上半で施釉が止まる。見込に胎土日積みの痕跡が残る。(150)は暗灰色の釉下面に葉状の鉄絵文様がみられる。(144)は灰白色の釉調で内面に文様等がみられない例である。

III類 上記以外のもので胎土・釉調の特徴のみを記する。(145)は灰色の胎土に暗灰色の釉調が認められ胎土日積みの痕跡がある。(146)は石英の混入する暗灰色の胎土で、白濁釉が施されている。(148)は赤褐色の胎土に、青灰色の施釉がみられる。(149)は灰褐色の胎土に、光沢のある深緑色の施釉がみられる。(152)は黄灰色の胎土に、透明感のある緑色釉が施され、内面に胎土日積みの痕跡がみられる。

Fig. 48 唐津・土師質土器・埴塼実測図



以上が、唐津の特徴であるが、本年度の出土品には砂目積みの痕跡を有するものはみられずすべて胎土目積みのものであった。

Ch 88. 唐津製薬表

PL. No	Fig. No	遺物No	出土区	遺器名	類	位	器形	胎	調	胎	文	様	特	徴	備	考
22-142	48-142	P 1477	T 39		Ⅱ		黒	白灰褐色	明黄褐色	内面に鉄粒	胎土目					
22-143	—	P 2618	R 48		Ⅱ	上	花白褐色	乳灰色	乳灰色				1層がエグ状に渡っている			
22-151	48-151	P 475	S 45		Ⅱ	調	乳白褐色	乳黄色							接合	1984年度 片止
—	—	P 2781	—	SE 81	フ	ク	土	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	P 1739	R 41		Ⅱ		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
22-146	—	P 547	T 44		Ⅰ		黒	白褐色	灰色							
22-144	—	P 225	T 39		—		—	褐色	—				口縁に花輪			
22-152	—	P 226	—		—		—	波黄緑色	黄褐色							
22-145	—	P 722	W 47		Ⅱ		—	褐色	灰色							
22-148	—	P 1833	Q 42		—		—	青白褐色	赤褐色							
22-147	—	P 575	S 40		Ⅰ		—	緑黄色	灰色							
22-149	—	P 120	—		—		—	暗緑色	褐色							
22-150	—	P 1665	T 44		Ⅱ		—	暗褐色	明褐色				口縁と外面に鉄粒			

B-3 珠洲 (P.L.24, Fig.50, Ch.89)

珠洲窯で生産されたと考えられる製品には、甕11点、播鉢31点、壺10点の破片が出土している。ただし、珠洲と同定したものには、珠洲窯の製作技法を色濃くみせながらも明確に珠洲窯の製品であると認定できかねるいわゆる珠洲系と言われるものも包括している。珠洲系という名称を使用するにあたっては、今後各地における窯場の調査が進捗した段階で慎重に対応したいと考え、浪岡城跡のような消費遺跡の場合現状では珠洲という名称で一括報告する。

B-3-a 甕

甕はすべて破片で出土しているため、図示しなかった。出土品には、「く」字状に折れる口縁部片、外面に叩き目を有する胴部片等がある。

B-3-b 播鉢 (P.L.24-172-180, P.L.26-201, Fig.50, Ch.89)

播鉢は、口縁形態と卸目の施法によって細分できるが、全体形を知り得る資料は1点だけ(201)である。

I類 口縁が丸味を有せず鋭角に削られた状態のもの。

I a類 口唇を外面向きに斜行させた状態で成形し、内面には20条程度の細かい櫛歯原体によって卸目が施され、施条単位は一定の間隔をあけている。(172)

I b類 口唇を平坦な状態で成形し、外面はやや外反するように立ち上がり呈するもの(173)。残存部の内面に卸目はみられない。

Ⅱ類 口唇を内傾させて、その部分に櫛歯による波状沈線を施すもの。

- II a 類 内面波状沈線施文部の直下が、指でつまみ出されたように内湾しているもの。
 (201) は推定口径38cm、高さ13.9cmを計り、底の切り離しは静止糸切りによる。内面の櫛歯原体は9条であり、間隔なく口径下4cmの所から全体に施されているが、内面底の摩耗は激しい。口径付近には薬灰による自然軸状の光沢が認められるけれども、他は白砂や小石を含む素地同様に暗灰色の色調を呈している。他に、本類に含まれるものとしては、(176)と(177)がある。
- II b 類 II a 類ほど顕著に内湾はしないが、櫛歯波状沈線の内面直下に段状のくびれを有するもの。内面の櫛歯原体は8～9条で間隔なく口径下2cmの部分から施されている。(178)は、軟質で緑がかった灰色の色調を呈している。
- II c 類 内面櫛歯波状沈線の部分が幅広く成形され、その下はロクロによる成形痕はあるものの内湾した立ち上がり有せず、直線的なつくりをするもの。(179)は、内面の櫛歯原体が9条のもので口径下1.5～2.5cmの部分から間隔なく施されている。胎土・色調は暗灰色である。
- II d 類 櫛歯波状沈線下の内面では内湾気味の立ち上がりを有せず、斜行した立ち上がりに添って口径幅が狭まり丸味のある口径縁を呈するもの。(175)は、内面の櫛歯原体施文にあたって口径下2cm、4cm、5.5cmとバラつきがみられ、若干間隔のあいている部分もみられる。明灰色の胎土・色調を呈し、焼き締めは良好である。
- III 類 口径の櫛歯波状沈線はみられず、口径が若干外反気味の立ち上がりを呈するもの。内面の櫛歯原体は口径下5cmの所から施されるが、櫛歯の間隔や施文技法が雑で、観面性のくずれが認められるもの。(180)
- IV 類 珠洲であるかどうか明確ではないが、口径が丸味を有した肉厚なつくりをし、内湾して内面底にいたると思われる口径部片。(174)内面の櫛歯原体は8条以上でI類よりは大きく、II類よりは小形の櫛歯である。胎土は白砂・石英の混入する灰色で、器面は暗灰色の色調を呈している。

Ch. 89 摺鉢観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	胎土	特徴	備考
24-181	50-181	P2317	T44	SE138	フク土	灰色	内面赤褐色、外面灰色～黒色、13条の即日と片口有	
24-182	50-182	P 890	W47		II 下	黒色	内面8本の即日が波状に有	
24-183	50-183	P1064	Q50		I	〃	7条の即日	
24-184	50-184	P2566	P47	SE 82	フク土	黒色、灰色	口径に沈線	接ぎ 1984年度出土
〃	〃	P2668	P46	SE 84	〃	〃	〃	〃
24-185	50-185	P 476	P44		I	乳黄褐色	9条の即日	

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺物名	層位	胎土	特 徴	備 考
24-187	50-187	P1166	V46	SE111 フタ土		暗灰色	9条の節目、黒色処理	
24-188	50-188	P1408	T49	SX292		赤褐色		
24-186	50-186	P2091	S49	SX287		灰色		
24-189	50-189	P1136	R48		IV	茶褐色	11条の節目	
24-172	50-172	P 931	R47		I	灰色		
24-175	50-175	P1977	S42		II	暗灰色	口縁に波状欄目文	接着 1984年度出土
"	"	P1979	"	"	"	"	"	"
24-177	50-177	P2143	O47			"	"	"
24-173	50-173	P1992	S44			灰色		"
24-176	50-176	P2135	R43	ST247		暗灰色	口縁に波状欄目文	
24-178	50-178	P1358	R51	ST270		灰色		接着
"	"	P1397	R50	SE121		"	"	"
24-174	50-174	P1575	T38		II	暗灰色		
24-179	50-179	P2560	T44	SX318	床面直上	灰色	口縁に波状欄目文、節目が密である	接着
"	"	P2564	"	"	フタ土	"	"	"
24-180	50-180	P2072	Q46	pit内	"	暗灰色		
26-201	49-201	P 456	R45		II	"	口縁に波状欄目文	接着 1984年度出土
"	"	P2753	"	SE 80	フタ土	"		"
"	"	P2750	"	"	"	"		"
"	"	P2761	"	"	"	"		"
"	"	P2265	S43	SX320	床面直上	"		"
"	"	P2314	T44	SE138	フタ土	"		"
"	"	P2553	"	SX318	床面直上	"		"

B-4 越前 (PL.23・24、Fig.49・50、Ch.89・90)

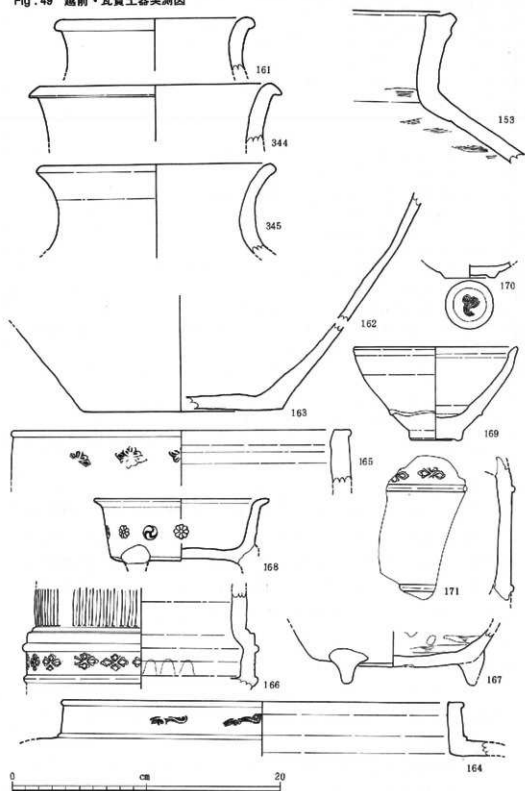
越前窯で生産されたと考えられる製品には、甕・壺と播鉢の器形があり、前者は144点、後者は14点の破片数が出土している。しかしながら、甕については口縁や底部の形態から推定すると個体数としては5～6個体と考えられ、大形品のために破片数が多くなり、破片数を単純に出土数としては置き替えられない。また、従来まで信楽ではないかとして扱っていた製品は、その確実性が乏しくなっており、越前的様相が濃いため越前系という名称で包括した。つまり、現状では越前の可能性を否定できないものの、類例が少なく今後の検討によって詳細な産地同定を行わなければならない遺物である。

B-4-a 甕

越前甕は、口縁部の出土数から推定すると3～4個体と考えられ、口径60cm以上の大形品と40cm前後の二種類がありそうである。

I類 口径60cm以上で、口縁がほぼ直立した立ち上がりを早し外面に口縁下2cmの所で一条の稜を有し胴部への張り出しは口縁下3.5cm前後の所から始まるもの(154)。この

Fig. 49 越前・瓦質土器実測図



類には胴部上半で「本」字と格子目を相互に配したスタンプを周回させるらしい(160)。

Ⅱ類 口径40cm前後で、外面口縁下2cmの部分で一条の稜を有し、胴部への張り出しは口縁下6cmの所から始まり肩の張ったような形態になるもの(153)。本類には地膚が鉄分によるためか赤褐色を呈し、厚めの灰釉が口縁から胴部上半に濃厚に認められる。(157・158・159)

Ⅲ類 口径40cm前後で、口縁部の内面に一条のくびれがありそれに対応して外面に一条の稜を有するもの。全体に灰釉が施され部分的に剥落している。(155・156)

B-4-b 壺

越前壺は、口径20cm以下のものを扱った。3～4個体と推定。

I類 口縁は比較的直線的に立ち上がり、外側につまみ出す形態のもの。(161・162・163)は同一個体の口縁部、胴部、底部であり、「浪岡城跡遺蹟」(P106)では信楽の可能性があると報告したものである。(344)は外側へのつまみ出しが薄い鐮状になったもので表面に石英質の小石がふき出た状態になっている。

Ⅱ類 口縁部がゆるく外反しながら立ち上がるもので、大粒の石英と黒色砂がみられ、焼成の仕上がりがよく硬質感がある。(345)

B-4-c 搦鉢

越前搦鉢と考えたものは、(181)で示した片口部のみられる形態が典型である。片口部は親指を強く押伸しただけの単純な整形で、口縁内面に一条の沈線を巡らし13本の歯状突起による節目を施している。焼成の仕上がりは壺等のように硬質なものは少なく、赤褐色から黄褐色の色調で軟質な出来上がりのものが多い。他の詳細については後日報告予定。

Ch.90 越前観察表

PL. No	Fig. No	遺物No	山上区	遺構名	層位	器形	胎土	特 徴	備 考
23-153	49-153	P1732	R41		Ⅱ	壺	褐色	自然輪付着	
23-154		P252	P45				灰色	内面茶色	接石、1984年度出土
		P2677							
23-161	49-161	P538	S45			壺			}
		P1153	T46						
23-167		P223	O45					内面茶色、外面茶褐色、外面に押印有	}
		P2198							
23-155		P2227	Q47					内外面緑色と褐色の白基釉	
23-156		P827			I				
23-162	49-162	P3044	S45		Ⅱ		褐色		接石、
		P966	V46	SX275	フタ上				

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	解位	器形	胎土	特 徴	備 考
“	“	P2067	T44	“	Ⅱ 下	“	“	“	“
“	“	P2565	“	SX318	フク土	“	“	“	“
23-159	“	P2103	S42	ST245	Ⅰ・Ⅰ内 フク土	“	灰色	内面褐色、外面黄緑色の自然釉、外面付着 微有	“
23-158	“	P2124	“	“	フク土	“	灰白色	内面褐色、外面黄緑色の口縁釉	様書
“	“	P2162	“	“	“	“	“	“	“
23-150	“	P2107	O45	“	Ⅱ	“	灰色	内外面褐色、外面に「本」のスタンプ有	“
“	“	P2014	O46	SE 86	フク土	“	“	“	“
“	“	P3045	O45	“	Ⅳ 上	“	“	“	“
23-163/49-163	P 494	S45	“	“	Ⅰ	“	“	“	様書、1984年度出土
“	“	P2562	T44	SX318	床面直上	“	“	“	“
“	49-344	P 855	Q47	“	Ⅳ 上	模	“	“	“
“	“	P1174	T49	“	Ⅰ	“	“	“	“
“	49-345	P 559	T44	“	Ⅱ	“	“	“	“

B-5 産地不詳の播鉢群 (PL.24, Fig.50, Ch.89)

すでに産地不詳の播鉢については、「設岡城跡Ⅶ」(P53・54)において北館出土品については分類しているが、いずれも全体形を知り得る資料でないため分類基準の甘さを指摘できる。内館においても、産地不詳の播鉢は播鉢全体の8割にも達し総量は多い。しかしながら北館と同様に全形を知り得る資料はなく、口縁部形態・焼成・成形上の特徴を述べ、後日に再検討する予定である。

(182) は、口縁を平坦に成形し、内面には8条の櫛歯原体によって口縁端から下半に斜行した施方をおこなっている。色調は暗灰色から黄灰色の斑状を呈し素地は黒灰色で砂質気味の軟質状況に焼き上っている。

(183) は、口縁内面をやや斜行して削り出し、外面胴部上端まで横位の調整板が残り以下は無調整の状態である。色調は黒色、素地は(182)と同様に砂質ぎみの黒灰色を呈し、内面の櫛歯原体は先丸の7条原体で浅く入れている。

(184) は、口縁が罅状に張り出す独特の口縁形態を呈し、口縁内面に同心円状の沈線を8条巡らしている。色調は黒色の表面下に灰色の薄い膜層のような部分があるため、地膚の剥落している部分は白灰色、他は黒灰色を呈する。胎土には多量の石英砂と白砂が混入している。

(185) は、口縁端を丸味のある成形とし横位の指ナデ痕が多用されている。櫛歯原体は先が鋭く尖った9条のもので比較的深めに入れている。色調は黒色気味だが、胎土は黄褐色の部分が多く白砂と石英砂が混入している。

(186) は、口縁をやや平坦に削り、内面に横位の波状櫛歯文を入れて縦位の節目を施している。色調は黒灰色であるのに対し、胎土は白灰色で白砂・石英砂が混入している。

(187)は、口縁を角状に成形し、内外面ともに横位の指ナデ痕を明瞭に残している。色調は漆黒色であるが胎土は黒灰色で白砂・石英砂を混入している。

(188)は、口縁が内湾気味の立ち上がりを呈し、口縁外側でつまみ出し状の段を一条巡らしている。色調は暗灰色で、胎土は赤褐色で大粒の白砂が混入している。歯歯原体は先丸の浅い卸目が4条だけ確認でき、備前的な製作技法と考えられる。

(189)は底部に糸切りにより切り離し痕と持ち上げた時の指頭痕が認められる。外面は横位の指ナデ痕が残り、内面の歯歯は11条でV字状の先端と推定される。焼成は良質で、色調・胎土ともに赤灰色で硬質感のあふれる出来上がりである。

B-6 瓦器 (P.L.23, Fig.49, Ch.91)

浪岡城跡で「瓦器」と称している土器は、使用機能が火鉢・香炉等と理解される一群の土器および壺形・碗形・他の器種を有している無軸の土器（素焼きの土器）を言っている。本年度の出土破片数102点のうち95点は火鉢・風炉の類、7点は香炉・碗の類であり、火鉢の破片が最も多い。

B-6-a 火鉢

火舎・火か・火鉢・手焙り等と言われるもので形状から二種類に大別でき、さらにプローションによって細分できる。

I類 器形を上から見た場合円形を呈するもの。

I a類 口縁部が直立して立ち上がり、胴部は強く湾曲した張り出しを呈して底部に至るもの。脚を有するものもある。(166)は口縁部外面に八菱状のスタンプ文、(164)は両巴状のスタンプ文を有している。

I b類 口縁部の詳細はわからないが、胴部張り出しの下端に口縁部と同じ位の径を有する円筒部を有すると推定される器形。(166)は上方に算木状帯を巡らし、その下方に隆帯で区画された中に四菱状のスタンプ文を施している。

I c類 一般に風炉といわれる器形で、中空となった三足と窓を有する胴部が認められるもの。図示はできなかったが、一乗谷朝倉氏遺跡46次調査出土風炉（「一乗谷朝倉氏遺跡XV」）に近似した破片が出土している。

II類 器形を上から見た場合方形を呈するもの。

出土例は少ないが、(171)のように四菱状のスタンプ文が押圧されている例がある。なお器形上の特徴としては、口縁が内側に突き出しを有し、底面四隅に脚を取りつける事が多いようである。

B-6-b 香炉

香炉あるいは小鉢と推定される器形で、口径17cm以下の円筒形を呈するものである。

(167) は底径12.5cmを測り、三脚を有すると思われる底部片で、外面は黒色処理され光沢を有している。内面には指ナデ痕、外面には捺ナデ痕が認められる。

(168) は、口径13cm、高さ(脚部を除く)4.6cmを測り、三脚を有すると推定される。口縁部は外反して、胴部外面の中心に三巴文と八弁の輪花文を交互に押圧している。口縁部と外面胴部だけはミガキをかけているが、他は無調整である。同形の香炉で三巴文だけを押圧した破片が一点みられた。

B-6-C 碗

碗形は浪岡城跡で初現のものである。器形としては天日茶碗をそのまま真似たもので、(169) は、器高7.0cm、推定口径12.3cmを測り、軸止の部分は粘土紐を貼って降帯状に表現している。内外面ともに丁寧にミガキをかけているが、部分によって暗灰色から明黄色まで色調のバラつきが認められる。(170) も碗形の底部と思われるが、あるいは火鉢等の胴部裝飾部分かもしれない。高台状の円形内に二巴文のスタンプ文が施されている。堅緻な焼成状態を呈する。

Ch.91 瓦器観察表

Pl. No	Fig. No	遺物 No	出土区	遺構名	判 別	器 形	胎 土	文 様	特 徴	備 考
23-164	49-164	P2541	R42	SX330	フクモ	手結り	灰色	外面に当流文	黒色研磨	
23-165	49-165	P1789	Q42		II		* 明黄褐色	外面に八葉形のスタンプ文		
23-167	49-167	P2050	L49	SB 68	フクモ	香炉	灰色		紫色研磨、脚付	
23-169	49-169	P2332	R42	ST280	*	碗	乳灰色		高台有、紫色研磨	注意
"	"	P2503	"	ST379	"	"	灰色		口縁やや内湾	"
"	"	P2504	"	"	"	"	"		"	"
23-166	49-166	P1855	"	"	II	手結り	*	2条の降帯の間に当流文	胴部算木状	
23-168	49-168	P2328	Q42	ST277	フクモ	香炉	赤褐色	三巴文と花のスタンプが交互にある	口縁外反	注意
"	"	P2529	"	"	"	"	"		脚付	"
"	"	P2535	"	"	"	佛面直上	"		"	"
23-170	49-170	P 97	S41		I	不明	暗灰色	スタンプ文有		
23-171	49-171	P1281	V46	SE111	フクモ	手結り	乳褐色	降帯の下にスタンプ文有		

C. 地元で生産されたと考えられるもの

C-1 土師質土器(かわらけ) (Pl.25, Fig.48, Ch.92)

浪岡城跡の調査で出土する土師質土器には、城館期の段階で使用したと思われる(現在のところ、明確に陶磁器と共存する例や遺構への一括埋設・廃棄がなく、古代に使用された土師器・須恵器も地業等によって中世の遺構に混入することはなほだしいことから、あえてと思われるという言葉を使用する。)中世かわらけと、いわゆる古代の土師器があり、地業や遺構重複の複乱によって混在した出土状態を呈するのが通例である。しかし、内館の調査によって出土する中世かわらけは、残存状況も比較的良好であり、古代の土師器成形とは一線を画す成形技法が

みられることから、数類に分けて報告する。なお、土師質土器（かわらけ）は39点の破片数が
 出上している。いずれも皿形の器形である。

I類 手づくねによる成形で、口径10cm前後、器高2cm前後の皿。外面胴部立ち上がりから
 は横ナデ、以下は指頭等による整形。内面は指ナデによって横方向に充分調整されて
 いる。(194)は、ススや油煙痕がみられることから灯明皿として使用したようで、
 (193)にはそれらの痕跡はない。

II類 回転糸切底を有することから、ロクロ成形と考えられるもので、口径8～10cm前後、
 器高2cm前後の皿。

II a類 ロクロ成形の後に、外面胴部および内面を指ナデによって調整をおこなうもの。
 (190) (191)

II b類 外面底部立ち上がりの外反が少ないため、内厚な底部であり、ロクロ成形痕内
 外面ともに明確にみられるもの。(192)

III類 回転糸切底を有し、口径15cm前後、器高3～4cm前後の大振りの皿。

III a類 底の切り離し後に、底部立ち上がり部分を指頭などによって丸く調整するもの。
 内外面ともに横位の指ナデを施し、口縁部外側を外反気味に整形している。(197)
 は明黄褐色の色調に対し、(199)は暗灰色の色調で焼成も甘い。

III b類 底の切り離し後は無調整で、外面にロクロの挽き上げ痕を有するもの(198)や、
 胴部中切で段を有するもの(196)がある。しかし、内面は横位の指ナデによっ
 て器面が平滑な状況を呈している。

以上の土師質土器は、いずれも微細な石英を混入する胎土を有し、比較的精選された良質の
 粘土を使用して焼成している。そのため、胎土観察だけからすれば同一箇所焼成されたと考

Ch. 92 土師質土器（かわらけ）観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	胎土	特徴	備考
25-190	48-190	P1717	U48	SE128	フク土	明黄褐色	糸切り底	
25-193	48-193	P1892	T43		II	"	手づくね	
25-196	48-196	P1711	U48	SE128	フク土	"	静止糸切り底	
25-198	48-198	P2374	T44	SE138	カクラン クラン土	明黄赤褐色	糸切り底	
25-191	48-191	P2529	R42	SX330	内内フク上	乳黄色	"	
25-194	48-194	P1913	U44		IV 上	明黄褐色	手づくね	
25-192	48-192	P1258	T46		IV	"	ロクロ使用痕、回転糸切り底	
25-197	48-197	P1712	U48	SE128	フク土	"	糸切り底	接着
"	"	P1713	"	"	"	"	"	"
"	"	P1714	"	"	"	"	"	"
"	"	P1715	"	"	"	"	"	"
25-199	48-199	P2380A	S44	SX328	カクラン クラン土	灰色	回転糸切り底	

えられるが、成形上の相違や形状の相違が年代的なものであるのか地域的なものであるのか現在の段階では明確にしがたい。今後検討すべき課題の一つである。

C-2 埴埴 (Fig.48, Ch.93)

埴埴は、銅等を溶融する時の器で、底が丸い小型碗形の形状を有する。口径は、7.5cm (363) 10cm (361)、11cm (362) と10cm前後のものが最も多く、内面 (361) 及び内面と口縁付近まで溶融物が付着しているもの (362・363) がある。本年度の出土破片数は19点と北館との単位面積あたりの出土率と比較して少なく、他に埴埴本体はないが溶融物の残片が28点出土している。

C-3 羽口 (Ch.94)

小破片のため図示しなかったが18点の出土をみた。形態的には「設岡城跡Ⅳ」P107で記述のものとはほぼ同じである。

Ch.93 埴埴観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺物名	層位	胎土	特徴	備考
—	48-362	P2307	T44	SE138	フク土	灰色	溶融物付着	
—	48-363	P1548	S39		Ⅱ	—	割、赤銅付着	
—	48-361	P1419	R48	SE124	フク土	暗灰色	溶融物付着	

Ch.94 羽口観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺物名	層位	胎土	特徴	備考
—	—	P1381	R50	SE119	フク土	赤褐色		
—	—	P1955	Q41		Ⅳ上	暗灰色	溶融物付着	

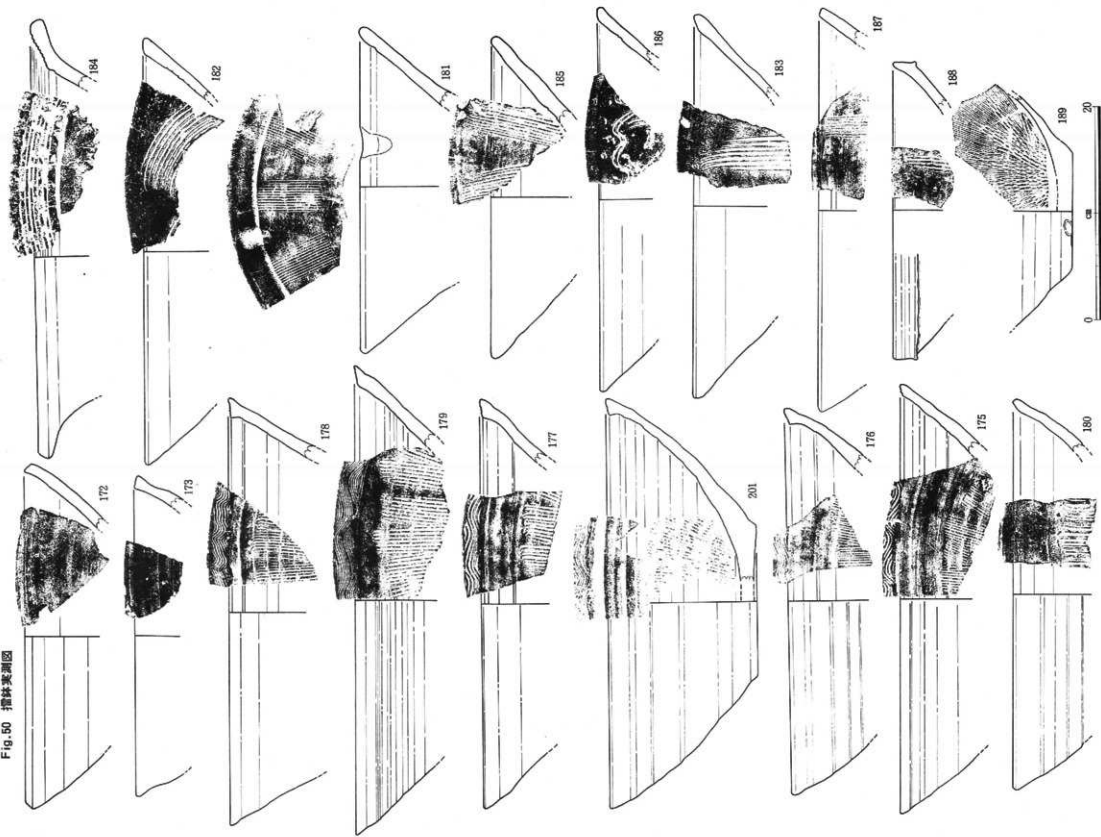
2. 鉄製品

鉄製品の出土数は、約1,085点であるが、若干地業の擾乱等によって年代の新しい製品が含まれている可能性があるため、城館期と推定されるもののみを取り上げる。その結果の出土品名と数は以下の通りである。

Ch.95 鉄製品集計表

名称	数量	名称	数量	名称	数量
角釘	639	鉄	3	皿	1
鉄鍋破片	52 (内耳3)	刀 (小刀倉)	11	環状鉄製品	1
鍋	1	針	3	棒状鉄製品	26
小札	46	毛抜鉄	2	多孔鉄製品	2
鉄	44	鎌	2	長楕形鉄製品	1
火箸	16	火打金	1	鉄滓	62
かすがい	5	ナタ刀	1	不明鉄製品	117
鏡	6	腕	1	計	1,047
手引金	3	燗台	1		

Fig. 60. 摺鉢家測図



出土鉄製品を概観すると、総出土量の61%が釘の類であり建築物の構築にあたって釘の使用頻度が高かったことが理解され、武器の中では各種形態の鉄鏃が4.2%と注目される。また、煮沸容器としての鉄鍋には吊耳および内耳の両形態が併用され、火箸の出土とともに、調理を考へる上で貴重である。道具・工具の類では、牽引金、鉄、鎌、火打金など例年同様の出土量があるのに対し、燭台と推定される製品は浪岡城跡で初現である。また鉄斧が6%近くの出土率を示すことは、内館内においても、工跡の存在を推測せしめるものだけに今後は遺構との関連から追求する必要がありそうだ。以下、項目別に詳述する。

2-a 武器

武器として主要なものは、刀、小札、鉄鏃である。しかし、刀の中には腰刀・小柄小刀・他のいわゆる小物だけであり、一般的な太刀や刀剣はみあたらない。また、当時は武士階級ではなくても通常腰や背中に小刀を身に付けていた事例があることから、武器の範囲に入れるべきか躊躇する点がある。今回は、利器という視点からあえて武器の項目に入れる。

2-a-1 刀 (P.L.29, Fig.53)

出土品の中で全形を知り得るものは図ができた(352)と(257)だけである。(352)は全長23cm、刃部14cm、茎長9cmの平造りの小刀である。(257)は全長21.6cm、刃部7.7cm、茎部は木部が残っているため明確でないが14cm以上あると推定される。刃部が短かく茎部が2倍近く長いことから工具的使用の可能性が高い。

他の小刀片についてみると、刃先が鋭く尖り刃部にやや反りを有する長さ15cm前後の製品があり、茎に皮紐状のものを巻き付けた後に木柄を取り付けた例がみられる。他は(352)と同形態のものが大部分である。

2-a-2 小札 (P.L.27, Fig.52)

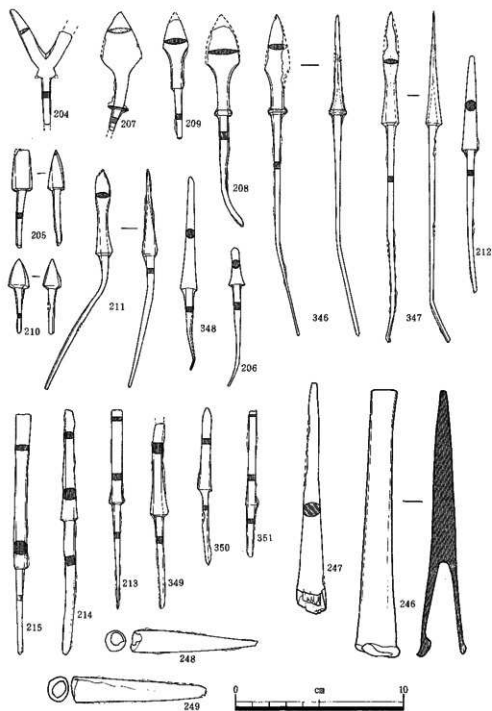
小札の形態は大別して、三日札、伊予札、碁碁頭札の三種類がある。出土数は、三日札4点、伊予札9点、碁碁頭札12点、不明21点である。

三日札は、長さ7.2cmのもの(216)と長さ5.7cmのもの(217)があり、幅はそれぞれ2.6cm前後である。破損品の中には(217)とほぼ同位置に孔がみられるものもあり、また幅3.1cmの広いものもみられる。壑穴建物跡や井戸跡の覆土から出土している。

伊予札は、長さ7.2cm幅2.0cm前後のもの(222~225)が多く、錆化の激しいものを除けば上端部左側に意図的くぼみの認められるものがある。孔の明確な1点(222)をみると、右列7孔、左列6孔で上3個の孔が大きく穿たれている。他に、長さ6.6cm幅1.7cmの小形のもの(226)と、上辺の角度が緩い例(219)が存在する。

碁碁頭札は、長さ6.3~6.5cm幅2.0~2.3cm前後の例が多く(218・221・227・228)、長さ7.1cm幅2.7cmのやや大きめのものの二種類がある。孔は、ほとんどすべてが7孔2列

Fig. 51 鉄製品実測図(1)



のものであり、上3段までの孔が大きく穿たれている。

以上の小札の中には漆の塗付痕が認められる例がある。(216・218・223)

2-a-3 鐵 (P.L.27, Fig.51)

鉄鐵は根と茎の形状からIV類に分類できる。

I類 いわゆる雁股といわれる先端が二方向に開いた鐵。茎は角形を呈する。(204)

II類 いわゆる平根といわれる根が剣先状を呈するもの。

II a類 根の幅が筥被部の幅より広く、比較的茎が短いもの。(207・208・209)

II b類 根の幅が筥被と同程度の幅分若干広いぐらいで、茎の長さが根先から筥被までの約3倍の長さを有するもの。(211・346・347)

III類 根が丸の断面形を呈しているもの。

III a類 根の長さが約2cmであるのに対し茎がその3倍の6cm強の長さを有するもの。(206)

III b類 根の長さが5cm以上あり、茎の長さが5~8cm前後のもの。(348・212)

IV類 根が鑿状の形状を呈するもの。

IV a類 根の長さが2.5cm以内で肉厚な三角断面を呈するもの。(205・210)

IV b類 根の長さが最短でも5cm以上ある長頸のもの。(213・214・215・349・350・351)

2-a-4 その他

現在の所、武具なのか狩猟具・漁具なのか明確でない、通称「打根」と呼ばれる鉄製品がある。円錐状に先を尖らせ内側は中空となっていることから、中に木製の柄などをさしこみ、槍や銃的な用途として使用したのであろうか。

(246)は、長さ16cmで先端が鑿先状を呈して、よく鍛えられた地金を使用している。

(247)は、長さ14cmで基部に本部が残存している。

(248)は、長さ7.5cm、(249)は長さ8cmの比較的短めのものである。

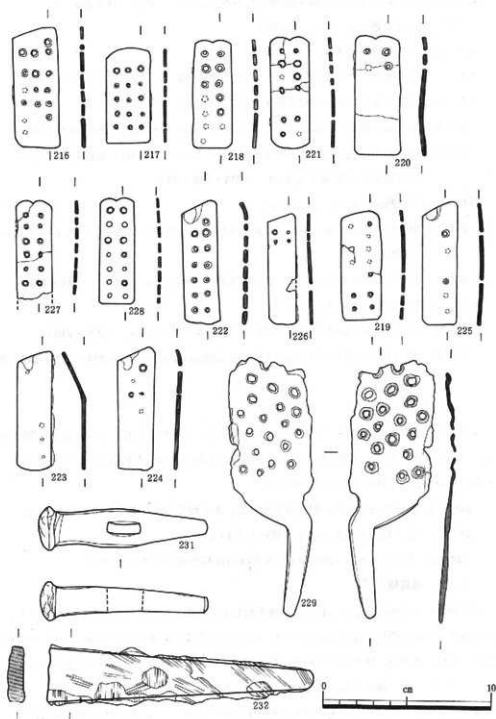
2-b 道具類

道具類という言葉の使用は広範囲な意味を有しているが、「物を作ったり、造作したり、または事をなすのに用いる器具の総称」ということでとらえておきたい。具体的には、建築具、農具、工具、煮沸具、灯火具等であり、今回は出土量も少ないことから細分はしない。

2-b-1 鎌 (P.L.28-230, Fig.53-230)

鎌は2点出土しているが、図示できたのは1点だけである。(230)は、刃部長17.3cm、刃部幅5.0cm、柄幅は基部で2.0cm、先端残存部で1.1cmである。刃部にソリはみられず直線的で、最も使用度の高い柄基部に近い部分が磨耗している状況がよくわかる。柄部と刃部の角度

Fig. 52 鉄製品実測図(2)



は120°。

2-b-2 鉈刀 (P.L. 29-258, Fig. 53-258)

刃部長22.2cm、刃部幅3.7cmと刃部が幅広に造作された刀であるため、鉈刀という名称を付し武具としてよりも工具的使用目的が濃いと考えられる。茎には木質柄が残存しており、基部の所は幅1.0cm、高さ0.4cmほど盛り上げて成形されている。基部から4.5cm前後の所に目釘穴らしい痕跡も認められるが腐蝕が激しく明確でない。茎の長さは約9cm前後とみられ、刃部の振りおろしを意図して製作されたらしい。重量190g。

2-b-3 牽引金 (P.L. 28-233・234, Fig. 53-233・234)

茎の繊維を取る時の道具として木製柄にはめ込んで使用する。(233)は両側の突起部分に木質が残存している例で、刃部長約7.0cm、取り付け部までの幅2.0cm、厚さ0.24cmである。(234)は刃部長約8cm、取り付け部までの幅1.8cm、両端に長さ1.5cm前後の突起が認められる。井戸や竪穴の覆土から出土しており、廃棄されたものらしい。

2-b-4 火打金 (P.L. 28-235, Fig. 53-235)

1点のみの出土である。三角形で山形を呈する火打金で、山の頂部に紐穴を一孔穿ち、両端のかえしは一方だけにしかみられない。高さ4cm、幅8.6cm、厚さ0.4cmを測る。

2-b-5 鉄 (P.L. 29-250・251, Fig. 53-250・251・353)

いわゆる和鉄と言われる鉄で、3点出土している。(250)は推定長約14cm、刃部長5.3cmの大きさで、握りの部分が長いのに対し、(251)は長さ12.3cm、刃部長5.3cmで握りの部分を短かく製作してある。他に、長さ4.6cmの刃部を有する破片(353)がみられる。鉄の出土も井戸跡や竪穴の覆土から出土しており廃棄されたものと考えられる。

2-b-6 燭台 (P.L. 29-252, Fig. 53-252)

残存長11.6cm、上部受皿まで3.2cmの差し込み棒があり、受皿は径4.0cm前後で12弁の輪花状を呈している。受皿の断面形は約2cmの平坦部から花卉が外反するような状態で辺縁部に至る。受皿以下の棒は断面が角形を呈し、長さ約7cmまで残っているが据え置き式の燭台か手持ち式の燭台かは判然としない。

2-b-7 毛抜鉄 (P.L. 28-243, Fig. 53-243)

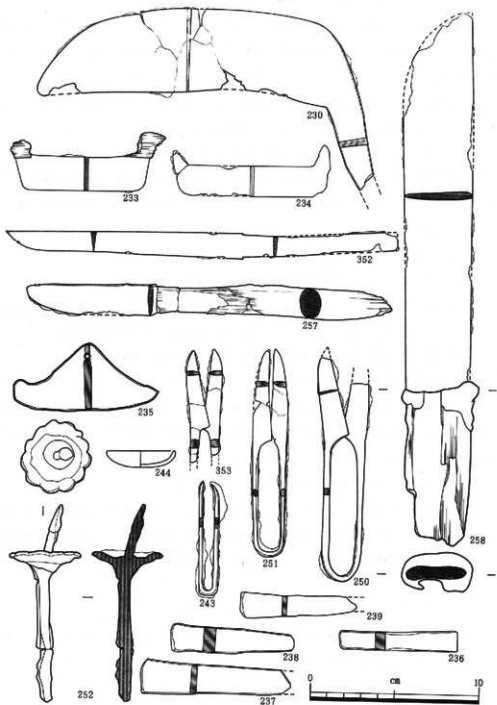
2点の出土であるが、図示したのは(243)だけである。長さ7.0cm、握り幅1.2cmの製品で、先端部は幅広に成形されている。

2-b-8 鉄皿 (P.L. 28-244, Fig. 53-244)

径4.0cm、高さ0.85cmの小皿である。厚さは0.14cmで均一な印象を受けるが、錆化が激しいため、孔等の存在については明確でない。

2-b-9 鉄碗 (P.L. 28-245, Fig. 54-245)

Fig. 53 鉄製品実測図(3)



推定径7.2cm、高さ2.9cmの小形丸碗である。口縁部がやや肉厚になった状態で緩いカーブを描きながら丸底にいたる。内面等に特に付着物などは認められない。

2-b-10 釘 (P.L.29-253~256, Fig.54~253~256)

釘は総数639本が出土している。うち完形品82本について長さをみると、1寸(～3.03cm)2本、2寸(～6.06cm)46本、3寸(～9.09cm)30本、4寸(～12.12cm)4本となり、破損品を含めても、2寸ないし3寸の釘の使用頻度が高かったことを指摘できる。頭部が、銀杏葉状に残る打ち込み前の製品はほとんどみられず、(253~256)のように頭部がL字状に叩かれた状態のものが大部分である。出土状態をみても、特に一定の場所に偏在する傾向はなく、各種の建物にくまなく使用していたと考えられる。

2-b-11 鋸(かすがい) (P.L.28-240~242, Fig.54-240~242, 355・356)

5本の出土があった。叩き面の長さが4~4.5cmのものだけであり、その幅は0.7cm前後、厚さ0.3cm前後で、打ち込みの後のためか両端が外側に開いたり内湾しているものがある。

2-b-12 楔(くさび) (P.L.28-236~239, Fig.53-236~239)

楔状鉄製品と言うのが適切かもしれない。断面形がV字状を呈する鉄片であり、頭部幅が2cm(237)、1.5cm(238・239)、1.0cm(236)の大小がみられる。頭部は一樣に叩かれた状態を示して扁平な状態になっており、その厚さの違いによっても使用器具・箇所の相違があったものと推定される。

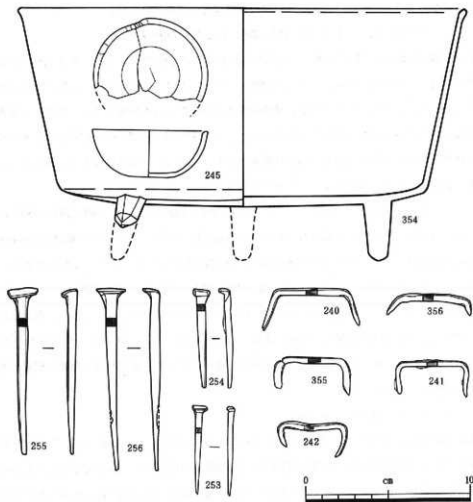
2-b-13 鍋 (Fig.54-354)

鍋には吊耳のものと内耳の二種類が存在する。しかし、図示した(354)を除けば、いずれも細片としての出土であるため図を割愛した。口縁部片の観察では、直行気味に立ち上がる類と胴部との境で一度内反りに開く類があるため、前者を吊耳、後者を内耳に比定できそうである。(354)はSE118覆土から出土したものであり、高さ12cm、推定口径27.5cm、推定底径22cm、三脚を有すると考えられその脚の長さは3.5cmである。口縁部の吊耳部や湯口部分は錆化が激しく不明瞭であるため図示できなかった。

2-b-14 金槌? (P.L.28-231, Fig.52-231)

ゲンノウ・カナヅチ等の大工道具は、職人の手足と同様なものだけに出土例は少ない。(231)はS39区第Ⅱ層から出土したもので城館期という確証は明確でないが図示しておく。長さ9.96cm、幅2.2cm、厚さ1.6cmで、叩面は湾曲して最大幅2.6cm×2.4cmの突き出し状を呈する。反対方向は一辺1.0cm前後の方形断面状にすぼまる。柄の取り付け孔は長辺1.8cm、短辺0.7cmであり、上端の方がやや広がって、楔等を打ち込みやすくなっている。重量は150gでよく鍛えられた鉄を使用していると観察される。

Fig. 54 鉄製品実測図(4)



2-b-15 多孔鉄製品 (P.L. 28-229, Fig. 52-229)

一種のオロシガネの使用目的を有するものではないかと考えられる。(229)は幅5.0cm、長さ10cm以上と推定される平坦部と柄と思われる長さ5.5cmの茎部から成り、平坦部に一方から穿つ状態で現存19個の孔が認められる。穿孔は表裏で状況が違い、一方は穿った孔縁が盛り上がったままの状況であるため、卸金のような印象を受ける。孔は一見無作為な感じで穿っているようにも見えるが、横斜位に1列3個~4個を穿っている。類似の製品は大野町唐牛城(1)で出土している。

2-c その他の鉄製品等

2-c-1 棒状鉄製品

断面円形と方形の二種類が存在し、火箸等の断片と推定されるものが多い。

2-c-2 長梯形鉄製品 (PL.28-232, Fig52-232)

いままでは、鋼状鉄製品の名称を符していたものであるが、近年各地の遺跡から出土する事例が多くなり、一考を要する遺物となった。(232)は、ST277の床面直上から出土したもので、長さ15.7cm、最大幅3.6cm、最小幅1.1cm、厚さ0.8cmの長梯形を呈する。いずれの部分にも破損痕がみられないことからこの形状で一翼の完成品とみなしうる。表面に木質の痕跡が残っているものの、その方向に一定性がなく柄等を取り付けたとは考えられない。現在の所、使用目的・使用方法については不明確であるが、出土例が東北北半を中心とした地域であることには注目しなければならないだろう。

2-c-3 鉄滓

鉄滓については詳細な識者の鑑定がなされていないので、多くを語ることはできないが、10cm前後の大形のスラグと5cm前後の小形のスラグに2分できる。前者には土砂等の付着が多みられ、形状も土饅頭形あるいは碗形を呈していることから小鐵治鉄滓と考えることができよう。

2-c-4 不明鉄製品

不明鉄製品としたものは、すべて破損品であることからその使用目的が不明な一群をさしている。形態的にみた場合、板状になったもの、輪状を呈するもの、棒状を呈するものなどが認められ、一部には孔を穿っているものも存在する。紙数の関係で図等は割愛する。

Ch.96 鉄製品観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備考
29-257	53-257	F 155	小 刀	W47	SE114	フク土	刃部分 (21.59) × 1.74 × 0.24 柄部分 1.64 × 1.20	木製の柄付き
29-258	53-258	F 284	鉈 刀	S49		灰層内	刃部分 32.0 × 3.74 × 0.48 柄部分 4.18 × 2.10	"
27-204	51-204	F 1040	鉄 鏃	S44	SX315	フク土	鏃部分 (7.08) × 0.80 × 0.29 柄部分 0.54 × 0.43	鏃殻燼
27-205	51-205	F 48	"	R44		I	鏃部分 (5.84) × 1.20 × 1.14 柄部分 0.60 × 0.57	鏃殻燼
27-206	51-206	F 37	"	R43		"	鏃部分 (8.25) × 0.98 × 0.95 柄部分 0.55 × 0.53	"
27-207	51-207	F 156	"	W47	SE115	フク土	鏃部分 (7.14) × 2.37 × 0.22 柄部分 0.55 × 0.56	鏃殻燼
27-208	51-208	F 261	"	R48		IV	鏃部分 (11.83) × 1.93 × 0.28 柄部分 0.61 × 0.53	"

PL.No	Fig.No	遺物No	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備考
27-209	51-209	F 611	鉄 棒	Q42		Ⅱ	根部分 (7.10) × 1.49 × 0.40 柄部分 0.85 × 0.79	"
27-210	51-210	F 1207	"	内館 表床			根部分 4.46 × 1.23 × 1.12 柄部分 0.60 × 0.52	鋸根線
27-211	51-211	F 272	"	R48		Ⅳ 上	根部分 (13.44) × 0.48 × 0.98 柄部分 0.55 × 0.52	"
27-212	51-212	F 550	"	S44		Ⅱ	根部分 (14.06) × 1.02 × 1.02 柄部分 0.51 × 0.44	"
27-213	51-213	F 1067	"	S43	ST247	セクション内 フク土	根部分 11.84 × 0.98 × 0.86 柄部分 0.50 × 0.54	"
27-214	51-214	F 1165	"	T44	SX318	フク土	根部分 (14.70) × 1.04 × 1.04 柄部分 0.70 × 0.61	"
27-215	51-215	F 912	"	S43	ST261	"	根部分 (14.41) × 0.97 × 1.00 柄部分 0.51 × 0.50	"
27-216	52-216	F 1148	小 札	R42	SE141	セクション内 フク土	(7.19) × 2.74 × 0.22	二口札
27-217	52-217	F 1186	"	"	ST283	フク土	(5.70) × (2.58) × 0.23	"
27-218	52-218	F 1107	"	S42	ST245	セクション内 フク土	6.49 × 2.29 × 0.22	葺物頭札
27-219	52-219	F 167	"	V46	SE112	フク土	6.46 × 2.36 × 0.26	伊予札
27-220	27-220	F 1083	"	S43	pit内	"	7.13 × 2.72 × 0.20	葺物頭札
27-221	52-221	F 514	"	R50	SE118	"	6.60 × 2.41 × 0.14	"
27-222	52-222	F 857	"	S43	ST283	"	7.34 × 2.10 × 0.18	伊予札
27-223	52-223	F 800	"	S42	ST245	"	(7.10) × 2.16 × 0.24	"
27-224	52-224	F 1123	"	"	"	灰層下	(7.30) × 2.25 × 0.24	"
27-225	52-225	F 819	"	"	ST245	フク土	(7.40) × 2.12 × 0.22	"
27-226	52-226	F 964	"	Q42	SE137	"	6.58 × 1.70 × 0.22	伊予札
27-227	52-227	F 23	"	S42	ST245	"	(5.89) × 2.18 × 0.22	葺物頭札
27-228	52-228	F 794	"	"	"	"	6.28 × 2.02 × 0.10	"
28-229	52-229	F 204	柄付多穴鉄製品	V46	SE111	"	(15.48) × 4.71 × 0.26 柄部分 1.26 × 0.56	孔径 0.50 cm
28-230	53-230	F 365	鏝	Q48	SX275	"	20.10 × 10.39 × 0.16	"
28-231	52-231	F 546	カナヅチ	S39		Ⅱ	9.96 × 2.60 × 2.44	柄をさして凸部分 1.81 × 0.67 cm
28-232	52-232	F1010A	長楕円形鉄製品	Q42	ST277	床面直上	15.70 × 3.6 × 0.8	"
28-233	53-233	F 439	空 引 金	R50	SE118	フク土	9.10 × 2.07 × 0.24	木片付着
28-234	53-234	F 293	"	T49	SX288	"	9.46 × 3.06 × 0.20	"
28-235	53-235	F 721	火 打 ち 金	R49	SE127	"	8.58 × 3.94 × 0.39	"
28-236	53-236	F 567	異状鉄製品	S43		Ⅱ	7.00 × 1.13 × 0.76	"
28-237	53-237	F 1176	"	Q42	SE137	セクション内 フク土	(8.90) × 2.12 × 0.61	"

PL.No	Fig.No	遺物No	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備考	
28-236	53-238	F 1001	炭鉄製品	T44	SE139	フク土	(7.40) × 1.84 × 0.92		
28-239	53-239	F 463	"	W47	SE131	"	(7.04) × 1.70 × 0.66		
28-240	54-240	F 520	かすがい	S38		II	5.96 × 2.46 × 0.77		
28-241	54-241	F 538	"	R50	SE118	フク土	(4.80) × 1.21 × 1.00		
28-242	54-242	F 461	"	T49	SX292	"	4.25 × 2.04 × 0.78		
28-243	53-243	F 744	毛抜	S48	SE135	"	7.00 × 0.65 × 0.40		
28-244	53-244	F 1013	鉄	III	Q42	SE137	径 高さ 厚さ 3.90 × 0.85 × 0.14		
28-245	54-245	F 621	鉄	碗	"	II	径 高さ 厚さ 7.18 × 2.86 × 0.41		
29-246	51-246	F 1005	打	根	R42	ST280	フク土	(16.08) × 0.82 × 0.72	
29-247	51-247	F 275	"	"	R48		IV 上	(13.82) × 1.70 × 1.52	
29-248	51-248	F 846	"	"	R42	ST246	フク土	(7.52) × 1.24 × 1.18	
29-249	51-249	F 704	"	"	"	"	径	(8.06) × 1.51	
29-250	53-250	F 488	鉄	"	R50	SE118	"	(13.40) × 1.37 × 0.34	
29-251	53-251	F 243	"	"	W46	SX274	セクション内 フク土	12.38 × 1.28 × 0.42	
29-252	53-252	F 907	燧	台	Q42	SE137	フク土	11.61 × 0.78 × 0.65	受皿部分 4.37 × 4.09 cm
29-253	54-253	F 685	角	釘	S42		II	頭部 身部 5.40 × 0.81 × 0.41	
29-254	54-254	F 446A	"	"	R50	SE118	フク土	頭部 身部 6.02 × 0.88 × 0.52	
29-255	54-255	F 996	"	"	T44	SE138	"	頭部 身部 10.14 × 1.85 × 0.70	
29-256	54-256	F 640	"	"	"	II	頭部 身部 11.16 × 1.68 × 0.77		
-	54-354	F 637	鉄	網	R50	SE118	セクション内 フク土	径 高さ 厚さ 25.98 × 12.00 × 0.56	脚の径 1.70 cm
-	53-352	F 225	小	刀	W45	SE100B	フク土	(23.15) × 1.52 × 0.32	
-	51-346	F 605	鉄	鏃	R41		II	刃部分 × 0.75 × 0.70	鑿根鏃
-	51-347	F 601	"	"	Q41		"	柄部分 1.16 × 1.22	
-								(19.75) × 0.95 × 0.93	"
-	51-348	F 785	"	"	R43		II 下	刃部分 × 1.03 × 0.95	"
-	51-349	F 196	"	"	V46	SX273	フク土	柄部分 0.61 × 0.54	
-								(11.12) × 1.12 × 0.96	"
-	51-350	F 784	"	"	S42		II 下	刃部分 × 0.63 × 0.78	"
-								柄部分 0.56 × 0.53	
-	51-351	F 227	"	"	V46	SE111a	セクション内 フク土	刃部分 × 0.84 × 0.80	"
-								柄部分 0.42 × 0.40	
-	53-353	F 448	鉄	"	R50	SE117	フク土	8.72 × 0.61 × 0.51	
-	54-355	F 440	かすがい	"	SE118a	"	"	(6.68) × 1.05 × 0.44	
-	54-356	F 1093	"	"	S42		III 下	4.72 × 2.22 × 0.77	
-								(5.20) × 0.63 × 0.45	

3. 銅製品

銅製品の出土数は81点であり、その内訳は以下の通りであるが、機能的には、武器・宗教具・工具等であり、武器の出土が圧倒的に多い。

Ch.07 銅製品集計表

名 称	個数	名 称	個数	名 称	個数	名 称	個数
足 金 具	1	日 貨 金 具	4	銅 皿	1		
銅	1	鍍 緑 金 具	4	香 炉	1	銅 鍋 ?	1
小 柄	7	八 双 金 具	1	六 器	2	針状銅製品	1
弁	5	八 双 鉄	2	盤状銅製品	2	銅 坪	11
小刀鞘金具	1	火 繩 挟 り	1	紙	6	キ セ ル	1
砂	1	鉄 砲 玉	3	鏡	1	不 明	22
鞘 紐 金 具	1					計	81

3-a 武器

銅製品の場合、武器の主要な機能である殺傷・防禦の部分は鉄製でありそれを補助ないしは裝飾性の強い部分に使用する事が多い。つまり、金具や挿入物・部品としての機能が多い。

3-a-1 足金具 (P.L.30-259, Fig.55-259)

太刀鞘を吊り下げる部分に使用する金具と考えられる。破損部の観察では、上端の紐通部分および鞘あてとなる左右の側面はそれぞれ成形後に接合している痕跡がみられ現存部から推定すると鞘の幅は約2cm程度であり、紐通部分は鉄の表面に銅鍍金したものと思われる。

3-a-2 緑金具 (P.L.30-260, Fig.55-260)

柄の緑に装着する金具と考えられる。天井部は楕円形を呈し、中央に背幅0.7cm、高さ2.1cmの二等辺三角形に近い孔があり、腰幅は1.5cmで両側面中央に釘打ち痕が認められる。地金は鉄のようであり銅鍍金がなされていると考えられる。

3-a-3 銅 (P.L.30-261, Fig.55-261)

鐙の基部を締める金具。内側の計測では背幅0.7cm、高さ2.8cmであり、鋳造りの刃にあてたと考えられる形状を呈している。幅は上端1.4cm、下端1.5cmで刃先の方が接合されておらず0.5mmほど若干のすき間があいている。

3-a-4 小柄 (P.L.30-275, Fig.55-275)

7点の出土がみられたが完形は(275)1点であり、他は細片である。(275)は刃部残存長6.1cm、柄長8.2cm、柄幅1.3cm、棟厚0.45cmを測る。地板に文様等は認められず、小口は茅部分を強く押し込んだためか縁がめくれた状態を呈する。

3-a-5 弁 (P.L.30-266・267・268・269・270、Fig.55-266・267・268・269)

5点の出土があり、胴に紋を有する類とまったく認められない類に分けることができる。

I類 胴の区画が明確にみられ、中央部に紋を配するもの。

I a類 紋を地板に接合するのではなく、同時鑄造かあるいは打ち延しによって成形されているもの。(266)は、長さ22.2cmで胴には魚々子をまいた地板に長さ8.0cm、幅0.2cmの紋を配し、下の木瓜形上の眉形が明瞭にみられ、蕨手は金象嵌が施されている。表面上の観察ではあるが、素材がしっかりしているため緑青のふき出しがあまりみられず、漆黒色の光沢を放つ部分が多い。指ではじくと、チーンという透明感のある音を出す。

I b類 紋を地板中央にはめ込む形態のもの。(267)は、長さ20.9cm、魚々子をまいた地板に扇を三ツ重ねにした文様を有する紋を接合している。紋は松状の文様とみられるが明確でない。木瓜形・眉形・蕨手も明瞭に残り耳搔は(266)と類似した状況である。(268)は長さ約21cm(折れ曲っているため計測値は16.6cmとなっている)竿は細身で胴は魚々子をまいた地板と紋を接合した径0.2cmの孔がみられる。木瓜形・眉形・蕨手も確認されるが表面の地膚が剥落している部分が多く、素材は精選されていない印象をうける。

II類 蕨手・細身に造作され、胴に文様装飾を施さないもの。(269)は耳搔の部分を欠いており、長さ13.5cm、厚さ0.15cmを測る。(270)も同様の竿・穂先部分と思われる。

3-a-6 小刀鞘金具 (P.L.30-262、Fig.55-262)

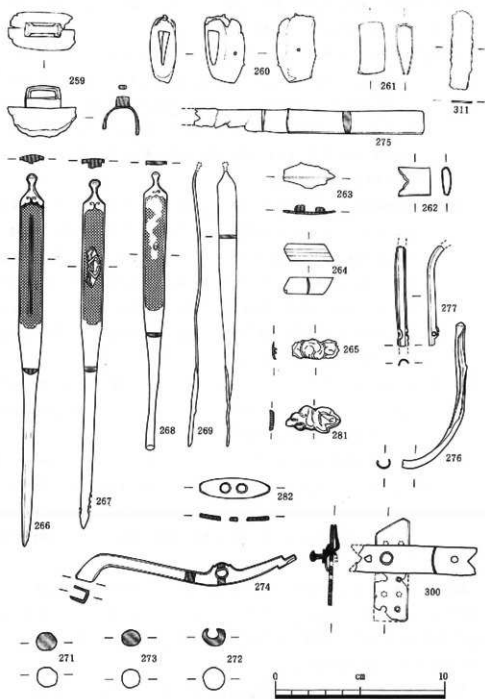
^{小刀}小刀の鞘あるいは柄の部分に装着する金具と考えられる。断面形は、高さ1.5cm、幅0.4cm(内径)で片側がややふくらみを有する先細長門を呈し、上端部に接合の痕跡がみられる。一方の縁の成形は途中で段を打するV字状の切れ込みを入れており、装飾的効果を意図している。

3-a-7 目貫金具 (P.L.30-263・264・265・281、Fig.55-263・264・265・281)

(263)と(264)については明確に目貫金具とは言えないかもしれない。(263)は扁平な板の外側に破断面があるためもっと大振りな金具であった可能性があり、二箇の突起状付着物もその機能はわからない。(264)は形状が平行四辺形を呈し、表面に三条の沈線が引かれていた痕跡を確認できただけである。

(265)は裏面中央に目釘に対応する小突起が認められ、表面には刻線による花状の文様が描かれている。刻線の中には若干ではあるが金と思われる付着物痕がみられる。(281)は表面全体に金鍍金がなされ金色に輝いている。そして刻線によって柏葉状の文様が描かれてい

Fig-55 銅製品実測図 (1)

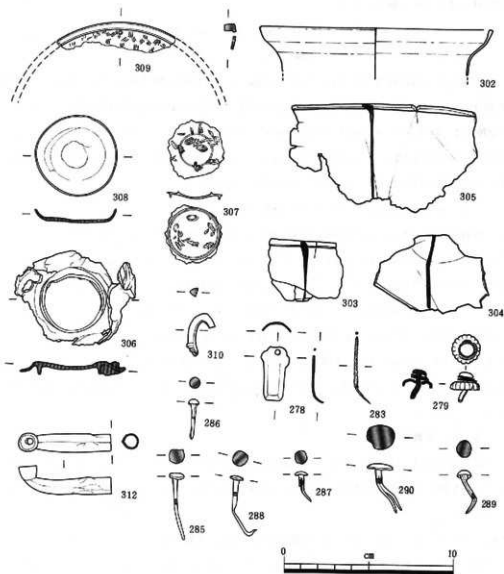


る。厚さ0.24cmで、(265)が0.08cmであったのと比較すれば、重量感のある製品である。

3-a-8 鞆 (P.L.30-282、Fig.55-282)

鞆を着装する時にその紐の長さを調節したり固定するための金具。長さ4.1cm、幅1.2cmの長円形を呈し、中央に二個一対で径0.5cm強の孔が存在する。厚さ0.2cmで、比較的しっかりした造作がなされている。

Fig. 56 銅製品実測図(2)



3-a-9 鉛鍍金具 (P.L.30-276・277, Fig.55-276・277)

鍍の胸板等の縁に廻らす金具と考えられる。厚さ0.2cm~0.5mmほどの板をU字状に成形し、(277)のように部分的に止め穴を設けるものもある。断片が多く、全体的なイメージはつかみにくい。

3-a-10 八双金具 (P.L.31-300, Fig.55-300)

「袖や胴の化粧板に打つ八双鉾の下に置く細長い装飾の板」(篠間1981)と考えられるもので、小札に打ち込まれた八双鉾とともに接合して出土した。推定長7.5cm、幅1.5cmの両端がV字状にカットされた「入八双」と言われるタイプのものである。八双鉾の二箇の孔とともに猪目状の透し穴が一個みられる。

3-a-11 八双鉾 (P.L.31-300, P.L.30-279, Fig.55-300, Fig.56-279)

八双金具とともに使用される鉾である。(300)の鉾は頭部径0.7cmほどで、先端部を二股に割り広げて止めるものである。鉾と八双金具の間には径0.85cmの円盤状留具が装着している。(279)は、鉾頭に二枚の留具が付いた例で、下部最大径1.7cmの留具は輪花状に盛り上がりのある成形がなされ、その上部の径1.2cmと1.0cmの留具は金鍍金を施し放射状に刻線を入れている。先端部は欠損しているため二股なのか不明である。

3-a-12 火繩挟み (P.L.30-274, Fig.55-274)

火繩銃の器具である。長さ13cm、火繩を挟む部分はU字形に窪められた形で成形され、支点となる孔は、径0.5~0.6cmの不整円で上端に切り込みが入っている。末部は鎌形を呈し、一側面には多数の擦痕が認められることから、かなりの回数使用したのと考えられる。

3-a-13 鉄砲玉 (P.L.30-271~273, Fig.55-271~273)

鉄砲玉と推定されるものは3個出土し、径1.2cm前後の球状を呈し、重量は6.5gから5.7gまであり均一でない。特に(270)は一部が空洞になった部分があり、鑄造にあたって粗悪なものを使用していたとみなすことができる。成分分析はおこなっていないが鉛の可能性が高い。

3-b 宗教具

すでに浪岡城跡では仏具と考えられる銅製品が多数出土しており、それも密教系の遺物が多いことを指摘している。具体的には六器・金剛盤・香炉等であるが、本年度は約5点ほど出土している。

3-b-1 六器 (P.L.31-306・307, Fig.5-306・307)

六器というのは開伽器等のように高台の付いた台皿と高台の付いた碗をもって一式(器)とするが、(306)は内側に鍍受けの隆帯圏がみられないことから碗の類、(307)は高台とと

にも鬚帯が存在することから台皿の類と推定される。

(306) は跡つぶされた状況を呈し、高台部樹縁は溶解状態が認められる。高台径は3.7cm、高台高0.6cmを測り、厚さも0.2cmとしっかりした造りの鉢と考えられる。

(307) は高台径3.1cm、高台高0.3cm、厚さは0.1cm以下と薄手に造作され、中央部が高台裏へ腹頭形にへこんだ状態となっている。稲藁や椀の付着が認められる。

3-b-2 香炉 (P.L.31-305, Fig.56-305)

破損品であるため明確な形状はわからないが、口縁が内側に突き出し円筒形を呈するものと考えられる。厚さは0.1cm前後であり、推定口径15cm前後、高さ10cm前後と思われる。

3-b-3 鏡 (P.L.31-309, Fig.56-309)

鏡は日常生活の調度品としても使用するが、古代・中世にあっては御正体として使用することが一般的であった。(309) は縁の内側に一孔を有し懸仏的に吊り下げて使用したことが推測されるため宗教具に入れた。推定径13.2cm、縁幅0.36cm、縁高0.72cmで、背文は三木の浮線をもって六角形(龟甲文)を連続する文様と考えられるが摩耗が激しく明確でない。表面にみられるスス状の付着物から二次加熱を受けていると思われる。

3-b-4 盤状銅製品 (P.L.31-303・304, Fig.56-303・304)

盤とすれば金剛盤等が考えられる破片。(303) は縁が0.38cmと厚く造作され、その盛り上りの内面は裏面よりよく研磨されている。(304) は厚さ0.2cmで破断面しか確認できない。

3-b-5 その他

(302) は口縁部が内湾しながら立ち上がる鉢・香炉状の器物である。表面の腐蝕が強く所々に小空洞が認められ、凹凸した状態になっている。推定口径13.9cmを測る。

(310) は、断面形三角を呈し、小壺や水注の取手ないしは耳の可能性が高い。

3-c 道具類

3-c-1 皿 (P.L.31-308, Fig.56-308)

口径4.9cm、高さ0.7cmの腹頭に近い形状をした小皿である。紐を通すような孔は発見されていないため、椀秤の受皿としては考えにくい。重量25.2gである。

3-c-2 鉢 (P.L.31-284~290, Fig.56-285~290)

前述した八双鉢に類似した鉢が6点ほど出土している。しかし、頭部の形態および先端部の状態で二類に分類できる。

1類 頭部がきのこ状に丸く成形され、先端部は二股に分かれて孔を通した後に広げて固定するもの。(284・287・289・290)があり、頭部が最も大きい(290)は推定径1.6cm強、(289)は1.0cm、(287)は0.8cmで金鍍金が認められ、(284)は0.6~0.7cmの径を有している。先端部は2.0~3.0cmの長さで板状に成形した二股

を頭部中央に接合させている。

Ⅱ類 頭部が扁平な円盤状を呈し、先端部は1本の釘状を呈するもの。頭部は明確に円形にはならず、面取りしているもの(285)もあるが、径は約1.0cm弱、先端部の長さは4.0cmで規格性が認められる。(288)

3-c-3 針状銅製品 (P.L.30-283, Fig.56-283)

長さ約4.0cm、厚径0.2cmの先端が鋭く尖った製品で、体部にねじりの痕跡がある。

3-c-4 その他

(278) は、鞘等の録金具のようにも見えるが、対照となる部分がないため明確でない。

(315) は、溶解状態となった録録金具のようであるが明確でない。

(311) は、小柄がつぶれたように、二枚の板が重なる製品であり、使用目的はわからない。

3-c-5 銅滓 (P.L.31-313・314)

銅滓は11点出土している。(313)と(314)は比較的大型の銅滓で、製品であったものを铸つぶした可能性も否定できない。

3-c-6 キセル (P.L.31-312, Fig.56-312)

雁首の部分で、火皿の径は1.1cmで内面口縁を斜行気味に削っている。火皿下端と首部上面に接合痕が認められる。ラウ取り付け部の径は1.0cm弱で内部に木質のラウと思われる残骸がみられた。

Ch. 96 銅製品観察表

PL No	Fig. No	遺物No	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×高さ)cm	備考
30-259	55-259	F 1074	足金具	S43	S X 321	フク土	高さ 厚さ 4.06 × 2.25 × 3.09 × 0.16	超過し部分 2.22 × 0.86 × 1.40
30-260	55-260	F 908	録金具	R42	S T 260	"	3.90 × 1.45 × 0.19	7.60 g
30-261	55-261	F 1019	通	Q42	S T 277	"	3.14 × 1.44 × 0.90	7.59 g
30-275	55-275	F 790	小柄	W47	"	Ⅱ 下	(13.71) × 1.37 × 0.36	19.71 g
31-311	55-311	F 539	小柄の柄?	R50	S E 118	フク土	(4.80) × 1.21 × 0.10	
30-266	55-266	F 444	斧	S48	pit内	"	22.30 × 1.37 × 0.48	重さ 47.82 g
30-267	55-267	F 398	"	R51	S T 270	"	20.89 × 1.32 × 0.36	35.42 g
30-268	55-268	F 1129	"	R42	S T 279	"	16.65 × 1.31 × 0.20	径 0.20cmの孔有
30-269	55-269	F 258	"	R49	"	Ⅱ 下	(13.50) × 1.21 × 0.15	
30-270	-	F 517	"	T39	"	Ⅱ	(7.01) × 0.70 × 0.18	
30-262	55-262	F 735	小刀鞘金具	T48	pit内	フク土	1.95 × 1.70 × 0.61	2.61 g
30-263	55-263	F 651	目貫金具?	R50	S E 118	"	(3.06) × 1.46 × 0.38	
30-264	55-264	F 205	目貫金具	S48	"	Ⅳ 上	(2.94) × 1.07 × 0.14	
30-265	55-265	F 97	"	V46	S X 270	フク土上面	(2.70) × 1.19 × 0.08	
30-281	55-281	F 305	"	S48	S T 273	フク土	3.24 × 1.49 × 0.24	

60年度内報

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	名 称	出土区	遺物名	類 位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	備 考
30-277	55-277	F 905	鎌 金 具	R42	S T 280	"	(5.95) × 0.67 × 0.54	
30-276	55-276	F 1016	"	T44	S E 138	"	(9.28) × 0.44 × 0.63	
31-300	55-300	F 248	ハ 双 金 具	R49		埋 土	(7.24) × 1.53 × 0.12	付着しているハ双 鍔の径 0.65cm
30-282	55-282	F 143	神	V46	S E 111	フ ク 土	4.12 × 1.22 × 0.22	孔径 0.57cm 4.98g
30-271	55-271	F 1054	鉄 砲 玉	S43	S T 281	セクション 内フク土	1.24 × 1.10 × 1.06	5.5g
30-272	55-272	F 466	"	T49	S X 292	フ ク 土	1.22 × 1.19 × 1.00	空網 6.29g
30-273	55-273	F 1110	"	R42	S T 279	"	1.11 × 1.08 × 0.95	5.74g
30-274	55-274	F 95	火 縄 鉄	W47		I	13.00 × 1.07 × 0.90	孔径 0.65 × 0.52 32.97g
31-305	56-305	F 807	香 炉	S42	S T 247	フ ク 土	(10.96) × (6.30) × 0.10	
31-302	56-302	F 1051	網 罟 ?	T44	S E 138	セクション 内フク土	(5.30) × (3.00) × 0.28	
31-303	56-303	F 783	盤	S42		II 下	(4.39) × (3.61) × 0.26	
31-304	56-304	F 664	"	S44		"	(6.70) × (4.60) × 0.22	
31-306	56-306	F 1141	六 器	Q42	S E 140	フ ク 土	7.03 × 6.60 × 0.16	溶解している
31-307	56-307	F 372	"	F48	S E 125	セクション 内フク土	(3.58) × 3.45 × 0.12	もみ、わら付着
31-309	56-309	F 234	銅 鏡 の 縁	"		I	(7.04) × 1.55 × 0.79	
31-308	56-308	F 743	小 皿	S49	S E 129	フ ク 土	4.94 × 4.85 × 0.86	重さ 25.21g
31-284		F 884	銅 新	Q42	S E 137	"	身 部 (3.60) × 0.34 × 0.18	
31-285	56-285	F 338	"	R48	S E 126	"	頭部径 身部径 (3.94) × 0.90 × 0.26	
31-286	56-286	F 902	"	R42	S T 280	"	頭部径 身部 2.44 × 0.62 × 0.26	
31-287	56-287	F 1053	"	S43	S T 281	セクション 内フク土	頭部径 身部 1.91 × 0.76 × 0.26	
31-288	56-288	F 29	"	S42	S T 245	フ ク 土	頭部径 身部径 (3.43) × 0.84 × 0.24	
31-289	56-289	F 292	"	R48	pit内	"	頭部径 身部 (2.14) × 0.98 × 0.30	
31-290	56-290	F 806	"	S42	S T 247	"	頭部径 身部 (3.25) × 1.64 × 0.33	
30-279	56-279	F 85	"	W46		II	頭部径 身部 (1.82) × 1.70 × 0.28	
30-283	56-283	F 124	針 状 銅 製 品	V46	S E 111	フ ク 土	径 (4.01) × 0.22	
30-280		F 399	円 形 鍔 金 具	R50	S E 120	"	1.28 × 1.08 × 0.10	
31-312	56-312	F 429	キ セ ル	Q48	S X 375	床 面 直 上	5.50 × 1.14 × 0.95	磨削、内部に木片が 入っている 9.88g
30-278	56-278	F 519	不明銅製品	T38		II	3.35 × 1.62 × 0.09	孔径 0.27cm
31-315		F 353	"	R48	S X 275	フ ク 土	(5.82) × 0.48 × 0.43	内部に種子が入っ ている
31-310	56-310	F 951	"	T43	S X 320	"	(2.55) × 0.59 × 0.46	
31-313		F 157	銅 洋	W47	S E 115	"	5.18 × 1.64 × 0.23	14.48g
31-314		F 114	"	"		II	4.53 × 4.02 × 1.03	32.30g

4. 石製品

石製品は、城館期のもものとして磁石28点、硯17片、茶臼16片、穀臼4片、石鉢1点があり、縄文時代と推定される石斧4点、石棒1点、未加工品1点と、時代不詳の加工石8点、自然石18点、軽石8点、けい化木4点を遺物として扱った。

4-a 文具

4-a-1 硯 (P.L.32-313・314・315・316、Fig.57-313・314・315・316)

硯はいずれも小片にて出土している。形態的には長方硯と言われるもの(水野和雄1985)であり、内側の平面形と裏面の形態によって細分できるが、今回は完形および全形を知り得る資料がないため個別に報告する。

(313)は海部の一部であり、内側の平面形は楕円形あるいは頭部だけが楕円状を呈すると考えられ、裏面は挟り脚を有しているものである。表面は堅緻な灰白色を呈する。

(314)は、緑帯幅0.3cm、裏面挟り脚幅0.7cmのもので、表面は赤灰色から暗灰色の色調を呈している。

(315)は裏面の挟り脚と周辺部だけがみられ、縞模様を呈する暗緑色の石質である。

(316)は裏面平坦な長方硯で幅は4.9cm、砂岩系の明黄色を呈する石質であり、成形は椎楯で面の角度が一定でない。

4-b 道具・工具

4-b-1 砥石 (P.L.32-317-325、Fig.57-317-325)

砥石は、一般に荒砥・中砥・仕上げ砥に分類されているが、浪岡城の出土品は材質による分類が明確でないため、使用金属器によって砥面の幅等が相違するという仮説のもとに、砥面幅によって分類する。

I類 砥面幅が2cm以下の小型の製品。(318)は断面長方形で、全四面を使用し、一面にはU字状の挟りが認められ頭部が丸いものを砥いだのであろうか。(322)は断面正方形に近く、四面は滑らかである。特に、砥面のへこみが少ない所をみると仕上げ砥として使用していたのであろうか。

II類 砥面幅が2cm以上3cm以内の製品。(320)は断面長方形を呈するが中央部は摩耗が著しく外側に比較して0.5cm以上も擦りへっている。砥面も一律な摩耗でなく部分的に平坦面や傾斜面を有しているため、多目的ないしは別製品の砥ぎに使用したと思われる。(323)は断面正方形を呈すが、四面の中央部が摩耗している他その角にあたる部分も四箇所砥面として使用した痕跡を残している。砥面は一律でない。(317)は厚さ1cmほどの扁平なもので、表裏と端を砥面として使用し、平滑な面と削り状に段を有する面が認められる。出土品の中では最も器面が緻細である。

III類 砥面幅が3cm以上のもの。(324)と(325)は断面形が一定せぬほど各所を砥面として使用し、特に中央部の摩耗は0.3~0.5cmほどで擦痕状のへこみが多くみられる。(319)は扁平な一面とその側面を砥面として使用し、縁にはV字状のきざみがある。

Fig. 67 石製品実測図(1)

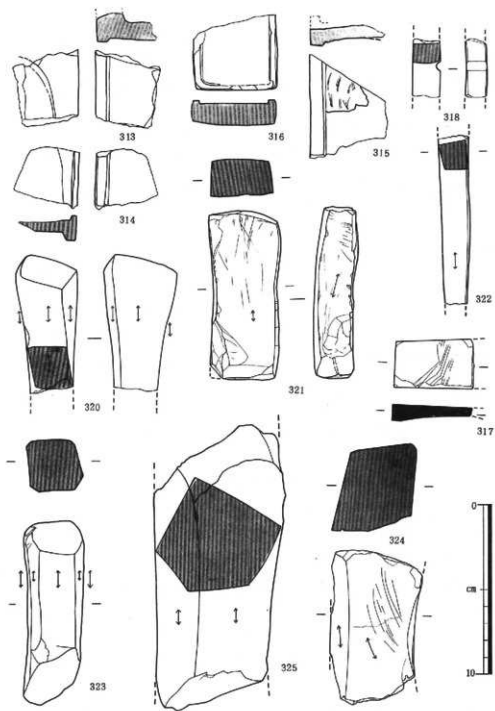
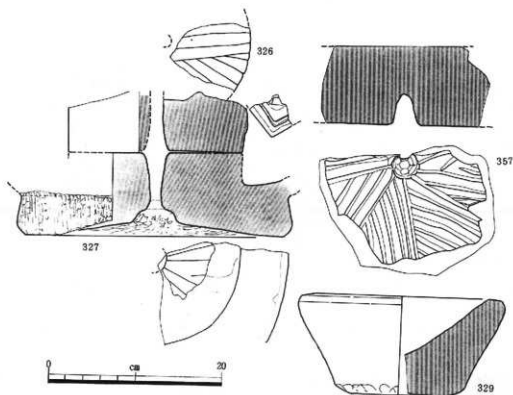


Fig. 58 石製品実測図(2)



(321)は扁平部の側面を多く砥面としているようで、表裏は凹凸している上に擦痕が多数認められる。側面の中央部はU字状に摩耗している。

4-b-2 茶臼(PL.32-326・327・328, Fig.58-326・327)

茶臼と穀臼の区別は断片からでは難しい点がある。一応、茶臼の場合は下臼に受皿がみられること(挽き臼の上手には受皿があるので茶臼だけとは限らない)、上臼の供給口が中央に位置していること、および器面を磨いて成形する事等を主な根拠としている。

上臼と推定されるものは2片出土し、(328)だけ図示した。(326)は上半を欠いているが推定径20cm強で挽き木孔の部分が菱形に造作され、主溝・副溝とも大部擦りへっているが中心孔より若干ズレた状態で廻り込まれている。同質・同径の下臼が(327)である。受け皿の部分欠損しているため全体径はわからないが、台部内外面にはノミの成形痕が明瞭に認められ、研磨はなされていない。溝をみた限りでは中心部から放射状に伸びる主溝以外確認されず、副溝を施さなかった可能性が高い。

他に研磨を施した上臼片(328)や、受皿部分がある。

4-b-3 穀臼 (Fig.58-357)

穀臼は上臼の供給口が中心軸からズレているものを抜った。上臼は2点出土しているが図示したのは(357)だけである。外縁が欠損しているため径はわからないが、高さ(溝面からくぼり面まで)は9.5cm、芯棒受けの孔は3.7cmの深さにえぐられている。溝は茶臼よりも幅広く8分割主溝に副溝が4~6本と規則的には配置していない。なお、波岡城跡から出土する臼には正常目と逆目の臼が存在し、いかなる相違なのか今後の問題点である。

4-b-4 石鉢 (P.L.32-329, Fig.58-329)

石鉢の機能としては、こね鉢(調理)、手洗鉢(手洗い)、シデ鉢(灯火)等が考えられる。(329)は推定口径24cm、高さ11.5cm、深さ7.0cmを測り、全面にノミによる成形痕が認められるが内面の底に近い部分だけは使用のためか平滑な面になっている所もある。

※以上の石製品について、時間の都合上石質の鑑定がなされていないことを御了承いただきたい。後日にまとめて報告したいと思っている。

Ch.99 石製品観察表

PL.No	Fig.No	遺物名	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	特徴	備考
32-313	57-313	S 72	硯	S 44		I	(4.45)×(3.82)×(1.72)		
32-314	57-314	S 11	"	S 42	ST245	フク土	(3.58)×(3.76)×1.50		
32-317	57-317	S 94	砥石	S 43	ST261	"	(4.63)×2.31×1.08		
32-318	57-318	S 90	"	"	"	"	(3.34)×1.73×1.18		
32-315	57-315	S 79	硯	Q 49	SB 66	"	(5.27)×(4.54)×(1.60)		
32-316	57-316	S 73	"	T 44		II	(4.48)×4.93×1.47		
32-319	--	S 43	砥石	R 48	SE124	フク土	(6.00)×5.43×1.64		
32-320	57-320	S 10	"	W 46		I	(7.90)×4.00×3.24	付着物有	
32-321	57-321	S 36	"	R 48		"	10.10×4.00×2.24		
32-322	57-322	S 77	"	Q 41		II 下	(9.91)×1.80×1.60		
32-323	57-323	S 70	"	R 42		II	(10.78)×3.50×3.26		
32-324	57-324	S 78	"	Q 41		II 下	(8.90)×5.60×4.64	付着物有	
32-325	57-325	S 71	"	S 44		II	(15.71)×6.53×6.35		
32-326	58-326	S 51	茶臼	R 48		IV 上	(10.56)×(9.00)×(6.66)	推定径 約20.0cm	上臼
32-327	58-327	S 40	"	V 46	SE111	フク土	(21.07)×(14.78)×(9.08)	" 約32.0cm	下臼
--	58-357	S 76	石臼	S 43		II 下	(18.96)×(14.34)×9.36	孔径 約2.47cm	"
32-328	--	S 69	茶臼	Q 42		II	(14.54)×(8.64)×(10.35)	推定径 約20.0cm	上臼
32-329	58-329	S 102	石鉢	Q 48	SX275	床面下粘土	(12.44)×(8.70)×13.36		

5. 錢貨

出土した錢貨を鑄造時期・使用時期別に分類すると、(a)城館期の錢貨、(b)落城以後藩政期の錢貨、(c)明治以降現代までの錢貨と三期になる。内館については、城館期はもちろんの事、間接的ではあっても現代に至るまで人々の生活空間の一部であったことが、これら出土錢貨によっても理解できる。

a 城館期の錢貨 (Fig.60)

城館期の錢貨としては、Ch. 100 に示した如く、33種261枚が確認された。しかし、判読できた錢貨についてもそのすべてが中国本錢とは言い切れぬ面があり、鑄造年

代については、開元通宝(唐、621年)から洪徳通宝(明、1470年)までの時間幅と渡岡落城(1578年)までを包括した幅を推定しておきたい。特に無文錢として表記した小型・軽量の錢貨は私鑄錢の範囲に含まれる錢貨と考えられ、その出土率が23%近くを占めることにも注目しなければならない。その上で、銘文を有する錢貨についてみても、中国本錢の基本的重量が日本製の模鑄錢・私鑄錢に比較して高い数値を示すこと(沢田正昭1982)を根拠に以下の統計をとってみた。

Ch.100 城館期の錢貨名称別一覧表

番号	名 称	枚数	出土率	番号	名 称	枚数	出土率
1	開元通宝	11	4.21	19	聖宋元宝	5	1.92
2	至道元宝	2	0.76	20	大觀通宝	2	0.76
3	咸平元宝	1	0.38	21	政和通宝	4	1.53
4	景德元寶	1	0.38	22	至大通宝	2	0.76
5	祥符元宝	3	1.15	23	嘉泰通宝	1	0.38
6	祥符通宝	3	1.15	24	景祐元宝	3	1.15
7	天禧通宝	2	0.76	25	淳熙元宝	2	0.76
8	天聖元寶	3	1.15	26	至和元寶	1	0.38
9	皇宋通宝	12	4.59	27	洪徳通宝	1	0.38
10	嘉祐元宝	3	1.15	28	慶元通宝	1	0.38
11	嘉祐通宝	4	1.53	29	洪武通宝	23	8.81
12	治平元宝	3	1.15	30	永樂通宝	11	4.21
13	治平通宝	2	0.76	31	朝鮮通宝	1	0.38
14	熙寧元宝	10	3.83	32	鉄 錢	1	0.38
15	元豐通宝	11	4.21	33	無 文 錢	60	22.99
16	元祐通宝	12	4.59	34	判読不能	53	20.31
17	紹聖元寶	6	2.30				
18	元符通宝	1	0.38		計	261	100%

Ch.101 錢貨重量統計表

	名 称	資料 個数	最大 値(g)	最小 値(g)	平均 値(g)	名 称	資料 個数	最大値	最小値	平均値	
1	開元通宝	6	3.40	2.32	2.64	9	紹聖元寶	5	3.42	2.88	3.14
2	天聖元寶	3	3.50	2.78	3.03	10	聖宋元宝	4	3.58	3.22	3.22
3	皇宋通宝	8	3.06	2.28	2.66	11	洪武通宝	17	4.36	1.26	2.71
4	治平元寶	3	3.22	2.48	2.92	12	永樂通宝	10	3.95	2.10	2.88
5	政和通宝	4	3.32	2.01	2.57	13	無 文 錢	33	2.68	0.34	1.43
6	熙寧元寶	6	4.21	2.10	3.07						
7	元豐通宝	8	3.31	1.99	2.68						
8	元祐通宝	11	3.99	1.66	2.93						

※重量計測には駒エー・アンド・ディ社の高精度
上皿電子天平びんE X3000 AとA D-8116を使用
した。

その結果、平均値が2.5g以下のものは無文銭だけとなり、1.43gという平均値は私鑄銭の可能性が極めて高いことを示している。さらに最大値と最小値の幅をみると、1.0g以下が天聖元宝・皇宋通宝・治平元宝・紹聖元宝・聖宋元宝だけであり、洪武通宝のように3.10gの幅がみられるとその中に中国本銭と模鑄銭が混在していると考えざるを得ないようである。今後は、素材・范型・加工痕・形状等の総合判断による分類が重要と考えられる。

b 落城以後藩政期の銭貨

寛水通宝が3点出土している。いずれも遺構等に伴うものでなく、表土に近い層位からの出土である。(Ch.103)

c 明治以降現代までの銭貨

鑄造年代をみると明治9年の一銭から昭和26年の十円までみられる。特に昭和26年造の十円はS X 275の床面直上から出土しており、覆土出土の昭和16年造一銭とともに遺構の廃棄が昭和26年以後であった根拠となりえる。またS X 278についても大正11年造一銭を覆土から出土している点から、大正11年以後の廃棄と考えざるを得ず、表土層周辺から出土する銭貨とともに、明治・大正・昭和の初期まで内館が多分に人々の集合する場であったと考えられるのである。(Ch.104)

Fig. 59 銭貨計測模式図

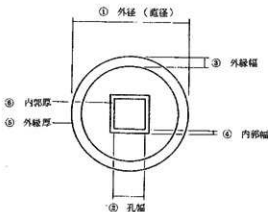
































Fig. 60 錢貨拓影圖

開元通寶	咸平元寶	景德元寶	祥符通寶	天禧通寶
				
天聖元寶	景祐元寶	皇宋通寶	至和元寶	嘉祐通寶
				
治平元寶	熙寧元寶	元豐通寶	元祐通寶	紹聖元寶
				
元符通寶	聖宋元寶	大觀通寶	政和通寶	至大通寶
				
朝鮮通寶	永樂通寶	淳熙元寶	慶元通寶	洪武通寶
				
無文錢	無文錢			
				
		背文十四	背文四	背文浙

Ch. 102 城館期の銭貨計測表

No	C No	名 称	出上区	造幣名	票 位	外径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内郭径 cm	孔 径 cm	内郭厚 cm	重 量 (g)	備 考
1	C 1	判読不能	S42		Ⅰ	2.46	-	0.13	-	0.66	-	3.06	
2	C 2	無 文 銭	"	ST245	フ タ 上	1.36	-	0.10	-	0.60	-	0.17	
3	C 3	"	"	"	"	2.14	-	0.13	-	0.66	-	1.59	
4	C 4	"	"	"	"	-	-	0.08	-	0.67	-	0.25	
5	C 6	"	"	"	"	-	-	0.08	-	-	-	0.09	
6	C 7	判読不能	"	"	"	2.20	-	0.10	-	0.64	-	1.19	
7	C 8	洪武通宝	"	"	"	2.28	0.34	0.16	0.11	0.49	0.13	3.06	
8	C 9	熙寧元宝	"	"	"	2.42	0.23	0.15	0.08	0.74	0.12	1.74	
9	C 10	判読不能	T38		Ⅰ	2.25	0.20	0.10	0.14	0.64	0.10	1.67	
10	C 12	洪武通宝	R39		"	2.42	0.16	0.12	0.05	0.56	0.12	2.61	背文「新」
11	C 20	〇宋通宝	R44		"	-	0.28	0.12	0.08	-	0.10	1.04	
12	C 21	判読不能	"	"	"	2.23	0.20	0.09	0.08	0.71	-	1.51	
13	C 24	崇〇通宝	P44		"	-	0.23	0.10	0.15	-	0.09	0.94	
14	C 25	洪武通宝	"	"	"	2.43	0.16	0.15	0.12	0.58	0.14	2.62	
15	C 27	元祐通宝	W47		"	2.39	0.26	0.13	0.07	0.66	0.14	3.99	
16	C 29	永樂通宝	V45		"	2.50	0.20	0.14	0.07	0.58	0.11	3.05	
17	C 30	熙寧元宝	"	"	"	2.34	0.30	0.15	0.14	0.60	0.10	2.87	
18	C 31	政和通宝	V46	SX270	ソ ク 十	2.43	0.28	0.10	0.06	0.60	0.08	1.99	
19	C 32	嘉祐通宝	"	"	"	2.53	0.20	0.10	0.10	0.65	0.12	2.70	
20	C 33	嘉祐元宝	W45		Ⅱ	2.64	0.34	0.16	0.06	0.78	0.14	3.57	
21	C 34	聖宋元宝	V45		上	2.46	0.22	0.15	0.12	0.63	0.13	3.60	
22	C 35	熙寧元宝	W46		Ⅲ	2.4	0.21	0.12	0.09	0.66	0.12	3.04	
23	C 38	崇寧元宝	W45		Ⅱ	2.46	0.21	0.13	0.04	0.66	0.12	3.08	
24	C 40	嘉祐元宝	W47		"	2.39	0.24	0.12	0.09	0.62	0.11	2.02	
25	C 41	無 文 銭	"	"	"	-	-	0.06	-	-	-	0.43	
26	C 42	〇宋〇〇	"	"	"	-	0.29	0.12	0.08	-	0.13	0.88	
27	C 43	判読不能	"	"	"	2.43	0.28	0.12	-	0.60	-	1.87	
28	C 44	元豐通宝	"	"	"	2.31	0.20	0.14	0.04	0.62	0.15	3.21	
29	C 45	皇宋通宝	"	"	"	2.46	0.31	0.12	0.10	0.70	0.10	2.48	
30	C 46	元豊通宝	"	"	"	2.45	0.26	0.14	0.08	0.56	0.13	3.31	
31	C 47	〇武通〇	V46	SE111	フ タ 十	-	0.19	0.13	-	-	-	1.35	
32	C 48	無 文 銭	"	"	"	1.86	-	0.06	-	0.72	-	0.74	
33	C 49	崇寧元宝	W45	SX272	"	2.50	0.29	0.10	0.08	0.59	0.10	2.67	
34	C 50	判読不能	V45	SE112	"	2.36	-	0.12	-	0.66	-	3.45	
35	C 51	熙寧元宝	V45	SE111	"	2.36	0.18	0.10	0.10	0.70	0.12	2.46	
36	C 52	無 文 銭	"	"	フ タ 十 灰 質	2.31	-	0.10	-	0.69	-	1.58	
37	C 53	元祐通宝	"	"	"	2.20	0.25	0.08	0.10	0.60	0.07	1.67	
38	C 54	開元通宝	"	"	"	2.52	0.23	0.12	0.06	0.68	0.12	2.38	背文「-」
39	C 55	景祐元宝	W47	Fit内	フ タ 十	-	-	0.09	-	0.70	0.09	1.39	
40	C 56	無 文 銭	"	"	"	2.36	-	0.13	-	0.59	-	2.57	
41	C 57	"	"	"	Ⅱ	2.13	-	0.07	-	0.70	-	1.50	
42	C 58	洪武通宝	W46	SE113	フ タ 十	2.04	0.26	0.20	0.09	0.54	0.17	3.66	

No	C No	名 称	出土区	遺構名	型	位	外 (内径)							重 量 (g)	備 考
							外 径 cm	外 径 cm	外 径 cm	内 径 cm	孔 径 cm	内 径 cm	厚 度 cm		
43	C 59	○祐元宝	W46	SE 101	壺	上	—	0.20	0.10	0.10	—	0.10	0.10	2.94	
44	C 60	元豊通宝	"	SE 113	フ	ク 上	2.30	0.29	0.11	0.07	0.60	0.10	0.27		
45	C 61	皇宗通宝	V45	SD 91	"	"	2.46	0.24	0.13	0.10	0.63	0.13	2.69		
46	C 62	洪武通宝	V46	SE 111	"	"	—	0.09	0.09	—	—	—	1.26		
47	C 63	○○元宝	"	"	"	"	—	0.26	0.10	0.10	—	0.06	0.94		
48	C 64	判読不能	W47	Pit内	フ	ク 上	2.30	0.27	0.10	—	0.67	0.10	2.00		
49	C 66	船型元宝	U48	"	I	"	2.38	0.29	0.16	0.10	0.62	0.12	3.40		
50	C 67	淨観元宝	W46	SX 274	フ	ク 上	2.44	0.24	0.14	0.09	0.65	0.14	3.20	背文「上四」	
51	C 68	船型元宝	"	"	"	"	2.44	0.20	0.12	0.08	0.70	0.11	2.26		
52	C 69	無文銭	"	ST 259	"	"	2.19	—	0.12	—	0.76	—	1.61		
53	C 70	"	"	SX 274	"	"	2.12	—	0.12	—	—	—	1.41		
54	C 71	"	"	"	"	"	2.20	—	—	—	0.70	—		} 4.75 併出	
55	C 72	判読不能	"	"	"	"	2.44	—	—	—	—	—			
56	C 73	淨○○元宝	"	"	"	"	—	0.20	0.12	0.08	—	0.10	0.85		
57	C 76	鉄 銭	U48	"	I	"	—	—	0.18	—	—	—	0.88		
58	C 78	判読不能	V46	SE 111	セクション内	上	2.23	—	0.12	—	0.63	—	1.65		
59	C 79	元祐通宝	P48	"	I	"	2.34	0.26	0.12	0.11	0.63	0.10	2.78		
60	C 80	王道元宝	"	"	"	"	2.36	0.26	0.12	0.08	0.60	0.11	2.14		
61	C 81	淨口元宝	"	"	"	"	2.42	0.32	0.10	0.08	0.67	0.11	2.65		
62	C 82	無文銭	"	"	"	"	2.09	—	0.06	—	0.75	—	0.81		
63	C 83	"	"	"	"	"	1.88	—	0.05	—	0.70	—	0.67		
64	C85A	判読不能	"	"	"	"	—	—	—	—	—	—		} 4.41 併出している	
65	C85B	"	"	"	"	"	—	—	—	—	—	—			
66	C 86	"	W46	SX 274	フ	ク 上	—	—	0.10	—	—	—	0.27		
67	C 87	無文銭	Q50	"	I	"	1.77	—	0.06	—	0.70	—	0.73		
68	C 88	洪武通宝	"	"	"	"	2.12	0.22	0.14	0.11	0.48	0.15	2.53	背文「一銭」	
69	C 90	元祐通宝	R50	"	"	"	2.46	0.24	0.12	0.08	0.70	0.12	2.59		
70	C 91	元豊通宝	Q48	"	"	"	2.30	0.30	0.11	0.12	0.60	0.10	2.38		
71	C 93	祥符元宝	Q50	"	IV	上	2.46	0.28	0.11	0.03	0.66	0.11	2.37		
72	C 94	船型元宝	R50	"	"	"	2.37	0.28	0.14	0.10	0.62	0.12	3.01		
73	C 95	無文銭	W45	SX 275	フ	ク 上	—	—	0.08	—	—	—	0.23		
74	C 97	船○○元宝	R50	"	II	"	—	0.40	0.13	0.11	—	—	1.49		
75	C 98	永楽通宝	"	"	"	"	2.54	0.23	0.11	0.06	0.68	0.10	2.21		
76	C 99	天○○元宝	"	"	I	"	—	0.17	0.15	0.08	—	0.14	1.13		
77	C 100	永楽通宝	"	"	"	"	—	0.25	0.12	0.06	—	0.10	1.27		
78	C 102	祥符通宝	R48	"	IV	上	2.43	0.26	0.08	0.06	0.64	0.07	2.07		
79	C 103	開○通宝	"	SX 275	床	面	—	0.20	0.12	0.05	—	0.12	0.93		
80	C 104	無文銭	W45	SX 276	フ	ク 上	1.70	—	0.06	—	0.67	—	0.52		
81	C 105	咸平元宝	"	"	"	"	2.46	0.36	0.10	0.06	0.62	0.12	3.26		
82	C 106	治平通宝	R49	"	IV	上	2.05	0.10	0.10	0.07	0.68	0.08	1.65		
83	C 107	無文銭	"	"	"	"	1.87	—	0.05	—	1.78	—	0.72		
84	C 108	"	R50	"	II	下	2.30	—	0.09	—	0.60	—	1.16		
85	C 109	洪武通宝	"	"	"	"	2.50	0.20	0.08	0.03	0.58	0.09	2.73		
86	C 110	無文銭	"	SE 118	フ	ク 上	2.08	—	0.10	—	0.76	—	1.43		

順	C 順	名 称	出上区	通槽名	層 位	外 径 (mm)	外 径 mm	外 径 mm	内 径 mm	孔 径 mm	内 径 mm	高 量 [g]	備 考
87	C 112	洪武通宝	R 49	SX 279	フク土上	2.22	0.34	0.12	0.09	0.59	0.10	2.83	背文「一銭」
88	C 113	皇宋通宝	"	"	"	—	0.33	0.12	—	—	—	2.49	
89	C 114	永〇〇宝	Q 48	"	IV 上	—	0.16	0.13	—	—	—	0.60	
90	C 115	無文銭	S 49	"	I	2.17	—	0.07	—	0.60	—	1.65	
91	C 116	皇宋通宝	"	"	IV 上	2.40	0.29	0.10	0.10	0.60	0.11	3.06	
92	C 117	永樂通宝	S 48	"	壁 土	2.50	0.22	0.12	0.05	0.56	0.12	3.81	
93	C 118	〇宋〇宝	W 47	SB 60	フク土	—	0.33	0.12	0.07	—	0.10	0.85	
94	C 119	朝統不能	T 49	SX 288	"	—	—	0.10	—	—	—	0.90	
95	C 120	洪武通宝	Q 48	SE 123	"	2.30	0.19	0.16	0.08	0.60	0.15	2.36	
96	C 121	元豐通宝	F 48	"	"	2.43	0.28	0.10	0.07	0.70	0.10	2.36	
97	C 122	無文銭	Q 48	SX 275	床面下粘土	—	—	0.05	—	—	—	0.39	
98	C 123	"	Q 48	"	"	2.28	—	0.10	—	0.66	—	2.15	
99	C 124	皇〇〇宝	F 48	pit内	フク土	—	0.30	0.09	0.10	—	0.10	1.30	
100	C 125	嘉祐通宝	Q 48	SX 275	床面下粘土	2.40	0.24	0.10	—	0.73	0.12	1.78	
101	C 127	洪武通宝	R 48	SE 126	フク土	2.14	0.20	0.16	0.10	0.44	0.14	2.68	背文「一銭」
102	C 128	大観通宝	"	"	"	2.48	0.20	0.15	0.08	0.63	0.16	2.87	
103	C 129	元祐通宝	"	SX 275	床面粘土 床面直上	2.45	0.23	0.12	0.08	0.68	0.08	1.80	
104	C 130	開元通宝	"	"	床面下粘土	2.47	0.30	0.11	0.06	0.70	0.09	2.19	
105	C 131	無文銭	R 50	ST 274	フク土	—	—	0.08	—	—	—	0.93	
106	C 133	〇武通〇	R 48	SE 126	"	—	0.21	0.11	0.08	—	0.10	0.54	
107	C 134	朝統不能	"	SE 124	"	—	—	0.09	0.12	—	—	0.67	
108	C 135	洪武通宝	R 50	ST 274	"	2.37	0.29	0.17	0.08	0.50	0.15	4.36	背文「一銭」
109	C 136	皇宋通宝	Q 50	SE 121	"	2.48	0.32	0.10	0.12	0.70	0.10	2.41	
110	C 137	無文銭	R 48	SE 126	"	2.24	—	0.08	—	0.70	—	1.36	
111	C 138	洪武通宝	W 45	SX 272	pit内フク土	2.28	0.24	0.10	0.10	0.53	0.12	2.59	
112	C 139	無文銭	R 49	SE 130	フク土	2.26	—	0.09	—	0.60	—	1.92	
113	C 140	元豐通宝	R 50	SE 118	"	2.48	0.22	0.10	0.08	0.68	0.09	2.21	
114	C 141	〇〇元宝	"	SE 120	"	2.30	0.24	0.10	—	0.60	0.09	2.28	
115	C 142	永樂通宝	"	"	"	2.51	0.30	0.12	0.08	0.57	0.16	3.95	
116	C 143	"	"	SE 118	"	2.49	0.22	0.13	0.08	0.50	0.15	3.38	
117	C 144	無文銭	T 49	pit内	"	1.74	—	0.07	—	0.70	—	0.55	
118	C 145	朝統不能	W 47	"	IV 上	—	0.16	0.12	0.10	—	0.12	0.82	
119	C 146	無文銭	F 48	SE 123	フク土	—	—	0.00	—	—	—	0.18	
120	C 147	"	"	"	"	—	—	0.07	—	—	—	0.26	
121	C 148	皇宋通宝	T 48	SX 288	"	2.45	0.24	0.12	0.09	0.56	0.12	3.21	
122	C 149	永樂通宝	W 47	SE 116	"	2.52	0.24	0.12	0.08	0.54	0.12	2.84	
123	C 150	朝統不能	U 49	SX 291	"	2.32	—	0.09	—	—	—	2.14	
124	C 151	開元通宝	R 50	SE 118	"	—	—	0.10	—	—	—	1.52	
125	C 152	"	"	"	"	2.45	0.20	0.12	0.06	0.70	0.12	2.70	
126	C 153	皇宋元宝	"	"	"	2.37	0.20	0.12	0.08	0.62	0.12	2.88	
127	C 154	洪武通宝	S 39	"	U	2.36	0.24	0.14	0.06	0.58	0.14	3.27	
128	C 155	聖皇〇宝	"	"	"	2.48	0.27	0.12	0.04	0.74	0.12	2.28	
129	C 156	政和通宝	S 38	"	"	2.44	0.20	0.12	0.05	0.68	0.10	2.34	
130	C 157	無文銭	T 39	"	"	2.82	—	0.10	—	0.70	—	2.46	

No.	C No.	名 称	出上区	遺跡名	層 位	外径 (直径) cm	外径 cm	外径 cm	内径 cm	孔 幅 cm	内径 cm	重 量 (g)	備 考
131	C 158	朝院不能	S39		II	2.36	—	0.13	—	0.73	—	1.56	
132	C 160	開元通宝	T43		"	2.38	0.20	0.12	0.09	0.60	0.09	1.29	
133	C 161	熙寧〇〇	R50	SE 118	フク土	—	0.24	0.12	0.08	—	0.12	1.22	
134	C 162	天聖元宝	Q41		II	2.46	0.24	0.14	0.12	0.65	0.14	2.81	
135	C 163	嘉祐通宝	"		"	2.40	0.32	0.10	0.09	0.70	0.09	2.33	
136	C 164	洪武通宝	Q42		"	2.37	0.24	0.12	0.06	0.58	0.10	3.24	
137	C 165	元祐通宝	"		"	2.40	0.20	0.13	0.10	0.72	0.11	2.99	
138	C 166	阜宋通宝	"		"	2.44	0.30	0.06	0.10	0.72	0.09	2.26	内郭加工
139	C 167	至和元宝	"		"	2.43	0.27	0.12	0.09	0.73	0.10	2.97	
140	C 168	洪武通宝	"		"	2.46	0.33	0.14	0.08	0.50	0.13	3.84	
141	C 169	政和通宝	"		"	2.43	0.24	0.13	0.10	0.60	0.09	3.32	伴出
142	C 170	朝院不能	"		"	2.20	—	0.12	—	0.63	—	2.69	
143	C 171	無文鉄	"		"	1.87	—	0.07	—	0.68	—	0.67	
144	C 172	洪祐通宝	"		"	—	0.22	0.12	0.06	—	0.09	2.20	
145	C 173	朝院不能	"		"	—	—	0.10	—	0.60	—	1.54	
146	C 174	無文鉄	"		"	1.83	—	0.07	—	0.76	—	0.46	伴出
147	C 175	阜宋通宝	"		"	2.42	0.22	0.10	0.10	0.74	0.10	3.00	
148	C 177	元祐通宝	"		"	2.48	0.23	0.14	0.10	0.67	0.12	2.86	
149	C 178	嘉祐元宝	"		"	2.36	0.33	0.13	0.09	0.56	0.11	2.94	
150	C 179	無文鉄	"		"	2.20	—	0.13	—	0.80	—	2.55	
151	C 180	熙寧元宝	"		"	2.36	0.28	0.14	0.07	0.54	0.13	3.42	
152	C 181	洪武通宝	"		"	2.36	0.20	0.13	0.08	0.56	0.15	2.50	
153	C 182	開元通宝	"		"	2.45	0.20	0.13	0.08	0.67	—	3.39	伴出
154	C 183	天聖元宝	"		"	2.50	0.20	0.15	0.07	0.65	0.12	3.50	
155	C 184	熙寧元宝	"		"	2.50	0.30	0.15	—	0.60	—	4.19	
156	C 185	朝院不能	"		"	—	—	0.15	—	—	—	0.62	
157	C 186	洪武通〇	"		"	—	0.20	0.18	0.09	—	0.17	1.57	
158	C 189	天聖元宝	"		"	2.50	0.25	0.10	0.10	0.63	0.12	2.78	
159	C 190	阜宋通宝	R42		"	2.45	0.25	0.10	0.08	0.62	0.10	2.80	
160	C 194	開元通宝	Q42		"	2.40	0.20	0.10	0.07	0.67	0.10	2.32	
161	C 195	開〇通〇	R41		"	—	0.20	0.13	0.05	—	0.08	1.37	
162	C 196	紹聖元宝	P42		"	2.41	0.25	0.14	0.07	0.60	0.10	3.42	
163	C 197	無文鉄	T44		"	—	—	—	—	—	—	0.68	
164	C 198	熙寧元宝	V46	ST 276	フク土	2.37	0.25	0.13	0.10	0.67	0.10	2.10	
165	C 199	熙〇〇宝	R43		I	2.43	0.29	0.10	0.10	0.67	0.10	1.54	
166	C 200	無文鉄	S42	ST 245	フク土	2.20	—	0.09	—	0.72	—	1.81	
167	C 201	開元通宝	R42	ST 246	"	2.27	0.24	0.12	0.08	0.64	0.10	2.62	
168	C 202	無文鉄	S42	ST 245	"	1.84	—	0.06	—	0.80	—	0.53	
169	C 203	洪武通宝	Q42		II	2.29	0.17	0.12	0.08	0.52	0.10	2.30	
170	C 204	"	R48	SB 64	フク土	2.27	0.30	0.10	0.06	0.59	0.10	2.14	
171	C 205	永樂通宝	Q49	SB 65	"	2.37	0.20	0.10	0.09	0.57	0.10	2.17	
172	C 206	〇徳元〇	"	"	床面西上	—	0.30	0.12	0.09	—	0.10	1.53	
173	C 207	熙寧元宝	R49	pit内	フク土	2.40	0.28	0.12	0.09	0.65	0.10	3.00	
174	C 208	〇〇通宝	"	"	"	2.41	0.28	0.10	0.10	0.68	0.10	2.25	

No.	C No.	名 称	出土区	遺構名	層 位	外径 (直径) cm	外縁幅 cm	外縁厚 cm	内径 cm	孔 径 cm	内径厚 cm	重 量 (g)	備 考
175	C 209	天橋通宝	Q49	SB 63	フク土	2.34	0.24	0.12	0.07	0.58	0.13	3.03	
176	C 210	聖宋〇宝	S49	SE 129	"	-	0.34	0.10	0.02	-	0.10	1.13	
177	C 211	無文銭	T49	pit内	"	2.08	-	0.08	-	0.72	-	1.57	
178	C 212	"	"	"	IV 上	2.30	-	0.10	-	0.62	-	2.60	
179	C 213	嘉祐通宝	S48	"	"	2.59	0.33	0.13	0.07	0.67	0.13	2.96	
180	C 214	洪武通宝	T49	SE 136	フク上	2.20	0.17	0.10	0.04	0.66	0.10	1.89	
181	C 215	寧大通宝	T48	pit内	"	2.21	0.17	0.18	0.08	0.53	0.17	3.60	
182	C 216	無文銭	T49	SE 136	"	-	-	0.12	-	-	-	0.35	
183	C 217	開元通宝	S49	"	"	2.37	0.20	0.09	0.06	0.60	0.09	2.17	} 伴出
184	C 218	永樂通宝	"	"	"	2.42	0.22	0.13	0.10	0.52	0.15	3.16	
185	C 219	元祐通宝	"	"	"	2.43	0.26	0.10	0.10	0.76	0.09	2.62	
186	C 220	無文銭	W48	pit内	"	1.58	-	0.05	-	1.00	-	0.34	
187	C 221	"	T48	"	"	2.24	-	0.08	-	0.73	-	1.94	
188	C 222	元豐通宝	S49	SX 287	"	2.50	0.30	0.13	0.09	0.69	0.11	3.22	
189	C 223	治平元宝	"	"	"	2.40	0.26	0.10	0.08	0.68	0.23	2.48	
190	C 224	〇宋通〇	S42	ST 246	床面直上	-	0.28	0.10	0.08	-	0.09	1.86	
191	C 225	判読不能	"	ST 245	フク土	2.40	-	0.12	-	0.67	-	1.70	
192	C 226	無文銭	"	ST 246	"	-	-	0.12	-	-	-	0.18	
193	C 227	皇宋通宝	"	ST 245	"	2.41	0.21	0.12	0.05	0.68	-	4.76	} 検査して いる
194	C 228	判読不能	"	"	"	-	-	-	-	-	-	-	
195	C 229	元祐通宝	R43	ST 247	床面直上	2.54	0.37	0.12	0.10	0.54	0.12	3.38	
196	C 230	判読不能	Q42	SE 137	フク土	-	-	-	-	-	-	2.30	
197	C 231	永樂通宝	R42	ST 246	"	2.40	0.22	0.11	-	0.58	-	2.11	
198	C 232	無文銭	S43	ST 281	"	1.82	-	0.06	-	0.66	-	0.70	
199	C 233	"	"	"	"	2.30	-	0.09	-	0.70	-	1.93	
200	C 234	"	"	"	"	2.26	-	0.08	-	0.76	-	1.70	
201	C 235	祥符元宝	R43	ST 247	"	2.34	0.27	0.08	0.11	0.63	0.08	1.37	
202	C 236	無文銭	"	"	"	-	-	0.12	-	-	-	0.90	
203	C 237	天禧通宝	R42	ST 278	"	2.50	0.33	0.12	0.08	0.60	0.12	3.64	
204	C 238	無文銭	Q42	SE 137	"	1.66	-	0.06	-	0.10	-	0.37	
205	C 239	判読不能	R43	ST 247	"	-	-	0.12	-	-	-	0.50	
206	C 240	"	R42	ST 278	"	2.36	0.23	0.10	-	0.76	-	2.63	
207	C 241	元祐通宝	R43	ST 247	"	2.44	0.37	0.10	0.08	0.60	0.10	2.46	
208	C 242	"	R42	ST 280	"	2.43	0.22	0.14	0.10	0.62	0.10	2.90	
209	C 243	皇宋〇宝	R43	"	"	-	0.24	0.10	0.12	-	0.13	1.36	
210	C 244	無文銭	S42	pit内	"	2.17	-	0.08	-	0.79	-	1.38	
211	C 245	熙寧元宝	"	"	"	2.34	0.21	0.11	0.08	0.66	0.15	2.27	
212	C 246	皇宋通宝	R42	ST 280	"	2.48	0.40	0.11	0.07	0.70	0.12	2.62	
213	C 247	景祐〇〇	"	"	"	-	0.18	0.13	0.10	-	0.13	1.85	
214	C 248	〇和〇〇	"	"	"	-	0.29	0.09	0.08	-	0.06	0.66	
215	C 249	無文銭	"	"	"	-	-	0.05	-	-	-	0.16	
216	C 250	政和通宝	Q42	ST 277	"	2.43	0.18	0.11	0.12	0.63	0.10	2.62	
217	C 251	咸平通宝	"	"	"	2.46	0.30	0.11	0.12	0.60	0.10	2.87	} 伴出
218	C 252	治平通宝	"	"	"	2.40	0.28	0.12	0.05	0.66	0.12	3.05	

No	C No	名 称	出土区	遺構名	位 置	外径 (直径) cm	外径幅 cm	外径厚 cm	内径幅 cm	孔 径 cm	内径厚 cm	重 量 (g)	備 考
219	C 253	祥符元宝	R 42	ST 280	フ タ 十	2.48	0.35	0.09	0.09	0.68	0.09	2.23	
220	C 254	無 文 銭	Q 42	SE 137	"	2.14	—	0.08	—	0.79	—	1.77	
221	C 255	〇元通宝	T 44	SE 138	"	—	0.18	0.13	0.06	—	0.13	0.70	
222	C 256	元豊通宝	Q 42	SE 137	"	2.40	0.28	0.12	0.08	0.68	0.10	2.63	
223	C 257	無 文 銭	S 43	ST 281	"	2.22	—	0.09	—	0.66	—	1.91	
224	C 258	朝廷不能	T 44	SE 138	セクシヨク内上	2.16	0.22	0.15	—	—	—	0.90	
225	C 259	崇寧元宝	S 43	ST 281	フ タ 土	2.44	0.25	0.12	0.10	0.60	0.11	3.35	
226	C 260	朝廷不能	"	"	"	—	0.33	0.12	—	—	—	0.26	
227	C 261	元符通宝	S 44	S F 75	焼土下黒色土	2.39	0.27	0.15	0.08	0.62	0.15	3.47	
228	C 262	皇〇〇宝	S 43	S X 321	フ タ 土	—	0.27	0.15	—	—	—	1.36	
229	C 263	無 文 銭	S 42	ST 246	セクシヨク内上	1.90	—	0.06	—	0.70	—	0.85	
230	C 264	"	S 43	pit内	フ タ 土	2.20	—	0.08	—	0.68	—	2.28	
231	C 265	大観通宝	S 42	S X 321	"	2.44	0.15	0.13	0.07	0.63	0.14	3.14	
232	C 266	上元元宝	"	"	"	2.37	0.28	0.13	0.10	0.62	0.11	3.18	内部加工
233	C 267	崇祐通宝	Q 42	ST 277	床 面 直 上	2.46	0.20	0.10	0.08	0.70	0.12	1.46	
234	C 268	治平元宝	R 42	IV	上	2.37	0.28	0.13	0.06	0.56	0.12	3.22	内部加工
235	C 269	元祐通宝	"	S X 330	pit 内フタ上	2.46	0.24	0.12	0.10	0.64	0.11	3.10	
236	C 270	元豊通宝	"	ST 283	床 面	2.44	0.24	0.10	0.07	0.62	0.12	2.48	
237	C 271	慶元通宝	"	S B 71	フ タ 土	2.46	0.28	0.12	0.06	0.64	0.11	3.16	背文「四」
238	C 272	聖宋元宝	"	"	"	2.40	0.23	0.12	0.08	0.64	0.10	3.07	
239	C 273	〇宋〇〇	"	S E 141	"	—	0.30	0.12	0.05	—	0.11	0.68	
240	C 274	皇祐通宝	T 44	S X 318	"	2.43	0.46	0.12	0.10	0.68	0.10	2.56	
241	C 275	祥符通宝	Q 42	SE 137	セクシヨク内上	2.46	0.30	0.10	0.08	0.64	0.10	2.71	
242	C 276	永興通宝	S 42	S X 330	フ タ 土	2.46	0.21	0.12	0.07	0.58	0.11	2.11	
243	C 277	朝廷不能	"	"	"	—	—	0.12	—	—	—	1.64	
244	C 278	宣道〇〇	"	"	"	—	0.20	0.12	0.06	—	0.11	0.74	
245	C 279	無 文 銭	R 42	ST 283	"	—	—	0.07	—	—	—	0.35	
246	C 280	"	"	"	"	—	—	0.08	—	—	—	0.16	
247	C 281	祥符通宝	T 48		埋 上	2.47	0.42	0.10	0.07	0.60	0.10	3.55	
248	C 283	洪武通宝	R 49		"	2.37	0.16	0.09	0.09	0.59	0.12	1.83	
249	C 284	朝陽通宝	R 50		"	—	0.23	0.10	0.09	0.56	0.10	2.42	
250	C 285	元豊通宝	"	"	"	2.36	0.30	0.07	0.08	0.64	0.07	1.99	
251	C 286	朝廷不能	"	"	"	2.27	—	0.10	—	0.63	—	1.94	
252	C 287	無 文 銭	V 45	pit内	"	—	—	0.04	—	—	—	0.76	
253	C 288	元祐通宝	Q 49		"	2.42	0.29	0.14	0.07	0.56	0.15	3.55	
254	C 289	朝廷不能	R 49		"	2.38	—	—	—	—	—	2.42	
255	C 290	"	"	"	"	—	—	—	—	—	—	—	
256	C 291	治平元宝	"	"	"	2.46	0.28	0.12	0.07	0.60	—	5.76	伴出
257	C 292	朝廷不能	Q 49		"	2.20	—	0.10	—	0.70	—	1.48	
258	C 295	無 文 銭	V 45	S E 111	フ タ 上	2.22	—	0.11	—	—	—	1.88	
259	C 296	"	"	"	"	2.20	—	0.12	—	—	—	1.45	
260	C 297	"	"	"	"	2.20	—	0.11	—	—	—	1.55	
261	C 298	"	"	"	"	—	—	0.11	—	—	—	0.96	

Ch. 103 落城以後藩政期の銭貨

No	C No	名称	グリップ	遺構名	層位	外徑 (mm)	外縁幅 (mm)	外縁厚 (mm)	内径 (mm)	孔 (mm)	内径厚 (mm)	重 (g)	備考
1	C 18	寛永通宝	R44		I	2.34	0.25	0.08	0.09	0.57	0.09	1.97	
2	C 188	"	P42		II	2.40	0.23	0.11	0.06	0.57	0.10	2.79	
3	C 192	"	R42		"	2.50	0.25	0.10	0.07	0.60	0.09	2.64	背文「文」

Ch. 104 明治以降現代までの銭貨

No	C-No	名称	鋳年	グリップ	遺構名	層位	No	C-No	名称	鋳年	グリップ	遺構名	層位
1	C 5	十銭	大正9年	Q42		I	18	C 75	一銭	大正10年	U48		I
2	C 11	一銭	昭和9年	T39		"	19	C 77	五銭	昭和14年	T48		"
3	C 13	"	大正11年	Q39		"	20	C 84	十銭	" 13年	P48		"
4	C 14	"	" 7年	T40		"	21	C 89	一銭	明治9年	R50		"
5	C 15	"	" 10年	R43		"	22	C 92	十銭	大正12年	Q48		埋土
6	C 16	五十銭	昭和22年	"		"	23	C 96	一銭	" 7年	R49		II 下
7	C 17	一銭	明治10年	"		"	24	C101	五十銭	昭和21年	R51		I
8	C 19	"	大正9年	"		"	25	C111	一銭	大正11年	R49	SX278	フク土
9	C 22	二銭	明治13年	P44		"	26	C126	"	昭和16年	R48	SX275	"
10	C 23	一銭	大正10年	"		"	27	C159	"	大正13年	T44		II
11	C 26	五銭	"	O44		"	28	C176	"	" 9年	Q42		"
12	C 28	五十銭	昭和12年	W46		"	29	C187	"	昭和10年	P42		"
13	C 36	"	大正13年	W47		"	30	C193	十銭	" 15年	R42		"
14	C 37	一銭	" 9年	"		"	31	C283	一銭	大正8年	Q48		埋土
15	C 39	十銭	不明	"		II	32	C293	五銭	" 11年	Q49		"
16	C 65	半銭	明治20年	U48		I	33	C294	一銭	" 10年	内館		表 探
17	C 74	一銭	" 16年	"		"	34	C299	"	" 8年	W45		埋土
							35	C132	十円	昭和26年	Q48	SX275	床面直上

6. 木製品・漆塗り製品等 (PL.33、Fig.61)

出土木製品の大部分はSE138から出土したもので、折敷・曲物底・木椀・漆塗り椀・椀・炭化痕のある板等であり、すでにP53の所で報告済である。これ以外に漆塗り椀と考えられる被膜部分が若干存在するので報告する。

(330) は推定口径10cm、推定高4cm、底径5.5cmを測る漆塗り椀である。底と口唇部が黒漆のはかかは朱漆が喰られている。がしかし、残存する木質部が炭化状態を呈するところから本漆器は火を受けているとみられ特に強い部分は朱色が漆黒色に変化している。口縁下1.4cmの部分に沈線様の凹が廻っている。SX308の覆土から出土している。

(331) はまったくの被膜だけであり、内面朱漆・外面黒漆と考えられ底に朱筆で「上」と

いう文字が書かれている。SE118の覆土から出土している。

(332)も被膜だけであり、内面朱漆・外面黒漆が塗られ、外面胴部には朱漆による花状の文様が認められる。高台部分も若干残存し、底径は5 cm前後と推定される。SE118覆土出土。

(333)は板状の木製品の一面に朱漆、もう一面に黒漆を塗った例で、幅2 cm厚さは1 cm弱と推定される。竈や甕応具の部分品であろうか。V47区トレンチ第IV層出土。

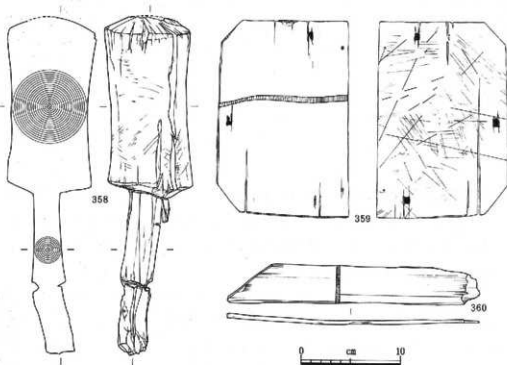
(334)は皮札に黒漆を塗ったもので、半分ずつ貼り重ねており右列の孔と左列の孔にズレは認められない。推定幅(1個体)は約2 cm、高さは6 cm前後と考えられる。

以上の他に漆器被膜として取り上げたものは54個ほどあり、一部には文様の認められる碗残片や、鏡の一部ではないかと推定される皮に黒漆を塗った例がある。しかし、大部分は2~3 mmの細片であるため報告は割愛する。

7. その他の出土遺物

他に城館期の遺物として注目されるのは炭化米(稷)、骨類、貝類があるものの詳細な鑑定を受けていないため報告を後日に譲りたいと思う。

Fig. 61 木製品実測図



Ch.105 木製品観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	特徴	備考
11-(e)	61-359	M61	折敷	T44	SE138	枠内フク土	20.00×(13.00)×0.50		
-	61-360	M58	加工柱	"	"	枠内粘土層	(25.00)×(3.50)×0.30		
-	-	M57	焼木	"	"	"	(33.00)×(9.00)×(1.00)		
-	-	M59	曲物の底	"	"	枠内フク土	46.50)×(14.00)×(1.20)	焼成痕有	
11-(f)	61-358	M60	水づち	"	"	"	頭部径 柄部径 (35.00)×8.50×3.50		
11-(g)	-	M63	轆	"	"	"	-	内面にわずかに朱塗が残っている	
33-331	-	M23	漆器	R50	SE118	フク土	-	朱塗の模様有	
33-330	-	M30	陶	T48	SX308	"	-	内外に朱塗、焼痕有	
33-332	-	M16	"	R50	SE118	"	-	外面に朱で菊花文を施している	
33-333	-	M68	"	V47	IV	上	-		
33-334	-	NR31	草札	R48	SF128B	フク土	-	内外面黒塗めり	

8. 城館期以前の出土遺物 (PL.26, PL.33, Fig.62)

城館期以前の出土遺物としては、10世紀頃と考えられる土師器・須恵器の類と埴土器片、縄文時代(土器の伴出がほとんどないため時期不詳)の石斧・石棒等がある。

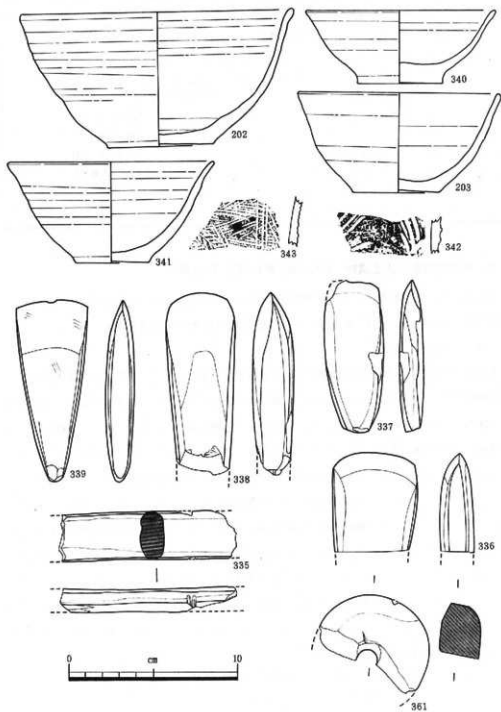
a 土師器・須恵器

土師器と須恵器は、城館期の地業によって破壊された製品が多く、細片のみの出土でみか箱2個ほど出土している。しかし、幸いにも城館期の地業を受けなかった遺構や地区(SD90・SD96等)からは実測可能な製品が出土している。土師器環は4点図示した。(202)は口径16.5cm、高さ8.3cm、底径6.4cmの大形の碗であり、内外面ともにロクロ成形無調整で底は回転糸切底である。(203)は口径12.4cm、高さ6.0cm、底径4.4cmの中形品でロクロ成形無調整、回転糸切底である。(202)は全体の色調が黄白色の明るい色に対し、(203)はくすんだ暗灰色を呈している。(340)は底が肉厚な皿形に近い器形でロクロ成形無調整回転糸切底であり、須恵器状の暗灰色の焼き上がりをする所と、酸化状態を呈する二器面が認められる。口径11.4cm、高さ4.5cm、底径5.2cmを測る。(341)は器面が擦りへったように砂っぽい器膚を呈し、ロクロ成形無調整回転糸切底の碗形である。口径12.2cm、高さ5.9cm、底径5.1cmを測る。以上の環の胎土には多量の石英が均等に混入し、同一粘土による焼成がなされたとみ

Ch.106 土師器環観察表

PL.No	Fig.No	遺物No	出土区	遺構名	層位	胎土	特徴	備考
33-340	-	P1256	T43		IV上	明黄褐色	糸切り底	
33-341	-	P1921	U44		"	"	"	
26-202	62-202	P924	V46	SD92	フク土	黄褐色	回転糸切り底	
26-203	62-202	P2031	T48	SD96	"	乳褐色	"	

Fig. 62 城館期以前の遺物



ることができる。

b 擦文土器 (P.L.33-342・343, Fig.62-342・343, Ch.107)

擦文土器は壺形土器の胴部片2点が出土している。

Ch. 107 擦文土器観察表

Pl. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区	遺構名	層位	胎土	文様	特徴	備考
33-342	—	P 623	W46		I	褐色			
33-343	—	P2051	U48	SX312	フク土	赤褐色			

c 縄文時代石器

石斧が4点出土しており、いずれも磨製のものである。(339)は、刃幅4.3cm、長さ10.7cmで柄装着部がすぼまる形状を呈する。表裏側面ともに無数の擦痕が認められる。(338)は、刃幅4.0cm、長さは基部が欠損しているものの11cm前後、厚さ3.9cmと肉厚な石斧である。

(336)は、中央部から基部にかけて欠損している。刃幅は5.0cm、刃先から内側へ約1cm前後の部分で鑄状に面取りして刃先を整えている。(337)は石質が良好でないため、表面の凹凸が顕著である。刃幅3.3cm、長さ9.0cmの小形製品である。(335)は、石棒と考えられ、長径2.8cm短径1.4cmの楕円状の断面形を有する。

その他、(361)は有孔円盤状石製品とも言うべきもので、径7.0cmを測る製品である。なお石質については詳細な鑑定を受けていないため、後日報告したいと思う。

Ch.108 縄文時代石器観察表

Pl. No.	Fig. No.	遺物No.	名称	出土区	遺構名	層位	計測値(長さ×幅×厚さ)cm	特徴	備考
33-335	62-335	S 75	石棒	U48	SE 128	フク土	(10.52)×2.90×1.44		
33-336	62-336	S 97	石斧	T44	SE 138	セクシヤン内フク土	(5.88)×4.82×2.08		
—	62-361	S 15	加石製品	V46		II	6.89×(4.15)×2.57		
33-337	62-337	S 34	石斧	R50		I	8.93×3.36×1.34		
33-338	62-338	S 32	*	P48		*	(10.82)×3.80×2.36		
33-339	62-339	S 100	*	T41	SE 138	枠内フク土	10.70×4.33×1.54		

V ま と め

本年度の調査は内館平場における2年日ということもあり、昭和59年度調査区の東・南・西側隣接地を実施した。それによって内館東半部における遺構配置・遺物出土状況については、かなりの部分で適確な把握がなされるようになったと思われる。特にS B 38（昭和59年度調査の礎石建物跡）を中心とする、掘立柱建物跡の配置をみると、建て替えによる基本軸の相違がそのまま年代的な相違を考える上で有効な視点になるのではないかと考えられ、北館とはだいぶ様相が違っていると推測している。つまり、北館の建物跡配置はある程度「屋敷割り」の概念を含んだブロック別構成を示すのに対し、内館の場合は同心円的配置を示すのではないかという仮説である。今後、西側の調査を進めた段階で次第に明らかになるであろう。

検出遺構の面では、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、井戸跡、溝跡等とともに、いわゆる性格・使用目的のはっきりしない小竪穴遺構・竪穴遺構・礎石列が存在し、遺構の全体像が把握しづらい事実も認めざるを得ない。また、遺構からの出土遺物をも、S E 118で示した一括廃棄の染付群、S E 138出土の木製品等を除けばとりたてて注目できる出土状況もみあたらない。

しかしながら、S E 138の覆土堆積状況で認められたように、遺構の構築時期と廃絶時期が出土陶磁器類の相違によって明確化する状況も感知できた。それは、北館にて確認した15世紀後半代の遺物（たとえば美濃・瀬戸緑釉小皿）と16世紀前半代の遺物（主として染付等）および16世紀後半代の遺物（唐津・志野等）が内館においては北館以上に明確な状況で出土していることである。遺構の時期別変遷を考える上で、今後は遺構のセット関係（掘立柱建物跡と竪穴建物跡・井戸跡の基本軸把握・距離関係等）と併行して遺物の出土状況把握という両面からの道が拓けた期待感を有している。

出土遺物の面で見ると、陶磁器類については総出土破片数のうち中国・朝鮮産の搬入品が60%近くに達し日本産の搬入品は40%強である。この出土率は昭和59年度調査分と近似し、北館よりも内館が城館形成期の古い段階から成立していた事実と考える一因でもあった。今回の報告にあたっては、中国・朝鮮産と日本産の各製品も同じく「舶載品」であるという概念に基づいておこなった。この事は陶磁器の組み合わせ（セット）がある程度年代差・時期差を示すという消費地遺跡の発掘成果に依拠している事実とともに、組み合わせ（陶磁器と土器を含む）自体が文化圏ないしは政治的構造範囲を示すのではないかという筆者の仮説に基づいた使用であることを御理解いただきたい。特に、陶磁器類の観察を続けるに従って一部の土師質土器を除けば、地元で生産された類は皆無であり、北日本の地では中国産と日本産の製品区別に大きな意味を有せず、交易の観点からは搬入品の一部を構成するにすぎない（最も前述の時代・年代決定の段階・生活形態の差異を推測する段階では重要である。）という視点をとったのである。

陶磁器類を具体的にみてゆくと、青磁の場合は無文碗、白磁は内湾小皿、美濃瀬戸灰釉では緑釉小皿と同鉢、摺鉢については越前よりも珠洲の出土率が高くなっている。しかし、志野・黄瀬戸・唐津というような落城期に搬入されたとみられる器種も存在し、内館については15世紀後半から16世紀末まで城館期全時期に亘って主要な位置を占めていたと考えられる。とりわけ13～14世紀に比定される白磁碗や瀬戸灰釉瓶子等は伝世品の意味を強く有するものであり、内館に居住する人々の階層的位階を考える上で有効である。

今回、土師質土器（かわらけ）として報告した資料については、製作年代が城館期以前である可能性が高く、特に手づくね形態の製品は平泉出土の資料と類似しており、浪岡城跡が12世紀後半から13世紀前半にかけて外ヶ浜方面への古道の一面を形成していたことに留意する必要があると考えられる。

他に鉄製品・銅製品・石製品・木製品等の各種遺物の出土状況は、これまでの調査と同様で特別に注意すべき点は少ない。今後、総括報告の段階で詳細な検討を行うこととする。なお、陶磁器類の破片数統計表を載せておくので活用願いたい。

Ch.109 陶磁器類破片数集計表

産地	名称	器形	数量	小計	中計	合計	出 土 率			
中 国	青 磁	碗	360	525	1,430	58.9	100%	36.7	100%	68.6
		皿	130							24.8
		盤・他	35							6.6
	白 磁	皿	371	406				91.4		
		碗	24					28.4	100%	5.9
		小杯・他	11					2.7		
	染 付	皿	390	482				80.9		
		碗	87					33.7	100%	18.0
		他	5					1.1		
	鉄・褐釉	壺	12	12				0.8		
赤 絵	皿	3	3	0.2						
朝鮮		碗	2	2	0.1					
日 本	美 濃 瀬 戸 (灰釉)	皿	182	242	998	41.1	100%	24.2	100%	75.2
		鉢	9							3.7
		瓶子	16							6.6
		壺	13							5.3
		刷 皿	6							2.5
		他	16							6.6
	美 濃 瀬 戸 (灰釉)	碗	58	80				72.5		
		皿	7					8.0	100%	8.7
		壺	13					16.2		
		他	2					2.5		
	志 野	皿	22	22				2.2		
	美 濃 瀬 戸	皿	5	5				0.5		
	樽 津	皿	56	58				96.5		
		碗	2					5.8	100%	3.5
	珠 洲	壺	11	52				21.1		
		搦 鉢	31					5.2	100%	59.6
		他	10					19.2		
	越 前	壺	145	159				91.1		
		搦 鉢	14					15.9	100%	8.9
	瓦質土器	火 鉢	95	102				93.1		
香炉・碗		7	10.2		100%	6.9				
産地不詳 陶 器	搦 鉢	186	239	77.8						
	浅 鉢	11		23.9	100%	4.6				
	他	42	17.6							
かわらけ		皿	39	39	3.9					

— 弔 意 —

1987年6月6日三上次男氏が逝去されました。
浪岡城跡出土の陶磁器を丹念に手に取り、
ルーペを近づけていた姿が目には浮びます。
特に、'85年11月に当浪岡町で開催した
中世考古学シンポでは御多忙中にもかかわらず、
有意義な御助言を賜わり、担当者として
望外の喜びであったことを懐しく思い出します。
北日本の中世遺跡調査にあたった発掘担当者が、
陶磁器という重要な考古資料を
歴史的価値を有するものとして把握し、
とりわけ東アジア史における陶磁交易の観点から
御教授いただいた
故三上次男先生
先生の在天の霊に対し、
万感の思いをこめて哀悼の意を表します。

1987. 11. 3

写 真 图 版

PL.1 発掘調査作業風景



(上) A区南部(北から)

(下) B区(東から)

PL. 2 発掘調査区全景(1)



(上) A区北部 (西から)

(下) A区中央部 (北西から)

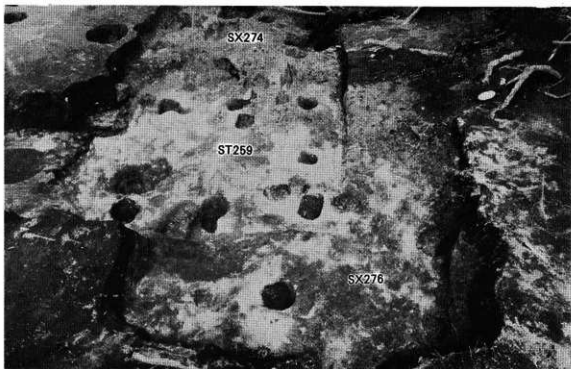
PL.3 発掘調査区全景(2)



(上) A区南部 (北西から)

(下) B区 (南東から)

PL. 4 竪穴建物跡(1)



(上) ST247.SX324

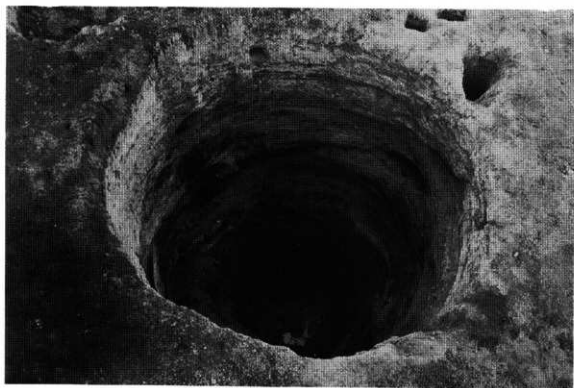
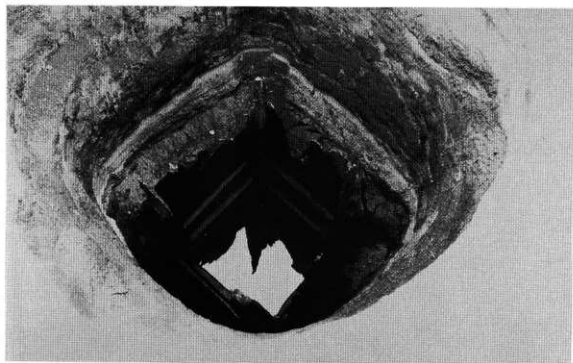
(下) ST259.SX274-276

PL.5 竪穴建物跡(2)



(上) ST280-282-SX327

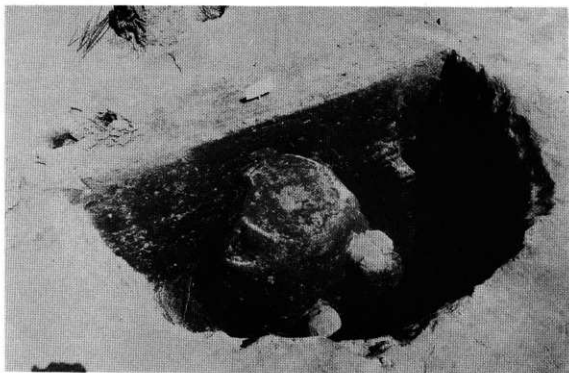
(下) ST281



(上) SE111

(下) SE118

PL.7 井戸跡(2)及び井戸内焼土



(上) SE121-SF73

(下) SF73

PL.8 井戸跡(3)



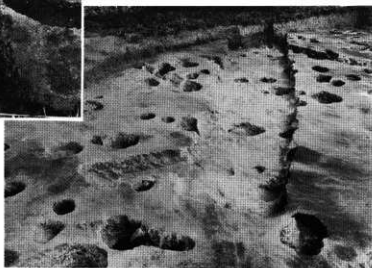
(上) SE138覆土層序

(下) SE138 (隅柱横棧型木枠)

PL.9 溝跡・焼土遺構



(a) SD94 (南から)

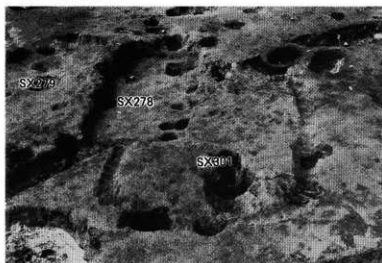


(b) SD95 (西から)



(c) SF75 (南から)

PL.10 竪穴遺構



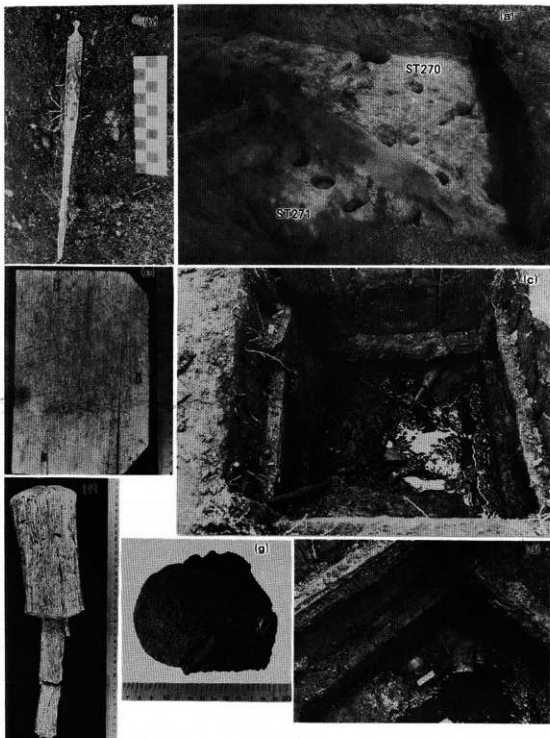
(a) SX278-279-301

(b) SX302-303



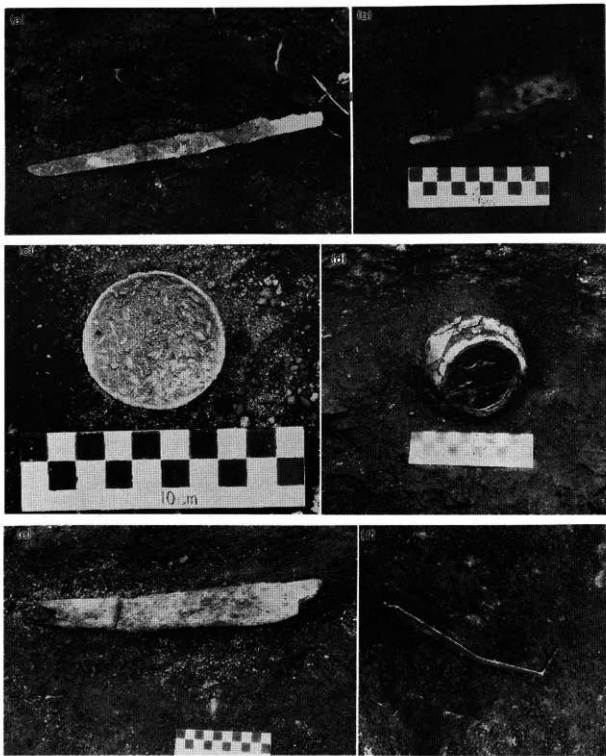
(c) ST245 (南から)

PL.11 遺構と遺物



(a) ST270・271 (b) ST270覆土出土弁 (c) SE138木礎・折敷出土状態
 (d) SE138出土漆塗り椀 (e) SE138出土折敷 (f) 同木礎 (g) 同漆塗り椀

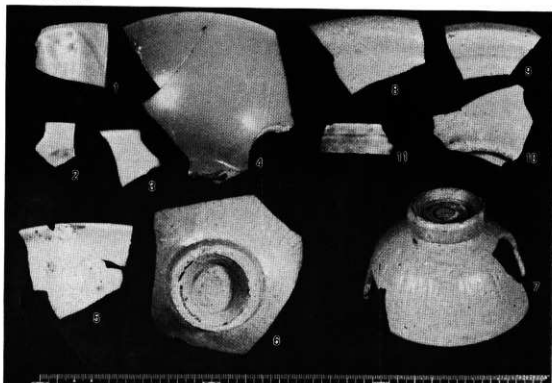
PL.12 遺物出土狀態



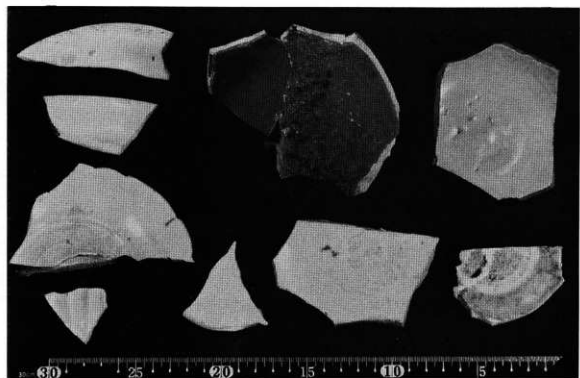
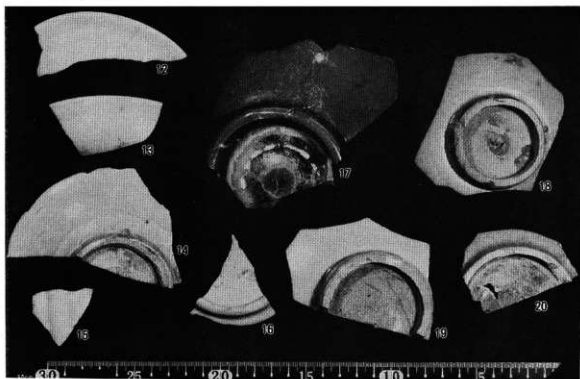
(a) SE110出土小刀
(d) SX308出土漆器

(b) SE111出土鉄製品
(e) SX287出土鈍刀

(c) SE129出土銅製小皿
(f) ST279出土銅製斧

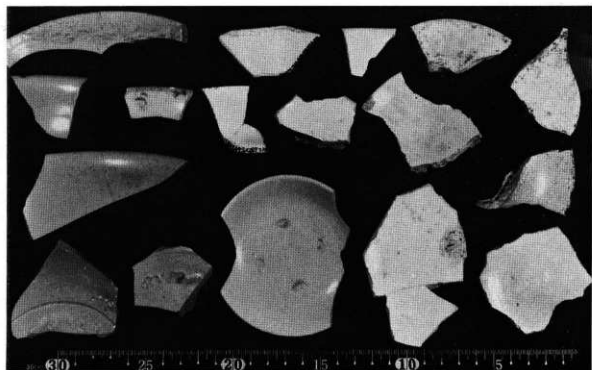


青磁碗 1~7 青磁盤 8~10 青磁香炉 11



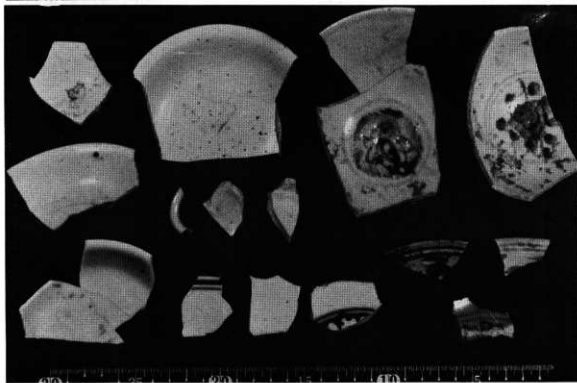
青磁甗12~16・20 青磁鉢17~19

PL.15 白磁

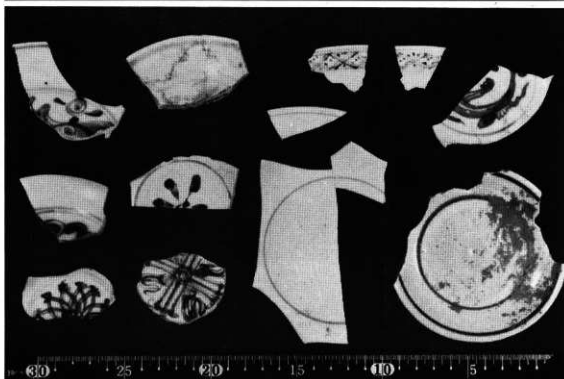


白磁碗21~26 白磁小杯27~29 白磁小鉢30 白磁皿31~37

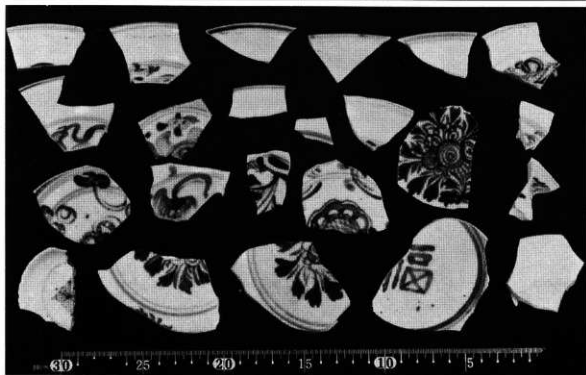
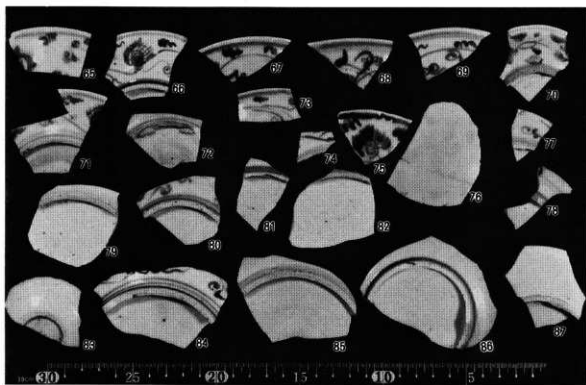
PL.16 白磁・染付・赤絵・色絵染付



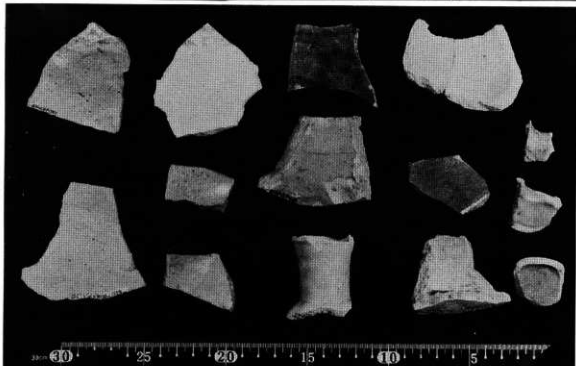
白磁皿38~41 染付碗42・43・47~49
染付水注? 44~46 赤絵51~52 色絵染付50



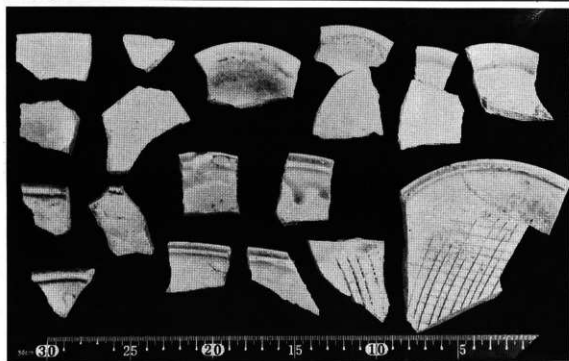
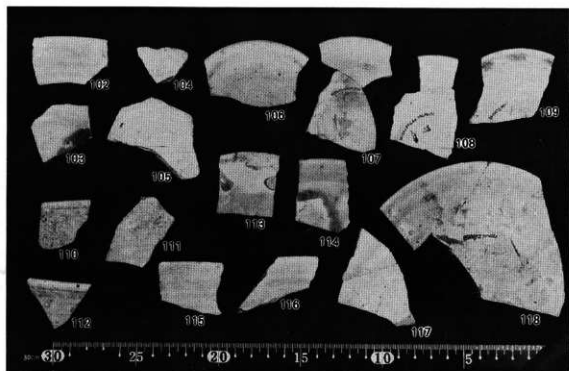
染付皿53~64



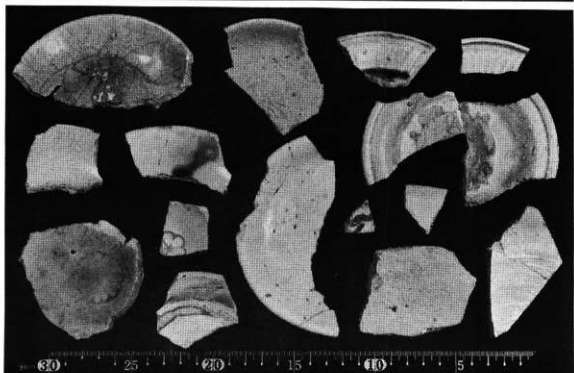
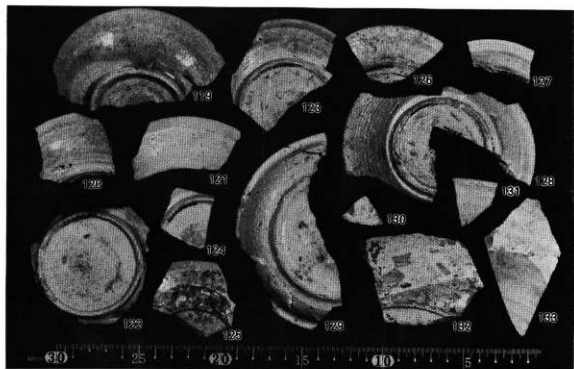
染付皿65~86 白磁皿87



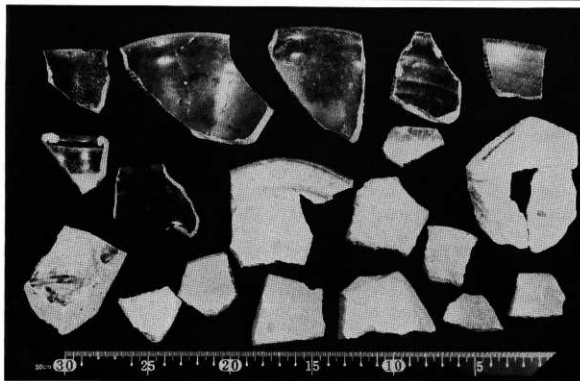
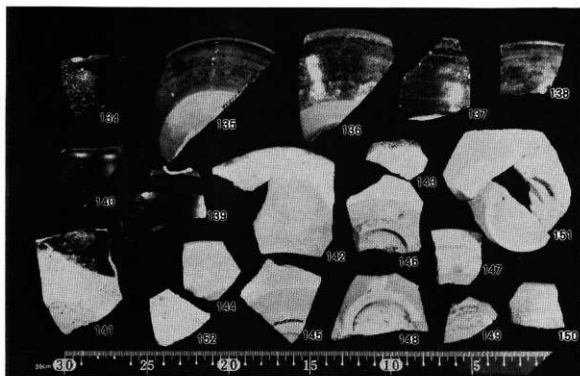
中国褐釉壺88・89 不明陶器90 朝鮮碗・皿91・92
瀬戸灰釉瓶子93・94 同壺95~98 同水滴99~101



瀬戸・美濃灰釉碗 102.103、同皿104~109、同香炉 110~112
同卍皿 114-117-118、同浅鉢114-115-116

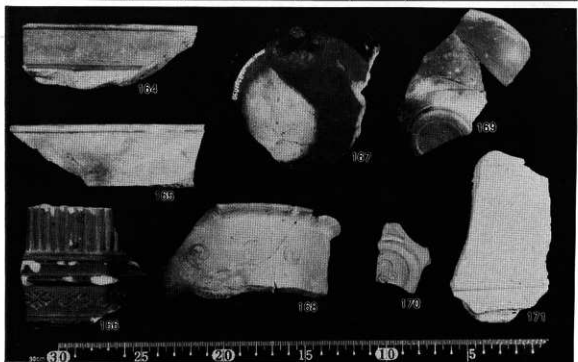
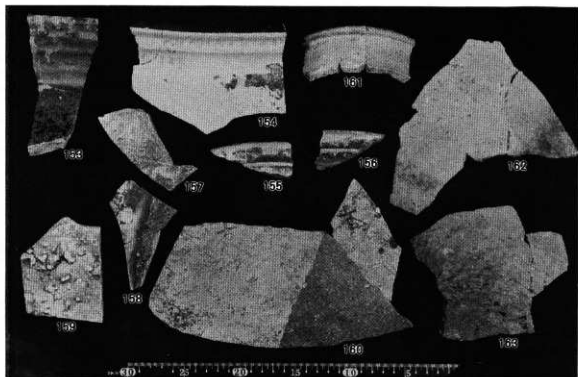


美濃・瀬戸灰釉皿 119～128、志野皿 129、130
黄瀬戸大皿 131～133



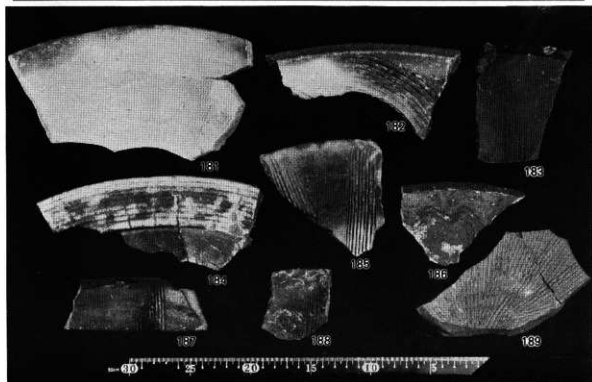
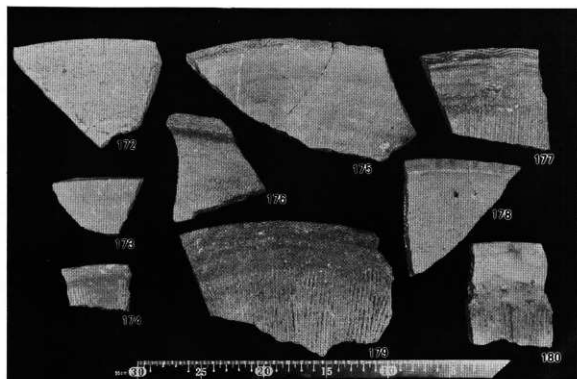
美濃・瀬戸鉄釉碗 134~139、同香炉140、同壺141

唐津皿142~150、同碗151



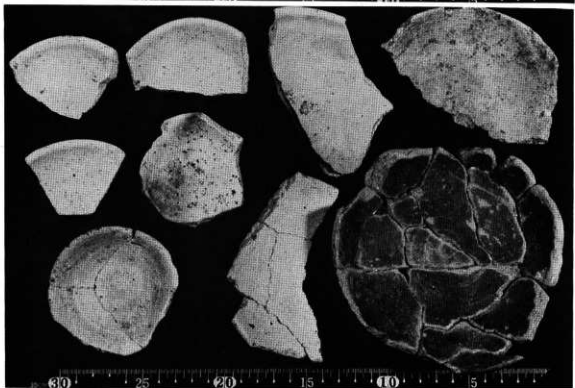
越前壺153~160、同壺161~163
瓦質土器火鉢164~166-171、同香炉167-168、同碗169-170

PL.24 摺鉢

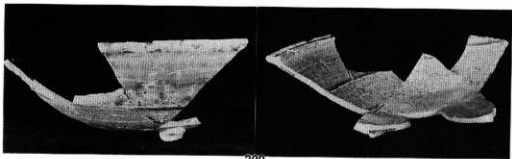


珠洲摺鉢172～180、越前摺鉢181

その他の摺鉢182～189

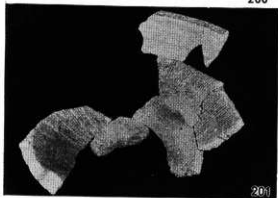


土師質土器190~199



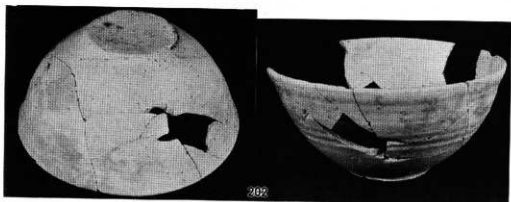
200

瀬戸灰釉浅鉢



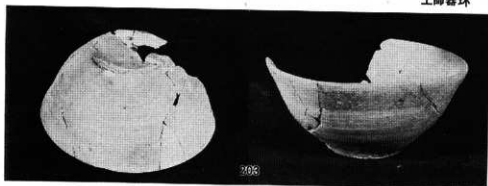
珠洲槽鉢

201



202

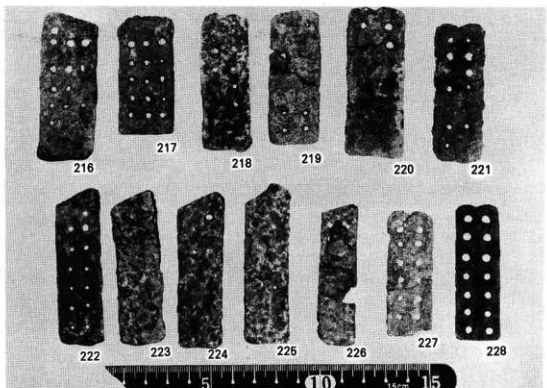
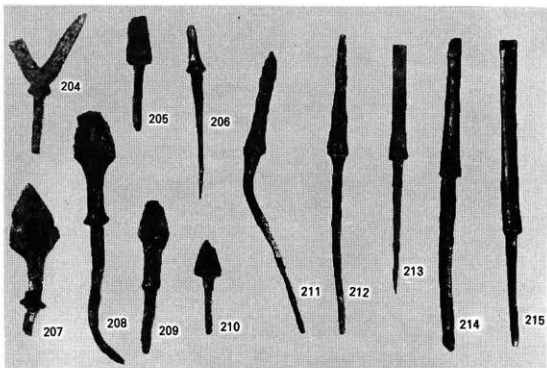
土師器坏



203

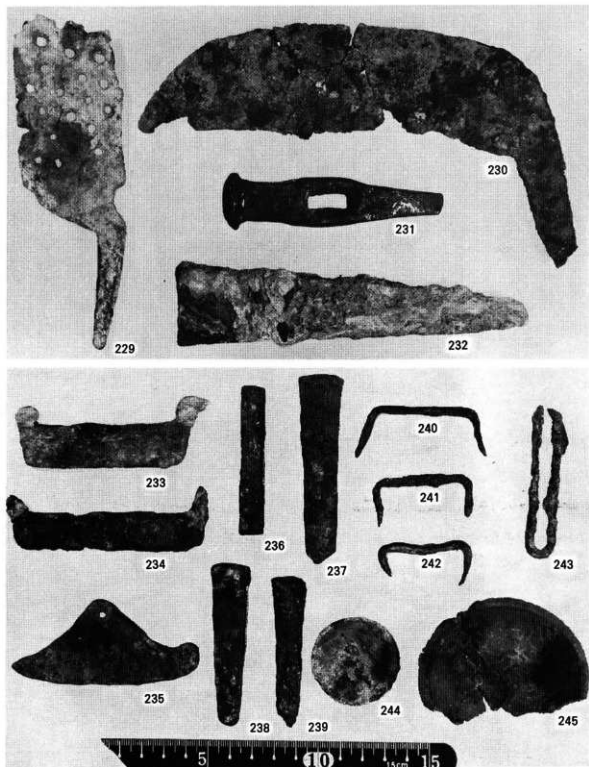
土師器坏

PL.27 鉄製品(1)



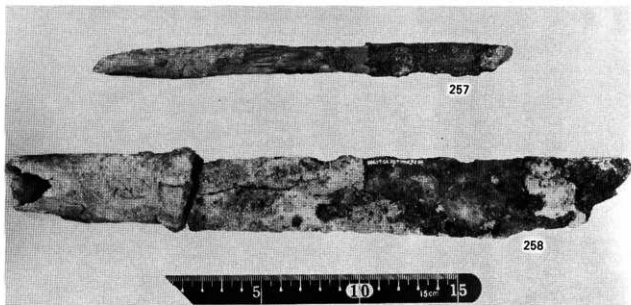
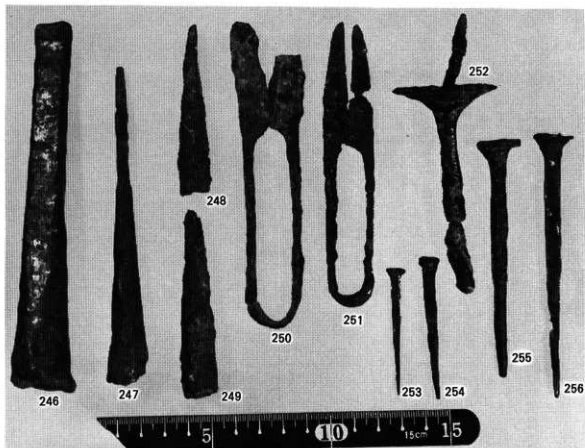
鉄器204~215 小札216~228

PL.28 鉄製品(2)



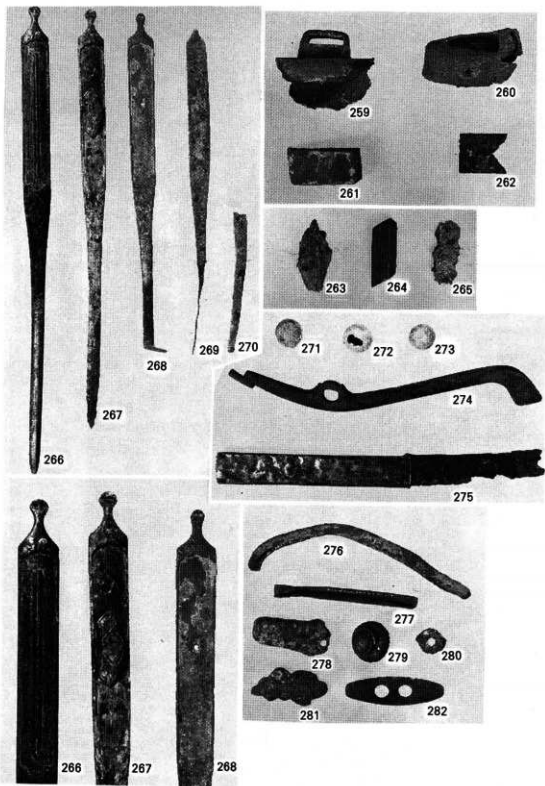
鎌230、平引金233-234、火打金235、毛拔243、他

PL.29 鉄製品(3)

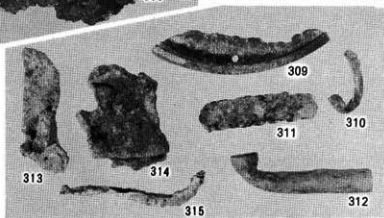
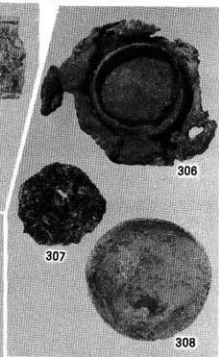
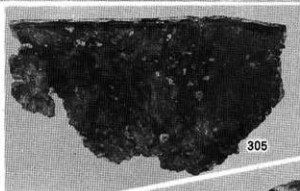
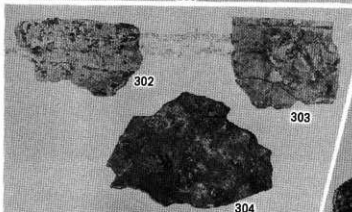
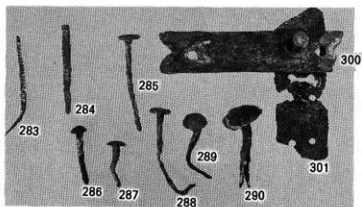


打根246~248、鉄250-251、燭台252、釘253~256 小刀259、鉈刀258

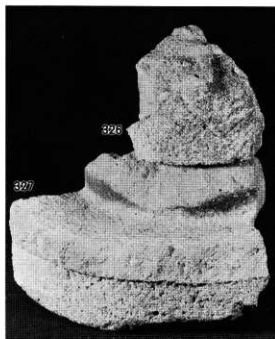
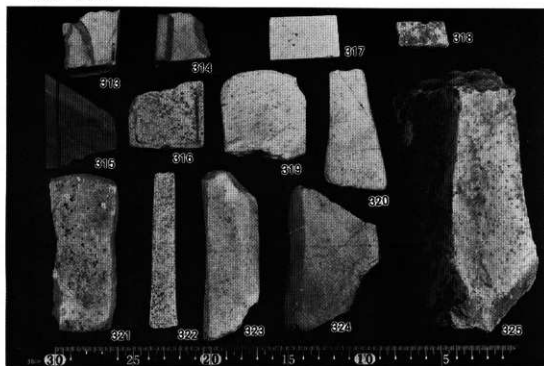
PL.30 銅製品(1)

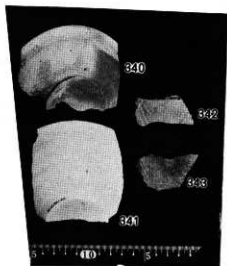
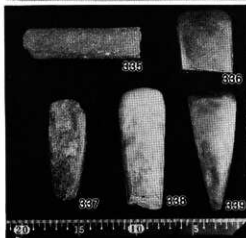
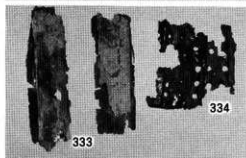
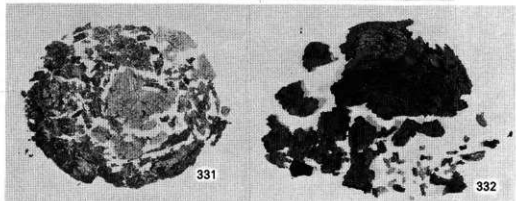
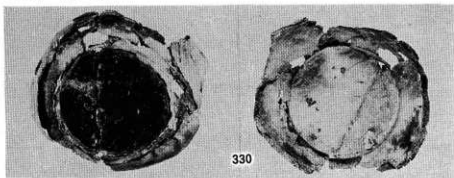


PL.31 銅製品(2)



PL.32 石製品





昭和60年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪 岡 城 跡 IX

発 行 浪岡町教育委員会

発行日 昭和63年1月31日

印 刷 鮎津軽新報社

